

THE AMERICAN INDIAN WARS

1

白人が来る

白人が来る前までは、現在は合衆国となっている広大で、壮大な、そして、比較的空地のあった領域には、600もの異なる社会に分れ、そして、ずっと北の氷に閉ざされていた荒れ地から南の温暖な湿地帯；東部の巨大な森林地帯から西部の大平原、砂漠、そして、山々にまでに散らばって、100万人ものインディアン達が住んでいた。こうしたインディアン達の社会は、彼ら自身は、お互い同士、そして、自然と均衡を保って生活をしており、そして、均衡は、インディアン達が、最初にこの大陸に生活を始めるようになった、新石器時代、あるいは、旧石器時代から発展してきた時代を通して出来上がった。

この文化に対する白人達の征服の衝撃は、たちまちのうちにすり減らし、そして、結局、悲惨な結果をもたらすものであった。ほとんど継続的な戦闘をしていた400年—大体1500年—1900年—に掛けて、インディアン達は、数の上では、400,000人以下まで減ってしまった。彼らの土地は失われてしまい、彼らは、ほとんどの者たちが、合衆国の西部の保護居留区に閉じ込められた、偏屈な白人達により制定された差別的な法律の犠牲者であり、政府の無視、そして、彼らの事柄に対する間違った管理—合衆国の上院議員から彼らの支援を導き出す土地に飢えたビジネスの利益の強欲さを語らない—の犠牲者だった。

しかも、ゆっくりと、そして、少しずつにインディアン達が諦めたものは、ただ、物質的なものであった。彼らの最も優れた歴史家の一人、John Collierが指摘しているように、彼らは決して彼らの征服者たちにいつまでも隷属されていたわけでもなく、“そして、今でさえ、永遠にでもあるが、物理的に心を挫けさせられている本当の事実……インディアンの社会的な特性がそれ自身を維持し、そのこと自身の自覚を深めさえしてきた、これ以外には何も得たものはなかった。” Rio Grandeの北のインディアン達が、白人達の魂の中にある、訳の分からない、しかも、本質的な興奮に、何時も気づいていたという事は驚くべきことだろうか？ 彼らは、私たちの過去の故郷の外から私たちに話しかけ、そして、それらを耳にするものは、我々の変わることはない、永久の部分であり、インディアンの社会が、それから後の世紀に我々により拘束され、そして、閉じ込められたようにさえも、我々の社会の新しい時代により拘束され、そして、閉じ込められている……。”

このようにして、インディアンは、彼らの実体を失いはしたが、彼の魂は維持した。彼ら自身に対する彼の征服者により、永久的なダメージがなされた。彼らの征服の4世紀にわたる激しい戦闘（Great War）の間、彼らは、それが余りにもむごいものであり、決して拭い去られることのない彼らの歴史のなかの一ページを書き残した。征服そのものは、歴史の容赦のない行進で説明されるかも知れないが、しかし、その目標達成のための手段は



原罪の Hyde County, N.C.の Pomeiock の町 by John White

言い訳できるものでは決してない。スペイン、フランス、そして、イギリスの開拓者や植民者達の最初の残虐行為から、最期の、1800 年の **Wounded Knee** におけるインディアンの女や子供たちの恐ろしい大量虐殺に至るまで、赤人（インディアン）に対する白人の戦闘は、たとえ、それが意図で無いにしても、20 世紀の文明化するための戦闘の洗練がいくつものものも、それが産みだされたものであるという、残虐の中に調和するものをつくる記録である。

自由の象徴として世界の最先端に立とうとしていた大陸を探検するために最初に来た人たちの目的の一つは、インディアンの奴隷を確保する一好奇心、探検の成功の証拠、あるいは、ヨーロッパでの探鉱のための労働者の確保と言うような、これらのいずれかであった。そうしたものが、ヨーロッパ人とインディアンとの間の最初に記憶された出会いの一つの結果であった。Azores からのポルトガル人である **Caspar Corte Real**（あるいは **Cortereal**）が 1500 年と、そして、1501 年に再び、北アメリカの荒涼たる北部地方の到達点にやって来た。こうした探検のある時に、彼は、奴隷として売りさばこうと言う意図で 57 人（あるいは、出所によっては、60 人）のインディアンを誘惑した。この高尚な目的は、逃げ出さないように鎖でつないだあった 7 人の捕虜たち以外は、全て恐ろしい死に導かれた彼の船が嵐で沈んだ時の故郷に戻る航海に大きな失望をさせた。こうした 7 人は、別の

船で無事ポルトガルに着き、そして、彼らの生き残った捕獲者達は、自分たちのことを、あまりにも疑いもしない野蛮人たちが彼らに示した歓待に喜び、彼らはインディアンの原住民地の Labrador, これは、“働く者が溢れる程もいる場所” という意味だが、この名前を付けた。

同様に教訓的なことは、1523 年の終わりの頃、フランスの国王であるフランシス 1 世により、Cathay への西方に向かった経路を見出すために、Dieppe から送り出されたフィレンツェの道案内役である Giovanni da Verrazano (あるいは Verrazzano) により、我々に残された物語である。嵐にあい、Brittany に戻った彼は、彼のもともとの小さな 4 隻の帆船の一つ、Dauphine だけでもう一度出発し、1524 年の 3 月 7 日には、現在のノースカロライナの Wilmington の近くにいる。

海岸にやって来た Verrazano のちいさなボートの一つを見たインディアン達は、白人の人達を最初に見て、恐怖を感じていたが、しかし、直ぐに不思議に思い、態度で友情を持っていることを示しながら、直ぐに彼らが上陸することを助けようと考えた。

2・3 日して、海岸に沿って北に向かって航海するために水が必要になって、Verrazano は、別のボートを海岸に寄せたが、上陸するには波が高すぎた。もう一度、不思議に思っているインディアン達のちいさなグループが浜にやって来た。彼らに上げようと、何某かのビーズと小さな飾り物を持って、勇敢な若い船乗りが海に飛び込み、岸に向かって泳ぎ始めた。かれが岸に到達すると、突然、恐怖が彼を襲った。彼は、そこに待っていた野蛮人に、彼の贈り物を放り出し、そして、ボートに戻ろうとしたが、きつい波が彼を飲み込み、そして、彼の将来の宿主となる人のいる岸に彼をうちあげた。

若い船乗りたちが恐怖に嘆けば嘆くほど、インディアン達はかれらの友情を彼が認識するように彼に向かって叫び返してきた。しかし、彼は、彼らが浜辺で燃え上げる炎を見て、彼らが彼を食べようとしていると思い込み、もう一度、キャーと叫んだ。彼が確信した時に、彼らは、彼が自分のボートに泳いで帰りたいという事を思い出すのに十分なほど意識を取り戻すように、ただ、彼を暖めて、そして、彼の来ている服を乾かそうとただけだった。インディアン達は、そうすると、自然と、“彼を素早くとんとんと叩き、とても優しい気持ちで、そして、彼を抱きしめて” くれるように、彼を海に戻して浮かべた。彼らは、彼が安全に、Dauphine に戻るまで見つめていた。

明らかに、こうした親切心は、Verrazano や彼の船員たちには、失われていた。バージニアとか、メリーランドのいろいろなところでも何度も浜辺に行ったが、かれらは、もっと信頼の少ないある程度の歓迎の集団を見出していた一浜辺の近くにある高い草むらの中で怖がってうずくまった、年老いた女、若い少女、そして、極わずかの子供達、と言った具合だった。予測された蛮行で、かれらは、まず、こうした無知の確証を得、そして、狩猟の商品のように、子供たちのうちの一人を誘拐した。彼らはまた、自分たちの後での楽しみのために、見た目の綺麗な若いインディアンの人妻を捕まえていたのかも知れないが、しかし、彼女は、彼らを恐れさせて遠ざけるために、とても大きな金切り声でわめきたて

ていた。

ニューヨークの湾を探検したあと、Verrazano は、Long Island 海岸に向かい、Block Island を過ぎ、おそらく Newport Harbor あたりに入っていた。そこで、彼は、部下たちに囲まれた、二人の非常に華麗に着飾った酋長に歓待された—あまりにもヨーロッパの宮廷の様であったので、Verrazano は、彼の物語の中で、彼らを“王様”と呼んでいる。彼は、また、酋長達が別のカヌーに載せて白人達から慎重に遠ざけていた、“女王”や彼女の“召使いたち”をも注目している。

この時点で、New World の歓待は終了した。彼が New England にやってくると、Verrazano は、原住民たちが、海岸地帯のように抑制されていることに気付いた。歴史家の Francis Parkman が、彼の無味乾燥した皮肉的な流行で記述しているように：多分、漁をする土手から略奪して行くある種のはぐれ者、ポルトガル人の Cortereal のような、ある種の人さらい、あるいは、彼らの中にもいる子供たちの誘拐者や人妻を強姦する者、こうした人達が、森の住人達に対して、キリストの軍艦の乗組員たちに注意するように警告したのだ。こうしたインディアン達は、釣り針やナイフ、そして、金属などを代わりに手に入れように、禁止された高い崖からどっちつかずの状態で毛皮を水の上に落とす以上の事はしなかったし、その後、彼らは、無作法な格好と騒音を彼らの訪問者に浴びせた。フランス人達が岸に近付こうとすると、彼らは、弓矢で、人を寄せ付けない迎え方をした。

それが、最も新しい Verrazano の部下たちとインディアン達がお互いに会ったときの状況だった。Dauphine は Newfoundland のずっと北の地域のまで入って行き、そして、故郷に戻った。イタリア人の案内人の死に関するいくつかの報告書について、もし、彼が別の航海に参加し、そして、殺され、かれ自身の同行者たちの目の前で食べられたとしたら、それは、詩的な道義にかなったことかも知れないが、；しかし、彼が 1527 年に海賊として吊るし首になった歴史的な確実性を立証するものであった。

こうした、白人達とインディアン達の当初の会合は、最初の探検家たちが新しい大陸の周辺で少しずつ噛みとっていったように、やがて来るもののただ単なる温和な前触れのようなものであった。インディアン達は、若干の例外はあったにしても、新しくやって来た人達を歓迎し、そして、略奪とかどわかしの仕返しを受けた。しかし、こうした出来ごとは、原住民たちのある人達がまだ組織化された歓待というものが無かった海岸線のずっと奥地まで、あまりにも広く拡散し、浸透していった。こうしたものが、まず、欺瞞に満ち、残忍なうての主人公たち、スペイン人の探検家たち、彼らの Rio Grande からの血筋は今日では誰にもよく知られているが、しかし、1500 年代の初めには、フロリダ、ジョージア、そして、スペイン人達が熱狂的に金を求めて侵略し始めて行った Gulf Coast に沿った奥地の疑いもしない野蛮な人たちの耳には届いていなかった、そんな人たちにより印象付けられて行った。こうした血なまぐさいエピソードとともに、400 年にも及ぶ戦争が現実には始まった。

Hernando de Soto の功績の予兆として、Lucas Vasquez de Ayllon と言う名の世にあま

り知られていない指揮官の行いは、将来の兆候を示すのに十分な素晴らしい働きをした。まさしく、Verranzano が、彼の絞首刑の柱からぶら下がっていたその年に、De Ayllon は、ハイチの人口を大幅に削減したばかりのジョージア、ならびに、サウスカロライナの海岸を急襲し、鉱山で働くことを運命づけられた奴隷として 100 名以上のインディアンを捕獲した。彼は、ハイチへ行く途中の海で、彼らの航路を見失った；他のものたちは鉱山で働くうちに亡くなってしまった。

この襲撃が、もっとずっと名前の知られた男、老 Ponce de León、彼は、不老の泉の探索で 9 年ほど前にフロリダに來た男で有るが、その彼の死に間接的に関わっていた。その探検で、インディアンとともに行動した彼の親族は誠に真心がこもっていたが；しかし、彼が、植民地を作るつもりで戻った時に、原住民たちは、その一方で De Ayllon やその他の者達から白人達について学んでいた。彼らは、若い探究者に土地を求めないように警告したが、しかし、彼は、彼らが彼をどんな危害でも加えようとしていることを信ずることが出来ず、その警告を無視した。インディアン達は、攻撃を加え、彼の部下の殆どを殺してしまい、彼に一命にかかわるような傷を負わせた。その直後、キューバで、Ponce de León は迷信に関わる探究の不名誉な生涯を終える事となった。

Hernando de Soto は、後の歴史家により、“インディアンを殺すような娯楽を随分と与えられた” 者として記述されていた。それは何の誇張的な言い回しではなかった。彼が、1540－1542 年の二年間にフロリダからテネシーに行軍し、ミシシッピーまで前進したときに、殺人をし、子供を誘拐し、略奪する彼の行為は、何世代にも渡って消え去ることのない獰猛な憎悪を生み出した、インディアン達の伝統の拭い去ることのできない部分となった。それは、インカの皇帝であった Atahualpa を殺害した以前に彼の指揮官の殺人鬼の部下として留まろうとすることで信用されているペルーの征服者の Pizarro の同伴者の一人としての De Soto であった。彼のそれ以外の血なまぐさい記録のなかに、名誉となるそれ以上の証拠は何も出てこない。

De Soto は、620 人の選りすぐった男達と一緒に、彼がやろうとした全ての事は、神の光栄のためになされるものであるという告知とともに今の Tampa 湾に上陸した。“こうした略奪者たちは”、と、Parkman が言っているのは、“彼らが略奪者となった相手のインディアン達の精神的な福祉については、無視することが出来なかったし；そして、縛り付ける足かせの上に、執拗に彼らを捕虜にするために追跡し、僧侶や修道士まで彼らの精神を救うために連れていった。” のだ。311 人の生き残りのものたちが、ガルフ海岸のスペインの入植地に到達する前に、彼らの指導者を夜中に、ミシシッピーの波立つ水の下に墓に埋葬して残し、3 年間の放浪の後、De Soto の探検は、貴重な少しは魂を救済するようなことをしたが、；しかし、それは、無残にもインディアン達の寛大なもてなしを侮辱したものだ。

現在のアーカンサスでの、ある晩に、De Soto は、彼のたった一つの違反行為が、スペイン人に対する食料の供給と保護であったが、Nilco のインディアン達に対して、武力を誇示することを決心した。彼の部下たちが、彼らの寝ている村を急襲し、弓矢を引く時間さえ

与えずに、100名もの戦士たちを殺害した。酷く負傷したもののうちの何人かが、逃亡することを許されたので、彼らはスペイン人の恐ろしさの印象を他の村に広げ、こうして、好ましい敬意を醸し出していった。こうしたことは、物語の記録では、彼らが自分たちの任務にあまりにも熱心であり、男達、女達、そして、子供達を見境なく殺して行ったスペイン人達のあいだでの出来事だったと言っている。

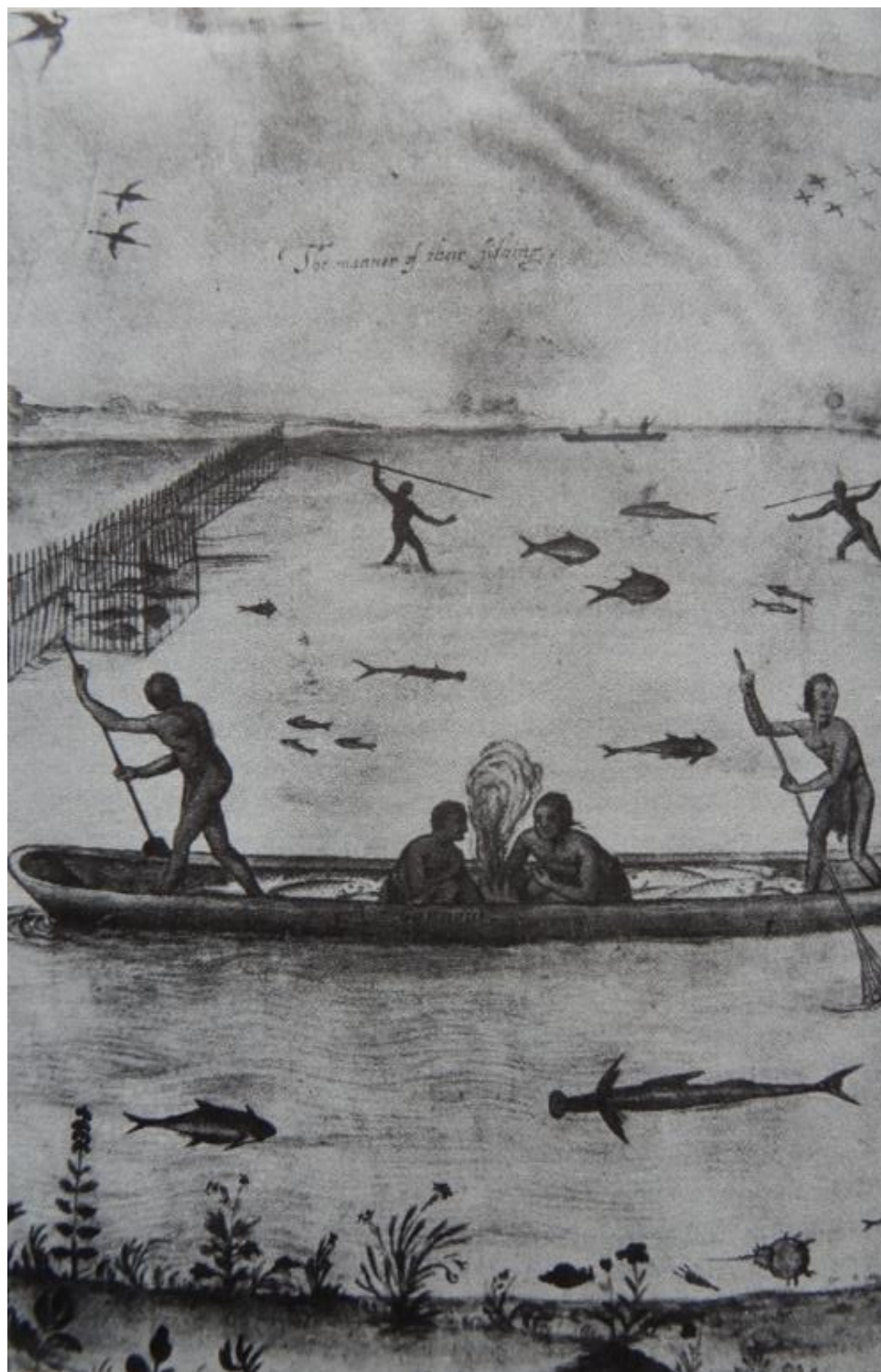
ギリシア人達の住んでいたジョージアでは、原住民のものが彼女のことをそう言うように、部族の信愛する“王女”が、彼女がかって捕虜として捕獲された時の、恩を返したようにスペイン人に対して気配りして歓迎した。これは、探検が進んで行った時の、よくあるパターンであった；村に入っていくと、酋長の歓待を受け、そして、その中に入っていく、物々交換のためにかれらを捉え、そして、村と周囲のとうもろこしの畑を焼きつくすと言うものであった。他のインディアン達は、足かせをつけられた奴隷として捕まえられた；さらに他のもの達は、彼らが必要とするような情報を提供するまで拷問を受けた。De Sotoの悪名高い道程が終わる前に、かれはミシシッピ川を発見した；そして、John Collierが注目しているように、“ジョージアの海岸からミシシッピの対岸にいたインディアン達が、白人を見た。”

スペイン人の征服者たちが、誰でもそう無慈悲だったという訳ではない。スペインの探検家である Coronado は、南東への彼の長い旅で、彼を、存在もしていない神話の中の黄金境の探索でカンザスまで案内したインディアンの案内人を首つりにする以上のことをしなかったけれども、ずっと温和な良い対処をしていた。にも拘わらず、彼は、あまりにも長く、そのためにそれが、大陸のその曲がり角で、白人達とインディアン達との関係に数年間もの間、深く影響を与えていた、かれの良心的な意思の一般的な印象を残していた。

今日、私たちはこうしたスペインの探検家たちを、実際にそうであったが、彼らが無慈悲な黄金の狩人たちと見ている；しかし、彼らが、インディアンに対して、もっぱら、残虐であり、ペテンを働いていたと考えるべきではない。ジェームスタウンに最初に白人達が入植する以前の20年以上もまえに、Sir Richard Grenville は1585年に、バージニアの海岸沖に、7隻の船の艦隊で現れていた。彼の部下たちを上陸させ、この気品のあるイギリスの海賊たちは、Roanoke川のずっと奥地まで侵入して行き、どこでも、インディアンが、最初に出遭った時にいつも見せるような白人達に対する簡単な気前の良い歓迎を受けた。しかし、ある村のインディアンが Sir Richard の銀製のカップをくすねた時に、イギリス人は、極かすかな情けもなく村を焼き、略奪をした。

(Greenville は、無鉄砲な勇気の単純な行動としてイギリスの歴史のなかに、英雄として長く記録に残されているが、そのなかで、かれのちいさな船、*Revenge* が、スペインの艦隊をことごとく Azores の海岸に近付けないように一手にその任務に就き、そして、それを伝統的な輝かしい勝利に導くまで戦った。)

こうした、インディアンと白人達との間の南東地域と大西洋の海岸に沿っての出会い、それ自身は歴史的にはそれほど重要ではないが、しかし、それらは4世紀の間、殫滅性を



John White

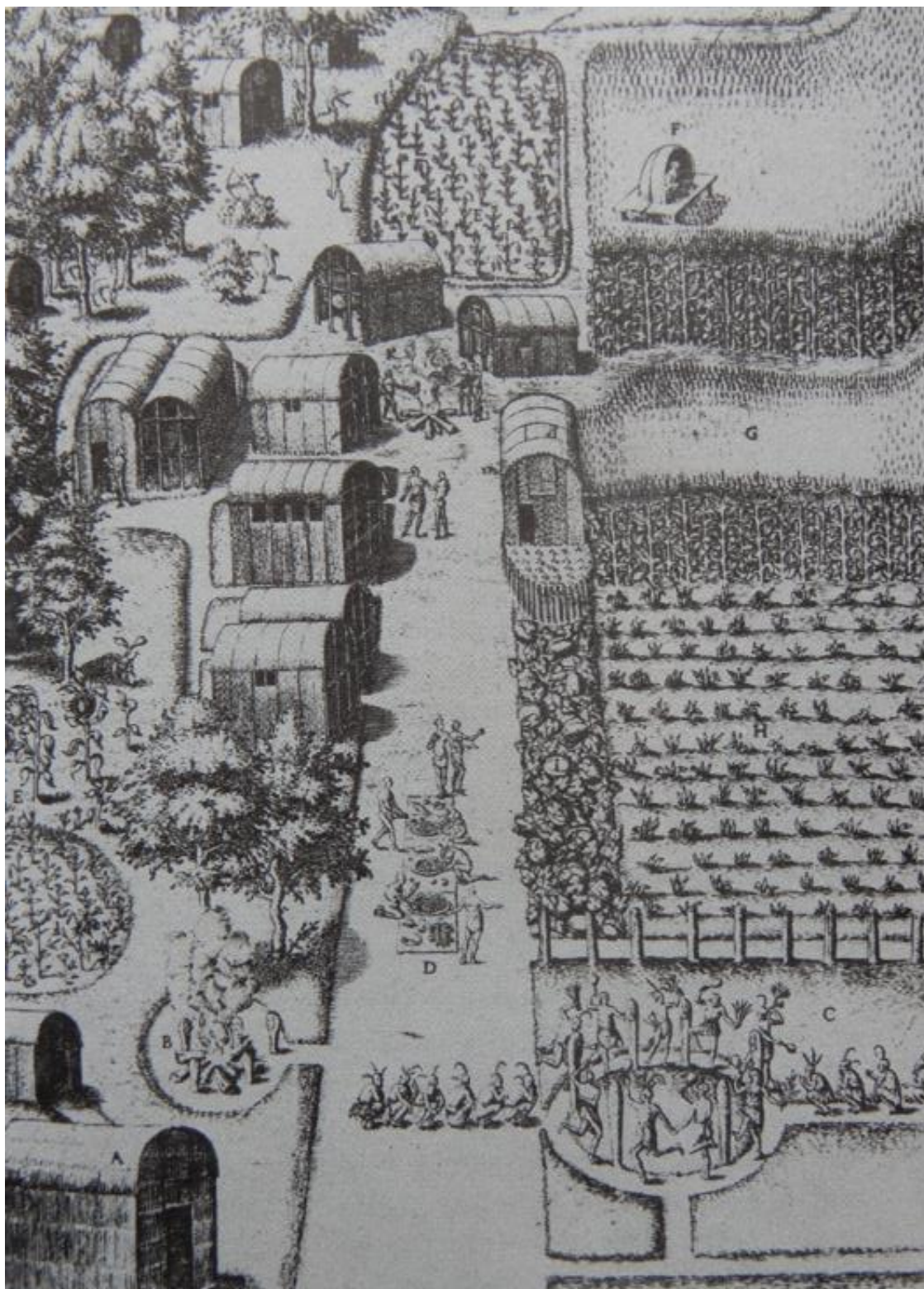
燃え上がらせた炎に火をつけた。断続的であるが、しかし、限られた部族の間だけである戦闘行為にも拘わらず、だいたいいつも平和で、繁栄して過ごしていたインディアンの世界は、白人の侵入者たちは決して信用できず、そして、彼らの目的は、インディアン達が、彼らに提供する取引の平和的なお互いの関係ではなく、むき出しとなった征服であるという事を学んだ。

まだ、戦争と言うところまではいっていなかった。二つのもっと前に進んだ発展と言うものが、線を引き、そして、この動きの中に苦い、見るからに終わりそうもないもがきをセットするのに必要だった。一つは、其れ自身は粗野な戦いの線であるが、辺境の開拓地を作る事であった。Jamestown や Plymouth での恒久的な植民地の基礎を築くことが、インディアンたちが、こうした白人達は、探検をするために来たのではなく、ここに留まり、そして、彼らの最初の村に居続けるのではなく、厚かましく押し入り、何世紀にもわたりインディアン達により維持されてきた領域に無慈悲に入り込んでくることを現実と感じた時に、辺境地での衝突の始まりを起こした。

その他の要因は、広大な土地の所有を求めて、たちまち互いに闘いはじめた様々な国籍の白人達によって誘引された。この事が、フランスとイギリスとの間での北アメリカを求める巨大な戦闘となった。インディアン達が関係づけられるような事とはかけ離れて、こうした闘争者達の最も基本的な戦略は、ぞっとするほど単純なものであった。ほとんど一世紀にも及ぶ、いかなる影響を持って互いに闘うには、あまりにも数が少なく、そして、彼らに対して圧倒的に数で勝るインディアンの国々とは、とても戦えるような数とは言えない少ない状態で、フランスとイギリスは部族を同盟者となるようにせがみ、そして、彼らを自分たちの闘争のために闘うように利用した。その当時、酷く苛立たせるようなばかげた考えに付きまといわされている事実にも拘わらず、それは、ひときわ目立ってうまくいくと身をもって示した戦略であった。最初は、フランスとインディアンとの間の戦争に引き継いでいくような長引く小競り合いから始まって、それが、7年間もの間耐え忍ぶような戦いとなり、次いで、アメリカの独立戦争に、そして、最終的には1812年に、インディアンの国々は、彼ら自身が、最期に、勝利者に与えられるようないかなる見返りにも恵まれないばかりでなく、現実には、彼らは辺境地における生命にかかわる様な戦いで勝利を得そこなっているという事に気づいた。西部に進出していく強力な後押しが、フル回転していた。ミシシッピー川の東部の地域すべてが、すでに失われていた。そこには、白人の侵入者たちを彼らの東部の町に追い返そうという偉大なる夢を描いているインディアンの指導者達が居たにも拘わらず、しんがり軍の行動以上のものはないもない様な、西部での最後の勇ましい姿勢が残っているだけだった。

四世紀の間が、赤人（インディアン）たちの最終的な勝利に要され、両方の側に立派な指導者が育った。全ての白人の指揮官たちが悪漢どもであったと、決してみなしてはならないし、インディアンの酋長達が必ずしも、英雄たちの集まりであったという訳でない。両者の側がお互いから新しい形の戦いというものを学んだのだ。征服には、抗しがたい悲

劇があったが、しかし、そこには、同様に感情と、そして、ゆがめられたユーモアのようなものさえあった。いかなるほかのもの以上に、征服された人の壮観の中には、悲哀と崇高さがあった。彼らの物理的な勝利と精神的な克服の物語が、以後のページに語られている。



Secota, Virginia の生活

John White

JAMESTOWN AND PLYMOUTH；辺境開拓が始まる

1607年に Jamestown にやって来たイギリスの植民者達は、それ以前の世紀に彼らに先立って来ていた強欲なスペイン人や、陰険なフランス人のようではなかった。彼らは、金に目がくらんでいたわけでも、奴隷を捕まえる事に飢えていたわけではなく、インディアン達自身が住んでいる野性的な自然の中で生き延びるという厳しい状況のなかに腰を降ろし、そして、新しく来たこの人たちは、まず、原住民たちの信頼を勝ち得ていた。友情関係については、沢山の話があり、事実、植民地がインディアン達の助けなくして、生き残って行く事ができたかどうかは疑わしい。初期の辺境地での開拓民が、頭皮をはぎ取るナイフ、戦闘用の斧、そして、マスケット銃を、ナイフやフォークと同じような感覚で使用しているインディアン達と来る日も来る日も闘っていたと言うような生活の一般的な認識は、実際とはかけ離れたものであるという事は、明確にされなくてはならない。とりわけ、当初のところは、もっとずっと親睦的だった。両者が、食糧を、そして、身を守ったり、生き残っていくために必要とするものを提供し合い、お互いが助け合う事の出来るものを見出していた。それが、どのようにして、この初期段階の平和が、壊されていったのだろうか？

答えは、普遍的なある種の人間性のもろさの中にある。お互いに密接にともに暮らしていると、こうした隣人同士は、インディアン達自身のあいだに周期性の闘争的な特質に導いていくものと同じような小さな出来事を経験した。インディアンは白人から攻撃されるようになり、それが殺人に繋がって行ったのだろう；あるいは、そう頻繁なことではなかっただろうが、白人は現実には、あるいは、想像的にある種の攻撃的な侵略者となったのだろう。こうした行動が、時々、無知な想像が日常的に起こった民衆の犯罪行為を引き起こして行った。インディアン達は、殺人や襲撃、そして、焼き打ちといった恐ろしいつむじ風で突然襲い掛かってくるものとして、習慣的に考えられた；しかし、実にたまにはあるが、白人の民衆も、通常は、インディアン達のさらなる犯罪行為から防ぐと言うのだろう、その主張により自己弁明された、同じような野蛮性の罪を犯していた。

入植が進んで行くと、こうしたお互いに別個の出来事が、だんだん人が多くなり、摩擦を起こす機会が増えてきて、ますます頻繁に起こるようになった。これが、増大して行くに従って、さらに、狩猟の権利や領域が直ぐに論争となり、インディアンは、侵略してきて、増大して行く、そして、圧力となっていく人達の圧力を感じ始めた。この結果は、長い戦闘の始まりとなった突発的な、血なまぐさい辺境開拓地での闘争であった。それは、ありふれた平和の合意、そして、即座に片方、あるいは、両方が違反したような協定により示された戦争であった。

辺境地開拓がさらに西部の地域に移って行くと、圧迫が増大しているところはどこでも、

そして、強力なインディアンの指導者が実際に民衆を沸き立たせるようになるといつでも、組織的な抵抗があった。時には、こうした抵抗の勢力がそれなりに大きくなり、正規の軍隊を利用する要望が必要になるほど危険な状態になった。そして、こうしたことが、作り話のための果てしない物質と、不安定な行動の姿を準備して行く様な一連の重大な交戦に繋がって行った。

そうしたものが、バージニア州やニューイングランドの植民地に端を発する辺境地での戦闘の原因であった。**Jamestown** では、植民地は、強力な、そして、才能の有る酋長の **Powhatan**、彼の同盟は、最初の 15 年間にはいつでも、あるいは、それが存在しているときには、いつでも、それを簡単に消滅させることが出来たが、その彼にこうして始められた。彼がそうすることをしくじったのは、**Pocahontas** の伝説の人気にも拘わらず、未だ説明されていない。

バージニアの低い沿岸地帯を支配していた **Powhatan** の支配力に間接的に後ろだてしていたのは、侵略者であったスペイン人であった。彼の父は、そこからフロリダかあるいは、西インド諸島のどちらかであるかは知られていないが、北の地域に勢力を伸ばしていき、彼がバージニアに達した時、その領域の 5 つの部族を征服し、彼らと同盟を結ぶことを始めた。**Powhatan**、彼のインディアンの名前は、**Wa-hun-sen-a-cawh**、であるが、彼は、この皇帝の地位を継承し、そして、時が経つにつれて、よりたくさんの部族をこれに加え、より強力なものにして行った。

植民地の指導者である、**John Smith** 隊長は、彼のことを“背が高く、扇動者的な、とても立派な容姿の男で； 幾分白髪があり、彼の髭はあまり濃くなく、全くそのようには見えなかった。彼は、大体 60 歳近くで、非常に力強く頑丈であった。”と、述べていた。**Powhatan** の“扇動者な容姿”は、彼の近づきがたい性格を反映したものであった。彼は、囚人たちや、彼に逆らうような者に対しては、残忍であると言う世評を持った、妥協の余地のない、疑い深い男だった。彼は、**Jamestown** の植民地の幅の広い連累を理解し、そして、植民者達の流れを、激怒とうろたえで、見つめていた。そして、彼は、何もしなかったのだ。**Powhatan** の統治している間に、植民者達は小さな狩猟者の集団による待ち伏せで、頻繁に悩まされたり、農民が彼の領地で殺されたりしたけれども、同盟をした部族と植民地は、比較的、平和な生活をしていた。時々、酋長は、意固地になって、植民地の食料が瀕している時に、彼のトウモロコシを売らなかつたりしていたのだろう。

それでも、まだ、平和であった。イギリス人は、1609 年に、かなりの誇示と礼儀正しさを持って、**Powhatan** をその領域の王位につけることにより、それを永続しようという外交的な努力と見なされるようなことをしていた。それは、すべからくうまく行く様なたくらみではなかった。儀式に臨んで、**Smith** が不満を述べているように、**Powhatan** は王位につくという事よりも、彼の植民地化に伴う贈り物にばかり興味を持っていた―“彼は、知ってもいないし、”と、**Smith** が言っているように、“その権威ばかりでなく、王位につくことの意味するところのものも知っていない。”のだった。誇りの高い年よりたちに彼の頭



John Smith 大尉の助命をしている Pocahontas

Chappel

を下げさせることがかなり難しかったので、**Smith** は、その上に王位をつけることが出来た。

多分、ロマンチックな人は正しい、そして、なだめるような賢明さを差し控えて、**Powhatan** は、彼の娘の **Pocahontas**、彼女は、伝説が言っているように、彼女自身の体を拿捕された **John Smith** の体の上に投げたし、そして、彼の処刑から彼の助命を嘆願したばかりでなく、そうすることの中で、植民者達とインディアンとの間の平和を維持した、その彼女の劇的な行為のもとに、彼にそうすべきであると言い聞かせた。勿論、かつて取られたような出来事を準備していた。確かに、1613 年の **John Rolfe** との彼女の結婚が、**Powhatan** が、植民地とともに、確かな平和を作り出すようにさせたし、その平和を彼は、1618 年に亡くなるまで忠実に守った。

しかしながら、そのような出来事とともに、比較的良い感覚の時代が終焉の時を迎えた。**Powhatan** の後継者は、彼の兄弟で、彼の名前はさまざまな形で表現されているが、通常、**Opechancanough** とつづられている。彼は、権力者となった時には、すでに、老人であったが、そのとき彼は長い間、ゆっくりと燃え上がる集団的な敵意を持ち、彼の到来する機会を待っていた。**Opechancanough** がなぜそれほどまでにイギリス人を憎んでいたのかを知る人は誰もいない。彼は、手におえそうにない誇りと威厳をもった男で、そして、おそらく、彼は、一度ならず、過去に何回も考えられるように根深く攻撃的な性格の持ち主であった。かれには、イギリス人と結婚を成し遂げた娘はいなかったし、彼は、彼の兄弟のように保守的でもなかった。彼の生涯は、植民地を消滅させ、そして、憎むべきイギリス人を海洋に追い出し戻すという事に奉じられた。彼が権力の座に上ると、彼はそれを実行する手段を着実に始めた。

Opechancanough は、もし、かれの準備の中で徹底的でなかったのなら、彼は何でもなかった。植民者達にたいし、注意深く保たれた友情の見せかけを示しながら、彼は、彼の計画、それはいかなる特別に巧妙な考案の無いことの無駄な長い時間の認識のようにも見えるが、その計画を完遂するために四年間を費やした。彼は極度の秘密をたくらんだ；イギリス人に親しいかも知れない様な隣人の部族で無くてさえ、差し迫っていることが薄々感じられた。

しかしながら、全ての彼の徹底さで、**Opechancanough** は、単純な基本的、かつ、致命的な失策を犯してしまった。彼は、**Powhatan** が躊躇していた期間のあいだに新しい植民者達の定常的な流れが、徹底的に彼に対抗する力の均衡をひっくり返していたことに気づいていなかった。彼は、あまりにも長く待ちすぎた。素晴らしい機会が彼の指のあいだからすり抜けてしまったのだ。

にも拘わらず、老人の酋長は彼の血なまぐさい意思を実行した。彼が植民者達を急襲するために選んだ 1622 年の寒い 3 月の朝に、彼のアメリカインディアンの妻たちは、彼女たちの朝の仕事に早くからついていた。彼女たちが朝食の支度をしている間、戦士たちは、彼らの顔を塗り付け、そして、武器を用意していた。極わずかに数マイルはなれて、入植

者達はいかれらの小屋から、初春の輝きの中で芽を吹きだしている平和なバージニアを、彼らの多くの者が、そうした光景を見るのは、これが最後であったが、眺めてみていた。彼らの妻たちもまた、彼らの闘う場で攻撃する平和のための武器の準備をしている男たちのための朝食の仕度に忙しかった。インディアンと、同様な白人達は、戦闘に加わる準備ができており、長い戦争の真の始まり、この時はまだ両方が、歴史の、そして、大陸全体を作り直して行く事になる歴大な混乱と、流れの哀れな被害者であった。

しかし、Opechancanough と彼の友人たちは、ただ、正義のため、そして、彼らの国に入ってきた侵入者たちに対する抵抗であるに過ぎないと考えていた。彼らの煙草畑での植民者達になだれ込みながら、彼らは、ナイフと戦闘用の斧で襲い掛かった。ほんの僅かの時間に彼らは、347 人の、男、女、そして、子供達を虐殺した。James 川の、上流、下流と彼らは果樹園を破壊し、こうした農園の数を 80 から 6 つにまで減らしてしまうような猛威を振るった。半ダースが、タイミングよく、親切なインディアンの忠告により、被害を受けずに済んだ。

植民地はこの災難からぐらついた；しかしながら、決して、Opechancanough がもくろんだように潰されたわけではなかった。落ち着かない間に、武装的な行為が、春と夏の間に平穏となり、**植民者達は対策を講じた。**そして、Opechancanough の憎悪に対する完璧な対策をまとめ上げ、彼らは致命的な仕返しを準備するためにかれらの穀物の植え付けを無視さえしていた。

彼らの戦法は、Opechancanough かれ自身から、彼ら自身の考案によるものを反逆的に捻じ曲げて、あからさまにそれを取り入れたものだった。インディアンの酋長がそれをしたように、彼らは、戦闘士や酋長達が、入植者達が 3 月の大虐殺により、完全におびえさせられ、そして、ただ単に平和を望んでいると得心させられるまで、和解をするような振りをしていた。そうして、インディアン達は協定を創案する見せかけの目的のための会議に招待された。しかしながら、かれらは、インディアン達に、もし彼らが会議に来るなら彼らの生活は神聖なものと認められると保証しようとしていたけれども、彼らが集まった時に、白人達は彼らにとびかかり、そして、多くのものをその場で殺害してしまった。

こうして裏切り行為と大虐殺が仕返しと言う形で実施された。しかしながら、血なまぐさい話全体の扇動者は逃げてしまった；年老いた Opechancanough は、彼は最初にそうすべきだと信じこまされていたように、惨殺された者達の中にはいなかった。彼は、逃げ延びただけでなく、悔りがたい忍耐力で彼がもう一度攻撃をすることが出来るまで、22 年の間を待っていた。その時に、彼は、100 歳になっていただろうと言われており（彼は、確かにそれよりも、10 歳も若くはなかった）、そして、彼の戦闘集団の戦闘に立ち、担い籠の上で戦いを実行されられなければならなかった。

再び、酋長は、上手く計画を立てた。この時には、600 マイル四方の全てのインディアン達が一か所に集まり、彼らの戦略は、Opechancanough が四半世紀に渡り目指していたように、イギリス人を自分達の国から追い出そうとバージニアの全域に渡って、バランスをと

りながら、絶えず、攻撃をし、引き返すと言うものであった。

攻撃が 1644 年の春に、計画的に開始し、2 日間、成功の様相を示した。白人達に与えられた損失されたものは、最初の攻撃以上にずっと大きなものだった；とりわけ、由緒ある酋長達が要望した York 川と Panunkey 川に沿った入植者達が、およそ、500 人以上ものが殺害された。しかしながら、ここでもまた、Opechancanough は、彼の敵の強さを、大幅に間違っで見計らっていた。William Berkeley 知事は、インディアン達の軍勢力よりも数段以上に強さで勝る軍隊を組織し、その結果は、戦いはしばらくの間は、残忍で死に物狂いのものであったが、不可避なものであった。Opechancanough は捕えられ、そして、勝利の証として、担い籠に乗せられ Jamestown に運ばれた。

Berkeley の兵士達が彼を小さな町の物見高い群衆のなかを運ぶと、弱弱しい百歳の老人は悲慘に痩せ衰え、そして、ほとんど死にかけていて、彼に向けられた恐怖と憎悪、そして、陰気な魅惑の眼差しを見返すために彼の臉を開かなかった。多くの歴史家たちは、彼は、臉を開くには弱りすぎていたと信じているが、それは多分信実だったのではないか。

酋長の逮捕に繋がる劇的な出来事の中で、どれだけの者が真実であり、どれだけのものが伝説であるのかを見定めることは不可能なことだ。しかし、彼が、建物の中に連れていかれ、そして、興味心と憎悪の狭間に引き裂かれた、そとの野次馬達が、広く開かれていたドアを通して彼を見ようと群がっている間、保護されていたことにほんの欠片の疑いもない。その年寄が引き起こした惨事に何の疑いもなく思案している彼の守衛の一人一多分、家族か友人が大虐殺の犠牲者であったのだろう、一彼は故意に彼の銃を Opechancanough に向け、そして、大首長の悲慘な台枠に弾を撃った。

それは、避けられない終焉を急き立てる一陣の風であったが、しかし、厳格な家長がそれを直ちに蘇らせた。その射撃は、外の群衆を改めて掻き立て、そして、今度はざわめき、騒ぎで、酋長の死の断末魔を一目見ようと、建物の全ての解放口に殺到した。Opechancanough は、野次馬達の始末に負えない混乱を聞き、付き添いの者に彼の臉を開くように頼んだ。担い籠の上で彼の頭を返し、彼のくすんだ眼差しで、押さえきれない憎悪を持って、その群衆を睨み返し、そして、意思の素晴らしい努力で、彼は、自分をその担い籠から引き寄せ、そして、真っ直ぐに立ち上がった。彼は、彼の傷ついた体と、大の年寄りのためにぐらついたが、しかし、彼の指示の威厳ある雰囲気は彼を取り巻いている白人の守衛たちに畏敬の念を与えた。彼が、統治官を彼のところにつれて来るように要求すると、守衛の一人が、議論することなく急いで Berkeley を呼び出しに行った。

統治官もまた、あたかも死からのように彼の前に湧き上がった、まさしく超自然の様相の、恐怖に強烈な印象を抱いたに違いない。Opechancanough は、身震いし、怒りのこもった腕を上げ、そして、彼に向かって叫んだ：“もし、Sir William Berkeley を囚人とすることが私の運命であったなら、私は、かれを私に従うもの達の前にみすばらしく晒すようなこれはしないだろう。”

統治官の Berkeley が返答したことは記録されていない；それは知りたいところであるが。

我々が知っている全ては、畏敬の念に溢れた威厳のあるこの最後の宣言をした Opechancanough は、横になり、死んでしまったという事である。彼が亡くなると、バージニアと、南方の植民地は、再び平和となり、その後、長きに渡りそれを満喫した。

北の地域では、一方、Plymouth ならびに Salem のイギリスの植民者達が、より安閑とした時を過ごしており、予期もしなかった味方の組み合わせに感謝をしている。その一つは、Rhode 諸島から Maine 州までの New England Indians（新しいイギリス系のインディアン達）を大幅に削減した、不思議な病気であった；“木々は、”と、Cotton Mather が独特な独善で観察しているが、“より良い成長のために空間をつくるように、こうした有害な生き物は殆ど追い払われていた。” *Mayflower* 号が到着する 3 年前に伝染病が猛威をふるっていて、そして、インディアン達は、不安定な栽培と、もがき続ける植民地の増大に対抗する術がなかった。もし、彼らがそれをしていたとしても、それは、生き残ることのできるものではなかった。

その他の味方は、もっと強力なもので、そして、長続きしたものだった。彼は、Massasoit、いろいろな綴りがあり、“偉大なる主張”として、勝手に名前を付けられているが、その彼の良く好まれているインディアンの名前は、“黄色い羽根”という意味の Ousamequin あった。Massasoit は、巡礼者達が到着した時には、間違いなく New England の部族の支配者であった。彼の統治している領域、警告もなく変えることのできる対象、これは、Cod 岬から Narragansent 湾からずっと南の Rhode 島までも含んだ、Massachusetts の全ての地域からなっていた。彼の支配するところは、頑強な不従順な酋長達を大胆にさせているような西部の遠くの地域まで及んでいた。

Massasoit 自身は Wampanoags 族の酋長であって、今日、Mount Hope として知られている、Rhode 島の Bristol の村の Pokanoket に住んでいた。彼が何時誕生したのかは明確ではないが、しかし、*Mayflower* が到着した時には、彼は、植民地のある人物が彼のことを、“非常に頑丈な男で、彼の最も素晴らしい年齢で、なんでもできるような体格をしており、顔の表情は厳かで、そして、あまりしゃべらない。”というような年恰好だと話していたので、彼の全盛期の頃だった。

白人は Massasoit にとってはよそ者という訳ではなかった。John Smith は、彼が、バージニアに落ち着き、入植した時以前に、New England の海岸を探検していたが、その時に、彼に会っていたのだろう。巡礼者達が来る前に、酋長は、2 人の漂着した船員の返却をたれに大英帝国の船長と絶えず交渉などで取り決めをしていた。白人との彼の会合の会うときがどんなものであったにしても、彼は、彼が生きている間、彼らを友人であり、仲良くする相手とみなしていたので、彼は確かに、彼らに対する変わらぬ良い印象を持っていた。

伝説が、Plymouth の植民地の人達と Massasoit の帝国との間の最初の遭遇は、巡礼者達が上陸した後のほんの 2・3 ヶ月後にやって来たのだが、その時に、植民地の者達は彼らの始めて出会った New England の寒さとじめじめした環境と戦っていた。その話は、Samoset、彼は、Massasoit 族の酋長の一人であるが、その彼が森から出てきて、そして、彼が、Main

州の海岸の沖で白人の獵師たちから学んだ、いくらかの英語で：“よくいらっしやいました、イギリスの人よ!”と、入植者達を歓迎していたと言っている。

このはなしは、多分に疑問であるが、1621年の3月22日に、Massasoitが、60人もの戦闘士を引き連れ、彼の兄弟の Quadequina、ならびに、酋長の Samoset や Squanto と一緒に、礼儀を尽くして植民地に來たという記録の事である。インディアン達が非常に情け深く見られた途中での会話が終わった時に、そして、Massasoit が、“その後はいつでもご機嫌よくした”、儀礼的なウィスキーを飲んだ後で、古い年代記が我々に話している様に、平和の協定が結ばれていた。

最初の時に、土地が、この協定の項目により、白人達に自由になる様に与えられた。“イギリス人達は、その土地を”、と Massasoit は、嘆いてみていたが、“それを占有するのに何も残さずにとっている。偉大なる酒……が、大地の見えるところから人々を払いのけてしまった。”彼が、大地と言っているのは、マサチューセッツと Rhode Island のことであり、そのほとんどが、Massasoit が、その土地の協定の契約条項も含めその協定を忠実に守っていた間に、栄枯盛衰の半世紀の間に、賭けの寛大さばかりでなく、彼の忠実な友情も、起き上がってきた不可避の小競り合いを食い止めることはできなかった。

平和は、Massasoit の Wampanoags 族と、彼らの同盟者達とにより、守られていたが、Connecticut River の峡谷に住んでいた、Pequots 族は、別の姿勢を示していた。最初の入植者達がだんだん増えていき、そして、拡大するにつれ、彼らは、北部と東部から、西部に迫いやられるようになり、Massachusetts の入植者達から悩まされるようになっていた。南部と西部からは、すでに、Manhattan 島の所有者や、Hudson 川の豊かな地所の所有者となっていた、土地に飢えたオランダ人達が、Connecticut に移住しかけていた。Pequots 族は彼らの間でそんな状況に身動きとれなくなっていた。

歴史のなかで、Pequot War として知られるようになったものの引き金になったような出来事は、まことに不思議なことに、もし、二つの漁船のあいだの行動が、その差異に値することができるなら、と、というような、海軍の交戦であった。1636年の夏に、ボストンの John Gallup という名前の紳士が、彼のちいさな船で、友達と二人の息子と一緒に Block 島の沖合で漁をしていた時に、近くで奇妙な動きをしている別のボートを見つけた。その船は、ただふらふらとしているだけで、何の目的もなく漂っていて、見るからに船員や乗り組んでいる者はいないようであった。しかし、もっと近づいてみると、Gallup は、その甲板の上に横に伏している姿が動いているのを見た；と同時に、彼はその船が、自分の近所の人のもので有ることに気付いた。

“ここで何か悪いことがあったのだ”と、かれは、自分の同伴しているものに言い、自分の船をもう一方の船の方に近付けた。まだ、十分に近づいたという状況ではなかったが、彼は、カヌーが急激に海中に沈んで行くのが分り、その中の数人の男が岸に向かってパドルをこいているのを見た。もっと近づいてみると、彼が思っていたこと、インディアン達は船を捕まえ、甲板の上で、この人達を殺害したか、あるいは拿捕し、この船を操ってい



Carver 知事と Massasoit との会合

H. L. Stevens

るのでは、ということが確認できた。

Gallup は、彼の立場を考えた。彼は、友人と二人の息子に、かれの海の軍備を用意させた。その中には、二丁の銃、二丁のピストル、そして、戦闘が長引いた時に使うのに十分な弾薬が積み込まれていた。彼は、かれ自身、名の知れた辺境地の開拓当時の射撃の名手だったのだ；彼は自分の考えのなかに一発の無駄もしないという自信があった。彼は船員に、もう一方の船の方に舵を取るよう指示をし、そして、Gallup 自身は、その舳に立って、銃を撃った。彼は、自分では、正しいことをしているという自覚があった。彼は全ての標的をインディアンに向けていたと説明した。他のもの集中攻撃に加わり、そして、一方、Gallup の船は、素早くインディアン達を圧倒した。

白人の男が、彼らを沈没させるつもりで有るのを確認し、やく半ダースのインディアン達が二つのボートが衝突する前に甲板から飛び込んだ。Gallup の船が、衝撃で後ずさりし、そして、もう一度攻撃に出た。この攻撃で、甲板にいた全てのインディアン達が 4 人を残して全て海に飛び込んだ。船員たちに自分に続くように叫んで、Gallup はいかにも海賊のように舳を飛び越え、船に飛び乗った。残っていた 4 人のインディアンのうち 2 人は、下の海に逃げた；他の 2 人は除き、命乞いをした。寛大にも、Gallup は、彼らを囚人として捕えた。

ボートに乗っていたインディアン達は、Pequots 族で有ることが分った。彼らを海賊的な行動にさせたのは何であるかは明確ではないが、しかし、その後遺症が起きたことには疑いはない。そのことが Pequot 族の実質上の根絶に繋がった。マサチューセッツの知事の Vain がこの物語を聞いた時に、彼は 90 人の男からなる軍隊を、そこに住んでいた Pequots 族を急襲するために Block Island へ派遣し、目にするそこで生きている全ての人達を殺し、そして、一人の犠牲者も出さずに、ボストンに帰って来た。

この無慈悲な攻撃が、Pequots 族の全体を混乱に陥れた。すでにオランダ人やイギリス人の圧力の現実により、彼らの時に起きていたことの恐怖に対し、彼らは、自分達を守ろうと立ち上がっていた。不幸にも、彼らは、彼らの領地の中に居る白人達全てを殺害し、あるいは、彼らを海に追い出すと言う、Opechancanough の大胆な決断に悩まされていた。彼らは白人達ともっと親密になることを楽しんでいたので、彼らは、自分の決断を公言しはじめた Opechancanough よりももっと洗練されていたし、彼らは、自分たちの目的を達成するためにはかなりの援助が必要となるだろうという事を理解していた。

同盟を模索しながら、彼らは、古いたではあるが、しかしながら、もし、彼らが、共通の敵にたいして一緒に闘うことを説得させられるなら、戦いの場に 5000 人もの戦闘士を送り込むことが出来る Narragansetts 族が近くにいることを知っていた。Pequots 族は、上手くたくらんで、同盟を模索していた。彼は、沢山の贈り物を携えた使いのものを送った；彼らは、Narragansetts 族に、財とか、お世辞、雄弁、そして、彼らができる限りのあらゆる口のうまさを屈指し、これに尽くしていた。

Narragansetts 族は、一時的に彼らとともに暮らしていた者、彼は、マサチューセッツの牧



Pequot 戦争での海戦

A. R. Waud

師の反逆者で、**Roger Williams** と言う名前の、その地位を外された宣教師で、彼は、平和的な男であり、さらに、**Narragansetts** 族は一彼らが **Pequots** 族を助けたとしても失うものばかりで、何の得るものはなく、それは何の足しにもならないという事を知っていたのだが、その彼を除いて、ほとんど説得されていた。彼の強力な饒舌（じょうぜつ）の結果、**Narragansetts** 族は、**Pequots** 族の誘いに対して、丁重に、断ろうという方法に動いていた。

失望し、そして、すてばちになった **Pequots** 族は、もはや自分たちの身近に他に有効な同盟は無いと理解し、自分達だけで、事を処すように決断した。彼らは、通常のやり方、一人だけの小屋に潜り込んで、男たちは戦いに臨むという方法を始めた。仕返しが迫っていないときには、彼らは、コネチカットでの戦闘路に 1000 人以上の **Pequots** 族の戦闘士が終結するまで、彼らの行動の構想を増大させていた。その領域にある植民地の者達は、数では圧倒的に少なく、そして、彼らの隣人たちよりもうまく装備されていたが、彼らは、**Plymouth** ならびに **Massachusetts Bay** の植民地の者に対し、彼らを助けにきてくれることを嘆願していた。

Massachusetts の者達は、**John Mason** を送り、これに応えていた。彼らは、その仕事に上手に対処できる男を選ぶことが出来なかった。**New World** に来る前に、**Low countries** で奉仕的のように働く専門的軍人として、**Mason** は、**Dorchester** から **Connecticut** の方へ **Windsor** の街を設立するために移住者たちの集団を誘導したような大胆な指導者の一人だった。**Gallup** の海軍の交戦より少なくとも一年前には、彼は、どこであろうとも **Pequots** 族を悩ますためにオランダの手当を受ける立場にあった。

1637 年の 5 月に、**Mason** は、**Pequots** 族にたいし、強力な軍事力を行使した。彼は、自分の支配下に 80 人の白人と、**Mohicans** 族の大首長である、**Uncas** のもと、100 人位の同盟者を従えていた。**Saybrook** 砦で、この小さな軍隊に、**John Underhill**、彼は、自分たちの家を守るために必要とされた、20 人の **Mason** の仲間達を削減するために 19 人の **Massachusetts** 族の男達を連れてきた、その彼が加わった。**Narragansett** の国で小休止し、その間に、彼は、予想もしなかった助命からの敵の攻撃を実行し、**Mason** は、**Pequots** 族が失敗した **Narragansetts** 族の説得をし、彼らの非常な大きな戦闘士の集団が **Mohican** 同盟に加わった。

Saybrook から、三隻のちいさなボートに乗り、探索隊は海岸に沿って航海し、5 月の 20 日の夕方になって、**Narragansett** 湾に入って行った。次の日は日曜日で、手中にある血の流れ出る務のなかで、彼らを救ってくれることに熱心な神に祈り、敬虔な死刑執行人たちは、その日を過ごした。もし、彼らが、信心深いのであれば、**Mason** と彼に続く者達は、彼らの祈りの後に続いた恐ろしい嵐からの忠告を受けたかも知れないが、しかし、ひとたび、日曜日が過ぎると、経験に富んだ男の **Mason** 隊長は、悪い天気は彼を 23 日まで、上陸することを止めさせていることになり、これにただイライラしていた。

この集団が、コネチカットの **Grotons** という現在の都市を見下ろす小高い丘の上に築か

れた **Pequos** 族のとてもしっかりと防備された要塞に近付いて行くと、彼は、その後、150 年近くに渡って、フランスとイギリスの両方が悩まされたインディアンの同盟の信頼性の無さを最初に経験した。**Mohicans** 族と **Narranansetts** 族は **Pequot** の砦の大きさと頑丈さに、恐怖を感じていると告白した。彼らは、かなりの距離まで撤退し、そして、白人達に攻撃の先頭に立つ名誉を与えた。

戦争のなかでは、インディアン達は実用主義者であった。彼らは、自分達が最も良い状況にあると思えるような場所と時にだけ戦った。この例のように、彼らは、自分の全てが、第一流の日和見主義的であり、白人達に対してと同じように、かれ自身の部下たちに対しても不忠実であるような、そんな悪名の高かった酋長の **Uncas** の指揮のもとにあった。**Sassacus**、彼は **Pequos** 族の酋長であるが、その彼は、彼の義理の父であり、その部族とともに生活をしていた。**Uncas** は、彼らのおかれている状況が、探検隊の中では、他の誰よりも良い状況にあることを知っていて、間違いなく、どのように戦闘が展開して行くのか、見定めが出来るまで待っていることに利があると、攻撃のうまくいくことをよくよく疑ってみている余地があると決めていた。疑うまでもなく、彼は、勝者のほうに加わろうとしていたのだ。

しかし、彼は、五月の 25 日の夜明けに目の当たりにしたものに、全く怖がりもしなかった **Mason** 隊長の巧みな仕掛けについて、重大な見誤りをしていた。砦は、約 1 エーカー程を防護壁で囲まれていて、そこは、だいた 12 フィートの高さがあり、隙間からは、矢を放つことが十分できるほどの広さはあるが、人間の体は決して侵入できないほど、非常に密接になっていた。中にある **Pequots** の村落は、木皮を張った小屋の列が段々になっていた。

Mason は、**Pequots** 族は、通常の村落の騒音一犬の鳴き声、彼らの儀式での騒音を出す子供や大人たちの声などでは、予想がつかないことを知っていた。彼は、パトロールの人間を送り出し、砦には、それぞれは反対側の位置に、二つの入り口があることを知り；これに従い、**Mason** は、自分の軍隊を二つに分けて、両方の入り口から攻撃することを決断した。

驚きに襲われ、**Pequots** 族は、それにも拘わらず、直ぐに、彼らが周りの部族からおそれられ、そして、感心されて来たのかを誇示した。彼らは、侵入者たちを、**Uncas** の疑問がほぼ現実のものと思われるようになるまで、勢いよく追い返すようにして、勇気と工夫をこらして戦った。そして、まさにこの一瞬であるが、**Mason** 隊長が燃え木を取り上げ、それを頭の上で回し、光り輝くほど燃やすようにして、それを小屋の方に投げ入れた。するとたちまち、その火が燃え上がり、この戦法を目撃していた **Underhill** がそれを真似した。燃える火が、こうして今や、戦いを動揺させ、防御している者たちを混乱させ、彼らの多くの者を炎で燃やすようになった。**Mason** は、こうして、彼の部下たちに砦の外に引き上げるように指示し、そして、インディアンたちが彼らの燃え上がる炎のなかで右往左往しているときに、兵士達は、身に迫る戦いをすることもなく、いとも簡単に引き上げることができた。この攻撃の集団から逃げ出した人達は、直ぐに、周りにいる殺人者でいる自分た

ちに満足し、Mohicans 族と、Narragansetts 族の手のうちに投降した。

“神は我々の側にいる”と、Mason は、虐殺の間、叫んでいたと想像される。“彼は、彼らを猛火の釜のなかに居るようにさせながら、彼の敵のものを軽蔑し、笑っている。”のだろう。それは、もつともありそうもない叫びであったが、しかしながら、それは、疑いもなく、隊長の信念を説明していた。確かに、それは、後に彼は“600 人は下らない Pequots 族のものが、その日に冥途の送り込まれた”と想像したと記述していた Cotton Mather の敬虔な確信であった。

多くの歴史家たちが、Pequots 族の不慮の災難は、男や女、そして、子供達を含め、1000 人程度の者と見積もっているが、しかし、どんな状況であれ、Mason 隊長の側の犠牲者が僅か 2 人であるのに対し、国は滅びてしまった。軍事的な見地からすれば、ごくごく僅かの軍事力で、数量的に膨大な敵を打ち負かした大勝利に近いものであった。

時が来て、彼らが彼らの船に行進した時に、彼らは、村にはいなかった Pequots 族の殆どの者と遭遇した。これは、彼ら自身の襲撃の冒険から引き揚げてきた、300 人余りの者達からなる集団であった。この時に白人達は仰天して、そして、かろうじて自身達自身の破滅から逃れていた。しかし、彼らは、Pequots 族の背後に何とか回ることをし、そして、絶えず、防御的な行動を取りながら戦って、港までたどり着くことができた。

目新しい援軍と新しい目的をもって、Mason は直ぐに、Pequots 族の残ったものを根絶やしにしようと決心し、再び、彼の部下たちを率いて行動した。彼は、New London から Saybrook までの領域を部族の生き残りのものを探し回り、情け容赦なく彼の役割を遂行した。残っていた生き残りの者達は直ちに降参し、そして、鎖につながれ、Bermudas (バーミューダ諸島) に送られ、その後の彼らの生活は奴隷として生きてきた。多くのものが、Massachusetts や Connecticut で同じような運命をたどった。極わずかの仲間から外れたもの達が、他の部族のものと一緒になり、反抗の機会を見出していた。

こうして、ほんの僅かの 2・3 週間のうちに、その人たちの文化は決してたいしたものではないと言い切れない、強力で勇敢なインディアン部族が、人類のできごとから簡単に消し去られてしまった。これが、こうして、その植民地にもたらされた平和と繁栄の時代に対して、気前よく、そして、何の悔いもなく、支払われた New England の代価であった。皮肉なことに、それは、こうしたことの原因でもないし、あるいは、白人の開拓者たちに対して次につづく恐怖をもたらした、いかなるそのほかの部族の原因でもない。Matacomet、あるいは、イギリス人に知られていた Philip が、1660 年に彼の兄弟の、Alexandre、あるいは、Wamsutta とともに合同して、彼の父親の後を引き継いだ時、New England は、決断力と、機略縦横、そして、知識を有するインディアンの指導者と直面していた。彼が始めた戦争は 17 世紀の最悪のそうした状況の衝突であったし、New England の植民地の生き残り以下の何物でもない戦いは、賭けでもあった。

3

PHILIP 王と彼の戦争

19 世紀の数世代に、何のために発生したのかよくわかっていない Philip 王の戦争という優雅な作り話があった。しかしながら、現在の学者たちは、New England の植民者達と New England のインディアン達の両方の運命を決めた赤人と白人との間のこの最初の重要な衝突の理由を極めて明確に確認していた。その戦争以前には、その領域の南部地方には、約 10,000 人のこうしたインディアン達が住んでいて、その中には、最も強力な部族たちからなる Narragansetts 族が 4,000 人ほどいた。彼らの酋長で引き入れた対抗者たち（大部分は平和的であった）は、3,000 人の Nipmucks 族（彼らは、常に戦闘的だった）と、その数は、1,000 人より少し人口の多かった Wampanoags 族だった。その他の、12,000 人は、すくなくとも、半ダース程度の部族に分散されていて、どの部族も、その殆どは、他の部族とともに競い合うような力を持った者達ではなかった。

こうした部族の、白人の隣人たちはマサチューセッツ(約 17,000 人)やコネチカット(10,000 人)のピューリタンの入植者達だった；5,000 人の人口だった、南東部のマサチューセッツの Plymouth 植民地；そして、New England 同盟の厄介者たち、3,000~4,000 人の争い好きな原住民たちのいた Rhode Island と言った具合だった。どんな戦争でもそうであるように、こうした対立する人たちの間で起こることの結果として戦いは、その原因は複雑なものであった。衝突には、いくつもの広範にわたる理由があった。こうしたもののなかの基本的なものは、譲渡と思惑により白人達の間、そして、彼らの土地がどんどん狭くなって行くと現実によるインディアン達の上に燃え上がった土地の所有をめぐる喧嘩であり、そして、それらとともに、彼らや彼らの先祖が何時も知っていた生活の様式であった。

New England の入植者達は、時々、言われているように、その土地をそう簡単に手にしたわけではなかった。上手にごまかした沢山のケースがあったけれども、ほとんどが、土地を手に入れるための支払いをしていた。トラブルが起きたのは、インディアン達が、白人達の法的な手段を完全に理解することが出来なかったからであった。彼らは、土地の取り扱い、彼らの太古からの狩猟や漁をする権利を含んではおらず、そして、彼らが自分たちの行為をした時に協議をした占有する権利のなかに実際に排他的なものは何もないと信じているように思われた。

インディアン達が、市民の計画に違反したような時には、イギリス人達は、当然のこと

のように彼らを植民地の法廷に引っ張り出し、そして、かれらは数世代に渡って彼らの防護壁となってきたイギリスの法律の元に裁判をした。インディアン達にとっては、イギリス法はイギリス人のための法律であった；彼らにとっては、それが彼らのためにどんな場合でも必要なものという訳ではなかった。市民や犯罪の両方の場合に、それを彼らに当てはめることは、彼らには、不面目なものであって、正義の様には見えなかった。彼らの憤りは、年々、判定のあるごとに蓄積して行った。

その他のいざこざの原因が、原住民の部落をどんどんイギリスから運び込まれてくる品物に、じわじわと依存させていくイギリス人の取引商達により、インディアンの人達が段々と経済的に支配され、そして、ますます増加する借金で原住民が苦しくなっていく状況に置かれたことにあった。白人達の相対的に豊かな生活に伴って、多くのインディアン達が、植民地で働く、奉仕人や労働者として雇われ、仕事をするようになり、そして、こうしたことが、自分達の雇用人が奴隷と少しも変わらないように考えている人達に尽くしていく、程度の悪い冷遇をまねくようになった。

インディアン達の生活の様式は、夜と昼も改宗のために働いていた植民地の宣教師たちの嫉妬的な行動にも脅かされていた。インディアン達の気持ちをつかむことで、フランスのイエズス教会の宣教師たちと激しい競い合いは、単に始まっていたと言うばかりではなく、すでにそれはインディアン達の社会のなかに不和を生じさせるような影響を持ったものであることが証明されつつあり、最も強烈にキリスト教的な信仰が危険なものであるとしていた酋長や祈祷師たちによりとりわけ不快に思われていた。

さらに、諍いの他の原因は、地形的な圧力であったる **Pequots** 族が彼らを取り巻く白人達の強力な人口で捕まったように、**New England** のインディアン達は、一般的に、海岸線にいた、積極的で、どんどん増加していく植民地と、西洋に対する **Iroquois** 同盟の敵愾心の力の間に取り込まれていく状況にあった。もし、彼らが彼らの先祖からの土地に残ろうとするなら、彼らは彼らに対し、毅然とし、そして、戦うようにしなければならなかったのだ。

こうして、お互いに二つの敵対者が、その後、数世紀にも渡りそうであるように、基本的なことがらを明確に描いていて、お互いに対立していた。白人達は、インディアン達は、より優れた文化の前に崩れてゆかねばならない、より下等人種であるとみなしていた。神は、白人のイギリス人が、この地を治め、そして、発展させてゆくべきであり、インディアンは、イギリスの常識的な法律のもとで見出すことのできる権利はなにもも持っていないと定めていたのだ。赤人たちにとっては、彼らの法律や、教会、考え方、そして、まさにその圧力が、大昔の時代から彼らのものであった全てのものを脅かしている邪魔な人達として、入植者達をみていた。

こうした背景に立ち、**Massasoit** の息子である **Metcomet** は仇討の天使のように、奴隷となっている者たちの解放者として現れた。しかしながら、彼は扇動者ではなかった。この思慮深い、黙想的な大酋長は、みるからに、彼の配下のもの達に起こっていることをはじ



Philip 王

めから理解し、彼は、彼が知っていなければならない戦争が不可避なものであるという状態にすることに急がなかった。**Massasoit** が亡くなった時には、イギリス人は、そうしたことは、見当違いであったが、彼らが、彼の年上の兄弟である **Wamsutta** に **Alexander** という名前を授けたのと同じように、彼に **Philip** というイギリス人の名前を与えることにより、彼の友情を得ようと努力さえもした。

しかしながら、**Massasoit** の逝去は **Wampanoag** の国の雰囲気を変えていた。それは、共和国から、民主的な政府への今日の変化のようであった。年寄りの **Massasoit** と彼の相談者たちの中道的な保守主義は、二人の兄弟の若さあふれる大胆さに会議の焚火の周りで譲歩していた。

この変化は、そう言われているが、間違っ、戦争のたくらみが企てられていると疑っていた入植者達の注目を集めることに失敗しなかったに違いなかった。1662年に、彼らは、あたかも彼が殺人的な挑戦を考えているかのように、尋問するために **Alexander** を **Duxbury** に呼んだ。**Alexander** は、当局の探りと駆り立てにたいし、丁重にそれに従った。それが終了すると、彼は、**Marshfield**、そこで彼は高熱で倒れ、そして、**Mount Hope** の家に戻って、2・3日して亡くなってしまったが、そこに友人である **Josiah Window** を訪ねて行った。

Alexander の未亡人は、イギリス人が彼に毒を盛ったと確信していた。他のインディアン達は、病気になるまで当局が彼を虐待していたと考えた。どちらの話にもその証拠となるものは存在していない。多分、**Alexander** は、抗生物質が出てくるずっと以前のこうした時代によく知られていた、死を招くようなある種のウィルスのために死んだのだろう。

いずれにしても、**Philip** は今や、**Wampanoag** 族の王位のゆるぎない地位についた。しかし、彼の兄弟の死を、復讐を模索する代わりに、彼は、彼の父が入植者たちと交わした協定を再確認し、長い間、支持されてきた平和を保とうと考えているように見えた。しかしながら、**Philip** は、将来に対して、なんの想定も持っていなかった。彼は、白人に対して総体的な服従する事も、あるいは、土地の所有のために死んでしまうような終局的な戦争をすることのどちらにも疑問であると、よく理解していた。

一方、決して容易ではない平和が支配していた。1667年と1669年に、そして、1671年の春にも再び、戦争によるひどい状況があった。**Philip** は、明らかに、入植者達をあまりにも警告した、こうした陰悪な策略を施すような後ろ盾とはなっていなかった；もっともらしいのは、**Narragansetts** 族に罪があった。しかしながら、彼は、インディアンの酋長のなかでも最も権威があったので、持ち上がった出来事に対して指導をするのにはもっとも好ましい人物であったので、当局が1671年に **Taunton** に呼び、そして、平和を求めた人物は **Philip** であった。

こうした **Plymouth** の当局は、彼らのやり方は横柄であり、厳然たる態度であった。そのほかの事柄のなかで、彼らは、インディアンは彼らの鉄砲を放棄するように主張した。**Philip** は、誇りがあり、そして、非常に敏感な男であり、こわばった顔の白人の役人たち

が彼と、そして、彼に付き添ってきた州議会議員たちに対応したやり方で、侮辱を受け、そして、酷く立腹していたが、しかし、彼は、自分が、反抗するに十分な軍事力を保有していないという事を知っていた。時は今ではなかった。彼は、協定に署名し、鉄砲を放棄した。

勿論、極僅かだけであるが、武器が押収され、それらは、Philip と彼の随行員の物達が、Taunton に携えて行ったもの殆どであった。その他のインディアン達は殆どが彼らの武器を放棄することを拒絶した。再び、Plymouth の役人たちは、恐怖を感じ、そして、Philip を、結果的に彼が次に彼らの前に出てくるときにそうするような立場に置くことを要求したが、しかし、再び、Wampanoag の酋長が、彼の威信を我慢し、そして、正しくもっとも情けない服従以外のなにものでもない協定に署名した。それは、彼がそう直ぐには忘れることのできない屈辱的なものであった

これに引き続く 4 年の間、Philip は、Achilles 族のように、彼のテントで不機嫌に過ごしていた。彼は、彼の配下の酋長達と、白人達により彼らの上にのしかかる好ましからざるものの積み重ねについて討論する、果てしない時間を費やさなければならなかった。そして、かれ自身、彼の部族のますます生活をしにくくなって行く事を考え、そして、何かなされるべきであるかを考えながら、ひとり物思いにふける時間を過ごさなければならなかった。

彼以前の他のインディアンの酋長達と同じように、Philip は、自分たちだけで入植者達と戦う事は出来ないと決断していた。彼は、あらゆる手にすることのできる同盟の助けを必要としていたのだろう。根気よく、彼—そして、もう一度、他の者達がしたように、—彼は、ありとあらゆるところに対して、彼の使いを送り、そして、彼の秘密の議会に火をつけた。これは、死に至る戦争である、と彼は、Algonkians 族の偉大なる仲間達のあいだの、この語族に属している、そして、彼らを白人が破壊するであろうという他の部族に対し、話を伝えた。彼らは、自分たちの国が、日常の出来事で合衆国としてきた古い戦争を忘れるに違いないか、あるいは、彼らは、自分達自身を破壊されるであろう。彼は、来る月も来る月も、彼の計画で、命とりの目標をもって働き、そして、直ぐに、状況は、屈辱の報復の 50 年となって行く戦争のためのそのもととなった。

殺人の裁判は、戦争への前触れであった。1675 年の 1 月 29 日に、John Sassamon という名前の改宗したキリスト教徒のインディアンが、Plymouth から南西の 15 マイルほどのところにある Assawompsett の池の氷の表面の下に、死体で見つかった。彼は引き上げられ、そして、彼を見つけたインディアンにより、すぐその場で埋められたが、しかし、2・3 日経って、Sassamon は殺されたのだという情報が当局に届いた。彼は掘り出され、そして、その検死の結果、決定的な証拠ではないけれども、彼は実際には殴打をされ、そして、池の中に放り込まれる前に、不明の加害者により殺されたという説明のできる話を提供した。

被害者は、通常のインディアンではなかった。John Sassamon はキリスト教徒として育

ち、ハーバード大学で、非常に珍しい学位を授与され、彼が突然彼の植民地の金銭的な後ろ盾となる人を見捨て、“白人のインディアン”に為ろうとする途中であったように思われ、彼が Philip 王の秘書として雇われた一勿論、我々が現在それを理解しているような言葉の実際の意味合いとは異なるが、一そのために、Wampanoags 族のところに戻って来ていた。彼は、英語を上手に話、そして、“ずる賢くて、一見、信頼できそうなインディアン”として、語られていた。彼は、また、明らかになったことであるが、スパイであった。彼の野生の生活にもどることを悔いながら、彼は、白人たちのところに戻り、教会に再度登録し、原住民の僧侶になり、そして、うわべだけで有るが、自由に白人とインディアンの社会との間を行き来できる、とりわけ尊敬をされた人生を送ることに落ち着いていた。しかしながら、彼の忠実さは白人に対するものであった。彼が殺される 2・3 日前に、彼は、Plymouth の当局者に対し、Philip 王の陰謀、彼の歴史のなかで彼らの不信により帳消しにされた裏切りの断片について、語った。

Sassamon の殺人を見たという事を明らかにしたインディアンの目撃者が出てきた。そして、殺人をしたという三人の Wampanoags 族の名前が名指しされた。彼らは、Philip 王の相談役の一人で、Tobias という者；Tobias の息子の Wampapaquan；そして、Mattashunnamo と呼ばれた戦士であった。三人とも、彼らの罪を否定したが、しかし、彼らは正式に裁判にかけられ、別の 2 人が実際に殺したと主張したけれども、有罪の判決を受けた者は、喘ぎながら、完全なる自白をした。政府は、公正が実施されたことで満足していた。彼らは、Wampapaquan をもう一度吊るし首にし、仕返しをし、そして、彼らは、今度はそこに何の刑の執行の猶予もないことを明確にした。

その刑の執行が Wampanoags 族を激怒させた。Philip は疑いもなく、容疑者は有罪であると知っていた；それは、おそらく Sassamon のごまかしが見破られたものだろう、一そして、彼は、両方の側がスパイを送り込んでいた行動一多分、Philip の扇動の場への、を与えられていた。しかしながら、処刑をされたのは酋長の友達であり、そして、白人の当局者は、いまや、Sassamon の話を信じており、そして、陰謀はもはや秘密ではないという認識になった。この特異的な時点でさえも、Philip は、時がやって来たと確信してはおらず、そして、彼が出来たなら、違反から自制させただろうが、しかし、若い勇猛な男達は興奮の絶頂にあった。彼らは、Mount Hope 半島の外側から燃え上がる地点に集まり、それから長い間続くことになる戦争へと突入して行った。

攻撃の第一目標は、避けるべくもない—Swansea の村で、ここは、半島の入り口にあり、そして、Wampanoags 族が Massachusetts と Rhode Island に流れ込んで行く前に、征服しなければならない場所であった。インディアンの偵察隊が、Swansea の村で見つけられ、植民地全体が警戒態勢を取った。統治官の Winslow が Philip に、彼に対して、どうして彼は、イギリスに対して戦争を仕掛けるのかを訪ねる使者を送った。Philip が傲慢な態度で返事をした：“あなた方の統治官は、イギリスの Charles 王の課題以外だ。私は、課題を取り扱わないだろう。私は、私の兄弟である王と平和についてだけを取り扱う積りだ。彼が

来るならば、私はいつでもよい。”

Charles は、とんでもなく、これから起ころうとしていることを拒絶できなかった。Winslow が、6 月 24 日を、戦争が避けられるように、断食をし、そして、祈りをささげる日として指定し、そして、戦争が Swansea で始まる日となった。Wampanoag の勇士たちの集団が、奉仕活動から家に戻っている多くの礼拝者達を襲撃し、一人を殺害し、他の 2 人を追跡した。二人の生き残りのものは、彼らも、また、砲撃された時に、一人の医者 of 所に逃げ込んだ。駐屯部隊、其れ自身の近くにいた 6 人の他の者が、砲撃され、そして、インディアン of のやり方で、手足を切断された。勇士たちは、彼らが自由に動く前に、極わずかの家を焼く時間を取った。

この攻撃が Philip の望むところに対抗して行われたと信ずるさまざまな理由があるが、しかし、真実が何であろうとも、それは、続いて起きた血の流れる嵐のなかでの損失であった。インディアン達は、いまや、気ままに、白人達の社会を吹き飛ばした。Swansea の住民たちは、最初の一攻撃で自由となったが、しかし、インディアン達は街を焼き払ってしまった。そして、彼らは、Taunto, Middleborough, そして、Dartmouth を、見境もなくこれらすべてを破壊しつくした。全ての町から、助けを求めて、Boston、そして、Plymouth に使いのものが飛んで行った。

ニュースがボストンに届くと、政府のドラム奏者が中央広場に立ちつくして太鼓を叩いた。3 時間の間に 110 人の男たちが招集され、Samuel Mosely 大尉の指揮下に置かれた。この軍隊が 6 月の 26 日にボストンの郊外に移動し、その二日後には Swansea の左側の何とかと言うところに入った。彼らがそこに到着したのは、夕暮れ近くであったが、Mosely は、おろかにも、一ダースの男達を Mount Hope のほうに偵察隊を送りだした。彼らは、同じようなインディアンの集団と遭遇し、そして、引き続いて起きた小さな小競り合いで、一人が殺害され、他の者達は負傷した。二人のインディアンが彼らの命を失った。

次の日の朝、もっとずっと大きな Wampanoags 族の軍隊が Swansea の郊外に現れ、Mosely に出てきて戦うようにけしかけた。勇敢な男である大尉はこの挑戦を受け入れ、彼の隊の先頭に立って突撃した。明らかにインディアン達は、誘いには乗らないだろうと考えていた。彼らは、向きを変え、そして、逃げ回わり、Mosely と彼の部下たちの追撃を受けた。白人達は、彼らが湿地帯の防護用隠れ場に到着できるまでに、半ダースの者を殺した；ただ一人の入植者を失っただけだった。

次の日、Mosely は Philip 自身の村に行進して直行したが、8 人の白人の身の毛のよだつような頭が、柱からじっと彼を見つめている以外、荒れ放題で有るのを見た。Mosely は、彼らを埋葬するよう命じ、Swansea に本部を設立するために引き返した。

戦争で、とられた最初の頭皮は、目先を変えて、白人の男たちにより掲げられた。Oakes という名前の若い副官に指揮された派遣隊が 7 月の 1 日の朝、Rehoboth から Swansea へ行く途中で、その隊が突然インディアンの集団に近付いた時、小競り合いの結果、数人のインディアンが殺された。Oakes はその頭皮をはがし、それを戦利品としてボストンに送

り届けた。

新しい指揮官が、陣容を整えていた入植者達を助けるために戦場に送り込まれた。彼は、**Rhode Island** の **Little Compton** の開拓地で住むために、3 年ばかりの彼の妻を最近引き連れてきた **Plymouth** の兵士の **Benjamin Church** であった。**Church** は、実に、彼の家の周りのインディアンたちの事を気にしてばかりいて、彼らと非常にうまくいっていたが、しかし、彼は、**Philip** に対しては、活気のある立場をとり、彼の上官が無視されるような良い忠告のうまい話をしていた。

36 人の男達と一緒に、**Church** 大尉は 7 月 8 日に **Pocasset Neck** に行軍し、そして、状況の評判を見ながら、**Philip** が **Mount Hope** の半島に全てのインディアンが居なくなるようにもっともらしくしていたので、彼を **Neck** に追撃しようと、彼の周りの役人たちをせきたてていた。この賢い忠告をはねつけ、植民地の役人他は、彼らの軍隊を **Mount Hope** に誘導し、それに対し、**Philip** が **Pocasset** から現れて、そして、**Plymouth** に向かう街を焼き払い始めた。**Church** は、彼の少ない海軍を、19 人の男たちを彼のところにおいて、分割し、そして、彼の隊を、湾の **Rhode Island** 側の場所に、彼の 3 隻のボートを停泊させ彼の前進先を目指して、**Narragansett** 湾に突き出ている陸地の指先のような **Tiverton** の南の地点に進軍した。彼は、そこでインディアンを見つけると確信し、彼は、そこで、一 300 人のインディアンを見つけた。

こうした恐ろしい生き残りのもの達にたいし、**Church** の男たちはしばらくの間はよく戦ったが、しかし、彼らは、誰一人、間違いなく、惨殺されるように思われた。大尉は、彼らが完全に降伏させられる前に退却するように命じ、彼の部下たちを、周りに散在している石でにわかに要塞を作るように急き立てて、大混乱の兆候にあったときに、彼の部下たちを冷静に元気づけた。**Rhode Island** 海岸の方に助けを期待して見ながら、**Church** は、船員たちは、彼らが自由になろうと戦っている最中であつたが、浅瀬に彼のボートが停泊しているのを見た。最終的に一人の男が自由になり、救助隊がやって来たが、それが、**Teverton** 側に到着すると、インディアン達が、船員が上陸できないように、彼らに銃撃をした。**Church** が彼らに戻って、そして、もっと簡単に操作できるカヌーを送って来るように叫んだ。船員が、彼を見捨てないと喚き返したが、それに対し、大尉は、彼の落ち着きを失っていた。

“もし、おまえが直ぐに去らないのなら、私は、おまえを焼き殺すぞ。” と、彼は大声で怒鳴り；そして、船員は、彼を良く知っていたので、急いで、そこを離れた。

それは、自暴自棄のように言われても仕方がない様な、苦境の中での極わずかの軍を残し、戦闘はますます激しさを増したにもかかわらずではあつたが、一人の白人も傷つきさえしなかった。この時、しかしながら、スループ船が現れ、岸に辿りつき、そして、その船の船長が包囲された男達を連れ出すためのちいさなカヌーを送り出した。そのカヌーには、一度には二人しか乗ることが出来なかった。まるで、**Dunkirk**、ここでは、極小さな小舟が、非常にあげしい砲火のなか、スループ船からでて、行ったり来たりせつせと忙しく



Brookfield の襲撃

働いたものだが、のように、その都度二人の兵士を安全に運んで来だした。

Church 大尉は最後にその場を離れた。彼がカヌー乗り込むと、弾が彼の髪の毛をかすり、別の二発の弾がカヌーにあたり、**三番目の弾は、恐るべき大尉の前の直ぐ前の杭を打ちぬいた。**スループ船の男達が歓声を上げて迎えた。Church の全ての探検隊が助かったのだ。信じがたいが、彼らは 6 時間もの間包囲されたが、殺されたものは一人もいなかった。Church は、これが、もし、Wampanoag の射撃の名手のまずまずの例であるとするなら、戦争の結果となるものについては殆ど疑いが無いのでは、と考えざるを得なかった。

一方、Matthew Fuller 大尉の率いる、Church のもともと軍隊の別の派遣分隊も、同じような体験の中で進んで行った。彼らは、別の大きなインディアンの軍隊と遭遇し、そして、岸からはかなり離れた水辺の端にある、古びた家に閉じ込められたが、そこから、彼らは、ボートで救助された。

こうした最初の小競り合いの全てで、目的とするところは、Philip の配下に居るインディアンの主力部隊をいぶりだすことであったが、しかし、植民地の指導者たちは、ばかげているにも、脇道に逸れてあとに続いているばかりであった。しかしながら、7 月の終わりになり、大首長が Taunton 川の近くにある沼地のなかの土地に向けさせられ、そして、植民地のものが、殺すためにとり囲んだ。彼らは、Philip をどうしようもないように閉じ込めたと考えながら、得意満面となり、そして、早々酋長は騙されやすいという特徴をつかんだ。

彼は、包囲されたと観察し、計略に長けた酋長は、2・3 人の勇猛な男を罠におびき寄せるために送り出し、そして、植民地のものは、彼らに、インディアン達は逃げようとしていると信じ込ませようとした。勇敢な男たちは、白人達を、まだ早い夕闇のなかで、賢く計画通りに待ち伏せした所から彼らを攻撃する、Philip の部下たちの射る弓矢で埋め尽くされるまで、追跡という形で誘導して行きながら沼地に引き下がって行った。湿地帯のまだ薄明るい輝きのなかで、白人達は、インディアン達が出来ること以上に、互い同士で射撃した。退却の命令が早急にだされ、とにかく、イギリス人達は、自分達が絶滅寸前に、なんとか脱出することができるよう策を弄した。

尚も、植民地の者達は、Philip は沼地から抜け出せないに違いないと確信していた。彼らは、彼らの軍の殆どを引き連れて戻り、彼を餓死させるような小さな武力を残して行った。こうした包囲する者達は、おそらく、入植者達が何時も本能的にしていた、それと同じようなことをした：彼らは要塞を作った。この行動は、策の後方で彼らを待っている代わりに、敵を追跡するために自分の優秀な配下をいつも使っていた、Church 大尉のような抜け目のない役人をいらだたせていた。彼は、湿地帯の外に居る軍隊は、ばかばかしいにも程があると考えた。“誰からも人を守っていないような、何にも役に立たない砦をあなた方は作っているのだ。”と彼は言明していた。

彼は正しかった。13 日後、その間に Philip は、ある目的をもってカヌーの小艦隊を集め、包囲している者達を彼らの砦に閉じ込め、かれの男たちを沼地の外に出し、そして、

Connecticut River の国まで行かせた。しかしながら、彼の計略の途中で、彼は、彼にとつと最良の男達数人を失うという、入植者達の全ての侵略よりももっと甚大な衝撃となった、白人達に好意を抱いていたインディアンの集団による攻撃を受けた。

彼の新しい地位で、Philip は、Massachusetts の後ろある入植地、ここは、彼が略奪を始めた所であるが、ここに、自分の意思でいつでも攻撃できるようになっていた。彼は、Thames の北の分岐点に沿って住んでいた Nipmucks 族からの一時的に支援を予測し、この進展を予測していた入植者達は、Brookfield から 3 マイル離れた合流地点で Nipmuck と会うように使節団を送った。この使節団は、Edward Hutchinson 大尉と、Thomas Wheeler 大尉の指揮のもと 20 人の騎馬隊からなっていた；そして、案内役と通訳を務める 3 人のキリスト教徒のインディアンが加わっていた。

こうした、希望をもった人達が約束された場所に到着したときには、彼らは、インディアンをだれも見つけることが出来なかった。相談をしたあと、彼らは、キリスト教徒になったインディアンたちが、戻ることを提案したが、自分達が Nipmucks かもしれないと考えていた場所にさらに進んでいこうと決断した。その途中で、彼らは、Nipmucks 族、彼らは Wampanoag の同盟者達とともに彼らを待ち続けていたのだが、その大きな集団による待ち伏せ攻撃を受けた。その場所で 8 人の者が殺され、そして、3 人の者が致命的な傷を負った。Hutchinson 大尉は、その場から運ばれ、そして、2・3 日後に亡くなった。Wheeler 大尉は、彼の馬が倒れて死んだときに、彼の息子に助けられ、彼自身も、鉄砲の弾に当たって傷つき、そこでふらふらとぐらついていた。若い、Wheeler が飛び降り、傷ついた彼の父親を救い、自分の鞍の彼の前に乗せ、安全にその場から走り抜けた。生き残った者たちは、冷淡なしんがり防衛の戦いをしながら、キリスト教徒のインディアンの二人が、もともと村に戻る道を知っていたので、それ以上の犠牲者を出すことなく、Brookfield にうまく辿りつくように手筈を取った。三人目のインディアンの仲間は、捕えられた。

事実、彼らに安全なルートを示して、その集団を救った二人は、引き続いて、彼らの白人達から、あまりにもひどい扱いを受けたので彼らは Philip の保護を探らなければならなかった。彼らの内の一人は、インディアン達のための戦いの最中に、後に殺された；もう一人は、白人達により捕まえられ、ジャマイカに奴隷として送られたが、そこから彼は、最終的には、“インディアンの使徒”と言われた、John Eliot により救い出された。Brookfield で囚人とされたインディアンは、そこから逃げ出し、そして、入植者達のどうも疑わしい保護のもとに戻った。

彼らは、安全に Brookfield に戻ったけれども、平和の使いの生き残りの者達は、安全であるという事からは程遠かった。彼らが入ってくると、警告を叫びながら、彼らは、急いで、ほとんど彼らの鉄砲や子供達を集める時間がなく、そして、入り口を固める時間もない、80 人ほどの他の村の住人達と一緒に、守備隊の家に入って行った。Nipmucks 族は、彼らのすぐ後ろにおり、そして、直ぐに、入植者達が避難している一つの家以外の Brookfield の全ての家々を焼き払った。

守備隊の持つ安全の範囲のなかに全ての入植者達が辿りついたという訳ではなかった。一人が、最初の一斉射撃で倒れた。他の者が捕えられ、首を切られ、そして、彼の頭は、インディアン達がこの遊びをするのを止め、不幸なその男自身の家の前の柱に突き刺されて置かれるまで、フットボールのように蹴られた。

インディアン達は、守備隊の家を焼き払おうとしたが、十分に触ることが出来るほど近くに男を確保することが出来なかった。中では、守備隊の者達が、彼らは、助けが来る事が出来なければ、それまでの運命と決め、そして、二度ほど使いを出したが、しかし、その使いの者たちのどちらも直ぐに見つかってしまい、安全に急いで戻ってくる時間がほとんど持てなかった。結局、インディアン達は家に火をつけるうまく仕組まれたやり方を見つけ出した。彼らは、彼らの矢先に火のついた先端を取りつけて、そして、それを、火のついたまま家の側面や屋根に対して、射こんだが、しかし、今度は、しくじってしまった。たいまつは、それが点火できる前に消えてしまったのだ。

その時は、もう、真夜中近くであり、そして、Nipmucks 族が攻撃の最終段階と確信して信じ込んでいる、満月が昇り、煌々と照り輝く時になった。初めのころの暗闇の元では、彼らは、守備隊の家の隅々に、燃え上がる様なものを山と積み上げて、そして、今度は、それに火をつけた。再び、彼らは、いらいらしていた。2・3 人の勇敢な男たちが建物のなかから射撃の名手の砲火に守られて、外に飛び出し、そして、火をつけようとしている者達を追い払った。インディアン達は、再度、何かをたくらもうとしており、そして、今度は、追い払いに行った男たちの一人が森の中に見つからずに隠れて行く事に成功し、そして、助けを求めて走り去って行ったが、しかし、守備隊は彼が、彼らを助けることが出来る時間まで助けを連れてくるかどうかは確かでなかった。

攻撃の二日目の朝、空がしらけてきた時、インディアン達は依然として森に火をつけることに苦勞をしており、そして、夜が来ると、Nipmucks 族は、やはりまだ、眠ることが出来なかった。一日中、そして、夜もとおして、彼らは、火の光が放物線を描いて飛んでいく、火のついた矢の嵐が空を焦がしていた。矢の内の何本かが、火を付けたが、しかし、防衛隊が、下から屋根に穴をあけ、そして、火のついたところに水をかけた。一方、彼らのほうも消耗し、そして、恐怖を感じている子供達は、妻たちが鉄砲の助けをし、弾薬を手渡し、そして、彼女たちの男達がうまくいくようにできる事にしているときに、眠りについた。

三日目になり、守備隊はもはやそれ以上に耐える事が出来なくなっていたように思われた。インディアン達は、麻や、アマ、枯草、そして、乾燥した木々を乗せた馬車を用意し、これに火をつけ、燃え上がる車を建物に向けて、猛烈に走らせた。それを何とかしてよけたり、あるいは、他の方に向きを変えたりする術はなかった；守備隊は、焼かれてしまうか、あるいは、虐殺されるかのどちらかだと観念した。彼らは、膝まずき、そして、祈った。そして、その祈りが報われた。強い雨が降って来て、火を消し、そして、たちまちのうちに、火のついた馬車が二度と燃え上がる事が無いように水をかぶせた。



Hadley でのインディアンに対して反撃をしている Goffe 将軍 *E. H. Corbould*

守備隊は、その時、それを知らなかったが、助けが途中まで来ていた。伝令が幸運にも、Lancaster の近くまでたどり着き、そして、あちこちの野戦での戦いから復員してきた 70 歳にもなった兵士である Simon Willard 少佐に指揮された 50 人の部隊のところに到着した。幸運にも、少佐の部下たちは、馬に乗に乗っており、彼らは、合衆国の騎馬隊が後に 1000 にもなるしぐさの行動を取りながら乗馬するように村の通り抜け、できる限り早いこと Brookfield に到着するように馬を走らせた。Nipmucks 族は何の慈悲もなく分断された。逃げた者達は、彼らの後に 80 人もの死体で残っていた。

Brookfield の攻撃は、New England を、燃え上がる街、そして、小屋の黒ずんだ赤い黒ずんだ光で明るくした、今では、よく知られ、狂暴な戦闘となった、ただ単なる劇的な物語であった。それは、Philip の統制とか命令の、ずっと離れた所まで広がって行き、そして、今日、その彼の名前のなかで、戦闘が戦われたと言う男、入植者達には、彼は、ありとあらゆる抵抗の恐怖の象徴であったけれども、かれ自身が指導者ではなかったという事が、明らかになった。確かに、かれはしばしば説得力があった。彼は、彼の元に参加したコネチカット地域の模範となったキリスト教徒のインディアン達を、甘言をもって説得さえしていた。時を経ず、どの街も安全でなくなり、そして、攻撃は、そのほかのどんな時とも同様に教会の礼拝の間にも容易できていたのかも知れない。

不幸にも、その中に真実の言葉を持ってもいないような表現をされた、戦争の最も感傷

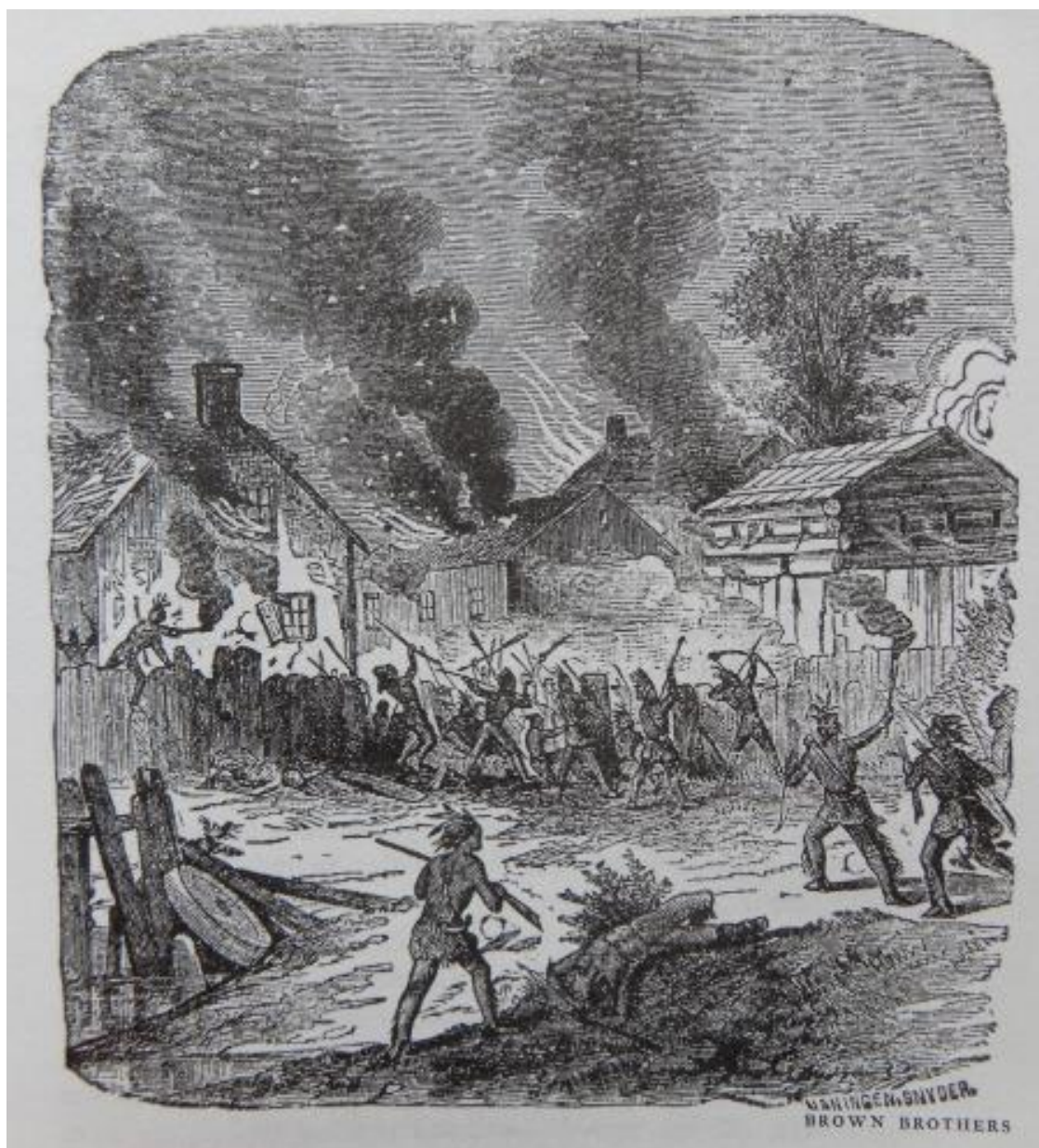
的な伝説の一つを作り出したものが、献身の日、断食の日になされたそうした攻撃で会った。**Hadley** の会合の家は、そんな話が進んでいるが、**Wampanoags** 族（あるいは、さまざま、そのほかの部族）の、狂暴な戦闘集団による攻撃を受け、そして、彼ら自身をその中に閉じ込めたおびえた街の人達が、彼らのなかに不思議なよそ者が突然の出現をし、これに畏敬の念を抱いた時に、火を付けられた危険な状態にあった様に思われた。彼は、背が高く、そして、長い顎鬚をし、彼がいざというときにはそれをどのように使うのかよく知っている剣を手に持ち、兵士のような容貌であった。彼の礼儀作法は貴族のそれであり、そして、指導者としてのものであった。防御をしている者たちの指導者の立場に自分を置き、彼は彼らの精神を集中させ、そして、インディアン達が追い散らすような、そんな技能の対抗手段を取った状況においた。そして、彼が来たときとおなじように突然にいなくなってしまった。

数年の間、この形態化した靈魂が迷信的な畏敬をもって信じ込まれていたが、伝説は—そして、少なくとも 2 世紀の間、頑固に続けられると— その不思議な人は、**Cromwell** と戦った、**Charles I** の挑戦の中で国王殺しの裁判官の一人として主人公を務め、そして、**Charles II** が権力を把握するようになると強制的に見捨てられた、**William Goffe** 以外の人は考えられないという話になった。**Goffe** が入植者達のなかに逃げ込んだという話は真実であるが、しかし、彼が、**Hadley** の会派のなかに隠れ、そして、そこの居住者たちを先導するために出現したかどうかという事は、どんな歴史的な証拠をしても確認されていない。

あるときに **Hadley** の会派が攻撃を受け、インディアン達が **Deerfield** にある何軒かの住居と納屋を焼き払い、そして、2・3 週間後に彼らは、**Northfield** のブロックハウスを攻撃し、12 人の男を殺害した。**Northfield** に急いで逃げた人達は、さらに 20 名の犠牲者が亡くなるという、待ち伏せ攻撃を受けた。**Deerfield** はそこに住んでいる者達が教会に逃げ込んでいる間に、二度目の攻撃を受けた。村の周辺の農場の農民たちは、ほんの一部であるが脱穀されたある程度の穀物の量を残して、そうした恐怖のなかに置かれていた。

インディアン達が居なくなると、80 人の男達が、もし、できるならこの価値ある穀物の収穫物を保持するために、18 台の幌馬車と一緒に、**Ipswich** からやって来た。彼らは脱穀を完全に澄まし、そして、幌馬車で自分たちの家に戻る途中の次の日の朝、彼らは、休憩ととり、そして、木々の間から取り留めもなく流れてくる小川の水を飲み、そして、たわわに実ったブドウの実を収集するために、快適な小森のなかでとどまった。彼らがこうした、のどかな気持ちよさに浸っている間に、夜の間、彼らの道の後をつけてきた 700 名ものインディアンの集団が彼らを襲撃し、そして、7 名の男を残し、後の全員を殺害してしまった。

Swansea の英雄である、**Mosely** 大尉は、**Deerfield** の限界での戦いを耳にし、そして、急いで、彼の指揮下にある小さな軍隊を率いて、救助に駆け付けた。彼は、決して十分ではない数であったが、しかし、死んで人達の頭皮をはがしていたインディアン達を驚かし、赤人たちを追い散らすための十分に補強された男たちが到着した、その夜中までに彼らを



Deerfield の焼き討ち

繰り返し攻撃していた。Ipswich の男達が、彼らが死ぬ前にその水をのんだ小森のなかの小川は、それ以来、**Bloody Brook** と今も呼ばれている。

戦争は、そうした血なまぐささからなっていたが、しかし、これらの小競り合いと別であって、そして、生活や財産のという点では、その被害は大変なものであったが、入植者達は **Narragansetts** 族が最終的に彼らの中立性を放棄し、そして、**Philip** と同盟を結ぶことを決断するまで、解決をあたえるようなキャンペーンのために合体しようとしなかった。この強力な敵に対して、マサチューセッツ州は、520 人の男達を集め、Plymouth は、159 名、

コネチカット州は 300 名を集めた。約 150 名の Mohicans 族は同盟に加わることを強要され、そして、全体の戦力は、Plymouth の統治官である Josiah Winslow の個人的な指揮下のもとに置かれた。それは、その時期には、尊敬すべき軍隊であったが、必要とされた以上のものではなかった。数の上では、インディアン達は圧倒して強く ; Narragansetts 族だけで Rhode Island の Kingston にある彼らの砦のなかの軍隊に 3500 名がいた。砦そのものは荒野で策略の典型的なものであった。その数エーカーのものは、どの方角にも深く張り巡らされた防護壁に囲まれて守られており、湿地帯の中央にある高い丘の上に建っていた。そして、そこに行く唯一の入り口は長い丸太の橋であった。

インディアンの反抗の主要な本拠地であるこの砦に対して、Winslow の極わずかの軍隊は、1675 年の 12 月 19 日に雪の積もった森のなかを通して進軍していった。立派な砦化されたさものの見るからの強さにも恐れをなさず、男達は 2 隊に分れ、そして、前後からためらわずに攻撃した。全てがマサチューセッツの男達であったが、主要な入口の人達は、彼らの数を表すようなものすごい致命的な砲撃で、押し戻された。Plymouth とコネチカットの男達の分遣隊の方で後方から攻撃を仕掛けた、勇猛な Benjamin Church は、もっと首尾が上々であった。3 度ほど撃たれたが、彼はそれにも拘わらず、彼が攻めたて、そして、その内側に立ち尽くした入り口をとおって行ったが、その間、彼の軍隊の先頭に立って突進して行った。

ほんの僅かの情けで、Church は、村のトウモロコシが貯蔵されていた小屋を焼き払う事に反対していたが、しかし、他の者達は、インディアンは他のどんなやり方をしても負ける事は決してないと言って彼を得心させていた。松明がもってこられて、そして、直ぐに、Narragansetts 族の 600 もの小屋が大火のなかで焼かれてしまった。焼かれて生き残るか、それとも逃亡するかを選択に直面して、インディアン達は防護壁の上によじ登り、そして、もう一度外で闘争を始めた。彼らは統率がとれていなかったが、Narragansetts 族は勇気を持って戦った。そして、一時の間、戦いは、どうなるかわからなかったが、しかし、結局は、彼らは、湿地帯に追い込まれ、そして、そこから、開かれた土地に出されていった。

それは、最も厳しい、そして、多分、戦争のクライマックスとなる戦いであった。80 人者白人がころされ、そして、その倍の数の人達が負傷をした。Narragansetts 族は 600 人以上の男たちを失い、その中には、少なくとも、20 人の部族の酋長達も含まれていた。両方の陣営が、生き残った人たちに付きまとう北極の寒さに苦しみ、Winslow 軍の男たちのたくさんの者が、彼らが再び自分達の故郷に戻る前に死んでしまった。恐らく、インディアン達も、同じような死傷者の状況だったのではないと思われる。

もし、Philip が尚も生き残っていなかったら、勝利は、解決策を与える様なもので、そうした展望がうまくいっていたかもしれない、戦闘を終結されていたかもしれない。彼が生きている間は、戦争は決して終わることがなく、そして、入植者達は、そのことをよく知っていた。彼の Wampanoags 族と、彼らの生き残った同盟者達は、ただ単なる元気があったと言うのではなく、時には、白人達を追い払うのは、彼らだと信じていたように思わ

れた。彼らが、Deerfield の荒れ地に彼ら自身の穀物を栽培するような冷静な信頼の根拠を説明するようなものはほかに何もない。

ボストンの Turner 大尉がこうした居残る人達を別のところに移すために 100 人もの人達を引き連れて送り込まれた。彼は、1676 年の 5 月 10 日の夜明けに、インディアン達の多くが彼らのパドルも持たずにカヌーで逃げ、そして、川を漂っていると、少し下流にある滝に彼らが投げ出され、助かることのないのが分ったのだが、そんな攻撃を仕掛けた。攻撃と追跡のなかで、Turner は、その数は、300 名か、あるいは、それくらいのインディアン、その中には、たった一人の兵士しかいなかったが、と説明していた。

尚も彼の勝利に意気揚々となって、大尉は、彼の守備隊の気を緩めさすような間違いを犯した。その近くに居たとても大きなインディアンの戦闘集団が、砲撃の音を聞き、そして、今度は、彼らが、白人達を驚かした。時々、Philip かれ自身が攻撃人な中に居ると叫びながら、そして、入植者達を当惑させ、彼らは、彼らかが無事となるまでに彼らの 1/3 を失った。その中には、彼らの大尉も含まれていたのだ。

Philip は、いまや、いつでもうまくいくという訳ではなかったが、どこでも一陣を明るく照らして攻撃する、野戦での輝かしい指導者であった。彼は、2 度ほど Hadley の館を攻撃し、そして、撃退された。しかし、彼は、兵士達に印象を与えながら、インディアンとの取引全体を禁止すると言う法律の施行される中で表現された、彼を止めようとする、ますます大きくなる植民地の決断に直面していた。

戦争の場所が次第に南の地方に移って行き、コネチカットと Rhode Island の植民地は、マサチューセッツが苦勞してきたことを学んだ。Kingston の戦いで苦闘した、負傷が癒えた Church 大尉が、Philip のネメシス（ギリシャ神話の女神：応報天罰の女神）となるべく、再び戦場に向かった。8 月の 1 日に、彼は、指揮を執り先陣を切り曾長の本拠地に攻撃をかけ、彼の部下を 130 人ほど殺害するか、拿捕し、そして、彼の全ての財産を後に残さずにはならなくなった Philip かれ自身をкаろうじて、捕まえそこなった。彼は、Church が彼の妻と息子を捉えたときには、彼にとってはもっとずっと価値のある財産をたちまちのうちに失った。

彼の有能な曾長達、彼の家族、そして、彼の個人的な所有物の殆どを奪われて、Philip は、今や、逃亡者同然であった。かれは、彼だと見破られないように彼の長い髪を切り落としていたが、それが、彼の伯父が彼の横に立っていて射撃された時に、彼を助けた。というのは、もし、かれだと確認されていたなら間違いなく彼が狙い撃ちされたであろう、その一発で叔父は撃たれたのだ。彼の部下たちは、彼が、定期的に場所から場所に移動し、奴隷のように探し求められ、彼の命が助かる事だけが彼の唯一の望みとなり、結局一人になるまで、ひとりひとりが彼を見捨てていった。それでも、彼は、かつてのように、誇りを、執念深さを維持していた。彼の不運を耐え忍んだある戦士が彼に降伏するように進言した時、Philip は、情け容赦なく彼を棍棒で撃ち殺した。

それは彼の生涯の最も汚れた行為であり、多分、彼の不運による精神異常に近づけて行

く様な彼の行動で、それが彼を死に追いやった。その犠牲者の兄弟は、憤慨すると同時に、同じように運命が彼にも迫ってくるのではないかと言う恐怖で、Church 大尉のところに直接行って、そして、彼に Philip が隠れている場所を話し、そして、彼をその場所に案内することを申し出た。

1676 年の 8 月 6 日の朝に終結の時が来た。Church が、極わずかの生き残った彼の信用のおける部下達とともに Philip が滞在していた湿地帯のなかのキャンプを静かに包囲し、そして、Roger Goulding 大尉の指揮下にほんの 2・3 人の男達を、酋長を捕まえるために送り込んだ。しかし、Philip はイギリス人達が近づいて来るのを聞いた。彼は飛び起きて、そして、彼が、唯一無防備に残されていると信じていた道を通って沼地を抜け出して行った。彼が現れると、二人の人影が彼の前に立ちはだかり、その一人はイギリス人で、もう一人は、Alderman という名前のインディアンであった。イギリス人が彼の銃を構え、そして、引き金を引いた、がしかし、上手く射撃することが出来なかった。Alderman のマスケット銃には二発の弾が入っていた。彼は、その一つを Philip の心臓に撃ち、二発目は、そこから 2 インチ離れた所に命中した。Wampanoags の王が、泥沼と水の池の中に彼の顔を上にして、そして、彼の銃を下にして倒れた。

彼の死体が、歓喜した Church 大尉の前に引っ張り出されると、訓練兵たちは Philip の死んでもなお気をゆるまさない、たくましく、そして、黒ずんだ姿に何の悲慘さも感じなかった。彼にとっては、かれが後に彼の回想録のなかで書いたように、“悲劇にみちた、偉大な、野性のむき出しになった、汚れた野獣” そのもののように見えた。彼は、この遺体の首を切り、そして、四分割するように注文した。その仕事は、大尉の雇用人のなかの年老いたインディアンの刑の執行官により執り行われた。

Philip の首は Plymouth に送られ、そこで、そのほかの酋長達に白人の優位性を思い出すようにと、20 年の間、絞首台の上に展示されていた。彼の腕の一方はボストンに送られ、そこで、病的なほどの好奇心の楽しみのために、数年間展示されていた。そして、最期の軽蔑があった。Plymouth の役人たちは、ずたずたに刻まれた残ったものを埋葬することを許さなかったのだ。Philip の体の全てが、野原に朽ちるように放り出された。

それは、その後も一年近く、New Hampshire で燃え上がり、Church 大尉は再び、救助のために派遣されることになったけれども、King Philip's War は終結した。しかしながら、New England の南の地域では、インディアンが依然として占領していた。それは、New England の人達には大変な代価となる勝利であった—12 の町が破壊され、数千人の入植者達が殺害され、そして、全てを合わせると 100,000 ポンドにもなる負債となった。インディアン達にとっての損失は、単なる生活と財産の計算と言うだけのものではなかった。彼らは、全ての男達の最も貴重なもの—彼らの自由、を失った。

THE SEVEN YEARS' WAR ； 7 年戦争

Philip が不名誉な死を遂げ、New England で組織化されたインディアンの抵抗の恐怖が永久に終結する一年前に、少しばかりさらに西で、40 年間以上に渡り、その激しい最高点に到達していた殫猛な劇的事件の幕が閉じた。

それは、極限の重要性を持った劇的事件であり、そして、完全な皮肉の一つであった。それは、自分たちが彼らの強力な同盟に対してこれを絶滅しようと言う殺戮と破壊に満ちた戦争の希望を一吹きにするインディアンインディアンたちの、白人の男たちが西部に向けてなだれ込むのを食い止める、あるいは、少なくとも、これを遅らせると言う最良の望みを表現している強力な組織であるイロクォイ同盟であった。1675 年に決議された時に、勝ち誇ったイロクォイは彼らの Huron 族の近隣の部族を破壊し、彼ら自身を自らが深刻に弱体化し、そして、五大湖からハドソン川に至るこれまでうまくいっていたインディアンの抵抗の展望を破滅する運命に定めた。

“それは、誠に奇妙で有り、かつ、謎めいた光景だった。”と Francis Parkman が言っているのは、“彼らに共通した破滅の鐘の音が既に鳴って居る、その時にこの大陸の野蛮人たちを見るのは。文明開化は彼らの境界線に足跡を付けていた。長く、そして、陰気な野蛮な風習の統治は、その終焉に近づくようになりつつあり、そして、かれらの統一化された努力は、ほとんどそれを維持するのに役に立っていないのに違いない。しかも、彼らの運命のこの危機の時に、これらは、部族がオオカミのような狂暴さで相手の喉を引き裂くように運命づけ、そして、お互いの破壊以外に何の目的もないようなそんな思いになっていた。”という事だ。

イロクォイ族が、この破壊の動因のはずだという事が、インディアンの歴史のなかの謎の一つとして残っている。五つの国—Mohawk, Oneida, Cayuga, Seneca, Onondaga、そして、あとになって Tuscarora の各部族—の者達が、Albany から湖にかけての、幅の広い、肥沃な Mohawk River の溪谷に住んでいた。彼らの膨大な数におよぶ部族と部族の集団はイロクォイ語族として知られている言語学的にまとまった集団から成っており、そして、それぞれの国が集まってイロクォイ族と呼ばれた。

イロクォイ族は、大陸のなかのインディアン達の中では、どんな他の部族よりも、ずっと良く統制のとれた組織をしており、すばらしい社会生活をしていた—ある見方からすれば、白人達の植民地よりもかなり進んだ社会でもあった。女達は、選挙に参加することも

できたし、財産を継承することができた；彼らの社会は、緩やかな民主主義的な者であったし；彼らの軍隊の組織は、非常にうまく工夫されていた。

Hudson から Genesee までの一帯に、イロクオイ同盟が、まさに、敵の部族の海の中の、強力な島のように広がっていた。こうした彼らの敵の部族は、膨大な数の Algonquin 言語と、その方言を話す部族であった。彼らは、Virginia, そして Pennsylvania, New Jersey, 南東部の New York, New England, New Brunswick, Nova Scotia、そして、カナダの南部の地域から、五大湖の北部に跨る広大な地域、そして、西の方には、Wisconsin, Michigan, Illinois, Indiana と言った荒野にいたるまで、こうした地域に囲まれた広大な領地を支配していた。時には、彼らの狩猟の集団は Kentucky までにも及ぶような南部の地域を領域としていた。

しかも、彼らは、同盟を囲み、そして、3000 人という、とても数の上で勝っていた戦闘士を抱えていたにも拘わらず、イロクオイ族の安全性を脅かすようなことほとんどしなかった。もし、非常に離れた所に散らばった、共通点のない部族の集団が、それは、不可能なことであったが、一つにまとめることができたのなら、Algonquins 語族は、彼らの戦力が頂点に達した時には、8000 人近くの戦闘士たちを招集することができただろう。

なぜ、イロクオイ族のように知的な部族が、侵害してくる白人の入植者達に対抗して、唯一、可能な同盟者であった、彼らの周りの部族に対して、彼らを絶滅するような戦争を、選択をしなければならなかったのかは、理解に苦しむところである。Algonquin の部族の者達は、狩猟する土地での習慣的な地方での小競り合い、あるいは、名誉とか、真実、あるいは、考え方に対する侮辱以外には、彼らを恐れていなかった。しかしながら、イロクオイ族は、どうもそのように見えるのであるが、彼らは、名誉とか、自己責任、共有している生命力というものが、彼らを夢中にさせた征服への欲望に導いたそんな時代にあった。

彼らは直ぐに、東部の領域での勝ち誇った圧制者になった。南の方面の彼らの隣人の、Andastes 族、彼らは Susquehanna 辺り、あるいは、その近辺に居住していたが、彼らは、天然痘が、ナイフや戦闘用の斧が成し遂げる事の出来なかったことを完了するまでは、しばらくの間、彼らに、すでに決められた反対の意思を示していた。Eries 族や中道派の国、つまり、エリー湖の南側、北側の岸に住んでいた人々、は、厄介なことに巻き込まれるには、十分な強い力をもっていなかった。Mohicans 族, Pequots 族, Narragansetts 族, Wampanoags 族, Massachusetts 族,そして、Peacoos 族、彼らは、Puritan の入植者達に対し、そのような恐怖の種で会ったが、彼ら自身、Mohawks 族、彼らはこうした部族のどこからか、現実には、毎年、献上物を強いていたが、その Mohawks 族の恐ろしい恐怖のなかにあった。

そこには Huron の国だけが残っていた。こうした人々、彼らはオンタリオ湖西部地域から、ヒューロン湖の東側の湖岸に沿って住んでいたが、その彼らは、彼らの手に負えそうもない隣人たちのように、それ程発達していなかったが、しかし、彼らは、Algonquin 語族の部族のなかでは一番発展していた部族の代表であった。

Hurons 族は、イロクオイ族にとっては、同盟を結んでいる他の部族ほど恐ろしくはなかったが、しかし、Five Nations(五つの同盟国)が、1630 年のちょっと後であるが、22,000 名にも及ぶ繁栄した部族が、ほんの僅か、2~300 名程度の餓死寸前の逃亡者にまで減少してしまった 40 年戦争に進んで行った、酷く、そして、申し合わせたような絶え間ない進攻を開始したのは、彼らに対してだった。一方、イロクオイ族は、部族が、New England の国のように、彼らは毎年の献上物をしようとしていた、そのことだけで存続し続けることが出来た、そうした上手いやり方で Hurons 族の Algonquin の同盟国を征服しようとしていた。

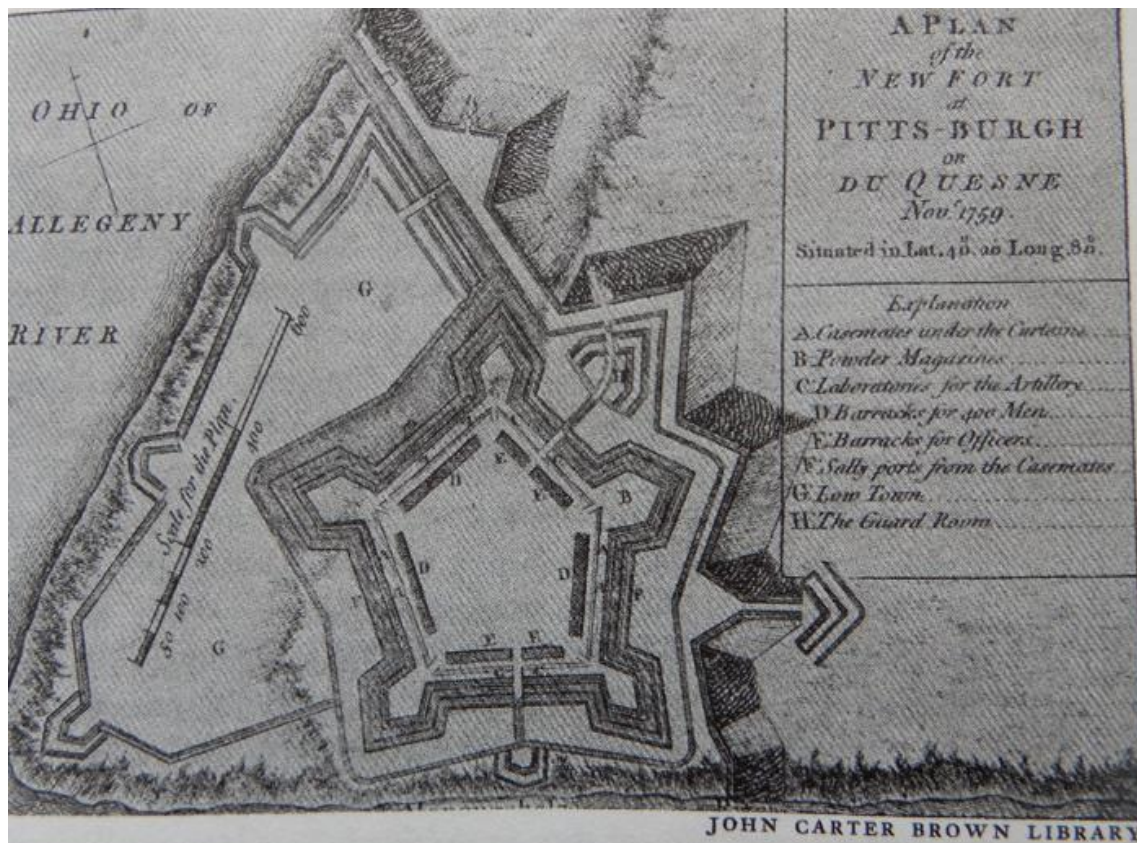
イロクオイ族は、これを完璧な最高点に引き上げるために、膨大な代価を支払った—その当時、彼らが想定していたものよりもずっと巨大なものであった。彼らは、必要費用を戦闘士の数だけで計る事が出来た。1675 年に、彼らは、残されたものは 2200 人程度であったが、そのうちの 800 人は、Hurons 族、Eries 族、そして、Algonquin's 族から採用された者達だった。しかしながら、それ以後、彼らの可能な限りの同盟の強さを破壊してしまったことで、しばらくの間ではあるが、できたばかりの植民地が西部に拡大して行く事を防ぐようなインディアンの大連合を造ることになったかもしれないどんな機会をも終らせてしまった。

もっと、直ぐにはあるが、イロクオイ族は、自分達が、今や、実際に大陸がそうなる宿命されたもの—フランスのカソリック、あるいは、イギリスのプロテスタントのどちらであろうとも、と考え始めた、フランスとイギリスの入植者達の間に、ただ一人だけで、捕えられていることに気付いた。

同盟は、この二つのキャンプの間に打ち込まれた楔のようなものであった。両方の国がそれをするようにせがんでおり、そして、同盟は、最初は、どちらでも一時的に勝つように感じたほうに、援助を貸すようにする、そんな典型的な態度を取っていた。後になった、さまざまな国の同盟は、見込みもなく分割された。

イロクオイ族が 7 年戦争（あるいは、我々が、それをアメリカ版と呼ぶように教えられていたように、フランスとインディアンとの間の戦争）の、決定的な要因ではなかった；彼らは、良くてフランスとイギリスのどちらかの漫然とした援軍に過ぎなかった。しかし、彼らは殆ど 18 世紀の間、すなわち。それに続いた 7 年戦争とアメリカの独立戦争の間、白人の、インディアンの犠牲というものの象徴となった。こうした戦争のなかで、彼らは二つの偉大な力のもみ合い、最初は、大英帝国とフランス、そして、もう一つは、英国と、独立しようとするその植民地との間の、抵当物以外のなにものでもなかった。

このことは、勿論、彼らがたまたま衝突に巻き込まれていった他の東部アメリカの全てのインディアンたちと共有して持っていた役割でもあった。しかしながら、イロクオイ族は、彼らの持っている地理的な立場、そして、彼らの畏敬的な評判により、彼らを同盟のようなものに説得する、あるいは、彼らに中立を保証させると言うような意味で、いつも他のどんな部族よりも注目される的であった。



英国やフランスの軍隊が、北アメリカの地に姿を表すずっと前から、イロクオイ族や他のインディアンが、もし、彼らが、何が起きているのか理解することが出来ていたのなら、彼らが果たすべき役割の多くの予めの情報を集めることが出来た、そのもととなる両方の勢力下にある植民地同士の境での定常的な戦闘があった。たとえばカナダのフランス統治官である **Count Frontenac** が、1689 年の冬に **Albany** のイギリスを攻撃するために **Montreal** に戦闘集団を送り出した時、白人がどのようにして彼らを分割して征服して行くのかの見事な事例を見る事が出来た。この派遣隊の 210 名の男たちの中には 96 人のキリスト教徒のイロクオイ族が居たが、これらの同調したメンバーたちに対しては、フランスの伝道師たちがニューヨークの上部の地域、そして、カナダでの植民地で彼らの故郷から出発するように説得した。こうした逃亡者たちは、彼らの故郷から彼らの友人や親せきたちに戦わせる事を依頼された時に彼らは、理解の出来ないような反抗を見せた。一方で、彼らは、愛情を持たなければならない何の理由もないイギリスに対抗してフランス軍に参加する事には確たる意思を持って臨んでいた。

しかし、もし、イロクオイ族のなかに、ニューヨークのドイツやイギリスの入植者達とともにカナダに逃げたり、フランス軍に参加したりすることに十分に幻想から目覚めた様な、こうしたキリスト教徒のような人達がいたなら、これらの、後方に残り滞在していた殆どの人達は、イギリスに対して少なくとも直接的な忠義を長い間保っていた。それは、

彼らがいかなるものにしろ、深い関わり合いを持っていたというものでない；彼らの多くは、キリスト教徒の逃亡者たちと同じようにたくさん強奪を受け、そして、だまされて来たのだ。それは、むしろ、同盟国が、フランスが最初に大陸に現れてから、フランスに対して疑いを持っており、彼らと断続的に戦い、そして、彼らがイギリスを好んだようには、フランスを好きになることが出来なかったという事であった。

しかしながら、イロクォイ族は、フランスとの彼らの個別の戦いの中で助けを依頼した時に、イギリスは、彼らに対し、ほとんど、あるいは、何も提供しなかった。たまたま彼らは **Albany** に招待され、何某かの贈り物をもらい、そして、イギリスの正義の戦いのために、もっと真剣に闘うように話された。ほんの僅かの、感覚に鋭い、知覚力のある白人達が、軽蔑的な酋長が、横柄な治安判事をいらつかせるのを、彼ら自身のビーズの飾りでなだめた。

イギリスは、傲慢に、彼らは、イロクォイ族をイギリスの臣下の者だと認識しているという事を明確に示した。

“英国の奴隷”とは、かつて彼の王様からの直接の指示で **New York** の統治官がインディアン達に毒を盛ろうとしていた、という噂や、**Five Nations** を恐怖の状態に陥れようと言う物語を広げたフランス人をあざけた。返答するイギリスが **Onondaga** のイロクォイ族の首都に極わずかの使節団を送るだけのことをしている間、イエズス会の代理人たちはそうした話で彼らの間で絶えず忙しかった。

そうして、イロクォイ族が、1700年代の初めに深く根付いた大きな力の間での論争のように中立でいようと望んでいたのはなぜかという事を理解するのは容易なことであった。いつも研ぎ澄まされた貿易商や政治家たち、彼らは、ビーバーを罠にかけて捕まえてくる“遠方のインディアン”、こうした部族は五大湖の州の中、あるいは、その周辺にいる人達で、彼らと **Albany** の商人達の間で仲介役となることを計画していた。

一時の間、彼らの志は、フランスとイギリスの両方の要望とよく合致していた。イギリスの取引商達は、この中継ぎの調整のなかで、彼らに対する有利性を理解するのに何の問題もなかったし、そして、アメリカの植民地とカナダとの間で、そのままの状態を望んでいる影響力のある商人達がいた。フランスの権威者たちについて言えば、彼らは、彼らが自分達に現在の大きな利益をもたらしてくれる立場にいるイロクォイ族がイギリス人達を助けるようになることを恐れるために、**New York** の開拓民達に新しい意地悪を与え始めようとしては居なかった。

このようにして、**Hudson** から湖の地域まで一時的に平和があった。フランスとイギリスが、フランスの使節団が **Abenakis** 族、そして、その他の大西洋の部族を中立的な立場から気を惹きつけていた **Massachusetts**, **Maine**, そして、**New Hampshire** の地域に小競り合いを持ち込むのを制御していた。**Montreal** から **Quebec** にかけて、入植者達は、次から次にと何度でも、インディアン達や、派遣されてきたフランスの探検隊により彼らの家や街を焼かれてきた。

7年戦争の終わり、それは1756年まで、公的には始まっていなかったが、二つの強力な植民地の力は **Quebec** から **Ohio** 渓谷に至るまでの広大な舞台のうえで、北アメリカにおけるお互いの衝突に直面していた。その東の果では、**New England** の入植者達が、フランスとかれらとのインディアンとの同盟者たちとの、定常的な小さな衝突に巻き込まれていた。ニューヨーク州の北の地域と隣のカナダの広大な地域では、あちこちでイロクォイ族が彼らのそう簡単ではない商売上の戦闘停止を維持していた。**Ohio** 渓谷に横たわるずっと遠く

の地域では、貪欲な植民主義の王冠に付けられた戦略的な宝石というような状態だった。端は **Quebec** から、もう一方の端は **Louisiana** という 3000 マイルにも及ぶ、信じられないような円弧の状態で伸びている、終点となる地点を結び付けている糸の上のビーズのように、軍事的な拠点の鎖を結んで、フランスの開拓民のなかにその中枢点となっている **Ohio** 渓谷であった。中間点にあったのが、**Ohio** 渓谷というわけだ。西に向かって進んでいたイギリス人商人が、もし、そこを占領したのなら、彼らはフランスのアメリカ帝国を二分しただろう。一方、もし、フランスが彼らの立場を強固なものにすることができていたなら、彼らは **Alleghenies** 族と大西洋との間のイギリスを封鎖することが出来ただろうし、さらには、その渓谷のインディアン達を制御することにより、彼らは戦争が起きた時には利用することのできる開拓地の戦力となる沢山の部族を彼らの手中に治めることが出来ただろう。

こうした **Ohio** 渓谷のインディアン達は、もし、混血の人達であれば、手におえない人達であった。北の地域と東の地域は **Delawares** 族, **Shawnees** 族, **Wyandots** 族,そしてイロクォイ族、彼らは、**Mohawk** 渓谷から移住してきた人達で、彼らの事をイギリス人は **Mingoes** と呼んでいたが、そうした人々がいた。こうした部族との混血人たちは **New England** からは遠い所に住んでいた、極わずかの **Abenakis** 族と呼ばれていて、**Nipissings** や **Ottawa** に散在していた。**Wabash** と同じように、**Miami** 川とその支流に沿った、西の方に行くと、**Miamis** 族がいたが、彼らの膨大な部族は、同盟組織のような形で、お互いに緩やかな結合をしていた。もっと西の地域に行くとイロクォイ族の国の残りの者達が住んでいた。

こうしたインディアン達のうち、フランスが忠義を確信する事が出来たのは極わずかであった。イエズス教会による 70 年にも及ぶ植民地化や熱心な伝道教会の仕事にも拘わらず、キリスト教徒になったインディアンは、ほとんどが **Hurons** 族の残りの者と **Wyandots** 族のバラバラに散在している者達を数えるだけだった。他の者達は、フランスに対し何の特別な結びつきを感じている様には見えなかったし、事実、フランスをビックリ仰天させるべく、イギリスの取引商を歓迎さえしていた。イギリスは、彼らは **Miami** の連合した部族たちを同盟国として、勘定に入れる事が出来ると信じていたし、多分、**Shawnees** 族も同様であった。一方、**Delawares** 族は、彼らを **Alleghenies** 族の東部地域のある彼らの古い故郷から遠ざけようとしたイギリスに対し不安要因を和らげ、そして、移住したイロクォイ族はフランスの代理人たちに耳を傾ける事に心が傾いていた。

インディアンとの同盟に対する競合の中で、フランスは、イギリスの入所者達の間に、永

久的な軋轢があるとみなす事が出来た。ニューヨークの統治官の **Clinton** が彼の群衆に対し、**Ohio** 溪谷のインディアン達の忠義を獲得するのに、**Pennsylvania** を助けるためにどんなことでもする必要があったと訴えた時に、**Albany** の高官が彼に話した：“我々は、我々のインディアン達の面倒を見るつもりだし、彼らはかれらの面倒をみるだろう。”と言った。しかし、ニューヨークの人達は、彼らのインディアン、イロクォイ族であるが、**Ohio** の地域にあまりにも沢山の数の移民した同盟国の人達が居たことが十分に証明しているように、彼らの“面倒をみよう”とはしなかった。彼らは、1750 までに、インディアン達の人口の中心が **Mohawk** 溪谷から **Ohio** に移って行ったように、そうした数で、西に方に移って行った。

致命的な 1750 年代の初めのように **Ohio** 溪谷は、陰謀で沸き返った。イギリス人商人達は、それがどんな意味があろうが、それが彼らに破壊を招くような低い額でものを売る事になり、彼らに前例のない様な寛大さで贈り物を上げる事になり、彼らに、彼らが依頼する時にはいつでも弾薬を差し上げることになる様な意味合いをしていようが、インディアン達に打ち勝つために、一生懸命に働いていた。**Maumee** にある砦の指揮官が **Quebec** に、渋い顔をして現地のことを書いていた：

“私の部下たちは、私を置いて、**Detroit** に行っている。ここにいようなんて言う者は、誰もいないし、彼の喉を切ろうとする者も誰もいない。**Pickawillany** のイギリス人のところに行く部族の者は、みんな贈り物をいっぱい持って帰ってくる。私は、危険にさらされことにあまりにも弱くなっている。20 人男達に代わり、私は、500 人が必要だ……。私は、イギリス人と平和にやって来たが、しかし、今は、彼らはインディアン達を使って我々と戦争をしようと、絶えずたくらんでいる；彼らはこの北部の地域全ての支配人に為ろうとしている。この部族たちは団結してフランス人全てを殺そうとしているし、このことは、イギリス人以外に彼らの国には誰も居なくなることをしようとしている。これは、私が、マイアミ族の大酋長である **Coldfoot**、私は彼の事を真からの正直者と思っているが、その彼から聞いた話だが、もし、そのようなことがインディアン達の間であるのなら、……、もし、イギリス人がこの国に留まるのであれば、我々は全てを失う。私は、彼らを攻撃し、この国から追い出さなくてはならない。”

同じような報告が別のフランス人の職の人達からも来ている。全ての者が、陰謀の中心は、現在の **Ohio** の **Piqua** の地域の近くにあった **Pickawillany** で、ここは **Old Britain**、もしくは、**Demoiselle** として知られた酋長の故郷でもあったところだが、この町であった。ここでは、イギリスの取引商達、50 人か、それ以上のものたちであったが、彼らが新しい征服地を計画して集まっていた。

当然のことながら、フランス人は **Pickawillany** を一掃しようとしたが、しかし、彼らは、1752 年、この時は、若いフランス人の取引商であり、冒険家でもある **Charles Langlade**、彼はインディアンの妻と結婚し、そして、**Green** 湾に腰を落ち着けていたが、そのかれが 250 人ほどの **Ottawa** と **Ojibwa** の戦士を載せた小さなカヌーの軍艦の先頭に立って



Monongahela の戦いでの George Washington

Detroit 川に姿を表すまで、それを実行する十分な力持っていなかった。この軍が、Detroit から Maumee を遡って行き、フランスの砦に近い運搬基地に停泊し、そして、Pickawillany に通じる森林を抜けて、軍を配置した。

彼らは朝の 9 時に Old Britain の要塞のようにがっちりとした町に攻撃を仕掛けた。戦士たちの殆どが夏の狩猟でいなかったが、しかし、Demoiselle 自身は、極わずかの戦力とともにそこに残っていた。彼と一緒に 8 人のイギリス人の商人達がいた。Langlade のインディアンの戦士が Demoiselle を含め、14 人の Miamis 族を殺害し、5 人のうちの 3 人を捕獲し、そして、傷ついた一人を刺殺した。それから、あたかも、フランスの伝道師たちは、彼らの中で全く無駄な仕事をしていたことを示すように、彼らは、Demoiselle を煮て、食べた。

この成功に刺激されて、フランスは、直ぐに、Ohio の上流地方に軍を移し、Virginia や Pennsylvania の商人達が西部の向かって行く事を阻止しようと、その準備をした。これをやり遂げるために、新しい統治官である、Marquis Duquesne は、その進路上でそれを見

たインディアンの誰にも恐怖を抱かせた 1500 人何某かの男達からなる強烈な印象を与える遠征隊を湖に至る St. Lawrence に送り込んだ。

遠征隊の主力部隊が Presqu'Isle、ここは、今日の Pennsylvania の Erie であるが、ここに上陸し、そして、砦を築き、その後に、今は French Creek となっている森を突き抜けた道を切り開き、そして、そこに Le Boeuf と名のついた別の要塞を建設した。それにより、彼らは、French Creek と、Allegheny 川の経路をたどり、Ohio に行く事が出来るようになった。

当初は、Ohio 溪谷のインディアン達は、この侵略に大胆に対抗していた。イギリス人達に Half-King と呼ばれていた Seneca の酋長は Le boeuf 砦に行き、そして、フランス人対し、断固として去るように注文していた。フランス人の指揮官の Cholerick old Marin、彼は赤痢にかかり死にかかって横になっていたが、その彼が Half-King に非常に腹をたて、酋長は、怒りの涙で家に帰るよう傲慢な軽蔑で取扱い、恥を掻かせた。

この出来事を耳にし、インディアン達は、フランスは彼らの動きは、彼らを怖気づかせようと、あるいは、はったりを通そうとしているのではないと理解した。いつものように、部族は、軍事的な力の示威により印象付けられ、そして、彼らの領地のなかに砦をためらわずに建設することが、フランスはビジネスをするつもり of 強力な男達であることを確信させているように見えた。彼らは動揺し、そして、自分達が最終的には、勝ち残るように思われる側と同盟を結ぼうとし始めた。イギリス人達と非常にうまくやっていた Miams 族は、フランスの側に立った。Sacs 族, Potawatomes 族,そして、Ojibwas 族がこれに続いた。誇り高き Iroquois 族, Delawares 族、そして Allegheny に住んでいた Shawanoes 族たちは、フランスが彼らの荷物を運搬するのを手助けする申し出さえしていた。Duquesne's の動きは、仕返しをした。

退役したフランスの役人であり、輸出業者であった Legardeur de Saint-Pierre は Marin at Le Boeuf を継承し、そして、背の高い、George Washington 少佐、彼は、1753 年の 12 月 11 日の夕日の沈む時に、森を堂々で行進してきた Virginia 市民軍の副官であり、彼らがそこに居るのが不法だったので、何とかして、引き揚げるようにフランスに命令をする Virginia の Dinwiddie 知事からの伝言を携えていたが、その彼を受け入れたのは彼であった。

恐怖の荒野の中での砦への旅の行き来が、Washington の伝記の著者たちやそのほかに人達により、沢山に記述されていたが。インディアンとの折衝役としての若い George の技量についての記述は、あまりなされていない。彼は、Half-King との友情を作り、そして、彼は、やっと 22 になったばかりで、荒野での戦いの経験がなかったけれども、彼は、彼の赤人と同盟することの価値を本能的に知っていた。1754 年の春に Dinwiddie からフランス人を追い出すように送ら出され、彼は、彼が指揮していた Virginia 市民軍の補佐官として Seneca の酋長の助けを得た。

しかしながら、若い George が召喚できた以上に、彼らが命令した時により有益な沢山の

インディアンの手助けを確保していたのは、Fort Le Boeuf の砦を建設するときに彼らの地域での大胆な大仕事の利益を獲得していた、フランスであった。彼らが、Fort Duquesne、ここは、今、Pittsburgh となっているが、ここに Washington に対抗して野戦が出来るように、遠征隊を終結させた時に、その名前により、砦の指揮官の Contrecoeur が彼の新しい、招集された部下に対し訓示を与えた魔法があった：“イギリス人は、私の子供たちを集合させた；私のところは病んでいる；明日は私のフランス人兵士達を復讐のために繰り出さよう。そして、今、Saut St. Louis の男達、Lake of Two Mountains の男達、Hurons 族、Abenakis 族、La Presentaion の Iroquois 族、Nipissings 族、Algonquins 族、そして、Ottatwa 族の男達—私は、この一帯に住んでいるあなた方、全てを、あなた方の父なるフランスに参加し、彼が暗殺者達を打ち砕く助けをするように招集します。この策謀家となろうではないか、それとともに、宴のための二本のワインの樽に為ろうではないか。”

Delawares 族、彼らもまたそこに居たのだが、その彼らには、彼はこう付け加えた。“もし、あなたたちの同輩の例に従いあなた方が真に Onontio【カナダの知事】の子供であるのなら、この四つのワムパムにより、私はあなた方をまねくのです。”

彼の心をうんざりさせた Contrecoeur の“子供たち”の殺人は、それは、今日では、Pennsylvania の Uniontown の村となっている Great Meadows の近くで起きた、実際には Washington とフランスの巡察員（彼らは、それは平和のための要員だったと主張した）との間の、些細な衝突であった。その指揮官の Jumonville が殺害され、そして、フランスが激昂させられた。事実、それは、Parkman が“7 年戦争の勃発に導いた一連の動きに落ち込ませた、火の世界を演出した”と言っているようにこの些細な市民軍の出来事だった。

Washington の極わずかの、だが、非常に重要な勝利の即座の結果は、フランスの彼を懲らしめ、そして、こうしてイギリスと直接争おうと言う、彼らの Ohio Valley 砦からの出撃であった。彼らは、Monogahela と Allegheny 川の合流点 (Pittsburgh) で、Ohio Company の砦を陥落させ、そこを Fort Duquesne と名付け、そして、Contrecoeur が、Sieur de Villers という Jumonville の兄弟の指揮下に、報復の遠征隊を派遣させたのは、この強力な地点からであった。

フランスのインディアン同盟の強力な感じのする集合体、あるいは、Washington の Half-King との連合軍のどちらも、これに続く戦闘で解決を与える様なものでないことを明らかにした。Great Meadows での彼の成功の後、若い市民軍の大佐は、ちょっとばかり後退し、にわか作りの防護の砦、彼はここを Fort Necessity と、まことに的を得た名を付けたが、ここを建設した。Great Meadows で、彼と一緒に、そして、彼自身の村に帰っていた Half-King が、彼のある意味で見るからに輝いているインディアンの女王の Alequippa、そして、そのほか 30 名の家族、さらに、彼らはスパイであることを証明していたが、Ohio からの 40 人のインディアン達と一緒に、また、戻ってきた。彼らは、Villier の軍により、市民軍たちの間に取り囲まれたが、もし、Dineddie が彼らを支援することができ、そして、包囲最中の一番大切なときに激しい雨になり、これが、全ての弾薬とマス

カット銃をずぶぬれにし、明らかに防衛の力を失わせる様なことかなかったのなら、こうした数で勝る者に対して勝っていたかも知れない。**Washington** は 1754 年の 7 月 4 日に降伏しなければならなかった。

事件がイギリスの植民地を通して、警告の恐怖を送った。彼らは、フランスが明らかに **Ohio** 溪谷の堅い制御のもとにあり、そして、東部に向かって移動し始めているとすることを理解した。イロクオイ族は、絶えず、フランスがカナダや湖地方から、派遣するのではと予測されるような新しい遠征隊に対する防衛と同様に、同盟の地理的な位置が彼らを沿岸地域の植民地と **Ohio** 溪谷の間の緩衝地帯にしているので、新しい重要性を持っていると考えていた。

しかしなお、このだんだん増大して行く重大局面で、イギリスの権威者たちはインディアンの取り扱いの中での理解に関する、彼らの習慣的な欠如を指摘していた。彼らは、同盟の西の端の **Senecas** 族や **Onondagas** 族が、オンタリオ湖からあまり離れていないところで **St. Lawrence** に流れ込んでいる **Oswegatchie** 川の土手の上にある **La Presentation** と呼ばれているフランスの伝道師たちのキャンプにだんだん引き込まれていく間、なんの希望もなく手をこまねいていた。彼らは、と同時に同盟国の東のまとめ役である **Mohawks** 族の領地の北部の地域を絶えることなく侵略していた **Hudson** 川峡谷のオランダ人の妥協しない土地の所有者達についても何もすることが出来なかった。

偉大なる **Mohawk** の酋長である **Hendrick** がこうしたものやその他のあまり良くない状況について公告するために派遣団と一緒にニューヨークにやって来た時に、彼は、払いのけられ、そして、イギリスのとの盟約の繋がりを断絶したと断言しながら、怒って帰ってしまった。

もし、イギリスが、ニューヨークの **Sir Peter Warren** 提督の甥の **William Johnson** という背が高く、赤人の人並み外れた性格の外交家を見つけていなかったのなら、状況はもっとずっと悪くなっていた。**Sir Peter** はアイルランドから来たばかりの彼の甥を、彼の領地を管理する前の数年前に、**Mohawk** 溪谷に送っていた。そこで、**William** は、**Amsterdam** にまるで要塞のような家を建て、**Mohawk** の言葉づかいを学び、最初のオランダ人の妻をもらったが、その後、インディアンの妾 (**Hendrick** の娘)、そして、最終的には、別のよく知られた酋長、**Joseph Brant** の、17 歳の綺麗な娘を彼の妻としてめとった。

かき乱されたニューヨークの権威者たちは **Johnson** の方に向き、そして、彼に対して、自分達になした打撃を直すように嘆願した。**Johnson** は、まず、彼の古い友人である **Hendrick** をなだめ、そして、それから、彼は、酋長達がいらいらし、そして、当惑していることがわかった **Onondaga** のところの西に向かって行った。彼らの一人が、彼に向かって怒った：

“私たちは、あなた方クリスチャンや、イギリス人、フランス人が意図していることを知らない。私たちは、あなた方の両方に囲まれているので、残された土地で狩りをすることもできない。端的に言えば、もし、森の中で熊を見つけても、そこに直ぐ土地の持ち主

が現れて、自分のものだと言い、われわれが、生きる術としている、それを射止めるのを妨害してしまう。我々は、あなた方のために困惑しており、何を言えばよいのか、どう考えればよいのか、わからないのだ。”

Johnson は、苦情を真剣に受け止めた。彼は、家で准男爵のように暮らしていたが、実際、彼は直ぐにそうだったが、しかし、彼は、また、彼らのなかの一人のようにイロクォイ族と一緒に住むことが出来、よくそのような行動をしていた。彼らは他の白人にはしたこともないように彼を愛し、そして、信頼し、そして、彼も、他の誰よりもよく彼らを理解していた。**Onondaga** から戻り、彼は、同盟全体が、もし、大自然の何かが直ぐになされないなら、フランスの手の内に引きずり込まれると思ひ込まされた。

彼が提案したことは、その地域の政府により指名された、貿易と植林の管理の権威の上に設定され、**Albany** でイロクォイ族のリーダーと会うようにされていた委員会が、彼らとの間に固い協定を發布し、そして、イギリスの大義のために彼らを味方にするのであった。ニューヨーク、ペンシルバニア、メリーランド、そして、そのほか四つのイギリスの植民地が、この案に賛成し、直ぐに、長官たちは **Albany** に **Benjamin Frank** を含めた、際立った身柄の者達を招集した、がしかし、その集団からは十分な力を持った軍の編成は出来なかった。

Albany の裁判所でイロクォイ族の酋長達と一緒に座りながら、長官たちは、国王が植民地と 5 の部族からなる国(**Five Nations**)を抱きしめていることを示しながら、ワムパムの鎖になった帯を作り、イギリスを持ち上げ、そして、フランスをできるだけ悪者に仕立て上げるような話をしながら、それを酋長達に贈呈した。

Hendrick がイロクォイ族のために返事をするために立ち上がった。彼は、何時も、戦争でも、また、平和でも、ほかには例を見ないような指導者だった。多分、**Mohican** 族の生まれで、彼は、**Mohawks** 族の養子となり、そして、まだ、若かりし日の頃に大酋長となった。1710 年に彼は、**Peter Schuyler** 大佐とともにイギリスに旅をし、宮廷で **Anne** 女王に紹介された。つねにイギリスの友達であり、彼は、**Mohawk** 族が彼らの興味の中にあるように彼の最善の忠義を報じていたが、しかし、と同時に、彼は、決して白人達に対し、彼らの詐欺まがいの土地の取り扱いや、インディアン達を故意的にアルコールに溺れ刺すような行為に対して、責任を取るように注文するのに躊躇する事が無かった。

話をしている **Hendrick** は、今や、長官たちにたいして彼を有名な男にした。彼が、立ち上がり、そして、話を始めると、彼らの多くは、イギリス人の旅行者、**Timothy Dwight** の：“彼の容姿と顔つきは、卓越した印象であって、堂々として居り；彼の弁舌の力は同じように特別に優れた年寄たちの者のようで；彼はあたかも他の人達を支配するために生まれてきたような男で、なにか、王位の無敵なもの雰囲気を持っていたようだ……”という、以前に彼の経歴について報告された **Hendrick** のまた聞きの印象を思い出していたのかも知れない。

“我々は、今や、盟約の鎖を新しくし、そして、輝くものにするのだ。”と **Hendrick** は、

言った。“我々は、我々の議会の火が何時でも燃えている Onondaga への鎖のベルトを握るのだ。そして、それを雷でも、稲妻でも、壊すことができないように安全にしておくのだ。”

しかし、その時、彼はイギリスの不平に対し、イロクオイ族は、フランスに向かって押し流されていると、説明した：“我々が統一されずに生活しているのは事実だ。我々は、我々が同胞に戻ろうとしてきた。しかし、無駄だった；カナダの知事は、不正直で、欺いている精神のようだからだ。あなた方は、なぜ我々が散らばっているのか訪ねる。理由は、あなた方がこの 3 年の間我々を裏切ってばかりいたからだ。”この時に、彼は杖を取りあげ、それを自分の後方に投げた。“あなた方は、このように我々を自分たちの背後に放り投げた；そこは、フランスが、いつでも我々を誘惑し、彼らのほうに向くように、彼らのこの上ない努力をしながら、ずるくて、そして、油断ならない人々でいるところなのだ……”

“バージニアの知事とカナダの知事は、我々のものである大地を取り合っており、彼らの戦いは、我々の崩壊で終結するだろう……”そして、最期の当てこすりの一奮発で、彼はイギリスに同様の可能性のある運命を見越して言った。“あなたの国を見て理解してください：あなた方は何の砦も持っていません。何もないのです、我々の国にでさえ何もないのです。ここには、カナダからのひとつの足跡以外には何もないのです、フランスはやがてやってきて、あなたがたをドアの外に追い出します。あなた方は、我々に、心底から話し合う事を望み、そして、われわれもそうするでしょう。フランスを見てください：かれらは、いたるところに、砦を築いている男達です。しかし、あなた方は、まるで女のように。砦もなしに、むき出しで、開けっぴろげなのです。”

田舎の新聞に書かれ、後に、扇動的なイギリスの刊行物の、*The Gentleman's Magazine* に複製された、演説はさらに、*Hendrick* の評判を大きくした。それは、彼らの引き続きの塾考のなかで、長官たちに、部族は、とても賢く、そして、公正に取り扱われなくてはならなく、そして、フランスの危険は、きわめて大きく、もし、植民地が、お互い同士の利害で統一した時だけ、それに対処できると、賛同させた；そのことについて、*Franklin* は、議会に対し、彼の有名な統一の計画を議会に披露した。しかし、植民地と国王は、それを見て、それが、もっとずっと大きな力をお互いに与え、そして、植民地は、彼らの貴重な個人的な統治権の多くを失う恐れがあると、お互いに信じこみ、その提案に同じような疑いを持った。

唯一、*Albany* の議会から積極的な結論があった。長官たちが、彼らの共通の危険性に対して、よく、賛同し、そして、地方の知事たち、特に、*Dinwiddie* は、イギリスの故郷の知事に対し、フランスに対する防御するように嘆願をし始めた。彼らの嘆願は、報われた。不合理で、舌足らずの *George II* が、500 人からなる 2 連隊と、その派遣隊が上陸することになっていたバージニアで、さらに 200 人を募兵するとの命令とともに、*Edward Braddock* 少将を送り出した。

1710 年に海軍少尉として *Coldstream Guards* に入隊して以来、奉職を続けてきた退役軍人の *Braddock* について、*Franklin* は、我々に最大の公正的な予測を与えた。“この将軍は、

私が思うに、勇敢な男で、おそらく、ヨーロツパでのいくつもの戦いの中で、良い恰好をしてきたのかも知れない。しかし、彼は、とても、自信過剰で；通常の連隊の正当性については、非常に高すぎる意見の持ち主で；アメリカ人にも、また、インディアンに対してのいずれか一方を、非常に見下していた。”

しかしながら、ともかく、Braddock は、彼が Alexandria に到着した時に、地方の知事たち、そして、そのほかの高官たちの会議に対し説明した、フランスが落胆するような計画を携えてきた。それは、自身が国王になったように国王の軍隊に命令をした、現実よりも、はるかに希望的なものであったが、その Cumberland の Duke により、考案された計画であった。

それが、熱心な知事たちに明らかにされると、フランス人を北のカナダに、そして、もっとずっと西にある彼らの砦に戻すように計画された四方面からの攻撃がもくろまれた。Braddock は、彼に二つのイギリスの連隊とバージニアで採用した者達を連れて Fort Duquesne に行くつもりでいた。Shirley 知事、彼はマサチューセッツの不屈の知事であったが、そのかれは、直前に、Fort Niagara、ここは、そこが無くては、五大湖もまた Ohio 溪谷地域のどちらも維持することが出来ない、フランスの生命線の重要な拠点であったが、ここに対抗して立ち上がった二つの田舎の連隊を率いて行こうとしていた。William Jonson は、Lake George の Fort Ticonderoga の丁度北に位置している Crown Point のフランスの本拠地に向かって、New England, New York、そして、New Jersey から招集された別の軍隊を引っ張っていくつもりでいた。最後に、正規の軍人である Monckton 准少将が、Fundy 湾の先端にある Fort Beausejour に攻撃するために New England の人達の別の部隊を指揮し、そして、Acadia (Nova Scotia) を連れて行くつもりでいた。

まず最初に、1755 年の春遅く、Braddock が出発した。彼は、今日のほとんどのアメリカ人に、愚かにも、待ち伏せに会い、捕まってしまったが、そして、もし彼が Washington のすばらしい忠告に耳を貸していたなら、決して不運に見舞われることはなかったであろう、とへまなことをしたイギリス人と思われている。真実は、彼の欠点が何であろうと、Braddock は、筆舌を尽くしがたい地形の中で、不満を抱いた正規兵と未熟な市民軍の集団を、ありとあらゆる考えられる運搬の問題に悩まされながら、ついには、彼らと対面した闘争を戦うために、かなり上等な装備をしたインディアンの敵軍に遭遇するまで、行軍させていた、特段に能力のある兵士だった。

彼は待ち伏せされたのでなかった。彼の軍隊が、Fort Duquesne から 8 マイルほどの Monongahela を横切る浅瀬に来たとき、これは後で批難されているが、ここを横切る決断は、実際、もっと直接だが、もっと危険なルートを取ることであった。川を渡り、なんども、なんども繰り返しながら、かれは、用心深い指揮官が彼の前進を保護するためにできる全てのことをし、そして、彼がそうであると別に驚くものではない、かなり念入りの作戦をとっていた。

彼と遭遇した軍隊は、とても手におえないインディアンたちであった。Fort Duquesne

は、そこに常時駐留している正規の軍隊は極わずかしかなかった。彼らのために、140 人カナダ人、そして、勤勉なフランス人により、周囲の四方から集められた 800 人ものインディアン達がいた。Saut St. Louis, St. Francis からの Abenakis 族、Anastase 酋長に率いられた Lorette からの Hurons 族がここにいた。こうした人達は、伝道団のインディアン達であった。その他の異教徒達もいた。恐るべき Langlade により指揮された、五大湖の北部からの Potawatomies 族や Ojibwas 族だった；Ohio からは、Shawnees 族、そして、Mingoes 族が；そして、Detroit からは Ottawa 族、多分ここには、沢山の部族の中で、数年の間に、最もよく知れ渡った、Pontiac という名のついた若い酋長が居たのではないかと思われるが、こうした人達がいた。

それは、獐猛な人たちのとても印象的な陣列であったが、しかし、にもかかわらず、Contrcoeur と彼の配下の者達、Beaujeu, Dumas、そして、Ligonier 中尉達は、Braddock の軍隊が近づいていると言うニュースが彼らの元に届いた時には、危険を察知している状態であった。Beaujeu は、勇猛で不動の方針を採択することに賛成した。Fort Duquesne にじっとして敵を待つよりも、彼は、行軍している途中で彼らを襲撃するつもりでいて、そして、できることなら、Monongahela を渡る所で彼らを待ち伏せするつもりでいた。

だが、彼がこの計画をインディアン達に話し、そして、彼らに戦闘用の斧を上げたところ、彼らがあまり乗り気でない事がわかった。“あなたは死にたいのか、私の父よ、その上、私たちを犠牲のするのか？”と彼らは彼に聞いた。彼らは7月8日に会合し、次の日の朝に前進をきっぱりと断った。

Beaujeu は、勇敢で、そして、断固たる男だった。いつもの話だった。通常兵士達を勇気づけ、そして、彼らの多くが急いで彼らの戦闘の場所に行くふりをしていた。Beaujeu については、どうかと言えば、かれは彼の僧侶から聖餐拝受を受け、そして、彼らを指揮する準備をしていた。8時までに、小さな軍は、森に向かって行進をしていった；36 人のフランス人の士官と士官候補生、71 人の正規軍、そして、146 人のカナダ人達であった。

とても不思議なことに、彼らは Braddock の男たちのように急いで行進することはなかった。1時までに、彼らは、その時間までに Monongahela を二度目に渡っていたイギリス人達のほうに、たったの7マイル進んだだけで、こうして、待ち伏せするという Beaujeu の計画を失敗させてしまった。Braddock の経路は今日、川と平行に、陰しい丘の麓に沿って、深い森にと繋がっている。

彼の前進の隊列はほんの僅か進み、そして、丁度彼らは狭い峡谷の道を通って行っていると、木や藪の中に配備された、Beaujeu のインディアンたちの箱荷車に出遭った。多分、もし、Braddock の先発の守備隊が彼らの主力部隊のもうちょっとまえに展開していたのなら、驚くような要因を減らすことが出来たかも知れないが、しかし、とにかく、戦闘が、直ぐに、自分たちのもともとの武器を使って戦う赤人とこうした戦闘の経験の全くない正規軍の連隊との間で起きたのだ。

にもかかわらず、素晴らしい勇気で、その時には自分たちの最善を尽くしているのは、

正規軍の兵士達であった。カナダ人の殆どが、まず、峡谷に逃れた。**Beaujeu** は、三番目の峡谷で倒れて亡くなった。それから、先に進んでいた部隊を指揮していた准少将の **Gage** が彼のカノン銃を取り上げ、そして、これを見て、インディアン達が後ずさりし、当惑した。しかし、彼らはその場を離れる事が無かった。

Dumas、彼は、いまは、**Beaujeu** の立場で指揮をしていたのだが、その彼が彼の軍隊を整え直そうとした。“私は、絶望からやってくる確信を持って前進した。”と後に記述し、そして、彼の同輩の士官たちが、彼の例に従った。彼らのぐらつかない勇敢さが男達を、白人を、そして、赤人を一様に奮い立たせた。**Dumas** と **Ligonier** は正規軍と生き残っているカナダ人達を中心となり、インディアン達が **Braddock** の軍の両側で一番外に列を這っている間、そして、彼らの下に陣取る逃げ場のないイギリス人たちを、彼らを木端微塵にまで、撃ちまくるように小高い丘の上から、殺人的な縦列射撃を浴びせかけ始めた。

びっくり仰天して、**Gage** の先発の守備隊が後ずさりした時に、彼らは **Braddock** と彼の主力部隊が昇ってくるのと遭遇した。2・3 分後に、両者は、どうしようもなく混乱し、四方八方から浴びせられる、死ねと言うばかりの射撃のシャワーのどっちを向いていれば良いのかも分らず、なす術もなく森の中に当惑して一緒にうずくまっていた。必然的に、運命のパニックであった彼らのような勇敢さが彼らを把握した。**Braddock** の一人の士官が三週間後に記述した；“私は、その情景の恐怖を書くことが出来ない。どんな筆もそれを書くことが出来ないのだ。インディアン達の叫びは、わたしの耳に生々しく、そして、その恐ろしい響きは、私が絶えるその瞬間まで私につきまとうだろう。”

大騒動が総崩れになり、そして、死にかけた **Braddock** が彼の軍隊の生き残りの者達とともに逃げると、疑いもなく認めてはいなかったが、状況は、インディアン達が勝利したように見えた。フランスとインディアンとの戦争の中で、彼らのために誤って付けられた名前の衝突の中で、彼らがこれほど輝かしい役割をしたものは、二度と起こらなかった。

このように、北アメリカにいるフランス人達を燃え上がらせる、**Cumberland** の基本的計画の **Duke** の最初の一撃は、惨めにも失敗に終わった。**Braddock** が彼の災難に行進している間、冒険的な計画の中の他の指揮官たちはかれらの課せられた任務を実行していた。

Johnson の立場を強化するために、彼は、インディアンに、将軍たちと同じように、監督をするようにさせ、イロクオイ族が喜ぶようにしていた。彼が、**Mohawk** にある彼の家に、**Crown Point** での行進について議論をするための会議に呼んだときに、彼らの 1100 人もの者がこの時という具合に、消えてしまった。

Johnson は、性格的に止めどもない演説が三日間もつづき、そして、四日目にもなるように、かれがなにも忍耐を示さないほど、インディアン達の事を良く知っていた。しかしながら、それから、かれは時を見計らって、彼は彼の戦闘用のベルトを投げすて、それを **Oneida** の酋長が拾い上げ、そして、戦闘のダンスが始まった。ポンチの桶を持ち込み、そして、インディアン達は、王様の繁栄を願ってそれを飲み、そして、彼らの熱気をさらに盛り上げた。

然しながら、出征の道を辿る時が来ると、1100 人のうちの 300 人もの者が現れた。

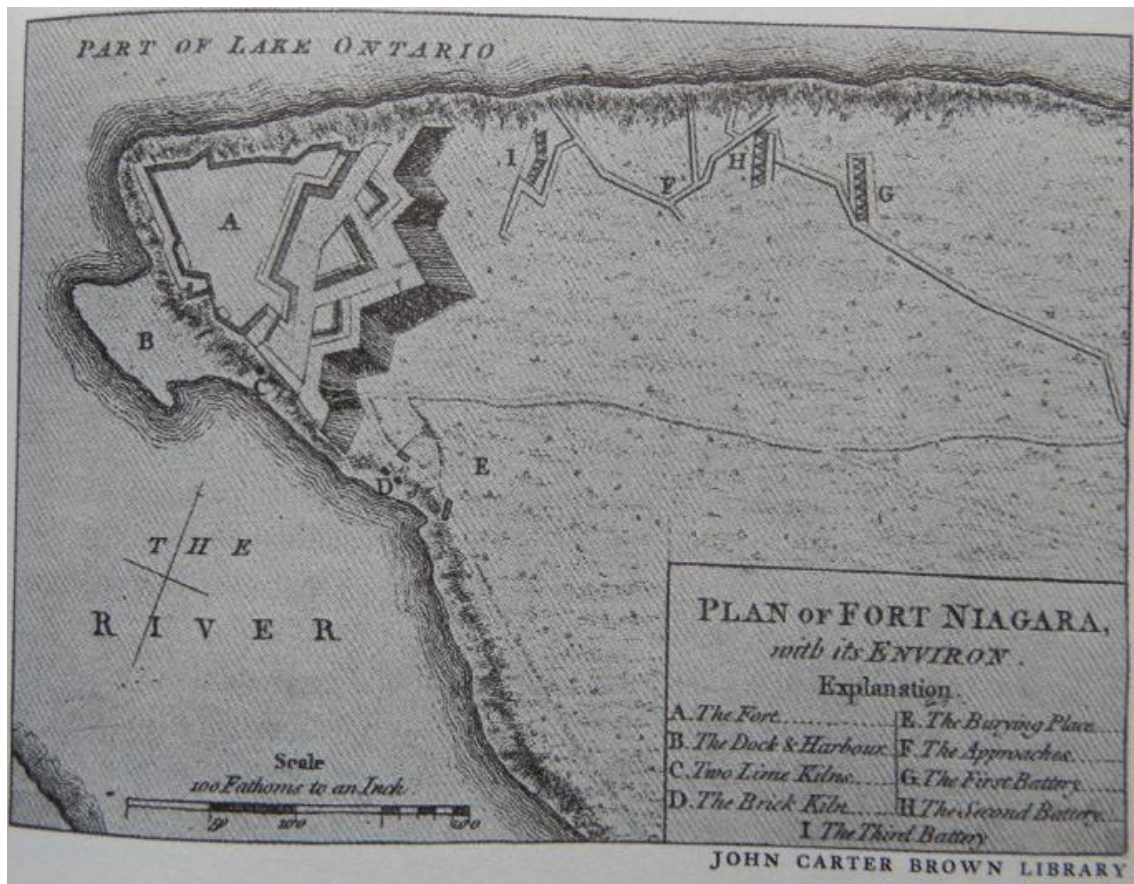
Hendrick は、彼の友達の Johnson に手違いを説明する必要が無かった；二人ともイロクオイ族は、すでにカナダに行ってしまった彼らの親戚と戦う気持ちのない事、そして、疑いもなく、フランス側に立って戦うのだらうという事を知っていた。

事実、それは、不幸な冒険であったが、そこで、Hendrick は、最初から、信じられないような味方をしていた。かれは、Johnson の命令で集められた田舎のものたちの市民軍に何の感激も示さず、こうした礼儀知らず田舎者達は、お世辞を返答していた。事実、彼は、この時まで、ゆうに 70 歳を過ぎた、歳老いた、デブの人間で、時に、彼の馬に乗って居る事さえ難しかった。しかし、彼はそれまでと同じように熱中していた。Johnson が、フランス軍に近付いた時に彼の軍隊を分割した時に、Hendrick はこれに反対した。杖を取り上げて、彼はそれを二本に折り、そして、そのあと彼は、今度は、数本の杖を手に取り、それを一緒にすれば、これを折ることはどんなことをしても不可能であるということを示した。Johnson はこのことからヒントをえて、彼の部隊を二分するという指示を取り消した。Hendrick は、それでも、満足しなかった；彼は、”彼らは、殺されるには十分だが、戦うには、決して十分だと言えない。”と彼の頭をふるわせた。

Johnson がよく、心に留意していたが、しかし、彼はあまりにも約束していたことからかけ離れていたという事が、示され、そして、正確に分析されていた。William がそれをしないように忠告を受けないと分ると、Hendrick は、自分は彼の兄弟の後に続くと言明し、そして、彼自身、骨の折れる銃の運搬にも精を出し、彼の古い、力強い流暢な話ぶりで、聞いていた New England の士官たちは、彼らは彼を言っているかを何も理解してなかったが、感嘆の中に我を忘れてしまったが、その演説で彼についてくるぐらつく Mohawk の部下たちに対し熱弁をふるった。インディアン達のうちの 200 人がこれに応え；その他の者達は、Hendrick によってさえも、納得しなかった。

もし、Johnson が彼のインディアンとの同盟に、何か問題をもっていたのなら、彼に直面した指揮官は、自分達が悪い状況の下に居ると信じたろう。ドイツ軍を退役した Baron Dieskau、彼は、フランス軍を指揮していたのだが、彼は彼の長い軍隊経験の中でインディアンを指揮するようなことはしなかったし、それは、それを繰り返さないように心掛けない、初めての経験であった。“彼らは、我々を狂わすのだ。”、“朝から、晩までなのだ。とにかく彼らの要望はとどまるところが無いのだ。彼らは、どれだけブランディーの小樽を、その量には関係なくこれを飲みながら、すでに、5 匹の牛を食し、そして、沢山の豚を食べているのだ。”と彼ははっきりと書いていた。端的に言えば、彼らの悪魔と居る事で感ずる怒りに耐え忍ぶ必要があり、そして、それでもまだ、何時でも、彼らと一緒に自分も楽しんでいる様に、無理にそのように振る舞っている必要があるのだ。

Dieskau の軍事力で Johnson の部隊が予め、Crown Point に向かい停滞させられ、引き続いて起こった Lake George の戦いで、お互いに最初に出遭ったのは、両方の軍のなかのインディアン達であった。Hendrick と Johnson が推測したように、フランス軍の指揮官の



インディアンもやっぱり、同盟国の西のほうに端の辺りから来たイロクオイ族であった。

多くの歴史家たちは、注意深く準備された待ち伏せをしている別の連隊と一緒にいる、Dieskau のイロクオイ族は、彼らの同族の者達に忠告するため、早くから狼煙を上げて、罠のあることをほとんど漏らしていた。間違いなく、歳老いた Hendrick は、危険を嗅ぎ分けていたが、しかし、彼が忠告を与える事が出来るまえに、彼の周りの茂みが、炎で燃えていた。彼の乗っている馬が倒れ、地面から立ち上がろうとした時に、フランス軍の銃剣が彼の体に突き刺さり、かれの名誉ある障害が終わりを遂げた。

Johnson の部下の者達が、失うものは多かったが名誉ある退却を実行し、こうして、“血塗られた朝の斥候”として知られるようになった戦いの第一幕が閉じられた。両方の軍にイロクオイ族は、兄弟が兄弟に対して戦うように考えられる戦いをしながら、憂鬱になり、そして、機嫌を悪くさせられた。彼らの指揮官である、Legardeur de Saint-Pierre は、殺され、そして、指揮官なしで、彼らは、無管理の状態になった。Johnson の Mohawks 族、彼らは殆どは、戦いの場面ではよく振る舞っていたが、彼らの間では、既に闘いに熱意を示さなくなっていた。

引き続いてすぐに起きていた、主な取り決めの中で、イロクオイ族は、彼らが喜んでるように、戦っていた時には全然その様では無かったが、しかし、そんな状況は既になく、

戦闘の場にいる Johnson とともに、Mohawks 族は、尚も、死んだ Hendrick の復讐を決めて、そのあたりに留まっていた。彼らの内の何人かが Johnson のいるテントに入ってきたが、そこには、傷ついて、拿捕されていた Dieskau が横たわっていた。男爵は Mohawks 族と Johnson が熱烈に怒った議論しているのを聞いた。インディアン達が腹立たしそうにそとに出て行ったあと、彼は赤人たちが望んでいたものを問い合わせた。

“彼らは何がしたいんだ？” Johnson が切り返して言った。“殺された 3 人や 4 人の彼らの酋長のための復讐として、あなたを焼き、(神により、)あなたを食べ、彼らのパイプの中で、煙らすのだ。しかし、何も恐れるものはない。あなたは、私と居れば、安全だし、さもなくば、彼らは、われらの両方を殺すだろう。”

Mohawks 族が、さらに議論をするために戻ってきたが、しかし、明らかになだめられて出て行った。次の朝、一人のだけのインディアンが横になっている Dieskau のいるテントに忍び込んできて、そして、もしそのテントの持ち主の少尉がその侵入者の武器を取り上げなかったなら、かれは槍で彼を突き刺していたかも知れない。

Johnson は、何かが Braddock の敗北をもたらした、怪しげな勝利を得ていたが、彼は、Crown Point に行く途中、ともに行く彼の軍を維持する事が出来なかった。壮大な計画の二番目の要素が、やっぱり失敗に終わった。

一方、Monckton は、こうした喪失したものをほとんど苦も無く Beausejour を拿捕することにより取り戻したが、しかし、そのあと、彼は、マサチューセッツの主要な植民地に近いそうした危険性のある土地に住むことを許されなかった敵軍の軍として住民たちを認識していた、Acadians 族の赤人の Acadia に対する Shiley 知事の決めた計画を実行して、不名誉に新しい章を書いた。引き続いて、Longfellow が彼の “Evangeline” の中でもっともなことに不朽にした、その巨大な移送を起こさせた。逃亡することのなかったこうした Acadians 族は、招集され、そして、マサチューセッツからジョージアまでの全ての経路にある植民地に分散された。後に逃亡に成功し、French Louisiana への彼らの経路を確立した者達は、彼ら自身の生活の手段を維持した。

Shirley 知事について言えば、彼の計画のかれの部分もまた、一つの戦いと言うほどたくさんではないが、これもやはり失敗に終わった。彼は、自分が望んだほどの規模ほどではないより小さな軍隊とともに、7 月に Albany を出発し、すぐに、フランスの強力な砦の Fort Frontenac から、湖を直接渡る、オンタリオ湖のほとりにいるのに気付いた。そこで彼はある素晴らしい理由を求めてとどまった。フランスはイギリスの大体的な戦略についての全てにかんする Braddock の掴んだ報告から様々なことを学び、そして、Niagara と Frontenac の砦の両方とも Shirley の到着を迎える準備ができていた。非常に優れた軍隊とともに、彼らは、新しく作られたマサチューセッツの将軍の周りで活動し、そして、彼を切り離すように準備されていた。

しぶしぶと、Shirley は、冒険を断念しなくてはならなかった。彼は、1755 年の秋に Oswego にあるイギリスの砦、ここは彼がそこに駐屯する者達を残してオンタリオ湖に留ま

っていたところで有るが、ここを強化するために数週間を過ごし、そして、次の夏に公表する新しい宣言の計画を一杯持って **Albany** に戻って行った。彼はオンタリオの湖上に圧倒的な軍艦の勢力を用意し、それを利用して、湖にある、フランスの砦、全て—**Niagara**, **Fronterac**、そして、**Tronto** の砦を陥落させようと目論んでいた。そして、彼は、なお、北にある、**Ticonderoga**、**Crown Point**、ならびに、南にある **Fort Duquesne** を攻撃するつもりでいた。もし、彼が時間と、兵力を持っていたのなら、彼は、**Quebec** の周りにある植民地の **Chaudiere River** を攻撃しようと考えていた。

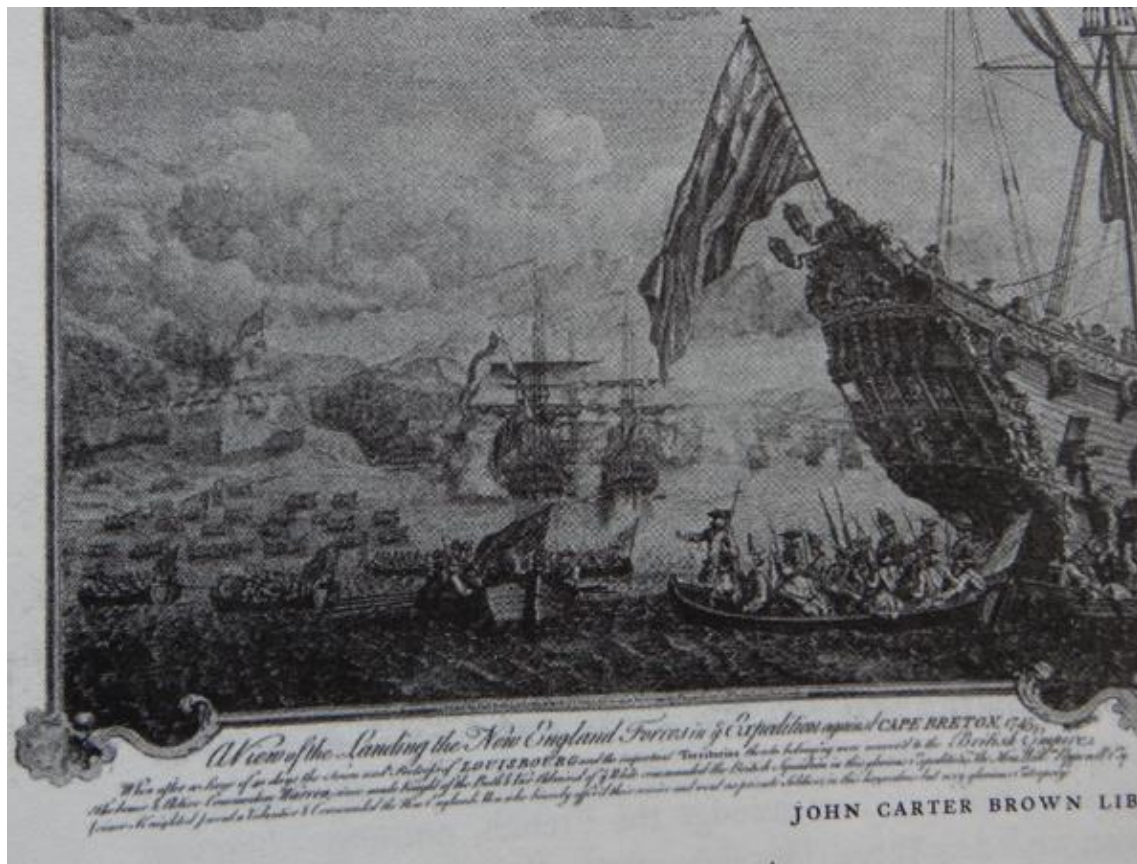
しかし、衝突の様相は、今は、急激に変わり始めていた。1755 年の公言は、宣戦布告なしの一部であり、そして彼らは、フランスの人の追い出しに失敗はしたけれども、なんだろうが、彼らの残したものは何もなかった。イギリスが北アメリカで、フランスの海の通商を、既成の形態にとらわれずに攻撃し、北アメリカで彼らの尽力を補強した、開かれた敵対行為のこの年は、宣告した戦争のなかだけの結果にすることができた。

イギリスは、1756 年の 5 月 18 日に、こうした宣戦布告する最初の国となり；そして、6 月 9 日に、フランスがこれに続いた。直ぐに、ヨーロッパの全土が、18 世紀の最も恐ろしい戦争であると認識された大騒動に巻き込まれた。アメリカは、インドやアフリカの海岸線にそって、地球上の出現した二つの国の両方に属した島々のように二次的な立場にたっていた。

二次的な立場にしようが、いまいが、戦いの中に居る人達には、北アメリカの継続的な闘争は十分に深刻な問題であった。カナダやアメリカの植民地にいる人々には決して忘れることはできない沢山の、悲劇的な場面があった。しかしながら、この壮大なドラマのなかで、インディアン達は亡くなった。ヨーロッパの軍隊がその場面の中に出て来始めると、彼らの重要性が途端に消えて行った。

にもかかわらず、二つの力は、彼らの頭上で戦い、そして、彼らを利用できるときには、とりわけ、宣戦布告をする最初の段階では、利用できるだけ利用した。**Johnson** は、特に、1756 年の初夏には、**Shirley** の策略した重要な公言の中で、インディアンをよりうまく利用しようと考えながら、熱心に仕事に携わった。しかしながら、イロクオイ族は、できる事なら中立の立場を臨み、そして、もし、それが不可能であれば、彼らは、だんだんフランス側に傾いていた。彼らの酋長たちは、なんども、なんども繰り返し、彼らに嘘をついき、裏切り、だまして来た **Albany** の政治家や商人達について、**Johnson** に対し、絶えず不平を言っていた。彼らの **Sir William** に対する愛情だけが、彼らをフランスとともに、ひとまとめにして投げすてる事から妨げた。イギリスに彼らの町の近くに砦を築くように彼らを説得するために多くの会議がもたれた。

Johnson は、たくさんの小さな成功を楽しんでいた。6 月に、戦争が公的に始まったすぐ後に、彼は **Confedracy** の首都に旅をし、彼らの大酋長である **Red Head** の亡くなった時に、二週間ごとにインディアンにお悔やみを言いに行ったあと、彼は、彼らをイギリスの大義のために手斧を持つようにさせることに成功した。その少しあとで、いまは、**Fort**



1745 年の Louisbourg での New England 軍の上陸

Johnson と呼ばれている彼の家で、かれが彼の家を訪問するように招待したインディアンの派遣隊に、Five Nations, Hudson からの Mohegans 族、Susquehanna からの Shawnees 族、これらの全ての人達がイギリスの境界線にある植民地に対する殺人的な戦争にきびきびとして魅了されていたのだが、その彼らを代表して、熱弁をふるうため、彼は病のベッドから起き上がった。彼らは止めることに賛成し、事実、フランスに対する戦闘の帯を受け取っていた。

しかし、Johnson は、彼のインディアンの友達については、現実論主義者だった。彼は、彼らの約束の言葉を守ることに対して何の責任も取らなかったし、何人かの酋長達はかれを歓待したが、他の酋長達はフランスに魅力を感じていた。彼らの堅固な支援を確信するための唯一の方法は、フランスに対して勝利により示される、軍事的な強さの演出を確信させさせることだった。それが、夏の演説が通常のものが持つ重要性よりも大切であったのが、なぜかという事だった。

しかしながら不幸に、オンタリオ湖の周りにある重要なフランスの砦を陥落させる代わりに、Shirley が、夢見たように、フランス軍は、まず移動し、そして、これが時を得て、とりあえず、彼らの西部での最先端となる所を首尾よく手に入れたフランス軍の唯一の勝

ち戦となった **Oswego Fort** を取った。さらにそのうえ、勝利が、彼らのキャンプになだれ込んできたこうした全てのインディアン達を運んできて、そして、**Ohio** 溪谷にあるイギリスの境界線に沿って攻撃を仕掛けるようにたきつけた。**Cherokees** 族や、**Choctaws** 族、長い間、イギリス軍の別動隊と見られていた部族でさえ、彼らの気持ちを変えたのではと思われた。

望みがどんどん無くなるにつれ、**Johnson** は、**Five Nations** が彼から離れて行くのを感じていた。11 月になり、彼らは有効の絆を再築するために準備をして、**Montreal** の大きな派遣団を送り出した。知事の **Vaudreuil** が自慢げに彼らに公言した：“私は、**Oswego** を灰にする。そして、イギリスは私のまえに怖気づくのだ。なぜ、あなた方は、胸元に居る毒蛇をのさばらすのだ？ 彼らは、あなた方を奴隷にしようとしているのだ。”

この時、派遣団の者達は、唸りを上げ、そして、彼らのイギリスのメダルを大地に投げ捨てた。“村のむさぼり人”かのように、**Vaudreuil** を指して、彼らは、再び彼に反対をしないように毒づいた。うれしそうに、知事は衣服を纏い、そして、彼らが逃れ無くすることができるよう、親切に彼らに振る舞いをした。彼らは、彼らを確実にしなければならないとしている人々への嫌がらせとなる様に、新しい年のフランスの祝いを支援するように、留まる事を主張した。

全体の同盟のなかで、唯一、**Mohawks** 族だけが **Johnson** に対して忠実なものとして残ったが、彼らの忠実性でさえ、絶えず疑わしいものであった。何の疑問もなく、フランスは 1757 年の春に、**Lake George** のイギリスを攻撃し、そして、ことによっては **Albany** への全ての経路に行く、機が熟したと決断した。冬の間に、彼らは西や北の部族たちの中にインディアンの同盟者達を募集し。いまや、**Montreal** の村辺りに、フランスから来て **Oswego** を征服した偉大なる **Montcalm** に会い、そして、彼と話をしたいと思って集まった 1000 もの人達よりも多くなっていた。

彼らが少なくともこの特権に浴している時に **Michilimackinac** の弁士が彼に話した：“我々は、イギリスを踏みつぶすようなこの有名な人に会いたいと望んでいる。我々は、我々が彼は、雲の中で彼の頭が見失われてしまうほど背が高いのではと思っていた。しかし、おお、なんと、あなたは小さな男だった。我々が、松の偉大さ、そして、鷲の電光を理解するのは、我々があなたの目を望みこむ時だ。”と。

全てのフランスの軍が 7 月の終わり近くに **Ticonderoga** に集まった時までには、8000 人の軍隊のなかには、多種多様であり、ずっと遠くのほうからの部族たちで、**Iowas** 族などは、彼らの言葉を理解できる白人の通訳がいらないほどで、そんな部族からのインディアンが、およそ 2000 人近くいた。彼らは、落ち着きのない、取り扱いにくい同盟者たちだった。戦闘を待機している間、彼らは、**Lake George** のほとりの岩の上で日向ぼっこをしているガラガラヘビの数を減らすことで、楽しんでいたり、軍隊がしっかりとした形で包囲するために湖の南の端にある **William Henry** 砦の前に最終的に集合した時に、彼らは、あらゆる戦闘のルールを無視するなどして、**Montcalm** をいらだたせていた。

フランスの将軍がインディアンの指導者達を会議に呼び、ワムパムを与え、そして、彼らに忠告した。そして彼らは、以後彼に従う事を約束したが、しかし、彼らは、将軍が彼らに対し、包囲攻撃を指揮するのかについて彼らの忠告を聞かなかったので不満を漏らしていた。“我々は森林の中で戦う事については、あなた方よりもよく知っている；我々の忠告を聞けば、あなた方は、もっと効率的にそれができるのだ。”と。

Montcalm は、返事に、朝になったら、彼らは実際に行動するなかで、大砲の音を聞くようになるだろうという情報を含めた約束をして、彼らを慰めた。彼の八つのキャノン重砲と迫撃砲が、夜明けとともに鳴り響くと、インディアン達は、喜んで彼らの傍らにいた。彼らは銃を手にする事を許すように嘆願し、時によっては、Montcalm は、それを許していた。

それが起きた時に、彼らは、もうちょっとするように頼まれた。イギリス軍が William Henry 砦を 8 月の 8 日に放棄した。しかし、インディアン達が彼らの歴史のなかに遡って書いたのは、それからだった。ラム酒、略奪、そして、頭皮に飢えて、彼らは全ての約束を、そして、フランスの指揮官からの命令を破り、僧侶たち、脅し、あるいは、甘言によっても、やめようとしなかった。

彼らは、18 ヶ月のあいだは、奉公しないことという条項のある降伏文書を合意したイギリス人達の退却の縦列の後に続き、敗北した人々は、想像するに、フランスの軍の誘導により保護されていたけれども、インディアン達は少なくとも 50 人の人達を殺し、その頭皮を取っていた。この中には病気だった人、砦や、退却する間の最初のキャンプで虐待を受け傷ついた人達は含まれていない。600 から 700 人のほかの者たち、女や子供達が、拷問を受けるか、あるいは、裸にされ鞭打たれ、森の中で死ぬように置き去りにされるために囚人として連れて行かれた。こうしたなかで、Montcalm は、400 人以上を助けることができた。

成り行きはぞっとするようなものだった。彼らの残った 200 名、あるいは、囚人たちのような人達とともに Montreal に到着すると、インディアン達は、馬鹿なことにそれぞれに 2 つのブランディーの小樽を運ばせるために彼らのなかから捕獲した男達の何人かを連れてきた統治官により譴責（けんせき）された。あるフランス人の目撃者が次のようなことを書いていた：“……私の魂は、私の目に残っている情景に身震いした。15 日の 2 時に、町中の人々が居るところで、彼らは囚人たちの中の一人を殺し、彼をやかんの中に入れ、そして、彼の破壊した田舎の者に彼を食べさせた。別の目撃者が、彼らは、”母親たちに、彼らの生まれたばかりの赤ん坊を無理やり食べさせた。”と口汚く罵っていた。

そうした獰猛さに恐怖を感じて、フランス人達は彼らの同盟者達に銃、カヌー、そして、彼らを自由にさせるようなその他の贈り物を惜しげなく与え、と同時に、将来彼らを利用するように保護していた。しかしながら、統治官のいい加減さが彼らを勇猛にした。“彼は、彼らに好きなようにさせている、”と、別のフランス人目撃者が、次のように書いていた、：“彼らは Montreal 中を、手にナイフを持って、だれかれとなく恐怖をあたえ、そして、時



Montcalm 将軍の死

には、彼らが会った人を侮辱するなどして、喚きまわっている。もし、不満などが出てきても、彼[知事]は何も言わない。それどころか；彼らを咎めるどころか、彼らの残虐行為がそうすれば優しくなると信じて、彼は彼らに土産物さえ与えている。” 2 週間して、それが効を奏し、La Chine での大規模な暴動のあと、彼らの西部の村にカヌーで漕ぎ出て行った。

彼らのインディアンの同盟者たちに対するフランスの偽善的な態度は、Niagara 砦が 3000 人もの野蛮人が、イギリスの開拓民により自由にされる春を待っているだけだと、次の冬の間に報告した時にフランスの指揮官である Bougainvill により、描き出されたものだった。“一体、悩みの種は何なのだ？”と、かれの幸運に仰天して、かれは書いている。

“人間性が、そうした怪物を無理に使うように強いられた時に唸り声をあげて求めている。まるで稲妻のように、攻撃しては、消えていく見えない敵に対して何ができるというのだ？それは、破壊を続ける天使なのだ。”

でも、破壊の天使はもはや戦争が勃発した今では、もう重要ではなくなった。有能な大英帝国の将軍たちは、数千人もの訓練された正規軍を指揮して、戦いの場にいた。Jeffrey Amherst 爵は、1758 年に、Prince Edward Island の北の海岸の、Louisbourg のフランス



Wolfe 将軍の死

Benjamin West の絵からの *Falckeyesen* の彫刻

の壮大な砦を陥落させ；そして、それと同じ年に、John Forbes 将軍が Duquesne 砦を奪取した。フランスが達成してきた年月の続きでの唯一の勝利は、James Abercrombie に指揮された Ticonderoga での攻撃での Montcalms の撃退だった。

その歴史的な戦いの中で、Johnson とともに、その戦いに来ていた 300 人の Mohawks の者が、Mount Defiance の麓で安全に身を忍ばせており、そして、彼らの小さな銃で、散発的に、敵に危害をくわえないような射撃をしたあと、白人同士が長く、戦い続けた昼の間中殺し合うのを、静かにして、これを見つめていた。

Five Nations が戦うかどうか、あるいは、どちらの味方なのかどうかというようなことは、戦っている将軍たちには、もはや、さしたる問題ではなかった。他の地域のインディアン達は、彼らが戦うときにはいつでも、取るに足りない援軍になっていた；彼らの多くは、斥候として働いていた。副連隊長の Bradstreet は、Frontenac 砦を攻め落とす戦いに彼の 3000 人の部下とともに一緒に闘った沢山の Oneidas 族はほとんど必要ではなかった。

唯一、インディアンが示した強さの証は、Johnson が Fort Niagara を襲撃する 1400 人の白人兵士達に加えて 900 人のイロクオイ族を引き連れてきた戦争の最期の数日の間におこった。この連合軍は、疑いもなく 200 人程度のインディアンの同盟者がいた 1100 人のフ

ランス軍部隊を幾つかに分裂させることに成功した。ここでも、Johnson のイロクオイ族のものは、上手くはいかなかったが、フランス軍のインディアン達と、戦闘が始まる前に直談判をしようとしていた。この戦争のクライマックスが、Quebec の町の郊外にある、Height of Abraham というところでの、確かにこの戦争、あるいは、それ以前の他のどんな戦争でも最も素晴らしい将軍たちの一人であった Montcalm と、大英帝国のごく小さな非凡の持ち主である James Wolfe との間の輝かしい決闘という形で、1759 にやって来た。軍隊は彼らの二人のずば抜けて優れた指揮官の死体を決闘の場に残して行ったが、しかし、勝利は、Wolfe の、そして、カナダでフランス軍のよりどころとなっていた Quebec がイギリス軍に降伏した。そのことがこれに続く年には Montreal を占領するという事にだけで残り、そして、戦争は終結し、公式には 1763 年のパリ協定により決断された。

フランスとイギリスとの間の敵愾心の終結は、ミシシッピー川の東部のインディアンの住民たちに、陰気で、むごたらしい雰囲気を残した。彼らは、自分達は利用され、そして、彼らがイギリスを勝利に導いたことからすれば、微々たる不公平な報償であると感じていた。フランス側についた人達—そして、こうした人達はその主役であったが、—まだ、イギリスは彼らの敵であるとみなしており、そして、ほとんどの部族が、かれらの賢い者達がぼんやりと予測した、イギリスの入植者や植民地の勝利としての西部進出の大打進となり、そして、いまや西部が、彼らに自由に解放されたことへの懸念をもちながら、時が来るのを待っていた。

結果として、東部のインディアン達がかって、いまや大平原まで解放されてしまったが、そこにいる人達の土地、そして、そこに住んでいる人々を征服しようという白人達に対して戦った時に示したもっとも注目すべき抵抗の幕が切って落とされた。

5

ポンティアックの陰謀

大英帝国の勝利の瞬間は、赤人にとっても決断の時だった。もしこの時をしっかりと捕らえる事ができ、そして、彼らの有利に変える事が出来たなら、彼らは少なくとも全体的な白人の膨大な時代を後に伸ばすことが出来たかもしれない。一人のインディアンの指導者が、歴史が彼の人民に提供した絶好の機会に気付いていた：彼の領地は五大湖の地域であったが、それは、Ottawa の首長であるポンティアックだ。

ポンティアックとはいったい誰なのか？ ミシガンの歴史家、Howard Peckham が、彼について関係のある質問を投げかけている：“最高潮に達した発展に対し、あえてこれに反抗し、全体にヨーロッパの帝国主義的な闘争を止めた者のやり方はどんな方法であったのか？どのようにして、彼は 4 つの部族を戦争に導き、そして、三度にも渡って反逆を炊きつけたのか？だれが、イギリスの領土を 12 倍にもした国王のために勝利をしたばかりの將軍を拒絶した未開人なのか？どんな地域的な環境が彼の士気を高め、そして、勇気づけたのか？そして、最終的には、どうして彼はしくじったのか？” Peckham が、彼の賞賛すべき、そして、明確な、*Pontiac and the Indian Uprising* の中で、こうした疑問に答えている。

Ottawa の伝統に従い、ポンティアックの母親はその国の住人であったことが確認されており、彼の父親は Chippewa 族の者となっているが、しかし、初期当時のインディアンに関係したような生命学的な全ての事実と同様に、我々にもたらされているポンティアックの発祥に関するものは殆どが疑問に満ちたものだ。我々が知っている全てのものは、確かなものが多くではないにしても、彼は、1720 年から 1725 年の間のどこかで Ottawa 族のものとして生まれ、そして、そこで育ってきた。彼の名前の意味でさえも正確には分っていない。

ポンティアックは、カナダでのフランスの没落とともに歴史的な姿となっている。Sir Jeffery Amherst がモントリオール知事の降伏を受け入れた 1760 年の 9 月 8 日の後の日に、そこは今でもフランスに維持されているが、五大湖の西部地域にあるフランスの砦を陥落させるために、彼の有名なレンジャーの二つの一団を付けて、大胆不敵な 29 歳の Robert Rogers 少佐を送った。その派遣隊が Ottawa の領域に征服をしているイギリスを連れてきた。

Rogers は、1765 年に、どのように彼がポンティアックに会い、そして、彼とどのように関わってきたのか、全体的に愉快的な声明をしたものを発行した。彼らは、1760 年にデトロイト川の河口で、Ottawa, Huron、そして、Potawatomie の派遣団がイギリス人に会うよう

になったときに、その状況は **Rogers** が記述しているようなものではなかったかもしれないが、会合した可能性がある。インディアン達は、**Peckham** が指摘しているように、彼らたちは、その当時、まだ、イギリス人達が彼らを、“彼らの土地に住んでいる人達……”とみなしていると理解していなかったので、**Rogers** を歓迎していた。

しかしながら、インディアン達が、大英帝国は、上手くやって来た、そして、寛大だったフランスのようではないという現実を見極めるのに、一年、あるいは、それくらいもかからなかった。砦以外での取引はするべきではなかった。彼らは、現地人が必要とする十分な着物、あるいは、火薬以外に贈答品、あるいは、弾薬、その他のものはなにも手に入れる事ができなかった。最悪だったのは、大英帝国は彼らにラム酒を売ることを拒んだ。否、これが最悪だったのだろうか？直ぐに **Amherst** が、その上彼らの移動を規制し、そして、彼らの土地をしかるべき役人たちに分配しようとしていることが露骨になった。

Seneca's 族が、行動の的に怒りを露わにした最初の部族だった。彼らは、戦闘の赤いワムパムのベルトを **Delaware** 族と **Shawnee** 族に、それから、**Ottawa** 族、**Huron** 族、**Chippewa**、そして、デトロイトの **Potawatomi** 族に送った。イロクォイ族同盟の知性を演じながら、こうした **Seneca** 族は、決められた計画を持っていた。それは、デトロイト、ピッツバーグ、**Presqu'Isle**、ベナンゴ、そして、ナイアガラにある大英帝国の砦を、次々に攻撃すると言うものであった。

しかしながら、デトロイトの部族は、まだ、戦争を始める準備が十分ではなく、事実、**Seneca** 族が指定したデトロイトの大英帝国の指揮官に、それが効果的に終わらせてしまったのだが、情報を伝えた。しかしながら、この計画のなかに、ポンティアックの策略の種が潜んでいた。

そうした策略のもともとの発祥は、1762 年に、デトロイトのインディアン達による、彼らに対する大英帝国の政策が、実に **Seneca** 族が非難し、より悪いものであるとしていたことに気付いたことにある。それは、フランスは寛大にしていたものだが、ラム酒なしで済ませる事が、火薬なしにすること以外に、このことが、彼らにとって彼らの家族の生活を支えていくのに十分なだけの狩猟をすることがだんだん難しくなっていくという事を意味していることに十分なほど悪いものだった。彼らは、白人達は、フランス人はそうしていた、一方、イギリス人は、火薬というものは個人的な資産であるとみなしていたのだが、彼らとともにある火薬と同じように、基本的にはいろいろな事項は共有すべきものであると信じていた。それは、古い議論であり、より古くなり、そして、より膨大となることが運命づけられていた。

明らかに、策略は、1762 年の夏から秋にかけて **Ohio** 溪谷のなかのある不思議な容姿の者、彼は、インディアン達が **Delaware** の **Prophet** として知っているように、赤人達は、彼らが生活の手段をもともとの形に戻すだけで、白人達を追い出すことが出来ると彼に告げた洞察力を持つようにと主張した男であるが、その彼に助けられて、発展を始めていた。この伝道的で、精神的に不安定な人は、インディアン達に対して、彼らが白人や、彼のも



Detroit の砦を去る Pontiac と彼の仲間達

Frederic Remington

っているすべての商品に頼らないように嘆願しながら、自己満足する構図を説教しており、こうして、最終的に、彼らは、効果的な戦争をすることが出来た。ポンティアックは、言葉が部族の間に強力な効果を持ち始めているという、その Prophet の御告げを聞いた。

肉体的に、ポンティアックは、少なくとも白人の基準から考えても、決してハンサムという訳ではなかったが、しかし、彼は、背が高く、強靱で、がっしりしていて、沢山いた彼の兄弟の中では誰よりも、色白だった。彼の短い髪の毛に結ばれた羽根の元で機能していた、強固で、用心深い精神は、彼の信頼される確固たるものであった。彼の事を記述した全ての白人の同時代の人々、彼は、偉大なる指導者の尊敬を集める象徴的な雰囲気を持っていると見ていた。ある人々は、彼は生まれつきの、“完璧主義で断固”であると思っていたし、また、別の人々は、彼は其れを“命令的で、専制的”だと認識していた。フランス人の同世代のひとである Robert Navarre は彼の日記の中で、ポンティアックは“誇りが高く、執念深い、戦闘好きで、そして、直ぐに敵を攻撃する性格だ”と、書いていた。

そうしたものが、1763年にデトロイト川を渡ったところにある、防御柵で囲まれた砦を、どうやって、そして、どんな目的で持って、白人達の強力な力に対して攻撃をしていけばよいのか沈黙思考しながら、眺めていた首長の姿がった。彼は、間違いなく、Ottawa 族の者であり、そして、Potawamie 族は、簡単に同盟を受け入れていたが、しかし、Huron 族は二つのキャンプに違いがあり、分れていた。彼らの弱まった勢力は、違いを作るのに十

分ではなかったが、しかしながら、ポンティアックは、自分が招集できる 460 名の戦士たちは攻撃を仕掛けるのに十分な数だと決断した。彼は、4 月の 27 日の会議に密かに彼の軍を集合させた。

ポンティアックは、自分自らを Delaware Prophet の門下生と位置付け、彼自身の雄弁術のなかに福音の宣教師の伝言を携えて会議を開いた。彼は自分の目的のためにその伝言を持ち上げて変えるようなことをしなかった。Prophet が全ての白人達を放逐するように求めた時には、ポンティアックは懸命にもイギリス人にだけ、彼らに向かって話す彼の言葉を捻じった。フランス人達は、逃れるべきだった。

彼に計画での第一歩に、日曜日の午後、五月祭りであるが、砦の門の前に、40 人、ないし、50 人の男達とともに、現れた。イギリス軍の指揮官である Gladwin 将軍は、彼を中に招かざるを得なかった。そして、インディアン達が騒がしく、儀礼的に踊りをして彼らの迎え入れた者達の気を紛らわしている間に、10 人のスパイたちが、砦の内部を偵察するためにどこかに姿をくらました。彼らが戻ってくると、ポンティアックは、Gladwin に対し、彼は、2・3 日の内に、正式に訪問をしに戻って来ると話した。

川を横切って、再び彼ら自身の村に無事に戻ってきて、スパイたちが彼らの観察して来たものを報告し、その内容全体が直ちに Potawatomie 族と Huron 族に伝わった。これらの二つの部族は、5 月の 5 日に、Potawatomie 族の村での Ottawa 族との会合に招待され、ポンティアックは、細心の注意を払い、全ての女達を派遣し、見張りの輪を配置した。それから、彼は戦士たちに対して話をした。

“私たちが、自分達の土地であるこの国から消えてしまう、それは、我々に破壊のみを求めているものであるが、これは、我々、私の兄弟たちにとってまことに重要な問題である。あなた方は、私と同じように、我々がもはや、我々が私たちの兄弟であるフランスからしてきたような、我々に必要なものを手にすることができないという事を知っている。イギリスは、フランスがしていたようにうまく、二倍でものを我々に売っており、彼らの商品は長持ちしない。われわれは、我々が別のものを手に入れなければならないと思い立つ前に、自分達が纏うような毛布や、いろんなものもほとんど持っていないような状態だし；我々が冬のキャンプのために準備をしようと思っても、彼らは、我々の兄弟であるフランス人達がしていたような、どんな信用販売もしようとしない。

“私が、イギリスの指揮官に会いに、そして、彼に、私たちの仲間は既に死んだと言いに行ったときに、フランスの兄弟たちがしてきたように、彼らの死を嘆き悲しむ代わりに、彼は私を、そして、あなた方を見て笑っていた。仮に私が我々の病気にために何かをしてくれるようお願いしても、彼は、我々のためにできることは何もないと言って拒んでしまう。こうしたこと全てのことから、あなた方は、彼らが、我々の滅びて行くのを望んでいるという事がよくわかるだろう。だから、兄弟たちよ、私たちは彼らの崩壊を強く誓わなくてはならないし、もはや、待つてはいられないのだ。我々を邪魔するものは何もない；彼らは数の上でも少ないし、そして、我々は、これを達成する事ができるのだ。”

“我々の兄弟であるものはだれでも、彼らを攻撃する—なぜ、我々も攻撃しないのだ？我々も、彼らと同じ様な人間ではないのか？私は我々の偉大なる父、フランス人から受け取ったワムパムのベルトをあなた方に示さなかつたらうか？彼は私たちに彼らを攻撃せよ話しているのだ。なぜ、私たちは彼の言う事を聞かなかつたのか？私たちは何を恐れていたのだろうか？その時が今なのだ。今、ここに我々のなかにいる、我々の兄弟、フランス人が、我々をとめるのではないかと、怖れるだろうか？彼らは、我々の計画を知っていないし、もし、彼らがそうしようとしても彼らはどこにも隠れることはできなかった。あなた方全てが、私とおなじように、我々の父、**Bellestre** を追い出すために、イギリス人がわれわれのところにやって来て、彼らがフランスの鉄砲を取り上げ、持って行ってしまい、彼らは今や自分達自身を防御するための武力を何も持っていないことを知っている。だから、我々にとって、攻撃するのは今なのだ。もし、自分達の傍らのそれがある、フランス人がここにいたなら、イギリス人と同じように彼らを攻撃させるだろう。**Master of Life**、生活の長者が我々の兄弟、デラウェアにそうするように話したことを思い出してほしい。それは、他の者と同じように我々すべてに関わっているのだ。”

“私は、ワムパムのベルトと伝言を、我々の兄弟である **Saginaw** の **Chippewa** 族、そして、**Michilimackinac** の **Ottawa** 族、さらに、**Thames River** の人達に、我々に加わるように送った。彼らは、ここに来るのにそんなにゆっくりはしていないだろう、しかし、とにかく、我々は攻撃する準備を整えて待てよう。もはや、無駄にする時間は無いのだ。イギリス人が、負けた時には、われわれはそこに残されたすべきことを、そして、此方側に来るやり方を抑制してしまえば、彼らは二度と我々のところにはやって来なくなると分るだろう。”

この演説の後、幕引きの攻撃が計画された。ポンティアックは会議のために砦に行くのに、全ての者達が彼らの纏いの下に戦闘用の斧、ナイフ、そして、マスケット銃をもった彼の部下の 60 人を連れて行く予定だった。同じように武装した、**Ottawa** 族の残った者達が、砦に向かって戦士たちに続いて行き、配置について合図を待っている予定だった。一方、**Huron** 族と **Potawatomie** 族は、どんな補強の手段もこれを妨害してしまうために、砦の外で働いている白人は誰でも捕まえるという役割を担った。

ポンティアックの過ちは、攻撃が計画された時に、二日間、その策略の秘密を守ることが出来ると考えたことだった。それが実行される前の夜までに、**Gladwin** 少佐は、多分ただ一つの情報源からだけでなく、各方面からこの計画の全てを聞いていた。彼は、どうすべきか、とくと考え、そして、最も良い方法は、**Ottawa** 族を入れ、しかし、はっきりと見える様な動きを示さずに、武力の力を示して、彼らにひるまず対面する事だと決断した。それは、彼が、ポンティアックは、駐屯している部隊が、明らかに策略を築いて、準備を整え、待機していると理解し、すぐに退却する一面目丸つぶれの状態で、と **Gladwin** は、期待していたのだが、これはこうした理由からだった。

Peckkam は、**Gladwin** の事を、大英帝国の軍人の中で、説得力のある新しい種類の人間、

“頑固な帝国の建設者”の例として挙げている。維持する立場を与えられて、決して、そうした立場に注文するような彼の国の権利や、いかなる代償を払ってもその立場を堅持するように指示した彼の指揮官の知恵に対しても、……疑うことなしに、Gladwin はそれを最後の男が殺されるまで守り通したのだろう。ポンティアックは、頑強な壁に突き当たったのだった。

Amherst は、後にそれについて疑問を示しているが、頑固な Gladwin は明らかに正しい道を選択したのだった。ポンティアックと彼の 300 人の戦闘士たちは、武装し、戦う用意のできた駐屯部隊を見て、そして、彼らを慰める 6 枚の衣装スーツと、幾らかのパン、そして、煙草のプレゼントをもらい、しぶしぶと激怒して退却しなければならなかった。

彼は、適当に平和的な恰好をして、と考えた後、二日後に、再び挑戦したが、しかし、Gladwin は、準備ができていて、今度は、Ottawa 族が少人数だけで、砦の中に入ることを認めた。再び、計画を邪魔されて、ポンティアックは、自分が指導力を回復する為に直ぐに何かをしなければならぬと気づいた。彼は、手斧を掲げ、砦の外にいる全ての白人を襲撃し、駐屯部隊を孤立させるよう熱心に説いた。

彼の怒った戦闘士たちは、ただあまりにも従うには性急すぎた。彼らは最初に、砦から大体 1 マイルくらい離れた農場で一人の女と彼女の二人の息子を殺した。べつの集団が Isle au Cochon (現在の Belle Isle) に向かって行き、そこで牛の牧場を包囲し、そこで、そこに訪問していた二人の兵士に加え、退役した軍曹、彼の妻、そして、彼らの子供たちの内の一人を処分した。彼らは捕虜として、他の兵士、奉公人の女、そして、3 人の軍曹の他の子供たちを捕えた。

ポンティアックは、賢明にも仲介者、積極的に組しようとはしない同盟者としてのフランス人の居住者、彼らは、実に砦の中の者達よりも、ずっと助けにならない連中であつたが、その砦を攻撃する準備をした。一方、Ottawa 族と Huron 族の戦闘集団は Fort Sandusky に驚くほどの攻撃をしかけ、ここを 5 月の 16 日に、15 人の駐屯兵のうちの一人を残しただけで、砦の中で店を経営していた承認を殺害し、陥落させた。

インディアン達はこれと、そして、一連の小さな勝利に大変勇気づけられた。ポンティアックは、6 月 2 日に、200 名の戦闘集団に川を下って行かせ、さらなる悪さを決心していた。Gladwin 少佐が、彼に大英帝国とフランスが、7 年戦争を終結するという平和の協定を、2 月 20 日に、ロンドンで結んだという情報を、特使からその手紙を受け取ったのは、皮肉にも、この日をあつた。その戦争は、Gladwin にとってはずっと遠くのものだった。多分、ポンティアックが、Gladwin の知っていることを知らずに、それゆえ、彼は一人だけで戦い、そして、北アメリカでのどこであつてもフランスからの現実的な助けは頼むことが出来ないという事を知らなかったのは、これまた、同じように皮肉なことであつた。

当時、ポンティアックはどんな助けも必要ではなかった；戦争は、十分満足するように広がっていった。Sandusky の後、St. Joseph (現在の Niles, Michigan) のイギリスの前

哨基地が Potawatomie の部族に降参した。それから、Fort Miamis（現在の砦の名前は、Fort Wayne, Indiana）が、正しく彼の名前となったそのインディアンにより占領された。次は、Fort Ouiatenon の番であるが、ここは Indiana の Layatte にあったが、ここには、ポンティアックの旅団がその地域の部族—Wea 族, Kickapoo 族、そして、Mascouten 族を戦闘のなかに引き連れて行ってところであるが、ここが陥落した。

こうした砦は、どこも大した問題とはならなかった。彼らは無作法もので、そして、ほとんどのものに対して、準備ができて居なかった；とても簡単な裏切りで十分に彼らの陥落を誘い出すことが出来た。しかしながら、つぎに出てくる、Fort Michilimackinac は、最も大きく、そして、この陥落は血なまぐさい戦いなしには達成できなかった。

George Etherington 中尉と彼の部下の 35 人の駐屯兵は、彼らの近隣の部族たち、Chippewa 族、そして、彼のところに訪問してきた沢山の Sauk 族の者達との間でなされた明らかな何の下心もないラクロスのゲームを見るために砦の外におびき出された。この楽しみの経過が、温かい 6 月の太陽の下で繰り広げられているあいだ、インディアンの妻たちは、辺りをぶらついており、そして、何時ものように検査を受けて砦の中に入って行った。その後、合図があると、ボールが表面上はたまたま防護柵を越えたように飛んで行ったのだが、ゲームをしている選手がそれを追いかけるようにして、開いた扉の中に、走って行った。中に入ると彼らは持っている杖を投げ出し、インディアンの妻たちが彼らために隠し持っていた銃を取り出した。

Etherington 中尉と彼の副官は、直ぐに逮捕された。ほかの副官は痛めつけられ、首をはねられた。20 人の兵士達が死に、フランス人の取引業者だけが逃げ延びた。その日の大虐殺の注目すべき説明の一つが、若いイギリスの取引業者である Alexander Henry、彼はこのことを彼の Travel and Adventures の中でその恐怖を生生と記述しているが、その本の中に書かれていた。

“私に砦の領域の光景を見せてくれた開き孔を通して、私は、この上ない馬鹿な、そして、恐ろしい状況を目にした。死んだ人は頭皮を阿がされ、ずたずたにされていた；死にそうな人は、切れの良くないナイフや手斧のせいで、のたうちまわり、そして、金切り声を上げていた；そして、切り裂かれた沢山の体から、彼らの殺人者たちは、縛った腕の窪みから救い上げた血を飲みながら、激怒と勝利の叫びを上げ、それをがぶがぶ飲んでいた。”

Michilimackinac の陥落は、それを聞いて残っている大英帝国を通して恐怖のおののきを送った。Fort Edward Augustus(現在の Green Bay, Wisconsin)で、副官の James Gorrell は、命令で、ある Ottawa 族が Etherington からの、彼に L'Arbre Croche (Cross Village, Michigan)にいくような指示をしている書簡をもって行った時に、そこを諦める決心をした。幸運なことに、周辺の部族である Sauk 族, Foxe 族, Menominee 族、そして、Winnebago 族はフランスを憎んでおり、そして、Gorrell が Ottawa 族に対して Etherington や他のイギリス人の捕虜たちを Montreal、ここは、彼らが偉大なる称賛を約束されていた場所であるが、ここに連れて行くように説得するのを手助けした。

Fort Edward Augustus の放棄で、ポンティアックの勝利はほぼ完了となった。包囲された Detroit 以外は、すでに五大湖の西部の領域にはイギリスの出先機関は無い状態になった。しかしながら、彼の血気に溢れた戦士たち、彼らは満足することからは程遠く、その彼らが、この領域からはずっと離れた所の反乱の知らせをもって来ていた。Huron 族は Delaware 族、彼らは少なくとも彼ら自身の Prophet の言葉を聞いており、そして、Minge 族を連れてきているポンティアックの軍隊と同盟を結んでいたのであるが、その Delaware 族に伝言をもっていった。これらの部族は、Monongahela 川領域を一掃し、そして、現在は West Newton, Pennsylvania となっている植民地を攻撃し、そして、二人の婦人一人の子供を含め、5 人の人達を殺害し、その後、彼らは Fort Pitt を攻撃していた。しかしながら、それは、ポンティアックに提供された Detroit よりももっと深刻な状況にあった。Simeon Ecuyer 中尉は、16 門のキャノン砲と頑丈にできた砦のうえに、250 人もの、彼の駐屯兵たちを抱えていた。

尻込みさせられながら、Delaware 族は、ピッツバーグの南東 45 マイルも遠い、そして、Fort Bedford には、さらには 40 マイルも東に行かなくてはならない、Fort Ligonier の遠いところに位置していた。しかしながら、こうした陣地はどちらもさしたる重大な危険性にはなかった；それらは、自分達を守る手立てが十分に準備されていたのだ。

しかし、いまや、6 月の初めに Shawnee 族が Delaware 族に加勢に加わり、大した説得は必要ではなかったが、Seneca 族も、ほとんど同時にポンティアックに誘いを受け入れていた。攻撃中の Detroit と Fort Pitt とともに、こうしたインディアン達は Pittsburgh の北にある砦にも彼らの勢力を向ける努力をしていた。Seneca 族は Fort Venango、ここは今日では、Franklin, Pennsylvania にあるが、ここを攻撃し、そして、誰ひとり生き残りを残さなかった。Sir William Johnson は、Mohawk の酋長から、彼の愛するイロクオイ族が、Venango の駐屯兵をことごとく無残に殺し、そして、命令に従った副官に、なぜ彼らが戦争に至ったのか、その理由一弾薬に関する不満、そして、イギリスが、彼ら自身の国をすべて取り上げようとしていたと言う、彼らの確信を書くように強要していたことを悲嘆していたことを知った。副官がこの記録を書き終わったあと、Seneca 族は、計画的に見せしめにして、彼を火炙りにして殺した。

その後、これらの西部のイロクオイ族は Fort Le Boeuf (Waterford, Pennsylvania の地にある) に向かって移動したが、しかし、ここでは 13 人の小さな駐屯兵たちがそそのかされた戦闘をし、そして、二人を除き、夜の暗闇に紛れて全てのものが逃げた。次の日に Seneca 族が Fort Presqu'Isle (Erie, Pennsylvania)、ここは彼らが、ポンティアックが彼らを援助するために送った 200 人もの Ottawa 族、Huron 族、そして、Chippewa 族の者に出遭ったところであるが、ここに向かって移動した。大勢になった軍隊が、二日間ほど持ちこたえ、その後、男達は Fort Pitt に引き上げるのを認められるという約束のもと、降伏するように提案された 29 人の前哨基地を取り囲んだ。もし、白人達の約束が何もしないことを意味しているのであれば、インディアン達は、これ以上のことは何もしなかった。合意がす

ぐになされると、四つの部族は、後の楽しみのための捕虜として、彼らの駐屯兵を単純に振り分けた。

この勝利のあと、**Detroit** のインディアン達は西部に向かい、一方、**Delaware** 族、**Mingoe** 族、そして、**Shawnee** 族は、もう一度、**Fort Pitt** に彼らの焦点を向けた。彼ら、**Ecuyer** 中尉に対し、彼と、**Niagara** の間の全ての砦が既に陥落し、そして、彼は、彼らとともに平和を築いた方がいいと告げた。幸運にもスイス人のずるい中尉は、彼は、彼女らに対し、自分は抵抗するつもりだ、がしかし、彼はインディアンの派遣隊をプレゼント：天然痘の病院の二枚の毛布と、一枚のハンカチ、を渡して送り返した。こうして、始まった伝染病が、三つの部族の間に、夏から秋にかけて、そして、次の年の春に入り、猛烈に広がって行き、戦争に大勢で参加して行く彼らの力を削いでしまった。**Ecuyer** 中尉は、実に心底、インディアンを殺すためならどんな手段でも、それは良いことだと信じていた。

Fort Pitt と **Detroit** とは、尚も反抗が続いていたが、ポンティアックと彼の同盟者達は、しばらくの間、西部を統轄していた。この輝かしい情報が、**New York** にいる **Sir Jeffrey Amhest**、ここで彼はいらいらしながら、戦場から離れて家に帰る、そして、愛しても居ないし、賞賛もしていない、この地を離れてもよいと言う **London** からの許可を待っていたのだが、その彼の元に届けられた。被害のニュースは全ての前哨基地から来ており、彼の意思に対して、**Amhest** は、少なくとも、彼は、所様なインディアンとの戦争に差向かわされたと信じ込まざるをえなかった。

Sir Jeffrey は、そのニュースに、彼の上級の軍の技術者を度々邪魔するようなことがあった彼の生来の偏見の信念で接した。通常、インディアンをさげすむような、最高クラスの将軍と同じように、優しくて、寛大な者は、彼らを理解しようとはしなかったし、彼らの苦情がどんなものでろうとこれを理解する知識を持ってもいなかったし、ただ、彼らを慈悲心もなく鎮圧しようとしているだけだった。この中で彼は、彼らがそれを **London** で聞いた時に、起きている状況を正しく説明した、彼の王位の威厳を持つ市長たちのような知識を持ってはおらず、そこで、彼は、彼らが既に思いついていた計画—これは、アパラチア山脈に沿って、アメリカのなかに、白人とインディアンとの間に西部の国境を設定しようというもの、この計画の実行を急いでしようとした。彼らは、この意図を 1763 年の **Proclamation** と呼び、10 月 7 日に公布した。がしかし、それは遅すぎた。戦争は既に始まっており、入植者達は、どんなそうした境界線を受け入れようなどと言う気持ちはなかった。

しかしながら、すでに終局的なイギリスの勝利の基盤は、ポンティアック自身により知らず知らずのうちに、水面下に横たわっていた。彼が、**Detroit** を包囲している間、そして、こうして毎日が過ぎていく間に、イギリスの強化の確実性が身近に迫って来ていた。もし、彼が砦を猛攻撃し、これを占領していたのなら、不可避の救助無は、そこから働く、抵抗の余地は何もなかっただろう；彼らは、**Niagara** から **Pittsburgh** に繋がっている街道の、西に向かって行く全ての道筋で戦わなければならなかった。多分、ポンティアックは彼の失敗について感じていたが、しかし、彼はもし彼が持っていたとしても、彼はそのことに



Robert Rogers 少佐

ついて何もすることが出来なかった。彼は、圧倒的な多数の力を持つ軍隊を招集したが、しかし、インディアン達は、もし、彼らの損失が大きいと言うその後に起こることを知っていたのなら、その驚くほどの攻撃でたくさんの人が失われるかもしれないという事実にも拘わらず、それに対しては、少なくとも反対すると言う者は誰もいないだろうが、砦を猛攻撃などしなかっただろう。それは、彼らに関わる個性の問題であった。白人達の多くのために小さな犠牲をすると言う考え方は、彼らには慣れないものであった。

Detroit を包囲しているインディアン達の中に脱落者達が出始めた。Potawatomie 族、Huron 族は、Gladwin に捕まっている Potawatomie の酋長との交換となるイギリス人の捕虜たちを諦めていた Gladwin 少佐、彼はそれを Amherst に要請していた約束を取り扱っていたが、しかし、Potawatomie 族が彼らの捕虜を連れて来たとき、彼らは全員ではないと非難し、さらにその上、Ottawa 族のスパイを彼らの中に居るのを見抜いた。彼は、彼らを混乱の中で、追い出した。後にインディアンの会議が開かれ、ここでは戦争のやり方が議論されたが、ポンティアックは、痩せ衰えたこれらの Potawatomie 族の殆どを、彼の強力な雄弁の一撃により取り戻すことが出来た。

一方、助けが Detroit にやって来ていた。Games Dalyell 中尉が 7 月 6 日に、そこでさらに 40 人を受け入れた Robert Rogers をふくめ、220 人の者達を引き連れて、Niagara に到着し、そして、Erie 湖を横切って小舟で出発をした。彼は、湖の湖岸と川に沿ったインディアンの斬新的な痩せ衰えた村を通り、無事に、そして、奇跡的に 7 月の 28 日に Detroit に到着した。彼は、ある種の早急な攻撃をしきりに促して、そして、保守的な Gladwin は、攻撃を少し延ばそうとしたのかもしれないが、彼は、Dalyell が Amherst の代理人で有ると認識し、とりわけ、中尉は出かけることを指揮しようとしていたので、慎重に彼に反対しないようにしていた。

8 月の 1 日の夜明けに Dayell は、247 人の士官と兵士を指揮し、静かに砦の外に出て、川沿いの道を上って行った。約一マイル半ほど行った、Parent's Creek に跨る木でできた狭い橋の近くで、ポンティアックは 400 人の Ottawa 族、並びに、Chippewa 族のものたちとともに、待っていた。彼のフランス人の同盟者達は、彼に暗くなる前に攻撃するように十分な警告を与え、彼の計画は、中尉の小さな軍隊を切断し、全滅させることだった。

彼は、イギリス軍が橋の上に来るまで待ち、それから、半減の月によりぼんやりとしたとばりのおりる所に野蛮的な軍事力で勇敢な攻撃をした。最初の峡谷で、ここでインディアンに立ち向かう、Rogers 少佐は、彼のレンジャー部隊を引き連れ、家のそばに連れて行き、そして、それを砦代わりにし、インディアン達が、その方角から孤立させようと近づいて来るのを防御し、Dayell は直ぐに命令をするようにしていた退却を援護した。若い隊長は、後戻りすると決めていた、ポンティアックが強く指摘していたかつての、彼の道を戦わなければならなかった。そして、彼はそれに果敢に挑んで行った—その代償は彼の命だった。別の士官が命令に従い、退却に成功した。そのうえ、Dalyell、軍曹と 18 人の兵士が殺害された；そのほか、37 名の者達が負傷した。

保守的な Gladwin は正しかったが、しかし、彼は、ポンティアックの部下たちが Dalyell の体を確保し、それを彼らの村に持ち帰り、そして、彼の心臓をとりだし、それで、彼らの捕虜たちの顔を拭い、そして、そして、彼の頭を柱にかざすために切り落としていたと言うニュースを聞いた時は、彼の思いの中に、何の嬉しさも見いだせなかった。

そのご、Parent's Creek が、Bloody Run として知られているのはちょっとした疑問がある。

物語は、世代から世代へと持ち出され、そして、疑いもなく真実であり、ポンティアックが有力なフランスの入植者達を彼の勝利を祝う祝宴に招待したと関係している。祝宴が開けたあと、彼が客の一人に向かい、こう言った：“あなたはどれほど肉が好きだったのか？それは、とても素敵な若い肉、そうだったのではなかったのか？こちらに来なさい。あなたが今何を食べたのか教えましょう。” こう言って、彼は自分の後ろに置かれて居た袋を広げ、そして、髪の毛をつかみ持ち上げたイギリス兵士の血の付いた頭を示し、そして、にやりと笑い、こう付け加えた。“若い肉がありますよ。” と。

しかしながら、Dalyell のぞっとするような敗北にもかかわらず、Detroit は、補強され、そして、以前の彼の立場よりもよい地位にいた Gladwin により、包囲が再び始まった。8月の5日に、帆船の *Huron* が到着し、そして、60人以上もの男達と沢山の、ぜひとも必要な準備を持ち込んで、砦の水門に無事、上陸した。ポンティアックもまた、さらに 200 人もの男達を受け入れたが、Potawatomie 族の者達は最終的に引き上げた。

一方、別の Amherst のレスキュー隊の集団、ここには、Henry Bouquet 少佐が同伴していたが、この者達は、情けない Dalyell よりもずっと良い成功の実績を持っていた。Bouquet の2つのスコットラッド兵の連隊、その一つが有名な Black Watch であり、Royal Americans の大隊により強化されており、レンジャー460人からなっていた一の派遣隊が、Ecuyer 少佐の防御を打ち破ることにしくじった Delaware 族と Shawnee 族が Bouquet の救助に対面するように向きを変えていた、Fort Pitt の救済のためにやって来ていた。

Sandusky からの Mingoe 族と Huron 族により、補強され、彼らは、8月の5日に、Bushy Run の近くにある Pittsburgh の東、26 マイルのところにいる Bouquet を攻撃した。彼らは、彼の軍隊を包囲したが、しかし、Scot 人は、強固で、頑固であった。一日中戦いが続けられ、インディアンたちは、彼らは間違いなく打ち負かすと信じて慎重に闘っていた。Bouquet の男達は、丘の天辺に、彼らの負傷した者と馬を真ん中にして、しっかりと輪になり、引き込められた。

そこで、彼らは、もし、Bouquet が、イギリスの指揮官たちは、まだ、誰も、彼らが持っている特別の才能を発揮していないと、示さなかったら—これは、ごまかしであるが、彼らは間違いなく、持ちこたえられなかっただろう。彼は、彼の仲間の 2 人を、攻撃により、やられたように見せかけながら、輪の中に引き込み、そして、インディアン達を柵の割れ目に騙して入れるようにさせ、彼らは、最期の大虐殺を、がむしゃらにするしかないと思わせた。その瞬間、引き込まれた同僚が、インディアン達の後ろに立ち上がり、インディアン達の側面を攻撃した。こうして、赤人たちは、無理矢理四散させられ、もう一度



Library of Congress

彼らのやり方で戦おうと、森の中に逃げ込んだが、しかし、ずる賢い Bouquet は、驚くような事を彼らに対して準備していた。束の間に彼らの後ろに回って動いていた二人の仲間がものすごく燃え盛る火を投げ込んだのだ。インディアン達は、大慌てで走りだし、完全に敗走した。

それは、代価の多い勝利だった。Bouquet は 50 人の兵士を失い、そのほかに 60 人もの人を負傷した。インディアンは決して彼らの損失を報告していなかったが、しかし、彼の打撃は厳しいものであったことには違いなく、二人の名だたる Delaware 族の酋長が殺害された者の中に含まれていたということが知られている。しかしながら、Fort Pitt は救われた。Bouquet は、8 月にそこに到着し、西 Pennsylvania への危険な旅は決着がついた。ポンティアックにとっては、終結が視野にあったが、しかし、血を流し、狂暴性を帯びたさらなる重大な代価がなかったという訳ではなかった。

ポンティアックの執念深い恨みが、西部全体の開拓者を含んだ、両方の側に致命的な憎しみに満ちた衝突を掻き立てた。敵側の軍隊の組織的な動きに加え、開拓者たちとインディアンとの間には、何時ものことながら戦闘が起きていた。交易商人の George Croghan はロンドンの通商の男爵に対して、インディアンは、“彼の大目標のプロジェクトで、少なくとも 2000 人以上もの人を殺害し足り、捕まえ、そして、数千人もの人をひどい貧困状態にし、猛烈に悲嘆の底に落とし込んだ。”と手紙を送っていた。

この種の開拓地での戦闘で、入植者達は、伝統的に途方もなく襲撃してくる野蛮人たちの無垢の被害者達として描き出されていた。しかし、それは、いつでもそうだったという訳ではない。入植者達は、彼らが、いわゆる“Paxton Boys”、復讐に燃えた 75 人のペンシルバニア人、と呼ばれているように、Lancaster の 20 人ほどのインディアンの部族を襲い、戦闘には何も拘わらなかったで、全く無防備状態で自分たちの小屋に寝ていた彼らの内の 8 人を殺し、そして、その頭皮を剥いでいった襲撃をしていた時の 12 月のある夜に証明しているように、彼ら自身の動機に、残虐行為そのものを実行する力があつた。憤慨させられた統治官の Penn が、こうした無法者の容疑者を逮捕するように指示をしたときに、彼らはたまたま戻ってきて、そして、インディアンの生き残った女達や子供達を殺していた。

歴史家の Peckham が指摘した様に、辺境地の開拓者たちは、入植者の中の最も悪い者達 — “生まれつきの不満を持った人、法からの離脱者、脱走兵、債務者、詐欺師、こうした全ての者達は海岸地域から大量に生み出され、そして、辺境地に追い込まれて来た者達だった。” 彼らは、インディアン達の土地に不法に入ってきて、彼らを交易で騙し、そして、彼らの憎しみを引き起こしていた。そして、今度は、その憎しみが、ただ単なる敗北ではなくて、それ以上に故意的な残虐行為の政策により白人達に仕返しされた、穏やかな無差別的残虐行為に導いていった。このことが、次の世紀での開拓地における戦闘のパターンとなるべきものであつた。

1763 年に起きたこうした戦闘の一つの直ぐに起きた結果が、残虐的な殺人によるものと同じように、戦争でのヨーロッパ人の膨大な違反行為によりぞっとさせられていた

Amherst を呆れかえさせたものであり、そして、これが、深刻な復讐の出来事にと転じて行った。彼は、Bouquet に対し、病毒で汚染された毛布で、インディアン達の中に天然痘を広めるようにと忠告さえしていた。“おまえが、この呪わしい人種を絶滅させるのにうまくいく様な、あらゆる他の手段を試すのと同じように、毛布を用いたやり方で、インディアン達に浸み込ませようとうまくやろうとするようになるだろう。私は、良い結果をもたらすに違いない犬によって彼らは消滅させると言う、あなたの企てに大変な喜びを感じずはすだが、・・・・・・”

後に、新しい探検隊を西部に向かい探検隊を送り、彼は、Seneca 族や、そのほかの湖に地域のインディアンたちは、ただ単なる敵としてではなく、かつてこの大地を汚染したものを持っていた最もいかにわしい人種として、しかも、彼らのそれからの脱却は、良い人道的な行為として、賞賛に値するようなこととみなされるべきである、そんなものたちとして取り扱われるべきであると指導していた。Amherst は、ポンティアックの首を取った者には、100 ポンドの賞金を出すとしていたし、彼は Dalyell の幸運を聞いた時に、その数を疑っていた。

一方、ポンティアックは、深刻な問題に遭遇し始めていた。彼の勇猛な部下たちは、砦に新規な供給物を運んできた、そして、損失物の埋め合わせをしていた帆船の *Huron* を攻撃した。Potawatomie 族の脱党で Chippewa 族、そして、Ottawa 族が、その原因と、ポンティアックの指導性にいくらかの信用をよせなくっていた。ある Ottawa 族の内紛が、否認しているポンティアックを否認することとそう遠くない所にすすみ、そして、平和を求めているようにみせた。

このきわどい状況の中で、Mississauga の Toronto, の年老いた有力な酋長の Wabbeicomigot が、10 月の 1 日に到着し、そして、ポンティアックの没落を急がせた。Wabbeicomigot は、ずっと戦闘状態で中にあり、彼は Gladwin と平和について交渉したかった。彼が、砦に行く機会を待っている間、100 人もの Miami 族のものが、事がどのように進むのかをみるためにきて、そして、どちらともつかず、躊躇しているのを見て、彼らの内の半分が、また、もとの村に帰って行った。残った半分の他の者達は、Huron 族に彼らの運命を預けて、何が起こるのかを見ようとそこに留まっていた。

Wabbeicomigot は、Gladwin と、三度ほど協議をした。彼は、Amherst が上官代理の大佐に任命していたし苦勞していた連隊長に良いニュースを与えた： Chippewa 族と Ottawa 族も、前からすでに平和についての話をしたいと思っていた。冬が近づいて来ていたのだ。そして、彼らは寒さに耐える胃袋は持っておらず、そして、雪が直ぐにそれをもたらすだろう。Chippewa 族は、実際、10 月の 14 日に平和について話をするために砦に来て、Wabbeicomigot が、その後、そこを去り、そして、三日後に Ottawa 族が派遣団を送っていた。

ポンティアック以外の他のどんな酋長も一般的な情緒により、それが標準的なインディアンのやり方だったので、励まして踏みとどまらせていたが、しかし、反抗に熱心な指導

者達は強情な男達だった。彼らは、あきらかに、イギリスとの協定は顧みず、フランスからの援助を相かわらず期待していた。そして、彼が話したフランス人のものは、彼にそう信じさせようと思わせないわけではなかった。彼らは、イギリス人にできるだけ続けて、供給することを望んだが、しかし、彼らがそうであるような現実論者達は、彼らはどちらの方に戦争が進んでいるのか、そして、砦に非人情的に必要とされた小麦粉を送ることをして、結果的な勝つ方を援助し始めていた。ポンティアックもまた食料に関しては現実論者だった。彼は、季節が、彼に追隨する者達が、食糧を確保されなければならない時か、直ぐにやって来ること;冬の来る前に狩りに出かける時間がほとんどないこと、を良く理解していた。

にもかかわらず、彼は、10月の20日の別の協議会で、あるもっと重大な挙動を取った、がしかし、この時には、彼の堂々とした雄弁でさえもなく、彼の縮小して行く力をともに保つことができた。9日後に、天候が彼に最初の打撃を見舞った;厳しい寒さで辺りが凍りつき、4インチもの雪が一面を覆った。

同じその日の晩に、Louisiana 領域の Fort de Chartres のフランス人指揮官である、Major de Villiers からの伝言の到着で、より悪い災いに見舞われた。彼は、9月の27日から、Wabash に沿った、ポンティアック、Gladwin、そして、五大湖地域のフランス人に対して、似た様な手紙を携えて、旅をしていた。これらの手紙の趣旨は同じようなものであった。ポンティアックに当てたもののなかで、彼はインディアン達の事を、“フランスの子供達”と呼び、彼らに忘れるように話した。“あなたたちが持ちたい喜びは、”と書き、“同じパイプで煙草をふかしているフランス人とイギリス人を見ながら、そして、同じスプーンで食事をしながら、そして、結局は、兄弟のように住みながら”と、続けた。機嫌を取るおなじような言語以上のものがある。最後に、De Villiers は、フランスは、彼らの子供達を見限ったりしないしMississippiの遠くからでも彼らにものを供給し続けるだろうと約束しながら、その一方、彼は、彼らに全てのいとまごいを宣言し、そして、彼らが平和に暮らすように指導していた。

その時点で、ポンティアックは彼の実際の立場を理解していなければならなかった。彼は、もし、フランスからの支援がやがて来ようとしないのであれば、勝利する見込みはないと知っていた。事実、De Villiers はイギリスの敵もまた、フランスの敵であるとみなすべきものと、だから、両方の国は今や、彼に敵対していることになるが、このように明白に言っていた。彼には、たった一つだけ、解決の道があった。彼は、攻撃をしかけ、そして、できるだけたくさんの気品を残して Detroit を去る必要があった。De Villiers の伝令は、フランス語に翻訳された彼からの伝言を持ち帰ることに同意し、そして、それを Gladwin に手渡した。ポンティアックは、Gladwin を“私の兄弟”と言うの呼び名で書いていた。

“私の父が、私に、平和を作るように送って来た言葉を私は受け入れた; 私のところのわかい者達は、彼らの手斧を地中に埋めた。私は、あなたが、これまでの過去にした悪いことを忘れるのではないかと思っている。と同時に、私達にしようとしたことを忘れるで

あろう。良いこと以外に何も考えないようにするためにだ。私と、Chippewa 族、そして、Huron 族、我々は、あなたがわれわれに頼んでくるときには、あなたと話をしようと言う準備はできて居る。どうか、返事を聞かせてほしい。私は、この解決策をあなたが分るように、あなたに送っているのだ。もし、あなたが、私のような人であるなら、私に返事をするでしょう。わたしは良い日であることを祈っています。ポンティアック”

Gladwin の返事は、彼が戦争を始めたのではなく、だから、彼は、それを終結させることはできないという事を明らかにしていた。ただ、Amherst だけが平和の合意をする権力を持っていた。彼は、ポンティアックの手紙を、彼は実際にそうしたが、それを將軍に送る約束をしたが、しかし、それとともに、彼自身の抜け目のないそのときの状況予測もつけていた。彼は、このように書いた：

“彼らは、彼らの傑出した 80 人から 90 人くらいの戦士を失った；しかし、あなたの閣下が、今もなお彼らの野蛮性をもっと懲らしめようと意図しているなら、銃や剣でするよりももっと効果的に彼らを破壊するようなラム酒の自由な販売を許すことにより、王様にどんな負担もかけずに簡単にそれを行うことができるでしょう。しかし、その一方で、もし、あなたが、春には出来事を和解させようと言うのであれば、・・・Sir William Johnson を行かせることが必要になるでしょう。”

“この状況下におかれて、彼の威厳の奉仕の良さで、春に物事が和解するはずですが；その時までには、野蛮人たちは納得できるように火薬を求めたがったりしないでしょうし、私には、我々の恰好の良い主体である、彼らに仕掛けたフランス人によりなされた多くの例をだしながら、彼らが再び決起するようないかなる危険性もあるとは思えない。彼らを捕まえる困難さを負荷を負いながら、戦争を貫徹することにより得られる優位性は何も得られないだろう；これに加えて、もし、継続するなら、我々の毛皮の取引が全く無に帰することが来るに違いない様なそうした戦争の出費が必要になるに違いないし、そして、我々の商取引の膨大な消費の損失となるだろう。それは、彼らが我々に対して僻み、そして、彼らを我々の永久的な敵にするような Mississippi における他の国を強化することにもなるような、彼らの後退を意味することになるだろう。従って、それらは、我々が、フランスが彼らの求めるものを全て供給する約束をしたように、その国を所有する事を極めて難しく（仮に不可能ではないにしても）させることになる。

ポンティアックにとっては、彼は、起こっていることが、実際に過去にあったかどうか信ずることができなかった。彼にとっては、インディアンが、彼らの昔からの土地を守るために闘う中で彼らを支援する彼らの古い友達、フランス人無しの自分達を突然見出すべきであるという事は、そう簡単には理解できなかった。しかも、ここには、相互に敵である、イギリスと同盟したフランスがあった。彼は、インディアンの苦境と言う理由だけではなく、彼自身が、今や勝利から見放された指揮者であり、そして、『彼人の村の住人達』が、彼に背いているという事からも、彼自身が無慈悲にも孤独であると感じないわけにはいかなかった。彼は、Delaware Prophet から彼の質問に対する答えをもらおうと求めて、



Sir Jeffrey Amherst

James Watson による銅版画

De Villier の伝令である Ensign Dequindre とともに、イリノイに戻ろうと心に決めた。彼は、11 月に、彼の信頼のおける追従者達とともに出発した。

彼は、直ぐにはイリノイに行かず、冬を二つの大きな部落を作っている裕福な Ottawa 族の家族の仲間、そして、Gladwin の復讐を恐れた極わずかの改宗したフランス人たちのいる Maumee River の近くですごした。彼は、なお、Delaware 族、Shawnee 族、Miami 族、そして、Wabash 族に説明することが出来ると、彼は考えていたし、そして、多分、イリノイの同盟を立ち上がらせることが出来た。彼の心の中で最も素晴らしい最期のその考えで、彼は 1764 年の 3 月にイリノイに向かって出発した。

旅の詳細については、全く明確にされていないが、ポンティアックは、4 月 12 日に Fort de Chartres に到着する前に、旅の途中で多くの部族に話をするために立ち止まっていたことが知られていた。彼は De Villiers が、砦を乗っ取りに来るまで、ただ、時間に注目しているだけだと分り、これはフランスに戻ることができた。ポンティアックは、フランスの指揮官が全く頼りにならない事がわかったが、しかし、彼は、彼の評判を非常に良く知っていたイリノイ族の酋長に歓迎された。彼は二日間の間、彼らとイギリス人が来たときにはいつでも敵となることを確認し、そして、次の二か月間彼は、新しく敵愾心をした沢山のイリノイ族の村を興奮させることに成功した。

ポンティアックがしていることのニュースが、とうとう自分の故郷に帰って行った Amherst に代わって来た新しいイギリスの統治官である Thomas Gage 将軍がいろいろな出来事を処理しているニューヨークに浸み戻って来た。Gage は、Braddock と戦わなければならなかったし、蚊ンディアンとの戦闘の事を知っていた;彼は、ポンティアックの依然として続く抵抗を深刻なものと捕らえていて、彼の事を次のように書いていた: “ポンティアックは、彼を単なるインディアンに対するもっとも洗練された悪賢い、反逆の性質をもった野蛮人としてだけではなく、特異的な能力を持った者として評価するだけの理由がある。” 彼は、さらに続けて、酋長は“二人の秘書官がいて、その一人は、彼のために記述をする人で有り、もう一人は彼の受け取った手紙を読む人;そして、彼は、彼らを他の人達から左右されることの内容、これを無視するようにさせて管理している”と言っていた。

しかしながら、ポンティアックは彼の持っている全ての能力で、彼は、戦争の火を燃やし続けることはできなかった。7 月の 1 日に、彼は、Maumee に戻り、そして、Sandusky の Huron 族が、平和をもとめ、Seneca 族は Sir William Johnson(彼は、後にそれを知ったのであるが)に降伏しており、残って敵愾心を持っていた Ottawa 族が揺れ動いていることを知った。五大湖の北の地域のインディアン達もまた、Detroit で、ポンティアック戦争で中断されていた毛皮の取引の回復するのを頻りに望んでいた。Shawnee 族や、Delaware 族からの極わずかの兆しはあったが、全てが現実的な目標としては、戦争は既に変わっていた。

1764 年の秋から、1765 年の冬にかけて、ポンティアックは、彼の話聞いてくれる人が居る限り、彼は、イギリスに対抗する彼の計画を話し続けた。時には、イリノイ族の同盟

は、抵抗する可能性があるかの如く見えたが、しかし、ポンティアックは最終的には、1765年の春に **Fort de Chartres** で開催された会合で、彼はもはや何もできないという事を、渋々認めた。彼は、イギリスが敵愾心の中心となっている様な部族を鎮圧すること、彼らは、改宗したフランス人により絶えず誘発されていた敵対的なイリノイ族の部族の者達によって主に構成されていたのだが。

ポンティアックが 8 月に **George Croghan** と一緒に指導した平和の合意は、ポンティアックの戦争の終結が白人達とインディアンとの間の壮大な抗争の終わりにはならないということを補償しているような基本的な不合意を露わにした。インディアン達は、道義にかなって、その土地はフランス人が来る前から彼らのものであったと主張した；フランス人は、インディアン達に、賃貸料のような形で考えられるものを、火薬とか、ラム酒、そして、その他のものを支払う、ただ単なる借地人に過ぎないのだ。イギリス人は、彼らは、“国の家族”の一員ではなかった。彼らに対して、インディアン達は、彼らの両方が狩りをする動物でさえも、何の権利も持たせてはいなかった。しかし、赤人がそこにいる限り、そして、問題が起こるたびに、彼らは、必要であれば、贈り物をして、あるいは、イギリス人が絡んでいる限り、全く意味のない証文や協定の形で、まやかしの約束をして、だましていたに違いなかった。そうしたものが、ポンティアックの戦争を終結させた協定の精神であった。

その自覚の中で、ポンティアックは、イギリス人に称賛され、そして、尊敬されたインディアンの指導者として出現してきて、そして、それ故に、彼に従う酋長達の間で神経を消耗させるねたみの対象でもあった。独立戦争の間、彼の継続したイギリスに対する忠誠者的な支援が、彼自身の部族の多くの者を支えて行くのに彼ら多大な費用の危機に見舞わせ、そして、1768 年までに彼を最終的には逃亡者にさせた。彼は、イリノイの地に別の旅行をしたが、しかし、彼は、いまや、極わずかの親戚のものや友達がいるだれの、もはやだれも彼のいう事を聞く者がいないただの一人ぼっちの狩人かの如くだった。そして、これが、かつてはオンタリオ湖からミシシッピーまで至る領域で 18 の部族の支配して来た男の姿だった。

1769 年の春に、彼は、もう一度ミシシッピーに向かって旅をしたが、しかし、平和的に、大きな取引の話をし、できるだけたくさんの取引をしながら、ただ、少しだけの酒を飲もうとしただけのものだった。ある意味では、彼の存在は、明らかに自分が開拓精神を失ってしまったことをわかっていないイリノイの人達に警告を与えていた。多分、彼らの敵愾心は、一年も前に彼の訪問の時に、無名の口論をするポンティアックが彼らとともに持ったもののその結果であった。

どんな時でも、**Peoria** 族の村は、ポンティアックを暗殺しようと決断し、そして、彼に関する議論を終えていた。集合した議会の中で、彼らは、その仕事を彼らの酋長の **Makstachinga**、あるいは、**Black Dog** と呼ばれる者の若い甥に託し、この勇敢なものがすぐにポンティアックの仲間達を探し回った。4 月の 20 日に、彼とポンティアックは、その

酋長が Baynton, Wharton, そして、Morgan の店で取引をしている間、Cahokia の小さな村に居た。彼らがその場所を離れ、そして、街の通りを歩いている時に、ポンティアックの暗殺者は、彼は、少しばかり後ろを歩いていたのだが、その彼が突然、ポンティアックの頭の後ろを打撃した。老いた酋長はよろめき、倒れ、Peoria 族が彼に宿命の命に係わるほどの傷を与え、逃げた。直ぐにポンティアックは亡くなった。

このひどくくだらないニュースが使者により Fort de Chartres にもたらされ、そして、川向こうのセントルイスに行ったときには、肝をつぶさせるよう仰天があった。誰も本当の状況を知っている者が無く、そして、ポンティアックの名前は、依然として偉大であり、かつ、怖れられ名前であった。誰もが、彼の死は血なまぐさい仕返しの前兆だろうと考えた。Peoria 族でさえも気遣っていた、一とくに、ポンティアックの二人の息子と、彼の Ottawa 族の忠誠心を持つ一掴みの人達が、静かにこのニュースを聞いた時には、その死体を求めようとせず、すぐに立ち去って行った。

しかしながら、何も起こらなかった。思うに、Ottawa 族の多くの者が、ポンティアックの死体を見てなんとも思わなかったし、どんなことがあっても彼の代わりに戦争などしなかった。Chippewa 族の大酋長である Minavavana だけが、悲しみと同様、怒りをもってこのニュースを受け取った。何時もポンティアックの友人であり、同僚であり、そして、イギリスを憎んでいた一人、彼が 2 人の戦士を伴って、1770 年に Cahokia に行き、交易商社の二人の奉仕人を殺害した—その暗殺とは何の関係も持っていなかったが。

こうして、ポンティアックは、彼の偉大なる反抗の場面から、ほとんど悲しまれることもなく、消え去って行った。彼の名声は 1851 年に出版され、今でもなお印刷されている古い昔の、History of the Conspiracy of Pontiac を記述した Francis Parkman により、しっかりと築かれていた。しかしながら、7 つの町からのけ者にされ、そして、彼の名前の付いた湖のように、彼の名前は、今日、自動車として最もアメリカ人に馴染の深いものとなっている。あのような、運送車として・・・・・・。

彼は、自分の後に、イギリス人の慈悲の心を持って、彼らを尊敬しているインディアン達、友人、そして、敵でもある様な人達を残し、Peckham は、“とりわけ、厄介な人として”、フランスと戦うために、彼らを裁判にかける必要はもはやないと、言っていた。

彼は、どのような独立性をインディアン達に思い描かせるか、そして、イギリスにそれを認めさせ、白人たちが関与させられた、従者と主人という彼らの横柄な認識を改める事以上のものを望んではいなかったの、ポンティアックが彼の動機として戦ったものを残忍な行為として思うのは容易ではあるが、多くの者にとっては、それが正当な動機であったと思いつくのは、もっと困難なことである。

インディアン達は、一つの白人との戦争の中で、失う者の側に居た。彼らは、そのほかの抗争の中で、そして、それが終わった時には、この経験を何度も味わっており、新しいアメリカ合衆国は、イギリスの政策の失敗から何も学んでいなかったという事を示すべきであった。

植民地を前進するために、イギリスは、カナダ、Niagara、あるいは、Detroit を経由して、北の地域から、あるいは、Georgia を通って南の方から、やってくるにしても、大地に作り上げたいかなる行軍の時でも、彼らはインディアンの領地を通って行かなくてはならなかった。従って、インディアン達が戦争に引き込まれる、その時は大体がイギリス側にあったのだが、そうされざるを得なかった。

ここに、相変わらず、イギリスのインディアンに対する政策が、それが何時もそうであるように、愚かでさえあるのだが、先見の明の無いものであった。彼らは、何の戦略もなしにインディアンの問題に取り掛かって行った。もし、彼らが、彼らに対し、心の開けた明白な者を雇っていたのなら、それは、アメリカ軍にとって悲しい時になっていた事だろう。しかしながら、イギリスの将軍たちの中には、もし彼らが、Boston から Charleston への大西洋の海岸線に対する彼らの海上攻撃を、大陸の内部の開拓者たちに協調して襲撃していることと結びつけたなら、それがどんなにか打ちのめすものになるのかという事を目に見えるように、十分に想像する者は誰もいなかった。インディアン達は、イギリスが彼らを組織化するための見通しを持たせるようにさせる、そして、知的な士官たちの指揮の中に置かれ、そして、彼らに、適当な武器と補給をあたえる、そんな戦略のなかの決定的な要素を持っていたに違いない。

イギリス、戦闘の良い状況野を通して、完全な荒廃に陥ってしまうような敗北の端で揺れ動いている Washington の不確かな軍隊の危うい運命に変えてしまったのかも知れないという事は、どんなにか容易なことであつたろうか！ もし、彼らが、Allegheny、そして、Moninghela River に沿った Mohawk や Susquehanna の開拓者たちのいた、Boston, New York、そして、Charleston、さらには、Kentucky にまでも及ぶ西の地域、そして、Carolina の背後や Georgia までもおよぶ南の地域にまでもおよぶような攻撃を実行していたのなら、一もし、この戦略が実行されていたのなら、アメリカインディアンの歴史も含め、我々の国の歴史はもっとずっと違ったものになっていただろう。

勿論、インディアン達が、そうした計画に完璧に協調したというのが前提である。それは、イギリスが、かつて北アメリカで成し遂げるために彼らのすることのできたものを見たものよりももっとすばらしい外交手段だったのだろう。そうであつたように、極わずかの部族であるが、彼らは、植民地に対して親密な関係にあつた；他のものたちは、ごく自然であつたか、あるいは、そうしようとしていたのかも知れない。イギリスと同盟関係にあつた残りの者達は、一そして、これは、圧倒的なパーセンテージであつたが、一彼らは、開拓地にいるアメリカ人にとっては、恐怖以外のものではなかったが、予想されたように、彼らは助けると言うよりも、破壊ばかりをしていた。

当初は、議会で、インディアン達をことごとく“利用”するかどうかという、全くばかげた議論をしていた。独立の公文書が我々に対して述べているように、それは植民地にいた一人の酋長が、George III に対して、彼は、自分が、“.....われわれは開拓地の住民、どんな年の人であろうと、性別や、状況になどには関係なく、見境もなく破壊をすることが、

自分たちの知っている戦争のやり方であるという慈悲も何もないインディアンの未開人たち、彼らに紹介をしてきた。”と不平を漏らしていた。

この出来事の父親を我々が見つけたことに賛同してくれた著名なイギリスの報道官がいた。Suffolk の伯爵が 1777 年の 11 月に、インディアンを含め、インディアン達の同盟の全体的な考え方の中の激しい怒りのこもった非難のなかに、伯爵を加えて、同じように有名な返答を、William Pitt がしているが、独立を打ちのめすために、あらゆる意味をする、“神と自然が我々の手のなかにある”と、国王の代理人を駆り立てながら、Parliament で有名な演説をした。

6

イギリスとインディアンとの戦争

もし、かりに 7 年戦争をアメリカ人の見方から見るのが適切であるなら、フランスとインディアンの戦争と言うのは、独立戦争の中でのインディアンの立場を、この章の表題のように呼ぶことが的確だろう。

それが、彼らにとっては、フランスの同盟者であったという事と同様、インディアン達にとっては、イギリスの側にいたと言うのもごく自然の事であった。事実、ポンティアックの陰謀の結果は、彼らの父親として立場がフランスの王からイギリスの王に代わるという事、あるいは、むしろ、その交代が確実に実施に行われたという彼らの側からの認識であった。いかなる不公正さがあっても、彼らは交易のためにイギリスを望んでいたし彼らが必要な時には、その援助を求めている。彼らにとっては、植民地での湧き上がる独立の気運は、彼らが認めた、そして、頼っていた、ただ単なる権威対する攻撃を意味していた；彼らに関わりのあったものという限り、合衆国の当初の市民というのは、彼らが何年もの間、苦々しく議論を戦わしてきた、イギリス人入植者達だけだった。

インディアン達と入植者達は、独立戦争が勃発した時から互いに対抗し、これが Vermont の北部で緊張が広がって行き、New York の州境を超えて、Pennsylvania の西部を横切り、Ohio や Detroit に行き、そして、Ohio River、ここから Kentucky の方に入るように南の地方に広がって行き、そして、再び南に向かい、Virginia を超えて、Appalachians にゆき、Carolinas から、Georgia へと言う具合であった。

まさしく、それは、残酷むき出しの開拓者たちだった。インディアン達の間では、彼らは、開拓者たちが彼らの土地を平気で踏みにじっていると見て、考えられないほどの不満を抱いていたので、これが続く限りは、どんな場所でも入植者達に安全はなかった。

植民地を進軍するのに、イギリス人は、彼らが作ったのであろう陸地をどんな形で進むにしても、彼らが、カナダ、ナイアガラ、あるいは、デトロイトと言った北からの経路、あるいは、ジョージアを通過する南から、北上するにしても、インディアンの領地を通らねばならなかった。従って、インディアンが戦争に巻き込まれないという訳にはいかず、彼らの殆どは、イギリス側についていたのだが。

ここで、もう一度、イギリスのインディアン達に対する政策が、まさにばかっているのであるが、いつもそうであったように、目先の効かないものであった。彼らは、何の戦略なしにインディアンの問題を取り扱っていた。もし、彼らが、彼らに心を開いた明白な男

を雇っていたのなら、事は、アメリカの軍隊にとって嘆かわしい時代になっていただろう。しかしながら、イギリスの将軍の誰一人、もし、彼らが、**Boston** から **Charleston** に至るまでの大西洋岸にそって彼らの海上からの攻撃を大陸の内地の開拓地での協調した殺戮と結びつけていたのなら、それが、どれだけの破壊力を現実的なものにするのか、こうしたこと十分に頭に浮かべることのできる者はいなかった。イギリスが彼らを組織する見通しをもつようにさせるにしても、知見に優れた士官に指揮させるにしても、そして、彼らに適当な武器や補給を提供するにしても、インディアン達は、そうした戦略のなかに、決定的な要素を持っていたに違いない。イギリスが、戦争の好転している中で、負けかもしれない端で揺れ動いていた、**Washington** の不確かな軍の事情次第の運命を、完璧なまでの敗北に変えてしまうのも、どれだけ簡単なことだっただろう。もし、彼らが、**Boston**, **New York**, そして、**Charleston** を、そして、これと同時に、**Allegheny** と **Monongahela** 川に沿った、**Mohawk** と **Susquehanna** の開拓地にある、**Lake Champlain** を押しつぶすような力で、**Kentucky** の遠く西の地域、そして、**Carolina** や **Georgia** の未開拓地のような遠く南の地域を攻撃する計画を実行して居たのなら、— もしこの戦略が取られていたのなら、アメリカインディアンの歴史も含め、われわれの国の歴史は、全く違ったものになっていたかもしれない

勿論、これは、インディアンが、そうした計画に完全に協力したであろうという前提なのであるが。それは、イギリスが、それを完遂するために北アメリカでこれまで発揮した能力以上の素晴らしい外交的手腕となったであろう。それまでもそうであったように、極わずかの部族は、入植者達に対して友好的であったが、他の者達は、元のままだったし、あるいは、そうしようとしていた。イギリスと同盟を結んだそのほかの者達—それは、圧倒的な比率であったが、—彼らは、開拓地にいるアメリカ人達には、恐怖であったが、しかしながら、軍事的な同盟のように、彼らは、想像されたように、支援するというよりも、ずっと破壊的であった。

最初に、インディアンをことごとく“利用”するかどうかという事について、いくらか馬鹿げた議論が議会でなされていた。彼は、“.....我々の開拓地に居住者を熱心に入れようとしている、慈悲心の無いインディアンの未開拓人、彼らの持っている戦争のやり方は、歳が何歳で有ろうが、性別とか、状況には関係なく、見境もなく破壊することだ。”と、言っているのは、独立宣言が我々に告げているように、**George III** に対する入植者達の主だった不平の一つだった。

この出来事の創始者たちを我々が見つけ出したことに賛同したイギリスの著名な報道官達がいた。**Suffolk** 男爵が 77 年の 11 月に、国王の代理人が、全ての事を意味する、“神と自然は、我々の手の内にある。”インディアン達を利用することも含め、独立を潰そうと、この言葉を使ったことを激励して、演説を行い、**William Pitt** は、インディアンとの同盟に関する全体的な考え方の激しい怒りのこもった非難のなかで **Burke** の男爵に加わり、同様に有名な返事をした。

“この壁を飾る様なタペストリーから”と、Chatham の威厳のある声が議会に鳴り響いた。“我々の名誉ある貴族が、彼の国の面汚しに憤慨して顔をしかめている。無駄なことに、彼は、あなたの勝ち誇る艦隊をスペインの自慢たっぷりの艦隊に対抗させようとし、無駄なことに、彼は、この国の名誉と、自由と、信仰と、プロテスタントを、カトリックの教義と尋問の気まぐれな無情に対抗して、これを守り、確立しようとしたのだ。もし、こうしたカトリックの教義と厳しい尋問の実行以上のものが我々の間に自由となるなら；我々の植民地に向けて、我々の祖先の縁故の者、我々の友人、ならびに、親戚の者、無情な人食い人種、男やおんな、子供達でさえも！ その血に飢えたもの、神を信じていない野蛮人の前にさしだす、だれに対してか？—あなたのプロテスタントの兄弟に対してだ；彼らの国を荒れた地にするために、；彼らの住居を荒廃させるために、そして、彼らの人種と名前を、未開人の戦争というこうした恐ろしい地獄の犬でもって絶滅させようとしたのであれば。”

しかし、そうした、大西洋の両側から聞こえてくる非常に切実な叫び状況ののちにも、それぞれの戦闘員は彼に“不信な野蛮人”の助けを一生懸命兵役に取り込む以上の事を示していた。アメリカ人は、Massachusetts の地方議会が Stockbridge のインディアン達に宛て、彼らが新しくできた“合憲的な軍隊”に加わることは歓迎し、植民地の軍務に登録する者には誰にも“毛布と赤いリボン”を支給する約束をするという、提案をした Lexington と Concord の前の僅か 2〜3 週間前に、最初の一步を踏み出した。後に同様の登録した人達は、Nova Scotia のような遠くの所からのインディアンの兵士をも、熱心に雇おうとしていた。

戦争は、信心深い、Dartmouth 男爵が、“恐ろしい地獄の響き”を使う事に対し、公的な支持を与えた 1775 年の 7 月には、もはや避けることはできない状態にあった；“合衆国の植民地の兵役にインディアンに従事させることが、手っ取り早いことだ”と言う、一年の遅れを解決することに、諸州代表者会議はあまり違っていないかった。その誘因のように、インディアン達が捕獲した全ての捕虜たちに対して報奨金が支給された。

Washington 将軍、彼は、戦争において、インディアン達がなぜ素晴らしい働きをしているのか、その理由を把握していた、その彼でさえ、1778 年に、彼の Valley Forge の本社から、インディアン局の局長あてに、“もし、彼らが適当な条件で受け入れられることができるなら、400 人のインディアンの兵隊”を利用して自分の兵力を増強することに同意するという議会の解決策を同封して、手紙を書いた。それに加えて、彼は、“お互いに対して、彼らの戦争の中での繰り広げられた野蛮的な者達の習慣のそれらをはぎ取りながら、わたしは、彼らが、我々自身の軍隊と一緒にになって、斥候として、あるいは、輝かしい部隊として、素晴らしい働きをするようになるかもしれないと思っている。”と書いた。Washington は、彼らの“野蛮的な習慣”をどのようにして取り除くかという事には言及しなかったが、彼は、それが出来ないという事を知っていなければならなかった。

当初、インディアン達との間に抱えている Washington の問題は、明らかに、イギリス

が、フランスとインディアンの戦闘の始まりでイギリスが直面して居た状態に似た様なものであった。今や、カナダから、そして、再び臨戦状態にある Six Nations(6つの部族の同盟国)から、恐怖に陥れられているインディアン達には、言質に縛られない、危険な状態にあった。

1775年の6月25日に、Washingtonは、顔立ちの良い、43歳の年老いた貴族の Philip Schuyler 少将を派遣し、彼に、Guy Johnson 大佐という、“インディアン局の動きを監視し”、“できるだけのことをして、彼が、我々がインディアン達に対して持っている偏見に彼の影響の効果が及ばないようにするような指導をしている” New York 部局の命令を彼に与えた。

それは、そう簡単な任務ではなかった。その時まで、Sir William Johnson は、イギリスの権益の中に残すために Fort Johnson でインディアンの会議を熱心に訴えた後の前の年の夏のある暑い日に熱病の病で、彼は既に亡くなっていた。Guy Johnson 少佐は、彼の義理の息子で、インディアン局の総統率官の後継者であった。彼は、Sir William ほどの偉大で、寛大な気性でもなかったし、また、インディアン達に対する特別の把握力も持っていなかったが、しかし、彼は、それにも拘わらず、白人の誰よりも、Six Nations に親しくしており、そして、おそらく、イロクォイのカナダ人との同盟国、これは、獐猛で頑固な Abenakis 族や Caughnawagas といった、その部族は極めて知的な部族であったが、こうした部族を含めた、Seven Nations とも、同盟していた。

Schuyler は、Johnson が 1775 年の夏に何かを準備しているということに気付くのに何の問題もなかった。彼は、イギリスと戦うためにインディアン達を集めるのに忙しく、これを集中して有効な同盟達との関係を幾つか持っていた。その一つは、Louis St. Luc de la Corne であり、彼は、フランスが威力を持っていた時のカナダ人インディアンの管理者だった；別のものは、Corne の義理の息子の、Campbell 少佐で、彼は、当時は、その役所を仕切っていた；さらには、Johnson の補助者で、図太くて、全く情けを持たない兵士の、John Butler であった。4人目は、Sir William の特別な友人で際立った Mohawk 族の酋長の Joseph Bant、あるいは、Thayendanegea だった。

こうした代行者達は、インディアン達を雇うために様々な手立てを使っていた。La Corne は、火薬とブランデーを使用していた。(彼は、また、それぞれ、1.6 ドルで極わずかの若い Caughnawagas 族の若者を雇う事が出来たが、しかし、部族の年老いた男達が金を受け取り、そして、それを、戻していた。) 彼の陛下の政府が、誘引するもの全ての荷物を送った：銅製のやかん、金の淵飾りのついた帽子、しわくちやのスカート、パイプ、厚地の外套、樽と火薬や銃の入った荷物、青、バラ色、黄色、そして、朱色と言った化粧品と一緒に、“・・・青い荷物の形をした、数百もの鳥撃ちの弾、ナツメヤシの貯蔵品、手のくわえられた銅製、銀製と思われる飾り、・・・鋭い、ぴかぴかしたインディアンの手斧、” などなど。

こうした誘惑品でも、インディアン達が、この誘いにのったかどうかははっきりしてい



Joseph Brant 6 連邦の大酋長

ない。諸州代表者会議が、最後に中立を確かなものにしようこの決定を把握した。彼らは、Six Nations に、ついに国王の弾圧について語り、そして、：“これは、我々と古いイギリスとの間の家庭内闘争である。あなた方インディアンには、何の関係もない。われわれは、あなた方が、国王の軍隊に対して、手斧を振り上げることを望んではない。あなた方は、家の中に留まって、どちらにも味方しないのを望んでおり、手斧は深く埋設して置いてもらいたい。”と打ち明けている演説の草案を送った。

この演説が、一週間以上行われていた、700 名ものインディアンが参加していた Albany での正式な会議に送られた。インディアン達は、その長い演説を理解し、そして、アメリカ人達を安心させた Mohawk の酋長の Little Abraham により与えられた：“我々は、この事情を完全に認識していた……だから、これは Six Nations の決意である：どんな役割取らず、それは、家庭内の問題のように、じっとして、あなた方が戦うのをみていよう。”という、彼らの返答を起草するのに 3 日間を費やした。

Schuyler とそのほかの委員たちは、もし、会議の焚火の周りにいるインディアン達が、真に Six Nations の力を代表しているのなら、彼らは、この表明からもっと心情を汲み取ることが出来た。しかし、彼らは、ほとんどが Oneidas 族の者達、そして、Mohawks 族のごく一部の者達であった。Onondagas 族、Cayugas 族、そして、Senecas 族の酋長達に従うその他の Mohawks 族の者達は Brant や Johnson とモンリオールで構想を練っていた。しかしながら、一つの元気づける兆候があった。10 月に Seven Nations ー彼らは、これに何をする力も持っていなかったが、ーその代表として Caughnawagas が、彼らは、それまでのように、入植者たちを、“いささかも苦しめる”ようなことはしないと約束した。

Albany で交渉が行われている間、ベルモントからの手におえない Ethan Allen 将軍が“お金、毛布、戦闘用の斧、塗料、そして、軍の中にあるものを何でも、丁度、兄弟に対するように”、彼らに差し出してカナダ人のインディアン達との間の同盟を確たるものにしようとしていた。しかしながら、どこのインディアン達も、入植者達の約束を疑がっていた；彼らは、そんなことは以前にも全て聞いていた。70 名～80 名の者が、ケベックへの Benedict Arnolds の不運な行進に参加していたが、しかし、しばらくの間、交渉も、また、説得も伝令とか、斥候、あるいは、ガイドすらほとんど出すような事を確信する事が出来なかった。

イギリスについて言えば、彼らは、指揮官たちがインディアン達を取り扱う手立てに全く嘆かわしい程度の欠如で事に当たっていたにもかかわらず、最初からもっとうまくやっていた。ひとりの者が、1777 年の夏に、インディアン達に対する者と同様、入植者達にも馬鹿げたようにしか見えないような振りをわざとするとする彼の編み出したやり方で、Albany での構想の悪い攻撃に従事していることについて、“紳士の旅” Burgoyne のうろたえを持って読んでいる。彼が、7213 名、そのうちの 400 人はインディアンであったが、こ

の軍とともに、**St. Johns** を元気づけために用意して待っている間、彼はアメリカ人をおびえさせるように仕組まれた、仰仰しい説明文を発表した。

この大げさな言葉の端のなかのその他の余分なもののなかで、**Burgoyne** は、彼“不自然な抵抗”の中で、彼は彼らを追い詰めるために、彼の獐猛な同盟者の数千人を自由にし、そして、この復讐のために、彼は、“神と男たちの目の中で無罪を言い渡された立場になる”だろうと主張している人々に対して警告を発している。そして、彼は、“キリスト教徒の自覚”で、アメリカ人は、仮に彼らが、懺悔をすることが無くても、彼らは、“気が進まないけれども避けては通れない軍の任務の告発が起こることは間違いのない破壊と、飢饉とそしてあらゆるこれに伴う恐怖”を予測することが出来ると決断した。

そのアメリカ人達は、おびえさせられていると言う状態からは、がぜん異なっていた。ある者達は、怒っており、また、ある者達は面白がっていて、在宅しているイギリス人は、腹をたてさせられてさえいた。**Walpole** は皮肉にも **Burgoyne** が、どうやって、“福音書で、頭皮を剥ぐナイフを治める”ことが出来るのか疑いの目で見ている。それから、2・3 日して、イギリス人の将軍が彼にインディアンの戦士たちに、ある注目するようなことを提案した。

“戦士たちよ”、と彼は、“あなた方は自由なんだー精一杯のあなた方の勇気を持って前進するんだー大英帝国とアメリカの共通の敵を打ちのめすんだー彼らは、社会の秩序を、平和と幸福を乱すものたちであり、通商を破壊する者達であり、そして、国の破壊者なのだ……”と、言った。こうして、ある者達を自由にし、彼は、さらに信じられないようにも付け加えた。“わたしは、あなた方が武装して反対しないのなら、積極的に殺害することを禁止する。年寄りたち、女、子供、そして、捕虜たちは、現実の衝突の中でも、ナイフ、あるいは、戦闘用の手斧から神聖なものとして守られなければならない。”

この演説は、本国では、不快感をもって迎えられた。**Edmund Burke** が **Tower Hill** の入植者の人々の中での混乱を想像させるように下院で立ち上がった。“彼の国王のライオンの飼育係は、何をやるのだろうか？”**Burke** は、皮肉にも問いかけた。“彼は、投げやりに野獣の檻の扉を開け、彼をこのように仕向けたのではなかろうか？ ‘私の従順なライオンたちー私の慈悲深い熊たち、一私の温情の厚いハイエナたち、さあ、立ち上がろう！しかし、私は、あなた方は、クリスチャンであり、そして、市民社会の一員として、男であろうと、婦人であろうと、また、子供であろうと、誰一人傷つけないように注意するよう、あなた方に勧告する!’”

Burke は、案ずる必要が無かった。**Burgoyne** のインディアン達は、白人達の戦いに参加する意思はなかった。軍が、**Bennington** に向かって進軍している時に、彼らは、略奪と破壊と、そして、ベルを獲得しようと牛を殺しながら、軍から離れて行った。**John Stark** 少佐が、引き続けている **Battle of Bennington** の進展を調査している時には、インディアン、ならびに、カナダ人達は、彼らの指揮官に従って、自分たちのもともといた峡谷に向かって、かつてに逃亡して行った。



インディアンに指示している Burgoyne 将軍

Burgoyne の基本戦略の別の一団は、オンタリオ湖、Oswego、そして、Mohawk Valley を通って、Albany にいる彼に会いに行くという旅をする調査探検という目的を持っていた。それは、彼が宣言書の中で正確に見込んだある種のインディアンの戦闘が実際に勃発し、その領域で、Tories によって救われ、援軍を受けた、その峡谷の中であった。ここに、インディアンの歴史の中で、多分もっとも恥ずべき挿話があった。彼らの長い白人との戦いのなかで、この西部の境界線でのものより、もっと残酷で、無慈悲なものはここよりほかにない。彼らは、故郷を守ろうとしたものとしては、全く、釈明できないような残忍な戦いをした。

進んでいるイギリスの戦力は、素晴らしい肥沃な Mohawk 峡谷で同盟を見出すことを予測することが出来た。1775 年の Albany の酋長会議は、たったの僅か、Oneidas 族と Tuscaroras 族の活気のない支援を保証しただけだった；同盟の他の四つの部族は、彼らは、Algonquins 族との間の内部的な戦闘のなかで、いつでも彼らを助けていただけでなく、アメリカ人と比べても彼らの贈り物で気前を良くしていたイギリスに対してごく自然な同情的ものを示した。

Bunker Hill のあと直ぐに、Guy Johnson 少佐が、Butler、Butler の息子の Walter、そして、Joseph Brand とともに、会議に出るために Oswego に行ったが、そのあとこれらの 4 人の指揮官たちと一人のインディアンの派遣された者は、Sir Guy Carleton とのさらなる会合のために Montreal にと向かった。Sir William Johnson の息子の John は、しばらく

の間、家族の家である、Johnson Hall に滞在した。Schuyler は、この強力な拠点を弱めようと 3000 人の者達からなる軍隊を送った。再び、戦わないと言う約束で仮釈放されていた彼は 4 ヶ月という仮釈放を破り、そして、彼に従う極わずかの者達を連れて、自分と一緒に Montreal へと行った。そこで、彼は少佐に任命され、二つの大隊、Royal Greens からなる Tory 党の連隊を兵役に迎え入れた。Butler 少佐も似た様な軍、Tory Ranger を有していた。しかしながら、こうした指揮者たちが、西部の地域から Albany に一掃することをしようとして探検をしていた Hudson を征服しようという Burgoyne の計画の一部としていた、Mohawk の峡谷に戻って来たのは、1777 年の 8 月までではなかった。

最初の障害は、オンタリオ湖へと短く結んでいる水路の、Mohawk River と Wood Creek の間にある、かつてはよく装備された拠点の砦である、Fort Stanwix の崩壊であった。ここはインディアン達が、運送の常用拠点として、Great Carrying Place と呼んでいた場所であった。

Burgoyne は、退役軍人の Barry St. Leger に、Stanwix の力を弱めるように指示し、8 月には、John Johnson の Royal Greens、そして、John Butler の Troy Rangers を従えて、875 名の男達とともにそこに向かって進軍した。Oswego で、彼らには、約 3000 人のインディアン達、これは、Brant の指揮下では、その戦争の中で、これまでに見られなかったような最も大きなインディアンの軍であるが、この者達が加わった。

Stanwix の 750 名の守備隊が、門の前でびっくりさせるような状態にいるこうした陽に焼けた色をした者達を見たときに、St. Leger が彼らの姿を見せることにより意図していたことに反したような効果が表れた。それを見てびっくりするだろうということどころか、アメリカ人たちは、野蛮人たちと彼らの背後にある峡谷の中の入植者たちの間にただ一人だけでも立ちはだかっていると見せつけながら、新たな決心をみなぎらせていた。

彼らが、次々と繰り出される攻撃にたいして、たくましく抵抗している間に、Tryon Country の民兵たちの軍がやってきたー彼らのうちの 800 人は Nicholas Herkimer という名前のついた、ドイツのプファルツの住民に指揮されていたが、彼は、民兵軍の准将であった。St. Leger は、彼らの行程を考察し、Stanwix の東 6 マイルの、Oriskany の近くのところにある広い小谷に彼らのために罠を作る事を計画した。彼は、極わずかの Royal Greens と Rangers の選抜隊とともに、全ての Brant 軍のインディアン達をその仕事につかせるために、出発させた。

それは、見事に良く考えられた待ち伏せで、もし、犠牲者が森の中で闘争に慣れていないヨーロッパ人であったなら、略奪だったのかも知れない。しかし、Herkimer の部下たちは勇敢であると同時に、知恵深い者たちでもあった。完全に取り囲んで、円陣を組んで、そして、防衛をしながら、反撃に出て、一方、Herkimer、彼は最初の一斉射撃で足に傷を負ってしまったが、彼は下の方からの射撃をされている馬の鞍に乗り、そこから落ちていて彼の防御隊に対して指揮を執っていた。あたかもまだ乗馬しているように、跨って座りながら、彼に煙草を吸い、木に背を持たせながら、丁度、捕まえられた者を昔やっていた

ように、部下の男達を彼の周りに集めた。この壮大な変則な輪の殆どの周囲は、まるで、つかみ合って戦っている様であり、敵が撃たれるのを待ちかまえ、そして、彼が息を吹き返す前に手斧で急激に彼に襲い掛かるインディアンの罠であったので、アメリカ人に対しての様でもあった。突然のにか雨が一瞬蒸し暑くなった雰囲気ですっきりさせ、そして、湿った火打ち石銃が、どちら側の射撃をできなくなるようにさせた時、暑い日の午後の戦いで、僅かの休止をもたらした。Herkimer は、二人の男により、彼の部下たちを整理しなおす小休止の絶好の時を取ることが出来、一人が再装填しているあいだに、もう一人が射撃をするという、罠を終結させる戦略的な策略であるが、これをさせるようにした。

抗争が再び始まってそう長くない時期に、インディアン達は、彼らが、直ぐに戦いが終結しない様な時には、よくある事だったが、彼らの闘う意思が次第に失われ始めた。結局、彼らは、やり直しを意味する“Oonah! Oonay!”と言う叫びをあげながら、森の中に引き揚げて行った。Tory 党の者達は、なす術がなかったが、後についてきて、その一方で、アメリカ人達は、彼らの傷ついた者達を治療していた。

一方、Fort Stanwix では、防衛隊の者達が、かろうじて守られている捕虜たちのキャンプと、うまくいく様な突撃をするということで不在であるその有利さをとらえ、また、それが突然であったので、Sir John Johnson は、彼の貴重な報告書を残したまま、これを置いて肌着のシャツのまま去らなければならなかった。アメリカ人達は、その後、インディアン達の鹿の毛皮とか、包み、こうしたものが無くなることは、彼らの同盟で彼らが不幸になると思わせるものと正確に予測して、これらのものに特に注意を払いながら、キャンプを組織的に略奪し始めた。

Fort Stanwix は、Benedict Arnold 少将、彼は 8 月の 21 日に、別の救助隊と一緒にいる最中であったが、彼の想像力豊かな頭脳の中で考え出された賢い策略で、辛うじて守られた。Arnold は、長引かせる知性を持った Mohawk Valley のドイツ人である Hon Yost Schuyler、彼は、インディアン達に、迷信的な尊敬と、彼らの精神的な病気を癒すような力の恐怖を持っていると認められていた者であるが、彼の支援を受け入れた。Schulyer は、イギリス人の大義名分のために Valley の男達を採用しようとして死刑を宣告されていたが、しかし、Arnold は、もし彼が噂通りの使者になるのであれば彼を許すと約束した。Hon Yost は、ただ、あまりにも手回しが良かった。

計画は単純であり、そして、効果的だった。Schuyler はコートを脱ぎすて、そして、Arnold の部下たちが、それを目掛けて発砲し、そして、その後、彼はもう一度その服をきて、Oneida 族の仲間たちにより踏みにじられた Stanwix に向けて出かけた。彼は、既に砦からの小旅行で中に居る者が少なくなっているインディアン達のキャンプに、飛び込んで行き、そして、既に Stanwix からそう遠くないところに差し迫っている数千人のアメリカ人の軍からどうやって逃げたらいいのか、その話をした。Hon Yost は、彼か彼の赤人の兄弟たちに忠告したいと話し、そして、彼の言葉は直ぐに同じ物語とおなじような忠告で急いでいた Oneida によって確認された。



Benedict Arnold 大佐

インディアン達にとっては、それで十分であった。大混乱の中で、彼らは、直ぐにその場から離れる準備をしていた；そして、**St. Leger** は、何もすることが出来なかったか、あるいは、彼らを止めるように言う事も出来なかった。彼らは、他のどのようなアメリカ軍の士官よりも、**Arnold** を恐れていた。貧相な **St. Leger** が、彼らに、“敵軍よりももっとおそるべきもの”と説明するまで、彼らのすぐ後に居るのは **Arnold** であると言うニュースが暴動を起こさせようとしていた。200 名の者達が、それ以上の議論もせずに、その場から逃げ出し、残っていた者達の酋長は、**St. Leger** に対し、良く知られた通常の取り扱いを命令するように強要した。捕えられた者達は、全てを後に残して、その場を去った；彼らは、自分たちか背負っていけるものだけを持って行った。

このようにして、**Mohawk Valley** は、一時的には、侵略からは安全であり、アメリカ人達は、**Canada** からのイギリスの脅威を効果的に終了させ、彼らのまだ十分に注目をしていなかった、最初に現実的に独立の決定的な戦いが闘われた、**Saratoga** での **Burgoyne** との会議に気持ちを熱中させることが出来た。

しかしながら、**Tory** 党の軍隊は、戦に負けたと言う状態ではまったくなかった。**Johnson** と **Butler** は **Stanwix** での散々な破壊的な事件の後、彼らの軍隊の力を再編成し、そして、1778 年の春に、彼らは、オンタリオ湖の **Fort Niagara** に彼らの本営を設置した。ここから、6 月の終わりごろ近く、彼らは、ほとんどが、**Luzerne** 地域の横たわっている **Susquehanna** の北の一部となっている肥沃で、素晴らしい場所の **Pennsylvania** の **Wyoming Valley** に攻撃を仕掛けた。その峡谷は、戦争に対しては、とりわけ強固であった。**Moravians** 族が 1742 年に最初に入植した土地で、**Pennsylvania** や **Connecticut** のからの敵対する権利の所有者達が、彼らに異議をとる村の富を手に入れるためにそこで闘争していた。独立戦争が始まる前まで、**Connecticut** が、その論争での勝利を収めていた。

Wyoming の資源供給地としての有効性を打破しようと計画した **Butler** 大佐の探検隊は、400 人の白人達—**Rangers**, **Royal Greens**、そして、**Tory** 党员たち—並びに、500 人のインディアン達、そのほとんどは、**Six Nations** の同盟部族の中でも最も闘争的性格を持った **Senecas** 族の者達であったが、こうした人達により構成されていた。**Wyoming Massacre** (ワイオミングの大虐殺)、すなわち、“独立戦争のずば抜けた恐怖”と言われたものをしでかしたのは、この軍隊であった。

狂暴によって襲撃された町、そして、農場は殆ど無防備に近い状態だった。2000 人の住民たちの中の男たちの殆どは、**Connecticut** 戦線での戦いに出かけていた。残った者達は、頑強ではあったが、別の **Butler** である、**Zebulon Butler**、彼は、大体 300 人位の老人と子供達を集める事が出来る者の中の防衛隊で、彼らは、彼はことあるうちに開放的に体形を配備していた。

Brant の **Senecas** 族はこうした惨めな防御隊を、破壊的な狂暴性で攻撃をした；全ての者が、300 人の中の大体 60 人ほどであるが、これらの者が殺されるか、捕えられてしまった。**John Butler** は、**Senecas** 族は、たった一人の殺された者と 8 人の負傷した者を除いて

227 人の頭皮を剥いで持って行ったと、自慢していた。この大虐殺の後、インディアン達と Tory 党の者達はその峡谷一体を、まるでモンゴル人の群のように一掃し、略奪と破壊をし尽くした。家や粉ひき所は焼かれ、畑は荒れ放題になり、生活道具は奪われてしまい、価値のありそうなものはすべからず持っていかれてしまった。生き延びた人達は、山の方、あるいは、Poconos、ここは後に、“The Shades of Death（死の小陰）”として陰気に知られたところであるが、この湿地帯に逃げ込んだ。彼らの殆どは、飢餓、もしくは、疲労で亡くなってしまった。

Wyoming Massacre のあった 2・3 週間後の 9 月の初めに、Brand と彼の仲間の Seneca 族の者達は、別の地域を攻撃し、今度は、Mohawk Valley そのものを襲った。Brant は、150 の勇者と 300 人の Troy 党のものを率い、現在では、ニューヨークの Herkimer の像が建っている極めて小さな村の German Flats を夜明けに攻撃した。しかし、襲撃を予測していた住民たちは、自分達が安全に避難できるように十分注意をしていた、けれども彼らの家や納屋は焼き払われ灰と化してしまい、馬、牛、そして、羊は、そこから 50 マイルも離れた Unidilla のインディアンの部落に連れて行かれてしまった。

こうした、野蛮な猛攻撃は復讐を呼び覚まし、そして、入植者達は、それを 10 月の 8 日に実行した。それが、逆転の German Flats の物語であった。警告をされていたインディアン達は、トウモロコシ、犬、牛、そして、家財道具を置いて急いで逃げた。彼らの家は、一そこには、ワグナムはなく、石と家の骨組以外は、一製材所と製粉所の近くに、一つの何か説明のできない何かの代わりになるものが残された以外は全て焼かれてしまった。

Senecas 族は、いまや、怒りに溢れていたが、しかし、秋がまじかに迫っており、彼等が 200 人の Rangers を引き連れた John の息子である Walter Butler 大尉と遭遇したのは、彼らが Fort Niagara で冬の季節に向かって行く、その途中で、彼らは Otsego Lake のちかく、Albany の西、大体 50 マイルくらいのところにある村の Cherry Valley で略奪に傾注していた。この町は、その砦が Lafayette の専門的な指示で建てられたものであって、Ichabod Alden 少佐のもと、第 7 Massachusetts 連隊によって守られていた。少佐自身、そして、隊員の誰一人、その村に通ずる 3 つの道路の内の一つである、古いインディアンたちの道に、守備隊を配置するのにしくじった Alden の不注意を言い訳することのできる、唯一の手段となるべき、インディアンの戦闘のやり方について、何一つ知っていなかった。

その道を通って、11 月の 11 日の朝、早く、Butler と Brant が、彼らの Troy 党の仲間、そして、インディアンの分遣隊とともにやって来た。その日は、とても霧が深く、これが彼らを覆い、それが保護する形になって、彼らは、彼らの仕事を分断してしまう、村の家々の焼き討ちを始めた。一軒の家の中だけで、彼らは、その家の主人、母親、妻、兄弟、姉妹、三人の息子、一人の娘、そして、そこに宿営していた 16 人の兵士達を虐殺した。朝の惨殺が行われる前に、30 人の無垢の村人たちが殺され、村の全ての家々が焼き払われた。それを建てた Lafayette の技能と配慮に感謝し、その砦は、奪われるのはあまりにも頑丈だった。

それは、事実上、毎年的一年の略奪の最期であったが、しかし、1779年の春になり気候が再び暖かくなると、直ぐに、**Brant** は、焼き討ちをし、略奪をし、そして、頭皮を剥がすと言った戦闘をまた始めた。**Brant** は、**Cherry Valley** での惨殺については、いかなる責任も放棄していたと言われているが、とりわけ、彼の **Senecas** 族の者達、彼らは、**Butlers** と密接な仲間だった者達だが、その彼らが、**Mohawk Valley** や近くの **Pennsylvania** の村々を荒らしまわり、略奪をし続けているという事が良く知られていたのもので、誰も彼を信じていなかった。

こうした略奪が、春の遅くまで完膚なきまでに、そして、広域にわたって行われるようになったので、全ての境界領域での警告が、もし、**New York** や **Pennsylvania** の辺地の開拓者たちが見放されたのなら、**Hudson Valley** そのものが、再び、危うい目にあうと知っていた **Washington** 将軍、彼自身のところまで報じられた。明らかに、**Six Nations** のインディアン達に対抗する逆襲攻撃が直ぐに準備されなければならなかったのだろう。

Washington は、決して、急進さと大胆さという事には欠けてはいない、気まぐれなアイランド人の **John Sullivan** 少将に対して、その言い訳をしながら、彼なりの戦略を練っていた。とても素晴らしい最高級の指揮官の命令は、曖昧なものではなかった。彼は、“彼らの植民地でのあらゆる破壊と略奪、そして、手当たり次第の年齢、性別にこだわらない多くの捕虜の拿捕……”を要求した。彼は、“破壊ではなく、ほとんど、荒らされた”という状態ではなく、**Six Nations** の地域をほしかつた。

このことを完遂するための宣伝は、三段階からなる筈だった。**Sullivan** は、**James Clinton** 将軍が **Mohawk Valley** を制覇し、**Otsego Lake** と、**Susquehanna** を攻略している間に、縦隊を **Susquehanna** から **New York** の境界線まで引き連れていき、**Daniel Brodhead** 将軍は、**Pittsburgh** から **Allegheny** に向かって進軍する予定のものだった。全てを合わせると、4000名にもなる男達がこの逆襲のために投入され、これは、戦線に展開されるもっとも大きな開拓軍であった。

それは、壮大な継続的な宣伝であった。**Sullivan** と **Clinton** の軍隊が、計画をしたように会い、**Tioga** で砦を築き、そして、8月の遅くに攻撃を仕掛けた。彼らは、最初に現在の **New York** の **Elmira** の近くに陣取っていたインディアン達と **Tory** 党の小さな軍を打ち負かした。**Brant** 軍の **Senecas** 族のもの、そして、**Butler** の **Greens** 部隊も彼らの全力を出しては戦わず、しかし、最期には、彼らは、膨大な数の戦力を投入しなければならなかった。それが終わると、白人達は、まるで野蛮人のような振る舞いをした。若い、**New Jersey** の見習士官が彼の日誌のなかで、彼は、“彼らが尻から始めて、脚のほうに向かって肌を剥いでいった、死んだ二人のインディアンの死体を見た；一組の少佐と、もう一人は、私自身だ”と書いていた。

Sullivan の軍隊は、完璧に荒れ果てたままになった、**Senecas**, **Cayugas**,そして、**Onondagas** の領地を通して、峡谷を下って行った。彼らは果樹園を切り倒し、そして、穀物を焼いて行った。インディアン達の家を、素晴らしい家も、そして、物置小屋のような

ものも、むやみやたらに焼いた。ある村では、後に残しておいて来た歳老いたインディアンの女、そして、少年のためにと、そのままにされた一軒の家を除き、全て焼き払われた。青少年の精神に満ちたその他の兵士達、彼らは、外から家を締められ、家ごと、無残な収容者として、焼かれ死んでいった。

10月の15日までに、Sullivan は、彼の任務が果たされたと考え、改めて John Jay, そして、議会の会長にあてて、彼は、40の町、トウモロコシの160,000ブッシェル、そして、何かわからないが、膨大な野菜のようなものを破壊したと、手紙を出した。彼が報告した Six Nations の全て地域の中で、一つの町だけが残っていた。彼が実行するのをしくじった彼の任務の唯一の部分は、人質として捕虜たちを駆り集める事だけだった。彼がしたのかも知れない、極わずかのものがあつたが、しかし、それらは、押しつぶされた村のなかに積み重ねられて置かれた死体だけだった。

Sullivan が彼の任務を実行して居た、その一方で、Brodhead 少佐は Pennsylvania での彼自身の目を見張る様な大成功を楽しんでいた。600人の兵士達と一緒に、彼は、Sullivan が直面していたどんなものより、ずっと危険な地形を超えて Allegheny 峡谷を進軍して行き、そして、New York の州境からずっと離れた所まで侵入して行った。彼の進軍を妨害しようとしていた散り散りになっていた Mingos, Munsees、そして、Senecas の者達は、簡単に追い払われた。Brodhead の部下たちは数多くの家々を焼き払い、そして、500エーカーものトウモロコシ畑を破壊した。彼らが Fort Pitt に戻るまでに、誰一人失うことなく、さしあたり、何の恐怖も経験することなく、33日間にわたり、400マイルもの距離を進軍していった。

しかしながら、政府のインディアンに対する成功は、ただ単なる物理的な破壊の統計的な尺度で測られたものにすぎなかった。例えばその一つは、Sullivan の捕虜を確保することの失敗は、インディアン達は、Tory 党の者達を有していたように、明らかに彼らの数は、何ら損なわれていないように保っていたことを意味していた。このことは、イロクオイ族が Sullivan のキャンペーン、これは、彼らの軍事的な名声を見るからにはっきりと低下させたばかりでなく、彼らが、提供したその他のどんな準備をしたものよりも、もっと彼らを落胆させたのであるが、そのキャンペーンの結果として、深刻な大きな不幸を感じていたと言う否定できない事実と相殺していた。彼らが、彼らの焼き払った村のことを思い描くときには、彼らは、その廃墟の中に、南部連邦の薄明を見たに違いなかった。

彼のキャンペーンの長所で、自分自身、そして、政府に対し、インディアンのトラブルは終わったと思わせる様な迷いをもたらしていた。1779年の10月の Washington の気分を良くした予測、これは、赤人達は、“冷静さを失い”、そして、“粗末にされている”と言う者であるが、このことが、この偉大なるリーダーでさえも、インディアンのことを、彼が、彼に続く指揮官、イギリス人やアメリカ人、と共有することのしくじりを現実に理解していなかったことを強調していた。その一方で、Tory 党の指導者たちは、同盟者としての彼らの価値を低く評価をすることもなく、また、過大にみることもなく、非常に自分た

ちのことをよく理解していた。

Sullivan が、彼の成功の中でしくじっていたと言う証拠は、そして、Mohawk から Kentucky までの境界線、ここは、独立戦争の終了まで、動揺していたところであるが、この境界線に火を付けたことであった。もっと端的に言えば、Brant は、インディアン達には問題ばかりの季節ではあったけれども、もう一度戦う準備をする前に、秋の災害から復旧のために、冬の季節がただ必要だった。彼らは、イギリスの防護のもとで、すっかり弱り果て、Fort Niagara の中にうずくまっていた；助けとなる、そして、英国人同盟の支えも無く、彼らは朽ち果てていた。絶えず、彼らは、春になれば、かつてイギリス対して抱いていたよりもっと身近に感じるようになると、そして、彼らの土地を荒らして回ったアメリカ人に対して復讐をしようと怒りに燃えていた。

Tory 党の者が戦いに挑む動機は、あまり良く知られていなく、とりわけ、Butler 達、Johnson 達の場合には、彼らは、確かに国王に対する永遠の忠誠心により動いているわけではなかった。もし、彼らの全てが、峡谷の中に彼らの豊かな土地を残しておこうというものであれば、アメリカ人達の側に立っていることに彼らの変わらぬ利益が確かにたくさんあったのではないか。結論は、彼らがイギリス側の愛国者であったこと以上に、もっとずっと冒険心を持っていたという事に尽きない。

しかしながら、Brant については、彼らは、インディアンという理由でばかりではなく、とても国王を敬っていた一人の優れた指揮者を有していた。彼は、そのことについては、イロクォイ族には一あるいは、他のどのインディアンの酋長達にはわからないよう形で、イギリスを主題として掲げていた。この素晴らしい取扱いを彼は、アイルの生まれであると言う事にも拘わらず、彼に王位の威厳の最も忠誠心的な主題として持っていた Sir William Johnson に対して尽くしていた。Johnson は、早い時期から、若い Mohawk の者の優秀性を認識し、そして、それに対し、彼は、Connecticut の Lebanon の学校で、英語で教育を受けたものと理解していた。そこでは、Dartmouth College の創設者である Dr. Wheelock、が彼の個人教師として、Mohawk 語に宗教の本を彼と共に翻訳するため、働いていた。ついには、Brant はイギリスに渡り、ここで、Romney が彼の肖像画を描いたが、James Boswell が彼を歓待し、彼は宮廷に紹介された。

にも拘わらず、Brant はインディアンを貫き、そして、彼に従う者達の指揮者として故郷に戻った。しかしながら、彼はイギリスに対する深い忠誠心を保ち続ける事が難しかったのだろう、心から、イギリスの興味は、インディアンのもっているものだと思っていた。彼は、Johnson の家族にも、また、忠誠であった。彼は、Sir William ととても親密に働いていたばかりではなく、後には、Guy Johnson の秘書としても奉献していたが、しかし、結局は、インディアンの法と、多分の同じような市民法により、彼の美しい妹の Molly が William の妻となり、そして、彼の 8 人の子供を産んだ。

アメリカにたいする、Tory 党—インディアンの国境での戦争の現実のリーダーとして、Brant は、イギリスと、そして、彼に従う者達の両方のために懸命に闘った。彼は、ほとん

ど同じよう感覚で、イギリスの市民として、そして、最も原始的に野蛮人として有能であったが、しかしながら、それは彼が思い出させられた野蛮性であった。

振り返ってみると、沢山の能力が無駄にされたことを理解するのは、むなしいことだ。**Brant** が、**Sullivan** に抵抗することが出来なかったという事ばかりでなく、1780 年の 4 月に彼が、彼の野蛮性に満ちた気持ちを持って現れた時、彼は、二重に失われたものに対する動機の指導者であった。彼のイギリスとの同盟は、もはや、カナダから、あるいは、もっと北西の地域からの脅威ではなかった。南部連邦は壊れた機能でしかなかった。**Tory** 党とインディアンは、尚も暴動事件や血なまぐさい騒動を広める事が出来たが、しかし、もはや、重要な行動をする希望は無くなっていた。残っているものは、**Mohawk Valley** の憎悪からの戦争だけだった。

John Johnson とともに、**Brant** は、徹底的に辺境地での戦闘を経験した **Marinus Willett** 少佐に率いられたアメリカの探検隊が **Johnstown** で **Tory** 党とインディアンの軍隊を破り、生き残りの者達を容赦なく **Oswego** への街道を追跡して行った 1781 年の秋まで、**Valley** をことごとく、焼き払い、そして、破壊して歩くという事を続けていた。それは、あらゆる現実的な目的としてきたものに対し、**Mohawk** に関わる戦争に終わりをさせるものであった。

しかしながら、もっと西に行くと、そこには違った物語であった。そこで優勢であったのは、僅か、23 歳の、そして、アメリカの独立戦争が始まった時には、インディアンとの戦闘にはすでに熟練の域に達していた **George Rogers Clark** であった。**Clark** は、インディアンや似た様なイギリス軍による攻撃に対し、早くから、開放的であった **Kentucky** が、この場合には、**Vincennes**, **Detroit**、そして、**Michilimackinac** を意味している、北西部の地域を征服することによってのみ救われると理解していた。

どのようにしたかは、とりわけ、彼が **Vincennes** を奪取した英雄的な物語は、アメリカ独立の真の記録すべき物語の一つである。巧妙な戦略、勇敢な戦い、そして、彼に耳を傾けたインディアン達の間での勇敢な外交術をもって、**Clark** は **Illinois** の地域の制圧権を確立し、そして、彼の究極の赤人の敵である **Shawnees** 族、そして、**Delawares** 族の勢力を徹底的に弱めていった。多分、彼は、もし、**Ohio** の **Moravian** の町での 90 人者ものキリスト教徒のインディアンの冷たい血も涙もない大虐殺が数マイルも離れて取り囲んでいる部族、とりわけ、**Delawares** 族をかき乱すことがなったのなら、**Detroit** を掌握し、そして、征服という彼の壮大な計画を完遂し続けていただろう。

この **Gnaddenhutten** の小さな村での残酷な物語は、西部地域での境界線で争いごとからの最も劣悪な被害者達ではなかったが、その **Pennsylvanians** 族の部族によって犯されたものだった。**Ohio River** の下流に住んでいた白人達が西部の **Pennsylvania** の入植者たちよりも、テロのもっと悪い状況に置かれていた。どういう訳か、最も暴力的な残虐行為が、**Cherokees** 族と **Shawnees** 族が、彼らの狩猟地を失ったことについて、とても恨みを示していた **Kentucky** で起きた。彼らの略奪行為が **Concord** や **Lexington** より、ずっと以前か

ら始まっていた；戦争は、彼らの領地を確保しようという彼らの闘争を増長させるだけだった。

しかし、彼らの戦闘集団は、既に残虐行為が日常茶飯事となっており、入植者達が的確な復讐行為をするために武装した部隊を組織化していた **Pennsylvania** にまで散らばっていた。もし、彼らが武装したインディアンの戦闘集団に会い、彼らを殺しても、それは単に戦闘におけるもう一つの出来事に過ぎないとみなされていたのだろう、がしかし、こうした白人達は、彼らの被害者となった者のために、独立戦争とは全く関係のない **Moravin Christian** の村の平和な住人になることを選択した。こうした、罪のない人達一男、女、そして、子供達一の虐殺は無慈悲な残忍なものであり、そして、**Clark** が彼らをなだめるためにこの上なく苦勞をしていた、まさにその人達を怒らせていた。**Yorktown** のニュースでさえも、彼らの執念深い行為を抑えることが出来なかった。

William Crawford 少佐、彼は **Washington** の古い友人であったが、その彼が、彼らの憤怒を感じた最初であった。300 人もの彼の部隊は、1782 年の 6 月に、**Upper Sandusky** に分断され、捕まった **Crawford** は、あまりにもひどく拷問され、彼は、有名な裏切り者の **Simon Girty**、彼はそのすべてを見ていたが、その彼に銃で処刑するのを止めるように懇願した。

この小さな被害者は、ただ単なる予備段階的なちょっとした小競り合いであった。一か月後に、戦争の間で、一つの集団としては集められたものとしては最も大きな数のインディアン、彼らの数は、1100 人ほどであるが、この者たちが、**Kentucky** に侵入し、そして、**Wheeling** に向かって移動していった。**Clark** の恐怖感が非常に大きくて、それがインディアンの部隊の 300 人以外をすべて離脱させることになったことを除いて、全く意味のものであったがそれが主要な動きだったかもしれない。残った者達は、彼らが、8 月の 19 日に **Blue Licks** で **Kentucky** の開拓者たちが編成した軍隊と遭遇するまえまで、一掃していた。**Daniel Boone** 少佐、彼はアメリカ人で小柄な体をしていて一人であるが、その彼が、補強のためにしばらく待っているように助言されていたが、しかし、彼は、活気盛んな **Kentuckians**、彼らは被害者だということを進めて証明するんだと言う人達であったが、これに、心を奪われていた。

それは、インディアン達にとって、とても損失の大きな勝利であった。**Clark** は大規模な反撃に転じ、そして、彼の生まれた **Chillicothe** の大きな **Shawnee** の町に下って行った。彼は、大量のトウモロコシやその他の準備されたものも含め、部族の他の 5 つの町を破壊した。いつもそうであるように、食糧の喪失は非常に打撃の大きな攻撃で、戦闘で人間が亡くなるよりももっと悪く、**Shawnee** 族は、それ以上の戦闘態勢を取ることが出来ず、そのことは他の部族でも同じ状況だった。

Yorktown での、決定的な戦いで、それが公式ではないとしても、事実、この国に平和がやって来た。しかしながら、まだそれでも、現実的な事実でない所が二か所あった。**Greene** 少佐はなおも **Charleston** にイギリス人を拿捕していて、政府が彼を忘れている間、それを

続けていた。昔の北西部では、やっぱりまだ危険な優柔不断が残っていた。Clark は、その領域を、全ての現実的な目的という意味で征服していたが、しかし彼はそれを維持する事が出来なかった。イギリスが依然として、**Detroit** を維持しており、そして、彼らのインディアンとの同盟が全くと言っていいほど弱められていなかった。

しかし、にもかかわらず、平和があり、そして、全ての闘士に対して、それは、違った意味を持っていた。イギリスの正規軍の者達には、それは、彼らが故郷に戻り、問題だらけの入植地をアメリカに残して行く事が出来るということを意味していた。彼らは、北西部とカナダには、彼らの地位を残しておき、南部では、勝利者に潜在的なトラブルを取り囲んでいる輪を残して行った。

開拓民達には、平和は、彼らの焼かれた小屋と荒れ果てた土地に戻れること、ならびに、彼らの不可避な西部に向かう行進を再び取り戻しながら、もとの入植地の再出発を始めることを意味していた。

インディアン達には、平和とは、彼は荒らされた村に帰るのも自由だし、それが白人達に占領された土地で無い限り、彼の行きたいところにはどこにでも行く事ができる事を意味していた。今や、彼は、いかさまと、敵愾心と、そして、侵略以外には何も予期できないことを学んだ、そして、彼らの、最も有能であり、そして、最も賢い指導者が、彼を根絶することを支持してきた、その新しい国のむき出しの力に直面しながら、彼の力強いフランスやイギリスとの同盟を継続し、物を失いつつ、ひとり立ちしていた。

インディアン達はそれを知らなかったが、しかし、領土拡張説の時代は始まっていた。

7

インディアンに対する新しい国の闘争

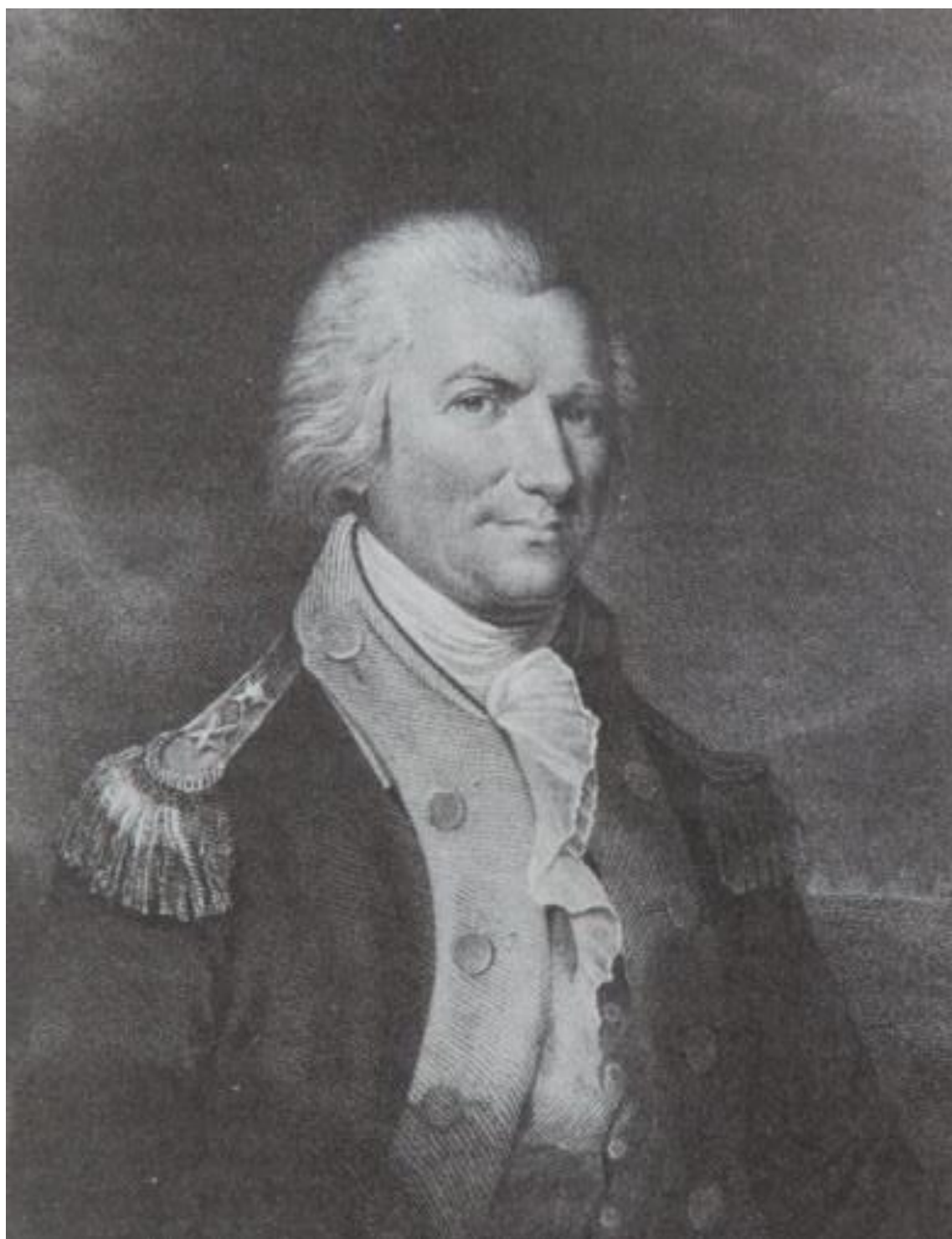
インディアンに関する限り何でもなかった独立戦争の終結が気遣われた。入植者達に対する彼らの労働苦情処理委員会は、かつてと同じように深刻なもので、そして、Washington 将軍が Washington 大統領になったという事は、Ohio Valley の赤人たちの住民、彼らは、フランス人であろうが、イギリス人、あるいは、原住民であろうが、白人の父であるという事に彼らの信頼を失ってしまった人達であったが、その彼らには、何の意味も持たなかった。

1700 年に、Ohio の北には、爆発に必要なあらゆる因子が存在していた。少なくとも、勢力を削減された Six Nations とともに、Miami 並びに Wabash の部族は、主たるトラブルとなることの当事者たちとなった。独立戦争の終結から、1790 年の 10 月まで、こうした、そして、その他の部族の者達が、Ohio とそして、その周辺の者達で、女、子供達をふくめ 1500 名近くの者が、殺害され、傷つけられ、そして、捕虜として連れて行かれたりしていたと見積もられていた。彼らは、しかも、少なくとも、2000 頭の馬を盗まれ、合計で 50,000 ドルにも及ぶ他の財産を略奪されていた。

さらには、内部の西部を流れる川を航行して行く船に対するいつまでも止まない気をもませるような襲撃が続いた。1790 年の 4 月、Doughty 少佐が政府のビジネスで、Chickasaws を訪問した途中で、Shawnees 族の者達で一杯になった 4 隻のカヌーと、Tennessee 川を流浪している Cherokees 族に遭遇した時に、こうした事之最悪の事態が起こった。インディアン達は白旗を振り、そして、将軍と 15 人の彼の部下たちに歓迎され、プレゼントを与えられて、そして、彼らは親しく交流した後、一時間後に分れた。

彼らは、自分たちのカヌーを川の方に押し出すが早いかな否か、直ぐに、船の向きを変え、Doughty の船に一斉射撃の雨をふらせた。兵士達が、これに対応して反撃をした；しかしながら、インディアン達が逃げ去る前に、11 人もの少佐の部下が亡くなり、あるいは、負傷をした。

これと、それに、似た様な話を耳にし、Washington の忍耐の緒が切れた。彼は直ぐさま、いまや、イギリスとスペインは、Mississippi を自分達の輸送ルートとして利用し、戦争をする寸前の状態にあり、こうしたこと全てが、インディアンの部族をさらに動乱させているもので、彼が危険な状態であると認識していたこうしたものを終結させるために動いた。それ故に、大統領は、北西部の統治官である Arthur St. Clair 少将に、インディアンに対抗して、探検隊を結成するように指示した。St. Clair は、これに従って、Fort Washington、ここは、現在は、Cincinnati であるが、ここに、1500 名からなる連隊を召喚した。そして、彼らを、戦争では Pennsylvania 連隊と供に闘い少将待遇に昇級された Josiah Harmar の



Arthur St. Clair 少将

指揮管轄下に置いた。

新しい大統領は、一方では、懲罰をほどこしながら、もう一方では友好の姿勢を示していた。新しい国の歴史の中での最初の時代の時に、インディアンがニューヨーク、ここが一時的な首都であったが、ここにやって来て、そして、大統領に面会した。Washington は、インディアンが好きではなかったが、しかし、彼は、興味と礼儀正しさをもった著名な混血の指導者である Alexander McGillivray に付き添われた、Creek nation の 29 人の人達をもてなした。Henry Knox が彼らとの合意を取り持ち、これが、インディアン達の他の領地での狩猟をすることを保護する以外は、Georgia に、所有権未決の土地を与えろと言う正式な協定という形の結果をもたらした。

協定が、取り決められるその一方で、Washington はインディアン達を歓待する手助けをした。彼は、自分の家で彼らを歓迎する会を開き、そして、正式な軍隊に彼らをよく観察するように指示し、そして、彼らを、丁度その時、中国の広東への航海から戻って来たばかりの、船の *America* 号に案内した。他の首都の住人達は、インディアン達が人道的であったことを見出し、まるで驚いているように見えた。Massachusetts の Fisher Ames は、McGillivray は、“子孫だが、まるで黒人とは違う”と言う事でビックリしている記述をしていた。Abigail Adams は彼の事を“真面目でしっかりしており、知的で、立派な紳士”だと思った。

協約の結論で、Washington 自身がそれに署名し、それぞれの部族の酋長と握手した。かつて、彼が Lafayette に対して、協定は“希望するけど、現実的ではなく、実現することはできない。”と手紙を書いた。“不逞の輩たち”を取り扱うために Harmar を派遣するなかで、彼は、独立戦争の時にしていたような、インディアンを絶滅しようとは考えていなかった。むしろ、彼は Lafayette に、“インディアンとの我々のやり方の基本はこれまでも進められてきたし、また、私が、この政府の管理の中であることをするだろうどんなものをもし、それは公平なものになるだろう。”と明示した。

11 月までに、大統領は Harmar が、インディアン達に対して、知らせるのにふさわしい男を持っているという事に、次第に疑いを持つようになった。彼からは直接に何の知らせもなかったが、しかし、彼は極めて大酒呑みだと言う、気になる噂があちこちから上がって来た。さらには、Washington は St. Clair が、なおも、アメリカ人の軍隊が彼らに対しては進軍して行かなかった、その Detroit の砦を維持しているイギリス人を元気づかせようと努めていたという事を知り、情報の断片から、大統領は、イギリスは、直ぐに、彼らのインディアンの友人たちへの仲介に入ろうとしていると、当を得た判断をした。

事実、このことは本当であった。Harmar は、600 名の Kentucky の市民軍を偵察軍として先に出して、300 人の連邦軍の者と、1133 人からなる市民軍とともに出発した。こうした者達は、自分達が、インディアンが、白人の男達を自分たちの領土の中により奥地まで引き連れて行きながら、ゆっくりと引き揚げていくかの如く、焼き払って行った村筋を進んでいるという事に気づいていた。210 人の偵察隊の集団が彼等に追いつこうとしたときに、

彼らは、引き返してきて、そして、数では勝っていたけれども、おびえていた、よく訓練されていない市民軍は、突然退却をし始め、戦闘するために待機していた正規軍と別々に離れ離れに近い状態になってしまった。

Miamis 族の、破壊されたままだった村の近くで、インディアン達はもう一度向きを変え、今度は、彼ら自身の度肝を抜くような勢力で Harmar の軍を攻撃してきた。150 名以上の将軍の部下が、倒れて亡くなった。インディアン達の損失は、Harmer が彼の部下の死者を弔い、負傷者を治療するに十分なほどの時間を与え、そして、その環境を完全に敗北であり、そして、将軍をして、全く不適当な形であったけれども、勝ち戦であることを表すものと正式の報告するようにさせるほどの深刻な状態であった。

Washington は、疑いもなく、真実を推察し、そして、だからこそ彼は、取り調べを求める議会に落胆を感じていた。しかしながら、Harmar は、彼を完ぺきに擁護するだけでなく、非難するよりも、彼は“高い賞賛”に値するものと主張する法廷の前に自分が現れた時に、彼の物語に固執した。多分、それは、たった一年以上の後になり、それを辞退するようになった良心からだったのではなかろうか。

Arthur St. Clair は、いまや、指示を得て、飛び切り上等の、何も準備のできて居ない、領域を取り扱っていた。St. Clair が、野戦については何の知識も持っていないと言う事を知っていた Washington は、彼に、彼が未発達な辺境地の他の指令者たちに与える警告書を与えた：驚かないように。統治官は耳を傾け、そして、彼自身の計画を提出した。彼は、Miami Village として知られていた Fort Washington から 135 マイルほど北のところに、出先の支所をつくり、そして、インディアンに感動を与え、イギリスには警告するという二つの目的を持って、奉仕したいと申し出た。

提案は受け入れられ、St. Clair は、彼の戦闘に従事するときには、少将として、新しく任命され、これは、彼を実際の軍の中での抜群の立場の者とした。彼は、Miami Village を 2000 人の兵士と、これを援助する砲兵部隊を持つようにし、“その地に、強力で、恒久的な軍の部隊を創設”し、そして、“敵を監視”し、“偉大な激烈さで彼を打ち破るあらゆる可能性のある手段を用いてこれに努める”ように、訓練を受けた。

インディアンに関する出来事の全体的な問題は、新しい首都である Philadelphia での議論となるものであった。政府の殆どの人達は、イギリス人の最期の入植が、尚もまだイギリスによって維持されていた部署が何時までも苛立ちを覚えさせるものであった Ohio Valley でのトラブルを終結させるものであり、その一方で、南部の Creeks 族は、もし、スペインが、スペイン領であるフロリダから彼らに弾薬と武器の供給を止めたら、静まるに違いないと、信じていた。Washington の政策は、友好的な部族とは、しっかりとした絆を確かなものにし、そして、と同時に、反抗的な部族には、服従させるためのハンマーをというものであった一彼が、St. Clair に託した任務。Jefferson は、もっと厳しい戦略を好んでいた。彼は、全体的に、インディアンは、まず最初に、“決定的な敗北”を経験しなければならず、その後で、彼らに対して、“自由とくりかえされる贈り物”が、部族を鎮静する

ためになされると信じていた。インディアンを愛しも、かつ又、信用もしていなかった **Washington** は、にもかかわらず、確かな総括的な平和のもとに恒久的な解決と、そして、疑いもなく赤人たちの所有物である領地を侵略することの防止を模索していた。

しかし、もう一度、大統領は、間違った人物を送り出した。**St. Clair** は、1791 年の 10 月の 3 日に **Fort Washington** を離れ、そして、**Miami Village** へ行く、その途中に、小さな砦を築き始めた。このゆっくりとした北への進展をしたように、彼の軍隊は、探検隊的な性格を帯びて行く悪い計画のために、バラバラに崩壊し始めた。武器と補給物資は当を得たものではなく、軍の勢力の 2/3 であった、市民軍は、月 3 ドルという正規の額が支払われることが無いばかりか、砦を建設すると言うような、一それには、微々たる支払いしかなかったが、こうした市民軍らしからぬ仕事に従事するように協約していた。

その結果は、任務放棄の確かな滴りと、軍が **Fort Washington** の北 100 マイルほどのところにある **Wabash** 川の上流の一つの支流にキャンプをした、一か月後の 11 月の 3 日の午後には、残っていた者は、たったの 1400 人だけという、契約した任務が終了したと言う市民軍の兵士達の離散であった。この時に、**St. Clair** は、指揮官としては、彼は何の経験もない、無能な高級役人という、情けないレッテルを張られてしまった。彼は、こうした士官たちの忠告を受け入れようとはしなかったし、情けないことに、彼は、インディアン達がどれだけ、彼のやることに反対したがっているのか、あるいは、彼らがどのあたりに居るのかさえも、何の考えも持っていなかった。

もし、彼が彼を対面していた酋長の最良を知っていたのなら、彼は、警告を埋める良い機会に恵まれていただろう。**Miami** の指導者である **Little Turtle**、彼のインディアンの名前は、**Mixhikinikwa** であったが、その彼は、彼が雄弁術に長けていたように、戦闘での技能でも誉れが高かった。**Old Northwest** には、ほかには、ほとんど有能な酋長は居なかった。独立戦争の間、彼は、確かにイギリス側に立って支援をし、それが終了した後、新しい入植者達の発展が、何もかもすべからく、彼にアメリカに対する敵対心を持たせるようにしていた。**Harmer** の敗北をもたらしたのは、**Little Turtle** であり、そして、こんどは、彼は、強力な **Miami** の軍を有しており、**St. Clair** と対峙していた。

アメリカ軍のキャンプは上手に選択されていた；その点では、何人も **St. Clair** を非難することはできない。それは、クリークを背後にして、中心に大砲を備えた、堂々たる土地に立っていた。市民軍は、昼間は森から出てくるインディアン達を押し出しながら時間を過ごしていたクリークの反対側に本拠地を置いていた。

次の日の朝、まだ太陽が上がって来ない 30 分ほど前に、川の近くに居た部隊が、突如、市民軍の陣取っていた側で発砲をしながら、行列から退散させられ、そして、その極わずかの間に、仰天させられ、すっかり混乱してしまったこれらの新兵たちは川を横切って、彼らが余りにも混乱して軍隊が体制を整えるまで、致命的な遅れが生じてしまったキャンプに殺到した。

正規兵たちは、しっかりと立ち上がり、キャノン砲が鳴り響いたが僅か 2・3 分の間に、

アメリカ人達は殆ど包囲され、明らかにどうしようもない状態になった。それは、古い物語だった。兵士たちは、ほとんどが、位に従って立ち、そして、殺害された。インディアン達は隠れ場所から発砲し、射撃するのはとりわけ難しかった。St. Clair の部下たちは勇敢に闘い、そして、命令を受けた時には勇気を奮って反撃に出たが、しかし、彼らがそれを実行していたら、彼らは殺され、最期の男まで頭皮をはがされたのは明白だ。

3 時間にわたる戦いのあと、St. Clair にもこの事実がわかるようになり、彼は退却を命じた。彼自身は既に病気であり、助けなしでは、馬に乗ることも、馬から降りる事も出来なかったが、それでも、彼は適当な退却を誘導するのに最善をつくした。St. Clair は、起こっていたことに、なんの誤解もしていなかった。“事実、それが戦いだった。”と、彼は戦闘に関する報告書の中で率直に書いていた。インディアン達は、彼らをほぼ 4 マイル程、追跡したが、それから、反転してどこかに消え、何とか、580 名もの者が安全に生き残る事ができた。

それは、もっとも屈辱的な姿を露わにした敗北だった。39 人もの士官が亡くなり、21 名の者が負傷した；全体の負傷者は 900 人以上であった。キャノン砲は失われ、それゆえ、装備の殆ど一戦場となったところに放棄された。“仕事の中でも、最も不名誉な部分、”と、St. Clair が嘆いていたが、“それは、追手が.....来なくなった後でも、部下たちの殆どの者が彼らの武器や装備のすべてを投げすててしまったことだ。私は、数マイルの間に、彼らをまき散らした道を見つけた。”手短かに言って、これが、貧相な Braddock のイギリス兵たちの虐殺以来、インディアン達の手で、白人達に苦しめられた最も悪い軍隊の敗北だった。

12 月の 8 日までに、非公式に敗北のニュースがちらほらと Philadelphia に流れてきて、次の日に、新聞が実質的に正確な記事を載せた。St. Clair の正式な報告書が夜には、Washington の手元に届いた。言い伝えでは、彼はそれを読んで、彼は冷静さを失い、St. Clair をののしり、そして、床でじだんだ踏んだ。それは、長いあいだ、彼の気性を制御することを学んでいた Washington が、完全にその気質を失ってしまった様なものだったのだろう。彼は顔を真っ赤にし、そして、彼がニューヨークでしたように、会議の場から外にでて歩き回り、でも、彼は西部からやってくる、ある一つの事を公正するのに十分なニュースであつたけれど、彼は、癩癩を起すようなことはしなかった。

現実には、大統領は、来客が Martha の通常の金曜の夜の謁見の儀にやって来始め、彼は、彼らが返るまで、彼の公的な勤めとして祈りをささげなければならなかったもので、さっと見るだけ以上のことをするだけの時間が無かった。それから、事実、彼が、St. Clair の派遣を再開し、そして、始まった悲惨なメッセージを見事な公平無私な態度で呼んだ時に、いくらか混乱したその中で、彼が、強い口調で話したり、大股で歩きまわる様な事がよくあつたのかも知れない。

“昨日の午後、私の指揮の下で、軍の残った者がこの場に戻ってきて、そして、私は、今、警告として、あなたに説明を差し上げなければならない辛い任務があり、そして、First Regiment (最初の戦闘部隊) 以外はどの部隊も、交戦させられ、そして、敗れてしまった、



彼らを撃退している

これまでの負けたほとんどの戦いと同様、不運な行動”を有している。これは、派遣された者だが……”

Washington は大衆からの悪いニュースを隠そうとしようなどとは思わなかった。彼らに彼を慕わしく思わせるように正直に、彼は、St. Clair の報告書を、最期の恐ろしい事実まで正確に、公表した。にも拘わらず、著名な Benjamin Franklin Bache's の *General Advertiser*、一般的には、Aurora として知られているが、その紙上のなかで、彼の批評が、アメリカ人のインディアン達の土地の侵略をする権利、とりわけ、それが、生活するにしても、資金的にもあまりにも経費が掛かりすぎるようになってくると、疑問を投げかけるようになってきた。

次第にキャンヘーンを行い、その成り行きでの騒ぎが静まって行つた。St. Clair は、少将に対する裁判を議決できるようなこれに相当するに十分な士官がいなかったので、彼が依頼した質問の裁判へ従わなければならないという訳ではなかったのだろう。下院自身がそれ自身の問いかけをし、それにつづくヒヤリングで、完全に St. Clair を免除した。にもかかわらず、彼は、彼の任務を辞した。

しかし、その時には、インディアンとの平和を求める圧力があつた。ほとんどの人は、適当な大きさの軍隊により、それができると考えていたようだが、それを現実にするのが大統領の次の仕事だった。この軍隊の指揮権については、政治的な争奪戦があり、少将の極めて高い地位は、結局は、猛烈で性急な **Anthony Wayne**、**“狂った Anthony”**、彼の 1779 年の 7 月の夜の **Stony Point** を占領する手柄が、彼を独立戦争の大衆的な英雄の一人に押し上げたのだが、その彼のところに落ち着いた。

Wayne は、**Georgia** で、彼のあまりうまくいっていないお米の農場で多くの時間を費やしていたが、ここで、彼のドイツ人の債権者が最終的には受け戻したが、彼は、1791 年に **Georgia** の代議士として議会に登場してきた。一年後、彼の席は、彼の選挙と彼の住民票が異議を唱えられ、無いものとされた。従って、この新しい指揮権者の立場は非常に歓迎する地位であった。

Wayne が 1792 年と 1793 年に彼の軍隊をゆっくりと編成している間、これは、最初は **Pennsylvania** の **Legionville**、そして、後には、**Fort Washington** の近くであったが、その時に、彼はインディアン達に対する軽蔑的な政府の平和的な姿勢を残していた。**Wayne** は、平和は不可能だと考えていた。彼は、北西部の領域にいるインディアン達が、登録するまえに闘わなければならない最終的な戦争があると信じていて、これは正しかった。

1793 年の 4 月までに、北西部だけではなく、スペインとイギリスの代理人たちが、トラブルを掻き立てる様な仕事をしていたが、その南部にも、部族の間に不穏な動きが広まっていた。**Creeks** 族の間にも敵愾心が広がり、**Seminoles** 族は戦闘の間欠的に敵愾心を持った状態であり、**Chickasaws** 族は **Creeks** 族との戦いと、白人の入植者達との闘争で時間を割かれていた。大統領は、**Chickasaws** 族に対して、平和を強力に説得してしたが、これは、政府が、**Creeks** 族や **Cherokees** 族との戦争で自分達に取り込まれたような場合には彼らの助けがどうしても必要だと信じていたからであった。

北西部ではどうだったかと言うと、政府は合意を試す最終段階の準備と、**Sandusky** の酋長会議にもう一度平和のパイプを進呈する用意をしていた。代表団がこの目的のために **Philadelphia** から送られてきて、**Wayne** は、その結果の仕度にどうすればよいのか、いろいろと追われていた。**Thomas Jefferson** が言っていたように、この、“インディアンと平和的にやって行くための最終的な努力”に多くのものが頼っていた。

議会が 6 月の早い時期に予定されていたが、それは、代表団のキャンプに酋長達が姿を現した前の 7 月の 31 日であった。彼らは、1768 年の **Fort Stanwix** での合意の中にあるように、直ぐに、開拓地が、**Ohio River** に設立されることを要求した。そこは、昔の境界線であり、政府が、そのことに合意をするどんな機会もなかった。代表団は酋長達が、少なくとも、合意するための基準を構成するような何か新しい提案をしてくるだろうと考えて、もう二週間待っていたが、しかし、インディアン達からの、ただ単に出てきた言葉は、彼らの要求の繰り返しだけで、この時は、文章になった最後通牒だった。愛想が尽きて、代表団は戻ってしまった。

このようにして、注目すべき Sandusky の会議、ここから Jefferson、そして、Washington、ならびに、Knox は沢山のものを経験したが、その終わりに、一つの単純な会話以上のものではなかった。戦争—Washington は、彼が北西部の開拓者たちを安全にするためにできる最後の、そして、最も好ましい努力だと認めていた最高潮の努力、これ以外に頼りにするものは、今や、なかった。

時は秋の軍事行動には既に遅すぎた。Wayne が、合意ができなかったと言うニュースを聞いた時、彼は、彼の 3000 人もの兵士達を For Washington から、St. Claire の古いルートに沿って、彼の古い友人であり、そして、独立戦争当時の指揮官であった Nathael Greene の栄誉にちなんで、Fort Greenville (あるいは、Greeneville) と名付けた砦を建設した、Maumee の南西の支所に到着するまで、行進をさせた。そこで、彼は、彼の士官たちの間での、義務の不履行、服務期間の満期、そして彼の下士官たちの兆候となるような騒動と言ったものに悩まされ、ただならぬ冬を過ごした。

こうした困難にも拘わらず、Wayne は、彼の卓越した技能を持って彼の軍事行動を遂行した。彼は、Little Turtle が、彼が経験した数少ないもののひとつである、戦略的なくじりに引き込まれるような、故意に送らせる戦略を取った。1794 年の春に、Wayne を孤立させる絶好の機会の代わりに、Little Turtle は、突然、6 月の 29 日に、Fort Recovery と呼ばれる駐屯基地を攻撃した。これは、大きな痛手を被り、そして、有能な沢山のインディアンが落胆をして、彼らの故郷に帰ってしまった。

このくじりの後、Little Turtle は、彼の身に着いた洞察力で、今度は、インディアンの部族を白人達の資源や財産に目を向けさせ、そして、彼は、究極的な勝利を見越した。彼は、イギリスからの継続的な支援を確かなものにしようとしたが、しかし、彼らは既に頻りに議論していて、誰も約束を守る気はなく、ほんの僅かの補給をするにとどまっていることに気付いた。こうして、Little Turtle は平和を支持し始めた。彼は、他の酋長達を説得させるのに、彼の眼を見得るような雄弁術を懸命に屈指したが、しかし、彼らは既に彼の成功を誇りに思っているだけで、何も聞こうという雰囲気ではなかった。

それは、彼が彼らにもたらしたたくさんの勝利と賢い指導力に対するあまりにも情けない仕返しであったが、その拒絶は、Little Turtle の不運な個性なかでの良い結果の部分であった。彼は、ほかの酋長達の間には人気がなかった。背が 6 フィートもあり、気難しい性格で、彼の周りの彼よりももっと土着的な者に対しては、彼らを軽蔑して取り扱うような、横柄で、気まぐれなやり方で、辺りをうろついていた。多くの例外的な酋長達のように、彼が白人達としばしば接触していたことが、彼を二つの文化のどちらともつかない中間的なところに置いていた。St. Clair の大虐殺では、彼は、鹿の皮で出来たレギングとモカシン、彼の太ももにまで垂れ下がっている青いペチコートをついていたと言われ、ヨーロッパ風のチョッキやシュルトウを着ていた。彼の頭には、200 以上もの銀製のブローチで飾られたインディアンの帽子、これは、背中の中分くらいのところまで、届いていたと言われるが、これを被っていたと報告されていた。耳飾りの二つの輪は、うえの部分には、一ド

ル程度の大きさの三つの銀製のメダルで出来ていて、下の部分はクォーターであった。こうした新しく工夫して作られたものは、彼の耳から 12 インチくらい吊るされていて、そうして、鼻には、“素晴らしい恰好をした” 三つの宝石を付けていたと言われた。

彼に従っていた酋長達は、そんな優雅なものに嫉妬心を抱いていたのかも知れない。どんな場合でも、彼らは、冷ややかにさげすみながら、彼の平和を作る忠告に耳を傾け、そして、直ぐに **Little Turtle** は、議会での彼の高い地位と、と同時に戦士の中での指揮権を失ってしまった。このようにして、インディアン達は、差し迫っている敗北から彼らを救ったかもしれない一人の男から、自分達を取り戻した。彼の地位は、あまり実行力の無い酋長の **Turkey Foor** にとって代わられた。

一方、**Mad Anthony** は、もっと忍耐強く、彼がいつものようであるよりも注意をしながら戦闘の準備をしていた。彼は、イギリスをなだめる努力を払い、それにより、彼らは、インディアン達が確信していた、そして、それを、**Little Turtle** は、酋長達の間でただ一人、飽きられていたものであるが、その助けの手を差し伸べなかった。彼は、彼が、近づきつつある対決のために集めた、2000 人の部族の者達を助けるために、**Turkey Foot** が、極わずかのカナダの市民軍と志願兵を募ることだけが出来るようにうまくやった。

二つの敵同士は、**Fallen Timbers**、大地が、野性の混乱の中で木々がなぎ倒されて荒れ放題になっていた、多分、これは竜巻によってなのだろうが、そして、それは軍隊が隠れるには絶好の場であったが、そう呼ばれていたところの、**Maumee** の急流に近いところで、相対した。

これらは、**Wayne** が一瞬の思いつきで連れて来た無経験の連隊ではなかった。他の野性的に満ちた指揮官たちの常識的な、そして、致命的な失敗をどうやって避けるかを模索しながら、彼は、彼がインディアンの敵に対して森の中での戦闘で知っている限りのものを、彼らが、手際の中でも完璧にそれをこなすまで、非常にうまく部下たちに教え込んでいた。

Fallen Timbers に辿りつくると、彼は、彼は、インディアン達の戦争の本のなかから一ページを取り出し、(戦争のやり方から一案を思いつき)、彼の攻撃を遅らせた。**Turkey Foot** は、直ぐに襲撃あるものと予測し、自分の兵士達を三日間の間、いつでも戦争ができるように準備させておいた。その時まで、彼らの大部分が、彼らの空いた腹を満たすために、ほんの僅かの気を緩めなければならなかったが、その一方、そのほかの者達は、半分飢えた状態で、後に残っていた。そして、驚きの、インディアン達の武力の絶好の機会を使い、**Wayne** は、突然、瞬間的に組織の乱れた野蛮人たちに襲撃を加えた。

結果は、大混乱と逃げ回りであった。**Wayne** は、指揮官たちが、彼らが負けた時には安全地帯とすることになっていた **Maumee** のイギリスの砦の門の方に、インディアン達を追撃して行った。指揮官たちが門を開ける事を拒んだ時には、なんとも悲しいことに、インディアン達を拿捕したにちがいない。たとえ、彼らか砦の策の外に、許しを請いながら、立ち往生したとしても、**Wayne** の部下たちは、やって来て、そして、情け容赦なく彼らを切り倒したに違いない。



Anthony Wayne 将軍

それは、インディアン達にとっては、血に溢れた敗北であったし、**St. Clair** の時よりも、もっとずっと決定的だった。**Wayne** は、絶った 18 人の部下を失っただけで、100 人程度が負傷したが、一方、インディアンの損失は、何時ものように決して明らかにされなかったが、悲劇的に大きかった。そのうえ、自尊心を傷つける様な敗北は、それまでにはなかったようにインディアンの精神を壊してしまった。それは、それから気持ちを取り戻した **Ohio** 連合の 20 年も前のことであった。最後の、粉碎すべく一撃を加えるために、**Wayne** は、インディアンの住居をすべて焼き払い、穀物倉庫を破壊し、彼らの土地の 5000 エーカー以上を荒らしまわった。

外交的手段に転じると、彼は、それから、打ちひしがれた酋長達に、彼らの動機は、全く望みの無いものであり、そして、さらにその上に彼らは断固とした平和の協定に署名するように説得した。勿論、彼は全く正しかった。**Jay** は、大英帝国との協定を決心し、インディアン達はイギリスからのいかなる助けはもはやこれ以上ないと予測したに違いなかったし、**Wayne** は的確に議論し、そうした援助なしに、彼らは、新しいアメリカの政府と戦う希望を持てなくさせたに違いなかった。

完全に気落ちさせられた酋長達は同意した。1795 年の 8 月 3 日に、1100 人の酋長達と瀕死たちが、**Fort Greenville** にアメリカの平和委員会とともに集まり、そして、現在の **Ohio** 州の全てと、**Indiana** 州の一部を含めた領域を割譲する平和条約に署名した。

Little Turtle は、その協定に署名した中の一人であったが、しかし、彼には、彼の弁明のなかに何の喜びもなかった。それは、彼が署名した最後の協定ではなかった。ちょうど良い時に、彼は、**Harrison** 大統領のための平和をつくる仲介者となり、最期には、彼らが彼の領地をもった、その時には彼の不正行為を忘れてしまう、まさに、そんなつもりでいたアメリカ人達の間での評判のよいインディアンの英雄となった。彼は、あちこちを旅し、そして、フランスの哲学者の **Volney** やポーランド人の英雄の **Kosciusko**、彼は、彼に贈り物をあげていたが、そうした、他の有名人達との会合をしながら、有名人の何某かになった。彼は、1801 年のある記念すべき日に、**Baltimore** で、友人たちの委員会の前に現れて、インディアンの国にウィスキーが持ち込まれるのに抵抗して、雄弁術と言う彼の贈り物を良く使っていた。

彼が、白人の男達のやり方に似てくると彼自身について来た人達に対する影響が、おかしくなってきたが、それでもなお、彼は、**Tecumseh** 連合、これは、インディアン戦争の次の段階のものであるが、これに参加する時から **Miamis** 族を支配する力を保持していた。彼の白人達との協調は、彼に良い結末をもたらさないと予言していた酋長達は、正しいものであると証明した。最終的に、**Little Turtle** は、白人達の病気の通風の病人となり、そして、**Fort Wayne** での軍医による手厚い看護にもかかわらず、1812 年の 7 月 4 日にそれではなくなった。(あるいは、その合併症と言ったほうかもしれないが)

Greenville の協定は、Old Northwest でのインディアンの抵抗で終わりを遂げた。長い戦争での混乱した状況があちこちにみられるようになった。しかしながら、Fallen Timbers での決定的な戦いがおこなわれた場所で、インディアン達が最後の言葉―それは、白人の入植者達から出たものであったにしても、をするようになった。1885 年の 8 月に、Ohio の Toledo の近くの戦場に、Michigan, Indiana、そして、Ohio から 5000 人の人達が集まった。彼らは、記念碑を建てる日を決めた。それは、彼らに記念碑は、Turkey Foot が倒れて亡くなったその場所に建てるべきだと宣言をさせた、遅かりし良心の呵責からのものだったのだろうか？ それは、誰にも分からない。

8

TECUMSEH と 彼の戦争

Fallen Timbers の Turkey Foot と共に闘った勇者のひとり、Tecumseh—インディアンの言葉では、“かがんでいるトラ”を意味する Tikamthi、あるいは、Tecumtha という名前の Shawnee であった。かつては、Joseph Brant、彼はその当時は既に、リタイアしカナダにいたが、その彼のものであった指導の権力が彼の手に渡った。Brant は、Six Nations が Ohio Valley の彼らの仲間達と連合することを、どうしても説得することが出来なかった、そして、Tecumseh は、このことが、彼に従う者達の究極的な敗北の主たる原因であると考えていた。Mississippi Valley の南から北までの全ての部族を取り込んだような何か、強力な連邦—それは、インディアン達の最期の、そして、白人達の溢れる勢いの湧き上がってくる移住に対する最も望ましいものであった。そう、Tecumseh は信じ、そして、その夢に向かって、彼は自分の素晴らしい才能を捧げた。

Tecumseh は、通常の部族の大首長ではなかった。彼は、時と場合によって、半ダースの他の酋長達に対して、気前よく与えられた称号でもある“これまでいた最も素晴らしいインディアン”と呼ばれたが、しかし、いかなる場合も彼は、あっぱれな、壮大とさえも言える風采をしていた。

例の通り、彼の誕生の状況、それは、1768 年の頃の事であるが、あまりはっきりしていない。ある識者は、彼は Ohio の Springfield の近く生まれたと言っている；インディアンの伝説では、それは、Old Chillicothe だと、言っているが、しかし、彼の母親は、多分 Shawnee の者で、彼の父親が、1774 年の Point Pleasant の戦いで死んだ Shawnee 族の酋長の Puskisinwa であることに疑う余地はない。Tecumseh は、彼自身、当時非常に若い少年ではあったが、彼は、イギリス人と共にしていたと言われている。

独立戦争のあと、Tecumseh は直ぐに、戦闘士としてばかりではなく、ある種のインディアンの政治家としてもまた、傑出した人物となった。彼は捕虜たちの拷問することにどんな役割も拒絶し、そして、それが普通とてもむごたらしいものであったが、もし彼がそれを阻止することができれば、容赦をしたり、あるいは許したりしなかったのも、入植者達でさえ彼を称賛していた。彼は、白人達からも、また、インディアン達からも、彼は非常に信頼され、広く知られていた。

Tecumseh は兄弟、多分彼の双子のもの、彼は、全体的には、彼と余りにていなかったが、がいた。預言者として知られた、Elkswatawa は、神秘的であった—自分は、部族主神と話をし、自分で奇跡を起こすことが出来ると主張する独眼竜の狂信者だった。Tecumseh は、気品が高く、畏怖の念を起こし、尊厳のある弁舌者だったが、一方、預言者は、彼の言っていることにはそぐわない様な墮落した顔から発する暴露する半分ヒステリックな声で話をする飲んだくれの非現実的な思考にふけている者だった。Shawnees 族、彼が取り仕切



捕虜たちを助けている Tecumseh

っている者達であったが、彼らは、彼の超自然的な力のなかでほとんどないようなものを取り上げていたが、彼は、どこでも広く信じられていた。この予言者は、事実、彼自身の部族の中では、正直ではなかった。

こうした男たちはともに血の繋がり以上の何を持っていた。Tecumseh は、兄弟のなかに伝統を維持するものを見ていた。どこでもインディアン達を彼らの伝統と、そして、それを維持して行く事の必要性を自覚させる昔ながらのやり方で、予言をする男である。予言者は、彼としては、巨大な連合の Tecumseh の考え方のなかに、疑いもなく聖なる戦闘を、思い描いており、彼の兄弟を、そうした者をすべて可能にすることのできる真の指導者だと信じていた。

こうした二人は、Indiana のなかの、Delaware 村にしばらく住んでいたが、1808 年に、白人の入植者達の圧力が、彼らを Tippecanoe の河口近くの Potawatomes 族とか、Kickapoos 族たちの居る、インディアンの領域にまで、遠く押しやった。彼らは、街を作り、その街は、Tippecanoe と呼ばれていたが、しかし、後には、Prophet の町と呼ばれるようになり、そこでは酒が禁止され、そして、伝統的なやり方が、気の荒い Elkswatawa によ

り、ほめそやされた。

白人の入植者達は、兄弟の連合を誤解することから始まった。彼らは、Elkswatawa を、おそらく、Delaware の預言者の影響なのかと思われるが、彼を恐れられるべき、そして、警戒されるべき男として認識していた。彼等、疑いもなく、兄弟が Tippecanoe で設立しようとしていた Spartan life により印象を受けていたが、それで彼らは、住民たちにラム酒を飲むことを慎み、そして、彼等が獲得したものの上で生活する非常に働きの農民となることを説得することで、考えられないような成功を納めたと報告されている。

Tecumseh は Tippecanoe で、ほとんど過ごしていたわけではなかった。彼は、Wisconsin、そして、Minnesota から、メキシコ湾に至るまでの連合の考えの価値を説きながら、旅を続け、そして、何時も合衆国とイギリスの両方の指導者達と、全てのインディアンの目標を議論していた

彼は、とても印象的な風貌をしていて、そして、自分のいう事は論理的だった。Tecumseh は、土地というものは、どんな一つの部族の所有物というよりも、常識的にインディアンが所有しているのであり、そのため、全ての部族が同意しない限り、合法的に販売したり、あるいは、譲渡することのできる土地は、どこにもないと言う態度をとった。彼が指摘した、Greenville の協定は、この冴えたる証拠であり、そこでは、政府は、集合した部族たちと合意し、そして、彼らの全ての者に対して、人間として、そして、白人達に譲渡されなかった土地を保証していたからである。

白人達は既に、彼らはこのみなし方に間違いのあることに気づいていた。William Henry Harrison、それから、Northwest Territory の統治官は、彼らが、Vincennes の役所に来た時に、彼は、“直ちに、Greenville の協定により認識されているものと見られる、インディアンの部族の間での土地にある利権の共同体は、異議を申し立てられるべきものだ”と認識するよう”率直に説明された。両方がともに意思の堅い者同士であり、彼らは、お互いに、その国の彼らの側では、非常に重要な人物であると認識していた。

Tecumseh の気持ちは、土地の所有権についての昔の議論からは、かなりかけ離れていたところにあった。もし、インディアンが、彼らの常識的な利権の中で、合同できたなら、彼らは、北の地域にあるイギリス系カナダと東の合衆国との間の緩衝領域となるような Ohio Valley と五大湖の中心地に、彼ら自身の町からなる彼らの偉大な国家を設立することが出来ると、見通しを立てていた。それは、何も新しい考え方ではなかった；多くの白人達が、既にそのことを考えていた。しかし、それは、考え方としてはあまりにも高貴であり、あらかじめ、失敗するものと運命を定められていた一合衆国が望んでいた鍛錬に彼ら自身を服従させるという事に関するインディアンの持つてうまれた無能力さによるばかりでなく、何事たりとも留める事の出来ない、アメリカのナショナリズムの抵抗できない力によるものであった。Tecumseh の壮大な計画に対して言われたに違いないほとんどは、白人の市民権に適合するためのインディアンの最初の試みを代表するものであるという事だった。もし、それが、小さな白人社会の間で継続だけでもできたら、インディアンは、お

そらく、自分達が白人達によりたらしめられることから救えたのではないかと、そして、最終的に、破壊されることから逃れられたのではないかと、Tecumseh は信じていた。

Tecumseh の仕事の別の欠点は、彼のイギリスに対する根深い誤解であった。彼は、彼らのインディアンに対する長い友好の絆は、彼らを新しい合衆国を支援し、その境界線を尊重させるようにすると考えていた。彼らは、インディアンがアメリカ人に対して騒乱を起こすかも知れない、そして、このようなことが彼ら自身の拡大に寄与することになり、そうしたどんなことをも歓迎するという事が彼らの利益に適合することから、彼がそのように信じることを認めていた。二つの国の間の論争は、まだ、落ち着いたものとはなっていなかった；彼らは、1812 年に極短い戦争状態にあり、無意識に、Tecumseh は、その切迫したドラマのなかの一部を演ずるような立場に置かれた。イギリス人は、彼を彼らが何時もインディアンを利用するように、彼を利用していった；彼らは、彼の基本的な計画には、何時でも真剣ではなかった。

Tecumseh 彼自身は、言わずもがなの信念を持っていた。彼は Pontiac、そして、彼以前の Joseph Brant の例を見本とし、そして、彼を駆り立てるために彼の兄弟の熱情と熱狂の何かをもっていた。“それは、私の決意だ。私は、全ての赤人を一緒にするまで、その歩みを休める様なことはしない。”と、彼は統治官の Harrison に話していた。既に、Tippecanoe で、一千人の Shawnees 族、Declarers 族、Wyandots 族、Ottawa 族、Ojibwas 族、そして、Kickapoos 族の者達の中心となる者を集めていた。村から、統一と反乱を呼び起こす声を張り上げながら、各地を飛び回っていた。一人の白人の観察者が、彼の声は、“群衆に……鳴り響き続ける雷のごとく、彼の言葉を投げつけているように見えた。”と報告していた。

1811 年の統治官の Harrison は、注視しなければならないのは、彼の兄弟ではなく、Tecumseh 自身だと推断した。“Tecumseh の追従者たちが、彼に対して盲目的に服従し、そして、尊敬しているのは、”と、Harrison が書いていたのは、“それは、実に驚くべきもので、しばしば、反乱と、物事の既に確立された序列を引っくり返すことを、呼び覚ます、そうした非常識的な非凡な才能の一つを彼に求める、ほかのどんな環境より、それ以上のものである。もし、それが合衆国の近隣のためでないなら、彼は、多分、光栄のメキシコ、あるいは、ペルーでの好敵手で有る様な帝国の基盤となるだろう。何も、彼を妨げるものはない。”と言うことだ。

このときまで、Tecumseh の衰えない情熱が、彼の計画を完成の間近に組織化された反旗を翻すようにさせた。もし、彼が、それ以前にイギリスのことを、ただ、もっと確かにしていたら、そして、極わずかの、動揺している部族を取り込んでいたなら、直ぐに攻撃に出ていただろう。彼との合意を断念した Harrison は、気持ちを元通りに戻し、そして、彼が約束したように、個別の部族との譲渡の別々の協定を作る事により、Greenville の協定の手紙を書くのに忙しかった。1811 年までに、彼は、彼らのなかの、すくなくとも 15 の部族と合意していた。

イギリスの援助を確保するために、Tecumseh は、しばしば、カナダに相談をしに行き、

そして、イギリスは、武器、弾薬、そして、衣類の贈り物をして彼の計画を支持していた。こうした援助に対し、Tecumseh は感謝していた。彼は、1810 年にイギリスに対して、“あなた方、父、は、我々を育み、そして、子供から育ててくれた。我々は今では立派な大人であり、そして、自分達が、自分たちの手で、自分たちの土地を守る能力があると思っている。”と話していた。

部族に対して、イベントはクライマックスに差し掛かっていた。1809 年の 9 月 10 日の統治官 Harrison の Delawares 族、Potawatomies 族、Miamis 族、Kickapoos 族、Wea and Eel Riber の部族との協定の中に、結果となる激発の来歴が横たわっていた。それは、傲慢な横領であった。ほんの僅か、たった 8200 ドルの現金と、別に、2350 ドルの年金で、Harrison は、Wabash に沿ったえりすぐった狩猟の領地 3,000,000 エーカーを手に入れた。Tecumseh と彼の兄弟は、この厚かましい詐欺に腹を立てたが、しかし、彼らの抵抗は無駄だった。Harrison は、穏やかに、Shawnees 族は、この取り扱いには含まれていないと指摘した。彼は、そのことについて Tecumseh と話をすることに賛成していた。

彼らの会合は、1810 年の 8 月 12 日に持たれた。一人で来るように言われ、Tecumseh は、300 人の勇士、武器、そして、準備も持っていく代わりに、Harrison が二つの市民軍の組織を対応して誇示するまでに、Vincennes で大きな警告の原因となったものを誇示して現れた。にもかかわらず、会合は、この不吉な始まりの後、全く生産性の無いものであった。Tecumseh は、最初の日、かなり厳しかったので Harrison が、しゃにむに出て行って、出直して来いと話した、演説を行った。次の日には、彼はもっと大人しかった。統治官は、彼を、大統領に対する彼の不平に留意すると約束してなだめ、そして、その返事に、Tecumseh は、もし、Harrison が、インディアンに土地を戻すのであれば、これを条件に、彼は、自分がアメリカ人と同盟することに賛成した。

勿論、統治官はそんなつもりは微塵もなく、しばらくの間、状況は依然と全く変わらなかった。1811 年の春に、しかしながら、落ち着かない Tippecanoe の住民たちが、孤立した 2~3 軒の家を略奪し、沢山の家に盗みに入り、そして、恐怖を覚えさせるような、古い開拓時代の策略を実行し始めた。Harrison は、もし、こうした略奪行為が止まないのなら、街全体を掃射すると警告し、そして、Tecumseh が、事を鎮めるために Vincennes にやって来た。彼は、今一度、政府が土地を返還するように要請した。

彼が分れたときに、入植者達は、Harrison のすばらしい知的な公務によって、彼が、何とかして、Creeks 族、Choctaws 族、そして、Chickasaws 族を彼の同盟にしようと南部に行ったことに素早く気づいた。この知識は、入植者達に引き続いてもっと警戒しているように警告した;彼らは Harrison に Tecumseh がいない間に攻撃するように懇願した。彼は、既に合衆国政府から、彼の裁量で決断し、行動を取る権威を与えられていたので、それは、統治官が必要としていた勇気を奮い立たせる全てのものだった。

数年のあいだ、多くの歴史家たちのあいだでさえ、預言者が、彼の兄弟がいないときに、Tecumseh の希望をこのように台無しにして、白人達を攻撃したと間違っ信じられていた

が、しかしながら、このことは、Harrison が、攻撃を扇動し、そして、実際に、もし、預言者が彼を予期していなかったのなら、最初に攻撃したのは、彼のほうだった。1811 年に Vincennes から出発した探検隊に積極的な意図以下の攻撃などされはしなかった。その兵力は、少なくとも、900 人であった；250 名の第 4 合衆国歩兵連隊の正規兵、60 名の Kentucky の奉仕部隊、600 名の Indiana 志願兵、それに、270 名の馬に乗った竜騎兵とライフルマン達であった。

彼は、Terre Haute の今の場所に彼自身の名誉を称えて名づけられた砦を築くのに、一端停止しながら、Wabash Valley を通り過ぎて行った時に、Harrison は、予め預言者に、明らかに盗まれたものとわかるような財産の返還と、そして、殺人の責を課せられたある人数のインディアンの引渡しを求める書簡を送った。Harrison の伝達者、二人の親友の Miamis 族の者であったが、彼らは、戻って来なかった。

Tippecanoe から見えるところで、11 月の 6 日に、軍隊は止まり、そして、和平交渉が行われた。預言者は和平について語り、そして、合意の進行している間、軍が、彼らのテントを張ることが出来た近い場所にキャンプの場を Harrison に提示した。Harrison は馬鹿ではなかった。彼は、荷物と補給物資を真ん中に置き、連隊は、それを取り囲むように、二つの曲がった隊列を組んで雑然と広がり、その後に歩哨兵を適当に配置するという、戦闘体制でキャンプを張った。

彼らは、賢明に予備的な警戒をしていた。夜が明ける直前に、預言者の戦士たちが二つの場所の隊列を攻撃し、そして、二時間の間、激しい、血の流れる戦いが続き、その間、彼の戦士たちをしっかりと対応するように奮い立たせようと、馬に跨り動き回っており、預言者は、安全な場所で、多分、勝利を確かなものにするような効果のある魔術を造りだそうと岩の上に座っていた。

昼間の間一杯で、戦闘が終わった。Harrison 側の損失は、全く深刻であった—61 人が殺されたか、あるいは、亡くなり、127 人が負傷した—がしかし、インディアン達のほうは、数えきれなかった。動けなくなった者、多分、それは、彼らの死、あるいは、負傷者の数ではあったが、その数はアメリカ軍のものよりもぬきんで多く、全くの負け戦だった。彼らは、追い払われ、散り散りにされ、そして、あちこちに散らばっていった。預言者は前の晩の儀式で、彼は、白人達の鉄砲の弾を引き寄せ、そして、それをそれで傷つけないようにすると約束し、誓約は確かなものであるので、話が進み、彼は、若い勇士たちが、彼が決して意図しないような攻撃をすることを阻止する事ができない形となった。これは疑問となっていたのかもしれない；真実は、多分、預言者の狂信は、彼をずっと遠くに連れて行っていたのだろう。どのような出来事でも、Tecumseh に追従するものたちは、にわか信頼の喪失に苦しんだ。彼らはまた多くの人を亡くし、多くの死人を彼らの後に残して行った。そして、彼らは自分達の村を、そして、大地を全てのものが、Harrison の侵入してくる連隊の慈悲深さに関わるような形で残して、荒らしてしまった。

狂った Anthony Wayne が、かつて彼の前でしたように、Harrison は、その機会の有利



Tippedcanoe の戦い

なことを完全に実行した。彼は、夏の干ばつが穀物を駄目にし、動物の獲物達を追い払ってしまったので、これは第二の大打撃になったのだが、目に入るあらゆる用品と家々を焼き払った。Tecumseh は彼の大襲撃のために必要となるだろうと注意深くその日に備えて節約していたものが、一晩でなくなってしまった。

彼が南部から戻って来た時に、Tecumseh は、まず、激怒し、そして、深い落胆に落ち込んだ。彼は、公にはそれを Harrison に転嫁していたが、全てのあったことに、彼の兄弟を咎めた。彼は、“我々は、これまで誰に対しても、直接的にも、あるいは、間接的にも、我々の白人の兄弟たちに対して戦争をするようなことにアドバイスした……。統治官の Harrison は、私の居ないときに我々に対して戦争を仕掛けてきた……。その時、私は家の中に居て、そこでは、その時に一滴の血も流されなかった。”と言えるものは、誰一人いないと、直ぐ次の 5 月のインディアンの指導者たちの会議で熱烈に断言した。

しかしながら、受けたダメージを修復しようと言う試みは無駄であった。彼の同盟の中軸であった、Tippecanoe の何千もの戦士たちは散り散りになってしまった。連合の他の有力なメンバーたち、最も信頼のおける友人たちでさえ、もはやだれも武器を取ろうとしなかった。統合の政策の夢は無と帰してしまった。それは、彼の兄弟が、Tecumseh が出発し

ていく前に彼に与えた、どんな理由があるにしろ、Harrison との戦闘に彼自身を引き込むようなことはするなという、独特な警告を無視したからだった。迷信と狂信が、政治的手段に勝ったのだ。

すっかり希望をなくし、そして、落胆して、Tecumseh はカナダ、そして、彼のイギリスの友人のところへの旅の徒となった。そこで、彼は、1812 年の戦争の時に、目を覚ました。市民軍としての彼の能力に類まれなる評価をしていたイギリスは、直ぐに彼を准将として採用し、Tecumseh は、きらびやかな制服を着て、とうとう、非常によく訓練された連隊の指揮官として登場した。

彼は、イギリスのために非常に良く戦い、そして、部下たち、白人にしろ、インディアンにしても、彼らを華々しくさせた。いまや、五大湖から Ohio Valley へとつながるインディアン達が、イギリスの大目的のために、彼らの友人が、先祖たちが狩猟をしていた大地、そして、その昔、維持していた所のそとに今度は、彼らの友人がアメリカ人を先祖たちが狩猟をしていた大地、そして、その昔、維持していた領地の外に追い出してくれると信じ、もう一度、膨大な数で一緒になった。Tecumseh もそれを信じない訳にはいかず、さらに、彼の夢を再び呼び起こす唯一の希望として、それに、すがりついた。

1812 年の夏おそくに彼は、勇猛な年寄の兵士である、Detroit のアメリカ人の指揮官である、William Hull が Fort Malden、ここは、イギリスの川南に横切る基地となっていたところであるが、ここを占領すると言う計画を妨げた。イギリスの軍隊と、インディアン達を指揮しながら、Tecumseh は、Hull が Thomas Van Horne 少佐の支配下に送り出した 200 人の男達の素晴らしい待ち伏せ隊を打ち破り、と同時に、将軍から、彼の軍での義務不履行の不平を言っている戦闘部隊へと派遣されたものたちの一群を捕獲し、彼らをしたたか打ちのめした。こうして派遣された者たちは、とりわけ、Tecumseh の優勢には意味のあったもので、Ontario の統治官の Isaac Brock 将軍、彼は短時間の攻撃で、なんども Tecumseh の援助でここ、デトロイトを陥落させた。

1813 年の春の戦争の運命が、Tecumseh にもう一度、彼のかつての宿敵である Harrison 将軍と相対することをもたらした。戦闘の尾が切って落とされた数か月の間、荒廃による荒廃に直面して、アメリカ政府は、Tippecanoe の頑固な英雄に向かい、そして、彼を Indiana と Illinois にあるすべての軍の指揮官に彼を据えた。と同時に、また、彼は、Tecumseh のような、准将にされた。

4 月 1 日に、Tecumseh は、たとえ短期間であつたにしてもあまり好きでなく、信用もできないようになったにしても指揮官となった Henry Proctor 大佐とともに Fort Malden に居た。Proctor は、Tecumseh の良い事務所を通じて、インディアン同盟を招集しながら、冬の間を過ごしていた；当時、そうした者の 1500 名以上のものが、彼の兄弟の Tippecanoe での不評を、完全に遠ざけることに失敗していた Tecumseh、ならびに、預言者の指揮権のもとで、Malden に居た。こうした勇者たち、ならびに、522 人のイギリス軍の正規兵、そして、461 人の彼の管轄下に居るカナダ人の市民軍の助けを得て、Proctor は、Harrison

が 1100 の兵士達とともに待ち受けている **Maumee River** にある **Fort Meigs** の攻撃の準備をした。

Proctor は、5 月の 1 日に砦を取り押さえたが、しかし、それは、イギリス軍を撤退させた、近くの **Fort Defiance** の軍により、2・3 日ののちに圧力を解かれた。**Tecumseh** は、戦うために留まっていたのだろう、がしかし、意気地なしの **Proctor** は、さっさとカナダに引き上げてしまった。

その途中、**Fort Meigs** の中に捕虜たちを確保することを認められなかったインディアン達は、逃げ場のほとんどない **Proctor** に対しての有利性を利用して、彼らの内の 20 名を捕まえ、その頭皮をはがしていた。彼らは、もし、**Tecumseh**、特質的にではあるが、彼が、それを阻止しなかったなら、彼らは、他の者を戦闘用の手斧で殺していただろう。しかし、その出来事が、インディアンを“利用する”と言う議論を再び、あちこちに巻き起こした。アメリカ人達は既にイギリス軍がそれをするに異議を唱えており、当時、**London** の野党は“イギリスの性質に相反するもの”としての施策であると述べ、自分達自身の軍に対して叫び上げていた。戦線の指揮官たちは、両方の側ともに、こうした宗教にかこつけた叫び声には、ほとんど耳を傾けなかった。彼らはどんなものであろうと必要なことはしたし、彼ら自身の創意工夫が相手を謀ることが出来た。

彼が、再び、**Malden** に戻ってきて、**Proctor** は彼を待っている強化策を歓迎していることが分った―彼の影響により、5000 人も数の数に上るが、北西部のあらゆる場所からの膨大な数のインディアン達であった。それが、彼がするであろうどのような計画であっても、彼を勇気づけるものであったことに間違いはないが、しかし、大佐はとりわけ用心深い人間だった。彼は、送らすことを相談していた。**Tecumseh** は、気が短く、そして、いくらか、軽蔑的な態度をとった；彼は、**Proctor** が何を待っているのか理解することが出来なく、そして、**Harrison** が、**Fort Meigs** で命令を残して行った **Henry Clay** 将軍を罠にかける、大胆不敵な計画を提案した。

この時、**Tecumseh** は、イギリス軍とインディアンは、**Fort Meigs** から見えない音の聞こえるところで、音を立てて戦っている振りをすべきだと、提案した。彼は、**Clay** の、輪の包囲軍が、別のアメリカ軍により攻撃されていると考えて、助けに出かけ、そして、用もなく粉々に粉砕されてしまうだろうと、考えたからだ。なんとなくしぶしぶであるが、**Proctor** は、この戦略を受け入れた。

7 月の 20 日に、イギリス軍とインディアン達の連合軍が再び、**Maumee** の河口に出てきて、そして、直ぐに彼らの仮想の戦いが、けたたましく始まった。**Tecumseh** が思ったとおり、砦の中の士官たちは、まんまと策略にはまった。全部がであるが、**Clay** だけは別だった。他の者達が彼に、外で戦うように彼らを指揮してほしいを嘆願している間、彼は、戦闘している音は本物ではないと主張し、門を開放するのを拒絶した。一時して、**Proctor** と **Tecumseh** は、断念しなければならなかった。**Shawnee** の酋長はとりわけそのしくじりで挫折させられたが、それは、彼がなぜ彼の計画がうまくいかなかったのかを知るすべがな

かったからだった。Proctor は乗っ取り、そして、今度は軍隊を Fort Stephenson、ここは、Sandusky River にあったもので、ずっと華奢な作りでできて居ると考えられていたのだが、ここを攻撃するために東に軍を移動させた。

Fort Stephenson は、George Croghan 少佐、彼は、僅か 22 歳で、Proctor の 400 人の正規兵と数百名のインディアン、彼らは、Tecumseh に従う 2000 名のインディアンに支援されていたが、これに対し、彼の部下として 160 名程度の守備隊を抱えた軍の正規兵であったが、その彼により指揮されていた。Proctor は、Croghan が、それだけ自分たちよりも大軍と対面したら、間違いなく直ぐに降伏すると予測していたが、しかし、この若い少佐はものともせず、イギリスの将軍が砦の一番弱いところ、そこは、Croghan がよく考えて、分らないような外観にした 6 ポンド砲を隠しておいた所だったが、ここを攻撃して来ると待ち構えていた。

彼が予想したように、攻撃が開始された。“私の勇者たちよ、見張り番を蹴散らせ。忌まわしいヤンキーどもに情け容赦するな。”と叫びながら、Short 准将がイギリスの攻撃陣を恐怖の死に追い込み、6 ポンド砲から打撃を与えた。二回の砲撃で、氣力を失った攻撃陣を撤退させるのには十分だった。

再度、失敗させられ、Proctor は、Tecumseh の軍にとにかくあったが、しかし、酋長の下の戦士たちは、キャノン砲、これは、ライフルをつるべ打ちする様な攻撃よりもすごいものと考えていたものとは全く違った想像もつかないものであり、これに恐れをなしてしまっていた。Proctor も、そして、Tecumseh も彼らを砦の攻撃に出陣するように説得することが出来ず、イギリスの将軍は、彼のインディアンとの同盟をののしりながら、カナダに戻る準備をして、怒って野戦を止めてしまった。彼は、100 名以上の死傷者を出してしまった。Croghan は、1 人が亡くなり、7 人が負傷しただけだった。

Proctor は、この時で、もはや Ohio Valley にうまく侵入して行く事は出来ないと確信させられた。

アメリカ軍に関して言えば、彼らは、カナダに侵入して行こうという事は、少なくとも、彼らの海軍が Erie 湖の安全を確保する迄は、それは無駄なことだと判断していた。彼らは、退却し、Perry 准将がすぐに来ることになっている、1813 年の 9 月に指示の来るのを待っていた。Perry が、彼の有名な勝利に酔いしれている間、Tecumseh は、Fort Malden から、カヌーで抜け出し、そして、約束での最初の様相を確認しようと、ずっと遠くの Erie 湖に漕ぎ出していたが、しかし、彼は、遠くに、ぼんやりと船を見、彼らの砲撃の音を聞くことができただけだった。彼は、これから起こることを見極めるには、まだ、ほど遠い所に居るだけで、Proctor、彼は彼の派遣した者を通して悪いニュースを後に知ったのだが、その彼は、あえて彼に話をしなかった。彼は、当時大体 3500 名もの戦闘士になっていた Tecumseh のインディアンの軍隊が彼を見捨てるのではないかと心配していた。

イギリスの司令官は、Harrison が、260 名のインディアンの一群を含め、彼の思い通りにできる 10,000 人近くの者達を繰り出し、もう一度野戦をすることを話していたので、彼

が使う事の出来る連隊の全部を必要としていた。この悔りがたい軍隊は、Sandusky Bay と Port Clinton の間の Erie 湖にキャンプをしていたのだが、その上に、とてもよく抑制のとれたインディアン達の軍隊で、R.M. Johnson 大佐のもとに 1000 名の騎馬のライフル射撃の男達がいた。

彼らを分けていた狭い湖を横切り、彼が Harrison のまさに近づいた到着の事をよく考えたように、Proctor の生まれつき注意深い性格が彼に、Malden を焼き、そして、危険を避けて、東の方に撤退した方がよいと論じた。しかし、インディアン達にどう話したらよいのか？ 幻滅して、彼らは、彼と彼の部下たちを虐殺するかもしれない。彼は、Tecumseh に彼の考えていることを説明しようとしたが、しかし、その誇り高き酋長が Proctor の言葉を聞いた時、彼は、彼の望みの全ての名残を包みこもうとしていたへまな將軍のほうに向かい、痛烈な軽蔑をもって彼を鞭打った。

“あなたはいつも我々にはなした。”と彼は言い、“あなたたちは決してイギリスの土地から引き揚げてはならない；がしかし、今、父よ、我々は、あなたが引き揚げようとしているのがわかる……私たちは、我々の父のした処理を、尻尾を背中の上にあげている太った獣に例えなくてはならない、が、脅かされると、彼はその尻尾を彼の股の間に降ろして、逃げていく……あなた方は、鉄砲と弾薬を手に入れ、そして、それを彼の赤人の子供達に送った；もし、あなた方がどこかに行こうと言うのなら、それを私たちにください……われわれの生活は偉大なる神の手の内にあります。我々は、自分たちの土地を守る決断をしました。そして、もし、それが彼らの意思であるなら、我々は、我々の骨をその土地に埋めたい。”

しかし、Tecumseh の勇者たちは、彼の持つ負け魂の精神を持たされている訳ではなかった。彼らは、イギリスの支援なしに Harrison の軍隊と一線を交えるために残って居ようと言う意思はなかった。さらにその上、Proctor は、彼らにどこか別のところに行かせてあげると約束して、彼らをなだめていた。その結果として、Harrison の軍隊が上陸する、僅か 3 日まえに、イギリスは、Fort Malden を焼き払い、そして、撤退を始めた。

撤退は、Harrison が Proctor らの意図を見破るやいなや接近した追跡に変わった。イギリスは、インディアンの子供達によって、その動きがうまく取れなく、そして、彼らがインディアンとの同盟関係、これは二倍の危険があったが、この関係を諦めるか、あるいは、立ち止まるかのどちらかであること、そんな状況に直ぐに陥った。インディアン達は、Chatham で、一方を試していたが、一斉射撃の最初の交換で四散させられた身の入らない努力であった。

彼の厄介な矛盾の時間での間に選択をしながら、Proctor は、留まることが最古の悲惨なものになると決断していた。最後に立場の弁明のできない欠片を選択して、彼はそれを複雑なものにした。彼の軍隊は Thames River 沿いに Ontario に向かい北東のほうに逃げて行ってしまい、そして、彼は、ちょっとした湿地以外には見渡す限りほとんど自然の防御の無い Moravian Town の宣教師の村の近くに彼の戦闘部隊の隊列を作ると言う選択をした。



Thames の戦いと Tecumseh の死

結果は、全く信じられないようなものであった。**Johnson** 大佐は、疑い深く、そして、正統派の **Harrison** に、もし、合戦が騎兵隊の突撃で始まったのなら、戦争のルールは、取り返しのつかないような粉砕をされる様なことはないだろうと説得しながら、彼の騎馬隊のライフル射撃部隊の半分を、**Proctor** の序列を失ったような兵たちを粉砕する攻撃に突撃させた。他の半分は、彼は、**Tecumseh** のインディアン達を攻撃させた。イギリスの正規兵たちは直ぐに、制圧されたが、しかし、**Tecumseh** は、全く違った相手だった。

酋長は、湿地帯が彼にとってほとんど防御をしていないことの有利性を利用し、**Johnson** の部下たちは、馬たちが、堅い踏み場を見出すことが出来なかったので、馬から降りなければならなかった。戦闘は、最も死に物狂いの狂暴で残忍な形の接近戦となった。家族や仲間達が境界での戦闘の拷問や恐怖に長い間思い知らされてきた **Kentuckians** 族がいた；彼らは、頼まれも、あるいは、与えられずとも、人をやっつけようと狙っていた。インディアンに関して言えば、彼らは、当時はどこにでも行かなければならない男たちの破れかぶれで戦い、そして、疑いもなく、彼らは、**Tecumseh**、彼は、彼らと共に肩を並べて戦う彼自身の向こう見ずの勇氣、これに感動させられていた。

彼の夢のしくじりと、イギリスの不誠実さに後悔し、そして、敗北は避けることが出来ないと確信していた **Tecumseh** は、彼の命を戦闘になげうとうと決心していたと信じている人々がいる。もしそれが彼の意図であったのなら、これは、悲しいことに、満たされたものだった。彼は、闘争の激しい所で打ちのめされたのだ。彼が倒れるのを見ながら、イ

ンディアン達は、パニックに襲われ、そして、望みを失い、殺伐とした混乱に見舞われた。時がどうなっていくのかを見ながら、**Proctor** は彼のもつ経歴のなかで、それを彼は直ぐに諦めなければならなかったが、あわてて消し、そして、彼の障害のために森の中に隠した。

荒れ果てた戦場を、戦利品を求めてうろつきまわる、狂喜した **Kentuckians** 族の者が、それが **Tecumseh** ではないかと、彼らが考えた死体を見つけ、そこから、気に入ったものはなんでも、お土産として、あるいは、剃刀の革砥として、皮膚の細片を切り取っていった。後に、インディアンの生き残った人が、この物語に異議を唱え、**Tecumseh** の死体は、彼の部下により、その日の晩にこっそりと運び去られ、埋葬されたことを明らかにした。

このようにして、彼が生きた様にする者は誰もいな北西部の最期の偉大なる指導者が亡くなった。当時、彼を処理するために、合衆国は、5,000,000 ドルの費用をかけ、そして、20,000 人もの兵士を雇ったが、これは多分、頑なな意思を持った彼の亡霊をいくらか満足させたのではないか。しかし、彼は、それを達成するために彼があれだけ一生懸命に活動し、そして、長い時間をかけたあらゆることの侘しさに、ただ哀悼の意を表すことができただけだった。**Thames** での戦いは、北西部地域のインディアン達の敵に対して、都合よく、効果的に終結した。そして、当時、アメリカ人達は **Mackinac** 島にあるイギリスの出先以外の全てを管理するようになった。

しかしながら別の観点では、**Tecumseh** は、舞台に登場する新しい指導者と新しい軍隊をもたらした、不穏と憎悪の遺産を彼の後に残して行き、そして、新しいアメリカの政府の簡潔な歴史のなかに、別の不名誉な章を書いた。

9

クリーク戦争

Coosa 川と Tallapoosa 川が合流する地点、ここで、Alabama 川となっているのであるが、この北東 Alabama 地域に、Creeks 族の国があった。Washington の時代には、Creeks 族は問題ばかりであったが、しかし、Tecumseh が彼らを訪問するまでは、彼らは“素晴らしいインディアン”とみられるようになっていた。彼らは、ほとんどと言っていいほど、正直で、例外的なインディアンの代理人である Benjamin Hawkins 大佐の博愛的なルールの下で生活を営んでいた農民たちであった。

しかしながら、彼らは、Tippecanoe の戦闘の直前に、最初に訪れて来た Tecumseh の雄弁に抵抗することが出来なかった。彼が、彼らのところに同一民族の者としてやって来て、あとで権威のある者が、彼女は彼だけの部族だったのではないかと話でいたが、彼の母親はれっきとした Creek の者だと正直に話した。

ある一人の若い酋長、彼は Lake（五大湖）から、Gulf（メキシコ湾）にまで伸びるインディアンの大連合という Tecumseh の空想に感動させられたものであるが、彼は、William Weatherford という名の、インディアンの血が 1/8 だけ流れて、有名な男だった。彼は、ロマンティックな家系を自慢していた。彼の曾祖父の、Marchand 大尉は、フランスの国旗をメキシコ湾から Alabama まで持ってきて、そこに砦を築いた。故郷から遠く離れ、淋しくなると、彼は、自分と一緒に生活する Creek 族の少女を迎え（結婚したのか、側女であったのかは誰も知らない）、そして、彼女は Sehoy という美しい少女を彼のために産んだ。

Marchand は、彼自身の反抗的な兵士によって殺害され、Sehoy は、まさに手厚い世界にわが身を投じた。彼女は、Creek 族の酋長と結婚したが、彼女の父親の砦がイギリスの手に落ち、その若い Tait 大尉が、彼の愛人として、愛らしい混血児を迎えた。Tait が、ある日、放浪している裕福なスコット人の冒険家、Lachlan McGillivray を歓待していたが、その時、彼が、Sehoy に目をとめた。その彼が出発する時に、Sehoy は彼と一緒に Coosa 川のほとりに彼女のために McGillivray が建てた家に行き、贅沢な暮らしをするようになり、彼は、そこからとても儲かる毛皮の取引をしていた。

ある日、彼は、田舎暮らしのアメリカの田園風景に、そして、彼のために子供を産んだ現地人の愛人との魅惑的な家族に飽きが来た。彼は、全く突然にではあるが、全てを置き去りにして、スコットランドに帰ってしまい、二度と彼らの前に姿を表すことがなかった。彼の残したもののひとつが、非凡な息子、Alexander McGillivray で、彼は白人として育てられるべきだと言う、父親の盲信的な信条で Charleston の町で教育を受けた。

しかしながら、Alexander は、歴史家の Marquis James が言っているが、“ウィグナムの文化と、彼の血のなかのずっと深い所にある、フランスの都会風なところ、スペイン人の誤魔化し、スコットランド人の儉約性、そして、Creek 族の狂暴性と言った血筋の流れ



Andrew Jackson

一彼の自慢にしていたことは、彼の血筋のなかで **Yankee** の血に汚されていないという事であったが、これに回顧していた”のだ。彼の経歴は素晴らしいものだった；独立戦争、後には **Miro** の元で働いていたが、スペインの市民奉仕隊、そして、最終的には、**Andrew Jackson** の傘下に入って、そこでのイギリス軍の大佐、その一方で、彼自身を **Creeks** 族の主要な酋長として、そして、**Seminols** 族の守護神であるとした。1793年に彼が亡くなった時、彼は合衆国海軍の准将であり、そして\$1,000,000の財産を有する裕福な人であった。彼は、**Pensacola**、ここに彼は埋葬されているが、このスペイン人の紳士の庭で **Masonic** の葬式が行われた。

Alexander は、**Tait** という名の異父姉妹、彼女はスコットランド人の貿易商の **Charles Weatherford** と結婚したが、彼女を後に残した。彼らの息子たちが彼らの混血の先祖を理解できるような年に為ったら、その貿易商は、彼らに、二つの生きる道の選択権を与えた。一つは、白人として生き残り、歴史からたちどころに消えて行った **John** の生き方。そして、もう一つは、**Creek** 族であることを選択し、直ぐに、**Red Eagle** として、彼らの会議の中で名を成してきた **William** の生き方であった。彼こそ、**Tecumseh** の言葉を聞き、そして、彼の構想に目覚めた **William** であった。

彼の時代はまだであった。しかしながら、彼は **Creeks** 族のリーダーではなく、彼は誇らしかったけれども、**Tecumseh** 自身のように、勇気のある戦士であり、素晴らしい馬の扱い手であり、そして、背が高く。生まれながらにして品位があった。

1811年の10月に、**Shawnee** の偉大な男が、依然よりも、もっと雄弁になり、そして、魅力的になって、彼と共に彼の兄弟の予言者 **Prophet** を伴って戻って来た。数千名の **Creeks** 族の戦士たちが、**Hickory Ground** として知られている、二つの川が合流し、形成した半島にある部族の酋長達の村で、**Tecumseh** の話を聞くために集まってきた。インディアンの代理人である **Hawkins** 大佐、彼は、あまりにも **Creeks** 族のためにいろいろなことをし、其のために **Washington** の高官たちの恨みを買っていたが、その彼は、賢明にも、**Tecumseh** の影響で戦闘を起こそうとはしなかった。彼は、**Shawnee** の者が戦闘の踊りを指導し、そして、**Prophet** が、**Creeks** 族の祈祷師たちと忙しくしている間、ずっと静かにしていた。

この努力の殆どは、部族の大酋長達、彼らは北部地方のインディアン、この人たちは、結局は、彼らのために何もしてくれなかったのだが、その彼らとともに、彼らのたくさんの人達を投入することの徳をなんら理解することができない人達だったが、彼らのために無駄にされてしまった。しかし、若い男達、彼らの考え方は、既に、**Tecumseh** の伝説に心を捉えられていた者達で、彼の魅力的な存在に元気づけられていた。**Prophet** は彼の群衆の迷信を信じこませることで、彼の兄弟のすることを助けることに躊躇しなかった。彼は、イギリス人から夜空に彗星が出現することを教わってして、偉大なる魂が、彼らに戦闘に立ち向かえと言っているような、キラキラとひかる前兆が、決めかねている人に直ぐに確信させるだろうと言うようなことを言いふらしていた。

Tecumseh は、不注意にも、迷信に対するこの訴えを助けてしまった。**Big Warrior**、彼

は、著名な **Creeks** 族の酋長であったが、彼にワムパムと戦闘用の手斧の包みを挙げる中で、彼は、彼らが受け入れた時の不承不承さと臆病さを理解する手助けをすることが出来なかった。彼は、突然怒って、彼がいつもそうしている様に；“あなた方の血は純潔だ！ あなた方は、私の話を理解し、そして、ワムパムと手斧を手にしたが、でも、あなた方は、闘かおうとはしていない。私は、その理由を知っている。あなた方は、偉大なる魂が私を送り込んで来たということを信じていない。しかし、あなた方は直ぐにわかるだろう。ここから、私は真っ直ぐカナダに行く。私がそこに着いたら、そこで、私は大地に足跡を残すだろう、そして、この村の全ての家を揺れ動かすだろう。” と、大きな声で布告した。

それは、瞬時に心に浮かんだ、空虚な脅しであったが、しかし、一人のものが、彼の立ち去った直後に、この **Alabama** に地震が起きた時に、**Creeks** 族の狼狽を思い描いたのかもとれない。幸いなことに、沢山の疑問を抱いていた人たちが、直ぐに、戦闘用の手斧を取り上げる様な気持ちになった。

しかしまだ、彗星や地震、そして、**Tecumseh** の輝かしい弁舌にも拘わらず、**Hawkins** 大佐の影響は、**Creeks** 族の中では、戦争を決断するものはほとんどない程、強いものであった。あまりにも貧弱で、上手く働かない火器だったので、最初の攻撃の後には、弓矢、そして、棍棒に頼らざるを得ないような装備で、こうして集まった戦士たちは、彼らのなかで、4,000 人もいなかった。彼らは、ほとんど手におえそうもない程ではなかったが、しかし、彼らは辺境地の人達には恐れ多かった。

白人の男の警告は、非常によく調べられたものであることが分った。**Peter McQueen**、彼は混血の **Creek** 人で、350 名の部下を引き連れて、**Pensacola**、ここは、彼がスペインの政府から沢山の必要な弾薬を手に入れていた場所であるが、ここに向かって攻撃を指導して、平和を破壊する戦闘の火ぶたに切った。入植者達の集団が、インディアン達が彼らの故郷に戻る途中で、それを阻止しようと試みたが、しかし、彼らは **Burnt Cork Creek** で敗北した、そして、勇気づけられた **McQueen** は、もっと沢山の弾薬と補給物資を求めて戻っていった。

当時、**Weatherford** は、**Creeks** 族の統治権を想定していて、直ぐに、それは、全てが彼のしたものであったという訳ではなかったが、ある行為をしでかし、それが余りにもひどく残虐なものであったので、ささいな森での戦いだったものだが、これが、アメリカ合衆国政府が正式な対応をするきっかけとなった。

Florida の国境から少し北に行ったところにある **Alabama River** の川沿いで、大体 500 名くらいの人達が、**Samuel Mims** という **Creek** 族の混血のものの、砦もどき家でインディアン達からの恐怖から逃れようとしていた。かなり仰仰しく **Fort Mims** と呼ばれ、そこは。別の混血の者である、**Daniel Beasley** 少佐に指揮された 70 名の **Louisiana** の市民軍により守られていた。その避難民の中には、裕福な混血人である農園主、白人の農民の団、そして、僅かの **Negro** の奴隷たちがいた。

Weatherford は、1813 年の暑い 8 月の 29 日に **Fort Mims** に接近した。高い草むらを忍



Mims 砦の虐殺

び寄ってやってくる野蛮人たちを姿をちっと見た、防御柵の外に居た **Negroes** 族のものが、彼らの目にしたものを報告したが、しかし、**Beasley** は彼らを嘘つき者呼ばわりし、彼らをむち打ち用の柱に縛り付け、次の日にはひどいむち打ちをするように命令した。

30 日、この日はとりわけ暑い日であったが、その日の夜が明けた。**Mims** の全てのものが緩慢で、そして、気楽な状況にあったが、たった 400 ヤードの離れた場所で、**Weatherford** と 1000 人の **Creek** 族の戦士たちが、草むらに隠れていた。昼の食事を付ける太鼓が叩かれた時、これはまたインディアン達に対する合図でもあった。狂暴な叫び声をあげながら、彼らは砦を襲撃した。**Beasley** 少佐は、打ちのめされ、そして、彼が砦に向かって無造作になだれ込んでくる手におえそうにない頑強な砂粒に向かって防御柵の門を締めようとしているかのように、むち打たれて死んだ。別の混血の **Dixon Bailey** 大尉が指揮をとり、そして、駐屯兵たちの陣容を整え直した。

しかし、時は既に遅すぎた。**Weatherford** の戦士たちは、最初の囲いを通り抜け、兵士達の二つの集団を裂き、むち打ち用の柱に縛られて立っていたような何もすることのできない奴隷達を殺し、そして、**Bailey** が、立ち上がることのできる全ての男、女とともに守っていた第二の囲いを包囲攻撃しに行った。

それは、見るからに不平等な闘争だった。防御するものたちは鉄砲をもっていた ; **Creeks**

族の者達は、強いて突進させられた。多分、インディアン達は3時間くらい闘った後止めたのであろう。そして、彼らは実際に引き揚げをしたが、しかし、**Weatherford** は、彼らが退却をすることを許さなかった。彼は戦士たちと、旧来のインディアンのトリックー防護柵の中の全ての家に火を付けるために、先頭に炎を付けた矢を使うという、別の攻撃を議論していた。でてくるのが恐ろしくなった人、そして、インディアン達に面と向かい合った人たちは、生きたまま焼かれた。**Bailey** 自身もひどい負傷をし、そして、これにより、抵抗は俄かに終わった。**Creeks** 族の者達が突入し、半狂乱状態でそこにいる全ての白人を殺そうと決めた。

Weatherford は、彼が許可もしていない狂人的なことに仰天したが、しかし、彼の戦士たちは完全に規制することはできない状態だった。男、女、そして、子供達が無慈悲にもめった切りにされ、殺された。それは蒸し風呂の8月の昼のぎょつとするような野蛮行為の情景であった。400名の砦の防御をしようとしていた人達がこうして死んだ。

大虐殺のニュースが、南部の地方に衝撃を与え、そして、立腹させ、**Weatherford** と **Creeks** 族は直ぐに絶滅させられるべきだという要望がでてきた。**Andrew Jackson** 将軍は、彼が **Fort Mims** の悲劇的な事件を聞いた時には、**Nashville** の彼の家で、ベッドに横たわっていた；彼は、彼の友人、**Thomas Hart Benton** 少佐との論争で受けた傷から回復しているさなかだった。やがて、それは **Creeks** 族に対し、行軍することを指令された **Jackson** であった。

Hickory 老人は、直ぐ依然に彼の部下が彼を呼びに来た時には、馬に乗ることが出来ないほど衰えていたが、しかし、彼は、直ぐに500人の竜騎兵をつけて **Coffee** 大佐を **Alabama** に送り、そして、市民軍の部隊とともに、彼の後を追う準備をしていた。10月7日に、やつれ、そして、腕を三角巾で吊るして、負けじ魂の **Jackson** が、ちょうど、**Alabama-Tennessee** を結んだその線の上にある、**Fayetteville** から彼の歩兵部隊を連れて出発し、9時間かかって32マイル行進した。彼は、**Fort Deposit** と呼んだが、供給基地を設立し、ここから、僅か2日分のパンと、6日分の肉を携帯させて、直ぐに **Coosa River** にある **Ten Islands** に向かつて、彼の部隊を移動させた。そこで、彼は、**Creeks** 族が **Tallassahatchee** に居る事を知り、11月の3日に、彼はその街を攻撃する準備を整えていた。

Jackson は、大胆であり、かつまた、大志を持った男で有ると同時に、信頼できる男であった。**Cherokee** 族の酋長の **Pathkiller** が彼に、**Weatherford** は、彼を援助することにしくじる様などんなインディアンに対しても、多大の損害を与えると脅しをかけていると話した時、将軍は簡潔にこう答えた；“兄弟よ、敵の **Creeks** 族は私とすれ違うまでは、あなた方を攻撃しないだろう；そして、私の考えていることは、彼らを気にしてないことだ。”彼は、自分の介護者の一人にぶっきらぼうに、彼は退却する事よりも死ぬだろうと話していた。

彼の **Tallassahatchee** での戦略は、身近なもので効果があった。彼は、インディアン達に

攻撃させようと誘い、体を前に乗り出すと言うようなことをし、彼らがだいたい輪の形になったあと、その終わりをきちんと閉じて、インディアン達が罠にはまると言うものであった。この計画を最初に実行した時には、非常にうまくいき、**Jackson** は簡単に勝利を手にすることができた：5 人のアメリカ人が殺され、たった 41 人が負傷しただけで 186 人もインディアンが殺されたのだ。**Davy Crockett**、彼は殺人をする側にいたが、後で、“我々は、犬のように彼らを殺した。”と、得意げに話していた。そして、**Jackson** は、満足げに、：“我々は、**Fort Mims** の仕返しをしたのだ。”と報告していた。その結果、彼は、**Fort Strother** と名付けた砦を **Ten Islands** に建設した。

4 日後に、彼は、再び **Talladega**、ここは 30 マイル離れた所であるが、**Creeks** 族の主力部隊により、味方のインディアンが包囲されていると報告されたところで、ここに向かって出かけていった。**Jackson** は、取り囲まれた同胞たちの救済に、できるだけ速くと急いだ。そして、11 月の 9 日に、1200 名の歩兵部隊と、800 名の騎馬兵を伴って、ここに到着した。彼は、おなじような輪を作る戦略を採用したが、彼の市民軍の何人かが、**Creeks** 族がその輪を打ち破ろうとした時に、逃げ出したりしたので、上出来というわけにはいかなかった。極わずかのインディアンが逃れたが、しかし、彼らは、自分達の後に 290 名もの死者を残し、これに対し、**Jackson** の方は、15 名の死者と 85 名の負傷者だった。

別の戦闘との合間に、**Jackson** は、彼自身のキャンプの中で、兵期が 12 月の 10 日に満期になると言う市民軍のものが、軍を離れる準備をするという、そして、ホームシックと飢餓が加わり、もし、**Jackson** が、それを阻止しようとするなら、一斉蜂起をするという、重大局面に遭遇した。キャンプは完全に食料が無くなり、そして、**Jackson** 自身、赤痢で苦しめられ、ほとんど立つては居られない状態であった。飢えた兵士が彼に何か食べるものが無いかと聞くと、将軍は、彼のポケットから手にいっぱいのだんごを取り出した。“私の持っている者をお前と分かち合おう。”と、彼は言った。

最後に支給品が来たが、しかし、11 月の遅くに、いう事を聞かない連隊は、**Tennessee** に出発する準備をしていた。**Jackson**、彼はそれまでの様に病気であり、そして、腕を三角巾でつるし使えなくなっていたが、彼の馬の首に括り付けたマスケット銃の銃身を突き付け、家にかえるような動きをした最初の男を射殺すると意思表示をした。兵士達は、彼に不機嫌に彼を目を見開いて凝視したが、しかし、彼らは彼らの将軍と彼によって踏みとどまった少数の王立の軍にまともに屈服した。**Jackson** が後で気が付いたが、マスケット銃は、彼が決してそれを発砲できないような悪い状況にあったとのことだった。

しかしながら、彼のトラブルは、解決からは程遠かった。**Weatherford** は彼の引き続いた敗北から戻り、そして、彼の軍隊を立て直しているあいだ、将軍は、なおも、彼の頑強な市民軍、彼らの兵役の契約はこの時に満了しており、彼らは何もいう事を聞こうとしなかったが、彼ら都、論争をしていた。病気であり、いらいらしていた **Jackson** は、彼の忍耐が無く、また、彼のもって生まれたいらいらした性分は、頑強な反骨者達に罵られていたように、問題を解決することができなかった。彼は、約束された代わりの者達が **Fort**

Strother に到着するまでなんとか彼らが留まるように説得したが、しかし、1450 名の救援隊が Tennessee から行軍を始めた時に、— “あなたが、これまで見てきたもののように素晴らしくみえるような連隊” —、将軍は、彼らの兵役の任務の契約期間が、10 日で終了し、彼らも、また、ここに留まる意思は全くないと知った。他の救援部隊の派遣は、これは、騎兵隊の一隊であったが、歩調を合わせて無理矢理に行進してきたが、彼らもやはり義勇兵であって、彼らが Strother から、北に向かって流れていく人の列に会うと、彼らは向きを変えて、彼らと一緒に去って行ってしまった。キャンプで病床にいた Jackson は、疑いもなく、絶望して大声で叫んだ：“私が聞いていることは、本当の事なのか？”

たった 500 人の男達を、彼の後の砦に、残して、退却するように、上司である、Tennessee の知事の Blount に指示され、Jackson は、きっぱりと屈服を拒絶した。彼は憤慨して Blount に手紙を送った：“あなたは、自分の軍隊を自分のところに座らせている私の親友なのか・・・わたしに、民衆の出来心を満足させるために私に退却しろと求めている。・・・あなたに言わせてもらいたい、それは、成り行き、あるいは、こうした戦闘で戦っている憂国の士の意見、彼らは甘ったれたおべっか使いや、あるいは、情熱を鼻にかけた後で、数千人もの人を私の退却の被害者にする・・・そのような者たちだが、そうした人たちの意見も気にせず、我々の任務を、あなたと私の両方に押し付けているのだと。”

それから、Blount のために、5000 人の Creeks 族、Choctaws 族、そして、Cherokees 族の者達を守ることもしないような地域に開放するような退却の恐ろしい成り行きの写真を撮って、将軍は、猛烈な雄弁をしぼませながら決心をした：

“あなたの無気力—あなたの機能の活力の行使を伴う—じゃれつくような笑い、あるいは、がみがみ言うしかめっ面にもかかわらず—あなたの無気力から目を覚まさない—キャンペーンは、直ぐに広がって行くにべきだし、さもなければ、・・・あなたの国は滅びて行く。—Secy of War（戦争の長官）からの指令を実行すること、を大声で叫びなさい、彼の任務を無視するものは逮捕する・・・そして、現在のために評判を消滅させるのです。・・・Mobile を維持しなさい—そして、領地を維持しなさい—あなたの開拓地が血にまみれる事から守りなさい・・・こうした環境の下で何が逆行なのですか？ 私がまず最初に消えていきます。”

この手紙と、戦争部からの新しい指導に激励され、Blount は、急いでそれに従う事にしたが、しかし、Jackson とともに残っていたほとんどの者は、新しい連隊が到着するまえに、の故郷に帰ってしまい、そして、ほんの僅かのやけと不安の時間を彼は Fort Strother で 130 人の部下たちとともに過ごしていた。

800 名の新兵が危機を救うために到着した。Jackson は彼らとともに Tennessee に戻る機会をいささかも与えなかったが、しかし、途方に暮れた市民軍を Tallapoosa の Horseshoe Bend にある Weatherford の野営地に向かわせた。将軍はこうした連隊の信頼をほとんど持っていなかった：彼は、彼らが訓練を受けていない者達で、指揮官も同様な者だと理解していた、がしかし、彼には、ほかに選択の余地が無かった。けれども、彼は、3 日間、Fort

Strother から 70 マイル、行軍させた。1 月 21 日の夕方に、彼らは、Creek 拠点から 3 マイル離れた Emuckfaw Creek でキャンプを張った。

Weatherford の斥候が彼に Jackson の到着の警告をあたえ、Creek の指導者がしきたりに従って夜明け前に攻撃する事を決心した。ほかの白人の指導者とともに、それは、首尾よく実行されたようだが、しかし、Jackson は、他の者達とちがい、ずっと長けていた。彼は、不意打ちに攻撃のあることを予測し、彼の部下に武装させて、一晩中待機させていた。攻撃が始まった時、陽の昇るまでに、インディアンたちの銃からの閃光に向けて、射撃するように言われており、Jackson が、彼の予備兵一団であるが、彼らに伝言をいれ、攻撃するように指示した。インディアン達は、彼らの本拠地である Tohopeka に方に退いた。

これは、また、見せかけでもあった。Weatherford は、アメリカ人達に戦線を伸ばすように誤魔化そうとしたが、彼が、彼らは、彼を待っているのだと分かり、彼は攻撃を準備した。再び、Jackson は出し抜いて、そして、先に攻撃をした。ここでもう一度、Creeks 族は後に退き、煮え切らない事態の内に戦闘は終わった。Jackson は、あえてことをそれ以上追うために留まることを好まなかった。彼は、彼の基地から 70 マイルも離れ、ほとんど強力な軍隊で囲まれた状態にあり、そして、襲撃するにはあまりにも強いインディアンの防備堅固に向かい合っていた。

懸命にも、彼は退却を決断し、そして、彼らの足跡、音を立てずに尾行するように、Creeks 族とともに、静まり返った冬の景色の中を移動しながら、直ぐ次の日にそれを実行した。Jackson は、胸が躍る適当な瞬間を待っているに過ぎないと確信しており、彼は、彼が Enotachopco という幅広い川、そこは、ほとんど防御されておらず、そして、対岸は昇って行くにはちょっと険しい、そんな川であったが、その川を渡っている間、彼らがそうするだろうと正確に理由づけしていた。

彼は、素晴らしい戦略家であったが、Jackson は、インディアン達に対して、罠を仕掛ける事により、彼らに不利と思わせるような、有利さをつくることを計画していた。部下たちは、3 列になって渡るべきであり、もし、攻撃があつたら、後ろの列にある者は、列の前の方の者が右と左に向き変え、川を上流と下流で渡り、Weatherford の戦士たちを取り囲む間、Creeks 族を遠ざけておかななくてはならないとされた。

その戦略は、後列の防御隊がしっかりと立ちはだかれなかった以外は、彼が計画したとおりに進んで行った。彼らの大佐に指導され、右と左の隊列は、川に向かって土手を転げ落ちるようにしながら、あわて急いで退却した。ただ、一人の勇敢な指揮官と 25 人ばかりの中央の列の男達が退却する者達と手斧の間に立っていた。

この危急の状態の中、Jackson は、実に誠の英雄であった。戦闘の雑音よりも、誰もが彼の力強い誓いや命令を聞くことができた：素晴らしいたくさんの部下たちは振り返り、後で Jackson に立ち向かうよりもむしろ好んでインディアンに立ち向かおうとした。将軍は、彼の隠遁した大佐たちを、即時逮捕しておき、そして、自分自身わからないような隊列を預かった。後で彼の部下の一人が記述していた：“弾丸の雨のなかで、彼は、警戒を恐怖に

おびえる者達を再び呼び集め・・・・・・このたとえで元気づけながら・・・・・・これで、臆病者たちは、彼らの恐怖を忘れてしまい・・・・・・と、そんな部下の下士官の任務を実行しているかの如く見え、そして、勇士が彼の周りに彼ら自身で塁壁を作ったのだろう。”と。

勝利でないとするなら、それは、輝かしい退却だった。そして、**Jackson** の **Emuckfaw** と **Enotachopco** での以前の二つの小競り合いが、政府に勝利として送られた。にも拘わらず、合衆国が、**Creeks** 族に対して、非常に多くのことを推し進めたことを、1814 年の 1 月には言われることが無かった。東部と南部のその他のどんなアメリカの軍隊も、反抗者を追い払った **Jackson** がしたこと以上の業績を上げていない。

12 月に、**Weatherford** は辛うじて拿捕されること、これが間違いなく戦争を終わらせるものだったが、これを免れた。**Claiborne** 将軍は、酋長自身の町である **Econochaca**、ここは、彼が焼き払った街であるが、ここまで、その行程で 30 人のインディアンを殺していたが、奥深く侵入した。川のかかなり高い土手で馬に跨り座って、そして、防御隊の方に向かっていたが、**Weatherford** は突然包囲されてしまった。後の世代のための、映画の中の馬の例を想定して、**Creek** の酋長は、彼の馬を崖から川に逃がし、そして、無傷で逃げた。

一か月あとで、**Claiborne** の兵隊が、兵役満期となり、極わずかの 60 人になってしまった、一アメリカ人の全ての指揮者たちにとって悩ましいトラブルであるが、一そして、彼は、重要というだけでなく、全滅という実際に危険な事態に置かれてしまった。

この時まで、合衆国は、インディアン達の領地に 7000 以上もの戦隊を送っており、そして、6 ヶ月活動の中で、800 人の **Creeks** 族の者を殺害してきたが、しかし、なお、**Weatherford** は、偉大であり、そして、彼の小さな軍隊の中心であったことは相変わらずであった。

Jackson は、なぜ白人達が、うまくできないかを十分知っていた。一番早く来た機会に故郷に帰ってしまう未熟な市民軍の事はともかく、支給品の疑問は、それが全てというほど重要であった。誰も、上手く補給されなければ、**Alabama** の内部地域に部下たちの大きな部隊を進軍させるなんてことを考えたりしない。

しかしながら、2 月の 6 日に、彼は間違いなくもっと大きな信頼を感じていた。新兵の連隊が故郷から到着し、そして、彼が最も称賛したアメリカ合衆国の軍隊のなかの第 39 連隊の 600 人の正規兵を含め、彼の指揮下に居る部下が 5000 名となった。彼の軍隊のしっかりした中核としてのこれらの正規兵とともに、**Jackson** は **Creek War** を直ぐに終結させることが出来ると確信していた。彼は、彼の下士官たちを除外せずに、非正規兵たちのなかに、専門的な規律正しさの厳格さを浸透させると言うような無駄なことをする時間はなかった。一人の主要な将軍と准将が逮捕され、そして、同意せずに、故郷に戻された。17 歳の少年、彼は、彼のライフル銃で、その時代の下士官に公然と反抗していた者であるが、その彼が軍法会議で有罪となり、略式に処刑された：少年は一か月足らず、軍隊にいた。反抗の話、あるいは、家に帰ったと言う話、そして、これ以外の規律正しさの欠如についての話はなかった。

状況は、当時、危機が最高に達していた。**Weatherford** は、**Horseshoe Bend** の要塞、そ

こは、三方向が川で囲まれ、そして、4つ目の方角には、高い丸太の塁壁があるもので、ここに300人の女、子供達をひきつれ、900名の部下たちとともに立てこもった。1814年の3月27日の夜明けとともに、Jacksonが2000人の野戦の男達とともに荒れ地の砦の前に現れた。両方の指導者は、明らかにこの戦いの結果は自分の側に幸運が来ることを掛けていたが、しかし、これは公平な対戦ではなかった。彼の全ての有能な者達をしても、Weatherfordは、Jacksonの敵ではなかった。インディアンの指導者は、もし、トラブルがあった時には、彼の部下たちを運び出すためにカヌーの船隊を考えていたが、しかし、Jacksonが、砦を囲んだ後の最初の行動は、銃弾の下をくぐって川を渡り、そして、そのカヌーの船艇を取り除く斥候たちを送り出すというものだった。そして、そのあと、陸上で攻撃する1000名の隊列を整え、Jacksonは、その日の命令を下した：“敵の前で、強力な武力であえてそうするようにされずに、逃げ出すようなどんな下士官や兵士は誰も死を被るだろう。” こうして、午前の10時半に、砲撃が開始された。

Jacksonは、Creek族の女と子供達が、安全に川を渡ってその場から連れ出されるまで、命令を出さずにいた。そして、長く響き渡る攻撃の合図の、太鼓が叩かれた。第39連隊の少佐がインディアン達の塁壁の前に最初に現れ、そして、これを打破した。そして、背の高い若い男、別の青い服を着た正規兵であるが、彼は刀を振りかざし、そして、指示をしていたが、彼がこれに続いた。それは、別の日に闘うために、生きながらえてきたSam Houston少尉であった。

Creeks族は、勇気を振り絞り戦ったが、しかし、彼らの棍棒や手斧は、接近戦ではアメリカ人の銃剣には到底かなわなかった。彼らは、敗れて、逃げまわった。川を渡ろうとした者たちは、射撃の名手たちにより一人ずつ狙い撃ちされた。他の者たちは小さな集団となって、また別の日に闘おうと、凸凹した地形を上手く利用した。

戦闘の初めとして起こったことは、無情な血の浴場と化した事であった。女や子供達でさえ、安全だと思われる場所で容赦されることは全くなかった：何人かは殺され、Jacksonは後にそれは事故だったと消し去った出来事だった。大地には死体のごみ場と化していたが、それでも、インディアン達は戦い続け、決してあきらめなかったのだろう。それは、彼らの伝統的なやり方では無く、そして、Jacksonもそれを理解できなかった。血塗られた午後の中間あたりで、彼は、包囲された全ての者達を保護すると提案した。

Jacksonは、Creeks族に特別の勇気を奮い立たせているものは、偉大なる精霊が彼らに勝利をもたらすということ、そして、戦いの高所で彼らの間を動き回わり、そして、彼らにその兆候として雲が天に現れて来た時には、潮の流れが変わる約束してきた祈祷師によって支えられた信仰であるという事を知らなかったに違いない。Jacksonが、彼の包囲をしている者に提案をさせた小康状態の時に雲が現れたのだ。Creeks族の居る方から、強烈な叫び声がしてきて、彼らは、呼び覚まされた激情で、再び戦う態勢を作った。しかしながら、その雲は、単にちょっとしたわか雨をもたらした以上のものではなかった。周りが暗くなってきた時には、小さな隠れ家にいたほんの僅かのインディアンの集団が深い谷間にう

ずくまっているだけだった。彼らは、降伏した者達をさげすみ、突撃してくる集団を打ちのめした。**Jackson** は、火のついた矢を使うインディアンの罠を元に戻し、砦の中の生きている者を焼き払った。こうして、戦いは終結した。

その日の朝、アメリカ人と対抗していた 900 人の戦士のうち、557 名が死体となり、200 人の他の者達が川のもずくとなった。勿論、生き残った者達も居るが、そのほとんどは負傷していた。**Jackson** の方はどうであったかという、49 名の者が殺され、彼自身もそうであったが、157 名の者が負傷し、彼を助け、彼に味方していた **Cherokees** 族の者は、18 名が亡くなり、36 名が負傷した。勿論、彼らは人数に入っていなかった。

しかしながら、**Weatherford** は、どこに居たのだろうか？ **Jackson** は、殺されたものや捕虜たちのなかに彼を見出すことはなかった。彼は、逃げ延びる事ができたのか？ 将軍は、彼が **Fort Mims** の大虐殺を唆（そそのか）したものが安全なスペインのフロリダに辿りついたのではないかと考えた時に、彼の苛立ちを抑えることができなかった。

Weatherford は、実際、**Horseshoe Bend** での死を免れたが、しかし、彼は、戦闘の日には彼がそこにいなかっただけという理由だった。この事は、臆病などんな行動にもよるものではなく、ただ、全くの偶然からだった。予測される攻撃に対処するために準備をしながら、彼は、簡単な思い付きのためにどこかに行っており、明らかに、**Jackson** がしたように、直ぐに攻撃をしてくるとは思いもしなかった。

将軍は彼の狙う敵を探したが、無駄だった、そして、とうとう **Hickory Ground** に引退した。そこで、2・3 日してから、**Jackson** が彼の居住地を離れようとした時に、彼は背がたかくて、腰まで裸で、その下に、見栄えの良くない擦り切れた鹿皮の半ズボンとモカシンを着たつやのある肌をしたインディアンに対面した。

“**Jackson** 将軍ですか？” と、この男が訪ねた。

“そうだ。”

“私は、**Bill Weatherford** だ。”

Jackson の返事は、議論されている。あるものは、“**Weatherford** さん、私はあなたに会えてうれしいよ。”と、彼は直ぐに気づいたと言っている。他の人達は、彼は、“**Fort Mims** でたくさんの女、子供を殺したのに、私のテントによくも来られたもんだ？”と、腹を立てて叫んだと主張している。

いずれにしても、二人の男は、事情を詳しくはなした。**Jackson** に付き添いの **John Reid**、彼だけが、起こることを聞くために一緒に折り、そして、後に次のように書いていた：

“**Weatherford** は、未開人たちの世界での最も素晴らしい人であった。彼はありとあらゆる情緒の男らしさー有能な指揮者としての計算された知識の理解の全て、を持っていた。あなたは、**Jackson** 将軍に対する彼の会話を理解した……が、しかし、あなたのその容姿やしぐさーそれは、彼らのもっているつつましきであり、また、堅固でもあるが、これを理解することができない”

次のような会話は、いろいろに伝えられているが、しかし、それは、実質的には、次の



Jackson 将軍と Weatherford との面談

ようなものだ：

“私は、断念して此处にやって来た、”と、Weatherford は言った。“私は、もはや、これ以上、あなたに反抗はできない。私は、沢山の損傷を与えてきた。私は、もっとたくさんあなたを痛めつけられるかもしれない・・・[でも]私の戦士たちは、殺されている・・・私は、もはやあなたの手の内に居る。私を、あなたの好きなようにするがいい。”

“あなたは、私の手の内にあるわけではない、”と、将軍がこたえた。“私は、あなたに私を、仲間の繋がりのなかに連れて行くように指示した・・・しかし、あなたは、自分の意思でやってきた・・・あなたは、私のキャンプを見、一私の軍隊を見、一あなたは、私の目的を知っている・・・私は、喜んで、あなたと、そして、あなたの国を守ろう、でも、あなたは、守ってもらおうとさえしない。もし、あなたが、私に対抗して戦場で戦う事ができると思うのなら、行って、あなたの戦士たちを指揮したらいい。”

“あなたは、そうした状況のなかで、今や、私を安全に方向付けすることができる。” Weatherford が言った。“私があなたに应える的には、時間があつた；私が選択をしたときには、余裕があつた；でも、今はなにもないのだ。私は希望さえ無い。私は、かつて、自分の戦士たちを励まして戦わせてきたが、しかし、死者を励ますわけにはいかない。私の戦士たちは、もはや私のいう事を聞く耳を持っていない。彼らの死体は、Talladega, Tallushatches, Emuckfau,そして、Tohopeka にある。私は、考えもなく降参するのではな

い。唯一の成功する機会があったが、私は私自身の立場を放棄しないし、また、平和を嘆願するものでもない。しかし、私の部下は行ってしまい、私はいまそれを私の国のためにお願いしている、これはわたしのためにではない。**Jackson** 将軍……私は望むものは何もない……[私自身のために]、……でも、私はあなたに、トウモロコシの鞘もない森林に連れて行かれた戦闘集団となった者達の妻、そして、子供達のために、届けてやってもらいたい。……彼らは決して害を与えたという訳ではない。しかし、もし、白人達が其れを望むのなら、彼らは私を殺すだろう。”

“私は、深い悲しみをもって回顧し、そして、さらに大きな惨事を招くことを避けたいと思っている。もし、私が **Georgia** の軍隊と戦わすようにされたのなら、わたしは、川の一方の土手にトウモロコシを育て、そして、もう一方で戦っていたであろう。しかし、あなた方は、私の国を破壊した。あなたは勇猛な人だ。私はあなたの寛大さをお願いします。あなたは、征服者のようにはしないでしょう、がしかし、そんなもんだが同意すべきでしょう。彼らがどのようなであれ、彼らに対抗することは、間違い沙汰だし、全くばかげたことだったのだろう。もし、あなたが反対であるなら、あなたは、私が服従の最も厳格に達成しようとする者達の中に居る事を見出すでしょう。今もなお主張するような人達は、さもない復讐の精神によってのみ感化されているに違いない。このために、彼らは彼らの故郷の最期の残りを犠牲にしてはならないし、そうすべきではない。あなたは、私たちが行こうとしている、そして、平和に暮らそうとしている我々の土地について話をした。これは良い話だし、そして、彼らはそれに耳を傾けなければならない。彼等は、それに耳を傾けるに違いない。”

Jackson は、この唯一の機会に、寛大なる勝利者として振る舞った。彼は、**Weatherford** のためにブランデーをコップ一杯に注ぎ、そして、二人の男が約束を交換した。彼の側にたって、将軍は、女達と子供を助けると言った。**Creek** 人の指導者は、平和を維持しようと述べた。こうして、二人は握手をし、そして、**Weatherford** はテントを出、外でびっくり仰天している兵士達の間を大股で歩いて行き、森の中へ姿を消して行った。もし、彼が再び姿を現しても、歴史はそれを記録に残さないだろう。

4月の遅く、命令が南部に保管されていたことを確信じて、**Jackson** は、テネシーに戻った。戦争の長官が、彼に、1000人の者以外、全ての彼の部下を解散させ、そして、休暇を取るようにさせた。しかしながら、南部からのニュースは安心させるものではなかった。彼らが負けた所から逃亡した時に **Creeks** 族を歓迎したフロリダの好戦的な **Seminole** インディアンを刺激するような武装化したイギリス海軍からの報告があった。

“私たちは最悪の事態に備えるべきだ、”と、**Jackson** は、戦争の長官に手紙を書いた。最悪の事態は直ぐにやって来た。

第一次セミノール戦争

1814年の7月の初めに、インディアン達が彼らの恐怖に巡り合った Horseshoe Bend の、Creek の国に Jackson が再び立っていた。Creeks 族は、そこには、住もうとおもっても、どんな敵、白人だろうが、赤人だろうが、誰も足を踏み入れようとは出来ない、神聖な場所だと信じていた。Jackson は、インディアン達が Fort Toulouse と呼んでいた、Weatherford の小さな砦を制圧し、そして、そこを彼のために残しておいたが、それにより、神聖なる場所を汚していた。

今度は、彼は戻ってきて、彼に恥を掻かせた敵の酋長を議会に断固として出頭させた。何時ものように、彼はそれにたいして、率直であった。“破壊は、承諾には通じないだろう。”と彼は言った。彼らは、飢えでやせ細って、だがなお、威厳に満ちて、やって来たので、Jackson は、彼の妻に対して、収容所の事を書かずにいられなかった：“食料の要求から倒れながら、そして、馬の口からこぼれたトウモロコシを拾い漁っている、そうした人達の困窮と悲惨さをあなたは見る事ができたか。”でも、彼は、一度たりとも彼らからの不満を聞いたことがなかった。

Jackson は、フロリダに逃げ延びなかった彼らの部族の人達と一緒にになった、Creek 族の王族に取り掛かりながら、議会で、まず話し始めた。“友人であり、兄弟たちよ、”と彼は言い、“あなた方は、合衆国の兵たちを戦い、その多くのものが・・・わたしの部下たちにより”そして、打ち負かされた人達に向き直り：“友人であり、兄弟たちよ、あなたがたは、悪い人間の進言について来た。”彼は、さらに、戦争は政府に対し多大の出費となったし、それは当然のこととしているが、そして、彼は、インディアンはそれに対して土地で支払いをすべきだという、通常では考えられない提案を進めた：それは、また将来の戦闘にたいする保障であったのだろう。彼は、提案された平和の協定という項目を作り出し、そして、通訳者によって読まれる記録を持っていた。

Weatherford は、征服をした人々に対して寛大さを予想していた。彼の部族の者が得たものは、白人の食欲さであり、インディアンが関わったことに対する公正さへの彼のよくよくの軽蔑であった。Jackson が提案したそのおだやかに無礼な略奪が、一世紀以上にわたりはびこって行った形式を作り上げたのだろう。

その協定は、23,000,000 エーカー、これは、全ての Creek の領土の半分を占めるもので、現在のアラバマ州の 3/5 と、ジョージア州の、1/5 の広さに相当するものであるが、これを要求していた。この土地の半分は、Jackson が、“友人であり、兄弟たち”と名指ししていた友好的な Creeks 族、彼らは、彼がその土地を手にするために闘うのを助けた人達であるが、その部族のものだった。

それは、不合理な提案であったし、**Creek** の酋長がおどろき、ビックリ仰天してしばらくの間彼らの空腹を忘れたと言うちょっとした疑問のあるものでもあった。次の日に、彼らは、酋長たちの中の 2 人、**Big Warrior** と **Shelokta** を、ある程度の譲歩を勝ち取り、そして、協定を緩やかにすることを希望して **Jackson** のところへ送った。こうしたインディアンの両方が、表情豊かに行動し、そして、彼らの話に聞き入った全ての白人達、**Jackson** は別であったが、その人たちの心を動かした。**Tecumseh** が取った筋道はさえぎられなくてはならない、と、そして、協定の項目は、その日の夜に受け入れられるか、拒絶されるかのどちらかでなくてはいけないと言った。受け入れた人達は、アメリカ政府の友人として認められただろうし；その他のものは、敵として焼印を押されたのだろう。彼は、ちやちな譲歩に同意しなかった。

それは、明らかに **Jackson** を避けるものであったが、**Big Warrior** の返事の中には、絶妙な皮肉が混じっていた。彼は言った、**Creeks** 族は、**Jackson** 将軍に、3 マイル四方の土地を、**Benjamin Hawkins** も含め、そのほか 3 人の白人にも同じような贈り物をして、“感謝の意を込めた証拠”として、彼の提案した土地を与えることを望んだ、と。**Jackson** は、彼らに対し、彼は、大統領にたいし、彼が彼らの生活に困っている女や子供達のために服をきせるだけの、その土地の価値に匹敵するようなお金を与えてくれるようお願いするだろうと話した。とんでもない、**Big Warrior** と **Shelekta** は、真っ正直な顔をして丁寧に、“彼らは、彼らに着るもので彼らに戻すように、その土地を **Jackson** 将軍に渡したりはしなかった；彼らは、彼に対して、そこに住むこと、そして、彼がそこを去り彼の家族がその土地を持つようになれば、それは、国が彼のために与えてくれたものだといつても思うのだ。”と言って、これに反対した。

その日の晩、協定は署名され、そして、酋長達は黙って、**Pensacola** に向かって去って行った。

彼は、この不面目な協定を決断していた一方で、彼は **Pensacola** のスペインの指揮官にたいして、そこに隠れ蓑となる場所を持っている二人の逃亡者の **Creek** の酋長を送り返すように要求して、使者を送っていた。**Don Matteo Gonzalez Manrique** は、その要求を“差し出がましい”と、呼んでいた。一方、その使者は、イギリスがフロリダに強固な軍の基地を建設していると、そして、スペインとイギリスの艦隊が海岸線で頻りに活動していると言うことを把握してきた。

Jackson は、それを知らなかったが、しかし、こうした騒ぎは、1812 年の戦争の目を覚ます最高点に持っていこうとしているずっと遠くの出来事から押し寄せてくるただ単なる漣に過ぎなかった。**Wellington** の軍隊、これは、打ち負かした **Bonaparte** を占領していたが、それがヨーロッパに平和をもたらし、そして、10,000 人もの野戦行動の退役軍人が、彼らが短期間、東部の者の侵略により新しいアメリカの国を破壊することを予測していた、**Quebec** へ行く途中であった。この事は、大西洋岸から遠ざける海軍の揺動作戦と、そして、**Jamaica** の終結地点から広げていく南部への陸軍の主要部隊と海軍の集中攻撃と、連結し

て行われる筈のものであった。

彼がこの意欲的な計画を知った時、**Jackson** は、しばらくの間、痛ましい **Creeks** 族のことをごく自然に忘れていた。イギリス海軍がすぐに **Maine** から **Chesapeake** にかけて、制御するに伴い、**Washington** が征服し、議事堂が焼け、そして、東部の町は、気違いじみたように要塞化し、新しい国は、冒険的に消滅へと閉鎖して行った。それは、**John McDonough** 准将の **Lake Champlain** での華々しい勝利、これが浮き足立って **Quebec** に戻っていった **Wellington** の退役軍人を、**Trafalgar** は、“これに比べりゃ、小虫の一刺しだ、” と、不満をぶちまけながら、そして、イギリスの下士官たちに：“これは、アメリカの誇り高き日だー今までに見たこともない誇り高きものだ。” と、怒って叫ばせながら、送り出したものであるが、これによって救われた。

McDonough の決定的な勝利は、**Jackson** により、**Ghent** の協定が 1812 年の戦争を正式に終了させた二週間後の 1815 年の 1 月の、**New Orleans** の戦闘でのイギリス軍に対する壮大な勝利が、**James Madison** の、倒れそうにぐらついていた施設を救ったことで、南部地域で再現された。

ついに、そして、その後永久に取り除かれたイギリスの強迫で、**Florida** を国の東半分を合併することを防ぐと言う問題だけが残った。しかしながら、スペイン領フロリダでは、**Seminoles** 族が、とらえどころなく、そして、処置できないような状態で、**Creeks** 族の生き残りの者達と協定を結び、政府の土地の不法入手にはいかなる手助けをも拒絶しながら、湿地帯を自由に動き回っていた。

スペインから **Florida** を買収すると言う目的の話し合いが何年ももたついていた。1817 年まで、それまでとは幾分成功の兆しが見えて来たかに思われたが、しかし、**Seminoles** 族の頑強に反抗するという事を聞かない連中が、アメリカ政府が、スペイン領の領地に入っていく言い訳として、部族に弁解する根拠に利用しようとしていたように、もう一度、強大な力の持ち主との国際的なゲームの中で、インディアンの担保を作った。

しかしながら、彼らは、それをはっきりとわかるような用意周到さをもってした。名誉少佐の **Gaines** が 1817 年の夏の早い時期にフロリダの国境からそう離れていない北に居たある **Seminoles** 族を攻撃した時、もし、それが必要とみとめられるなら、彼は退却して行く野蛮人達をスペイン領に追い込むように言われていたが、スペインの砦を攻撃することのように大雑把なものではなかった。

この時まで新しい戦争長官が来ていたが、彼は、もっと **Jackson** 好みのものだった。1817 年の 12 月 26 日に、**John C. Calhoun** 長官は、**Jackson** に対して、**Georgia** 州に行き、そこで、“インディアンとの紛争を終結させる必要な手立てを講ずるよう。そして、**Jackson** は、**Gaines** に対し、その指導に同意しなかった。**Monroe** への手紙のなかで、そこが征服したインディアン達である間に、フロリダをただ単に手中に治めるべきだということを、彼の通常の率直さでもって提案し、そして、もし、彼が許可を得られれば、彼は、それを 60 日以内に実行することを約束した。**Monroe** は、彼に、はっきりとでもなく、また、公

式でみとめられたものでもないような約束をしたが、それは、十分にはっきりとしていた：‘行動・・・Seminoles 族に対するもの、・・・これは、あなたが、多分、やりたいと思っている別の役割のある劇場にあなたを運んで行ってくれるでしょう’ということ。”と彼に命令をだした。

Jackson は、1818 年の 2 月に、こうした興味の対象となっているもの、もちろん、それは、Seminoles 族であったが、これを追跡するためにフロリダに向けて出発した。3 月の 9 日に彼は、Fort Scott におり、ここは、フロリダの国境からそう遠くないところであるが、ここで、次の日に彼は、彼の軍隊、ここには、800 名の正規兵と 900 名の Georgia 市民軍、彼らは、ほとんどの者が、Jackson がそれまでに見てきたような一飢えた、そして、彼と供と一緒に残りたいとも思わない様な者達ばかりだった。将軍は彼らに彼が何時もしているような取扱い方一僅かの糧食をあたえ、厳しい行軍をさせるというような策をとった。6 日遅れて、彼は、ことなくフロリダに入り、そして、その状態を上手く把握できるようになっていた。

Seminoles 族は、疑いもなく、気持ちがいらいらするような状況のもとに置かれており、Jackson は、その原因となっている、代理人の性格をよく知っていた。彼らは、Peter McQueen、そして、別の Francis という名前の酋長、彼は New Orleans の戦闘の後、英帝国によってイギリスに連れて行かれ、そして、きらびやかに、また、古巣に戻ってきて、准将の征服を着ていた酋長で、このような、逃亡してきた Creek 人の指導者達だった。また、もし、彼がアメリカ人を追い出すことができたなら、彼にとって価値のあるフロリダに居残ることのできたイギリスの下士官である、George Woodbine 大尉、そして、インディアン達との儲かる仕事をしていたけれども、正直者として知られていた、最近まで Nassau(バハマの首都)に住んでいたスコットランド人の貿易商の Alexander Arbuthnot もいた。Arbuthnot、彼は白髪の 70 歳以上の年よりで、インディアンたちに最も愛された友達で、神聖な会議にも出ていたし、白人との合意をする時には、彼らのために行動を取り、彼らの間で強い影響力を持っていた。“インディアン達は”、と彼は、“イギリスにより病人として扱われ、そして、アメリカにより摩られた。”、あけすけに、そして、正確に表現していた。両方の中で、アメリカが最も悪いと彼は思っていたのだ。

Jackson は、最初に St. Marks、ここは、フロリダの西海岸に近い所の要塞だが、ここに向かって行軍し、そして、そこがインディアンによって荒らされていることに気付いた。彼は一人の捕虜をとらえた：Arbuthnot で、彼は平穏に逮捕に従った。Francis は、別の Creek 人の酋長とともに、川を伝わって逃げようとし、捕えられ、これら 2 人のインディアンが、ほとんど正式な手続きもなしに次の日に吊るし首にされた。Arbuthnot は、裁判のために残された。

フロリダの内地のジャングル奥深く、再び入って行き、Jackson の次の目的としたところは、Boleck 酋長の村で、Bowlegs のようにもっとよく知られたところで、Suwanee River から 107 マイル離れた所だった。しかし、彼が 8 日後にそこに辿りついた時、彼は再び、



Seminole の戦闘酋長 Billy Bowlegs

インディアンがそこから消えていたことに気付いた。居たのは、二人の白人の一団だけだった：王立植民地海兵隊の Robert C. Ambrister 准将、そして彼のイギリス人の友人である Peter B. Cook だった。イギリス人の一団の召使のひとりだったが、Arbuthnot からの手紙が、Bowlegs と他の友人に、Jackson の軍事力は、抵抗するにはあまりにも強力だと警告した。明らかにインディアン達は上手に警告に従い、そして、彼と会戦して戦う意思がなく、Jackson は、決断した。

St. Marks に戻り、彼は Arbuthnot と Ambrister に直ぐに裁判されるように命じた。裁判は、酷いこじつけだった。競争をしていた貿易商、個人的な恨みを持っていた Peter Cook を含み、ただ、個人的にいろいろな理由で Arbuthnot に敵意を抱いている知識人だけが裁判することを許された。一方、疑いもなく—そして、決定的な証拠が、—Arbuthnot がインディアンの指導者たちのために、Nassau のイギリス政府に宛て、アメリカと戦うための軍と弾薬を求める様なたくさんの手紙を書いていたことを証明するために引き合いに出さ

れた。Arbuthnot は心底、インディアン達は、彼らが実際したように、戦う根拠を持っていると信じていた。

Ambrister については、彼は、いたるところで戦い、そして、彼の運を試して来た幸運の兵士で、ただ単なる冒険家以上の何者でもなかった。彼は彼の立場を理解し、そして、“罪であることと公正であること”をきっぱりと認めていた。

Arbuthnot は彼自身のために、彼の裁判を、“私の裁判官が、・・・・同情する側に傾くことを酷評するならしめるべき理由があるべきだと、完璧に説得し、”中止させながら、尊大な、かつまた、雄弁な弁明をした。彼の裁判官は、彼のただ単なる罪は、彼がインディアンを愛し、そして、彼らを助けようとしただけであるが、その彼に吊るし首の判決を言い渡した。Ambrister には、その裁判の裁判官たちによる最初の決断で、銃殺刑が言い渡されたが、しかし、見直しにより、判決は、50 回のむち打ちと、一年間の留置となった。しかしながら、Jackson は、最初の死刑の判決を取り戻すことにより、この同情的な行動を修正した。両方の判決が実行され、そして、暗澹とした太鼓を叩く音が処刑の時を知らせ、Ambrister は、疑いもなく彼がフロリダでの冒険が終わったらロンドンで結婚しようと考えていた少女のことを思いながら、この場に居合わせ、：“そこには、私がこの地球のどこでも聞いた響きがあり、そして、いまはその最後のものだ。”と、ため息をついていた。

こうした健康に良い出来事が、4 月の 29 日に起こった。5 月の 7 日までに Jackson は、再び Pensacola に向かって行軍していたが、そこは、彼が攻撃を始めてから僅か 3 日で、陥落させたところだった。彼は、旗をふりまわし、彼の部下の大佐のひとりを統治官に任命し、そして、フロリダのその地を合衆国のものだと、効果的に文書に署名し付け加えた。

それは、まさに不法な行為で、Jackson が Tennessee に戻ったあと、そこに向かっては 5 月の 30 日に出発をしたのだが、アメリカ人の外交家が、まさにその時、彼の行動をスペイン政府に説明した。怒ったスペイン人達が、Pensacola から北に向かった全ての彼らの砦を、彼らの失ったものに対する賠償金と同じように、もとに戻すことを、そして、Jackson に懲罰を与えることを求めた。

Washington の湿気に汗を流していた Monroe 大統領と、彼の内閣は、そのことを議論し不安な日々を送っていた。Monroe は Jackson など知らないと言おうとしていた、そして、ほとんどの他の者達も彼の考えに賛成していた、がしかし、John Quincy Adams は、Jackson がしたことは、必要性によって裁かれるものだと頑なに主張した。最後には、Adams は、上手く説明した。アメリカ政府は、Jackson は、彼自身のために行動したもので、それで自分自身を咎めようと言う意図は全くないと言った様な書簡をスペインに送る準備をした。しかしながら、砦は戻されたのだろう。

この決定により不服な気持ちにさせられた、ただ一人の者だったという訳ではなかった。スペインの外交問題の大臣が、砦の復活は、Jackson がした全てのことに対する公衆の否認と、将軍の適当な懲罰が伴って居なくてはならないと要求した。もし、こうしたことがされなければ、大臣は、アメリカがフロリダを買収したいと言う願いは退けられるに違いな

いと、示唆した。

国務長官の **Adams** は、“暗く、そして、不行跡な墮落”、“こそこそとし、陰険な戦争”という表現を使い、そこでのスペインの規律の歴史を総括し、スペインに対する、長く、しかも、力強い返事を起草した。彼は、大胆にも、合衆国は、もし、それらを再び陥落させることが永久に必要であるなら、フロリダにあるどんな砦も諦めはしない、と脅して締めくくった。

Jackson が、彼が、“不快な陰謀”と言ったことに直面して彼の行動を弁解するために、1819 年の 1 月にワシントンに彼自身やって来た。こうした陰謀は、**Henry Clay** の政治的に野望を持った、根本的な人々、彼らは、彼らの仲間の西洋人が彼に影を投げかけるのを恐れた人達であるが、その人達の結果であった。

ワシントンは、他の全てのビジネスを保留にして、フロリダでの出来事全体について国会が議論している間、混乱していた。**Clay** が、**Jackson** を攻撃する劇的な演説をしたが、しかし、**Strater** の **Hotel** に居座っていた、そして、彼の広報活動を指揮していた将軍が、彼を弁護した友人の知恵の一連のものを整理した。結局、最後に勝ったのは **Jackson** だった。一連の投票により、国会は、勝手にした、基本的に不公平な **Arbuthnot** と **Ameristar** の死刑執行の罪を咎めることを拒絶した；大統領の署名なしにインディアンとの戦闘での捕虜を処刑することを禁止する法案、これを準備することに反対した；そして、**Pensacola** の没収を憲法違反として処罰することを拒絶した；そして、敵を追い出すために必要でない限り、議会の承諾なしに、他国の地を侵入することを禁止するという法律の立案を認めようとさえしなかったのだろう。

評決は、民衆の成功であった；大衆にたいし、**Jackson** は、何も悪いことをしていない英雄だった。フロリダでの **Jackson** の指揮したことの痛烈な批判をした報告書をだした **Senate** の委員会の行動でさえ、その結果をおぼろにすることが出来なかった。**Monroe** は、部下である合衆国の上官代理達に、その時行われていた国会が閉会するまで、それは、たったの 2・3 日後のことであったが、それまで、報告書にあるいかなる対応も遅らせるように、たんにそれだけを指示した。

Jackson の彼の行動の彼自身による防御は、もし仮に、それが全くのまちがいの論理であるにしても、正直であることのまさに魅力的な例である。“……全ての私のしたことを、自然とか、国家の法則により、認められた自己防衛の不変の原理に基づかせたろうか”と、書き、“私は、私がスペインの砦を陥落させたことを、スペインの役人たちがインディアン達を助け、そして、扇動し、さらには、それにより我々に対し敵対行為をするような集団になったことにもとづいた正当化しているのだろうか。スペインは、アメリカの政府との間で結ばれた協定を無視してきたか、あるいは、それを強力なものにする力をもっていなかった。スペインの領域にいるインディアンの部族、その部族をスペインは、平和を保つように繋げていたが、彼らは、野蛮的な戦闘のあらゆる恐怖でもって我々の市民のところに押しかけて来ていた。**Negro** の集団は、彼らが、良しとする時と場所に現れ、そし



Florida 出の Jackson 将軍と彼の部隊

て、外国の代理人たちは、好きなように、そして、如才なく、この自然の豊富な領域で彼らの陰謀を巡らして来ていた。自己防衛の不変の原理は、正当であり、したがって、フロリダの占有は、・・・”

このようにして、領土拡張政策の最初の表明は、自己防衛の不変の原則として、ほとんど見せかけにされなかった。

しかし、よく尋ねる人がいるようだが、Jackson のフロリダへの侵略に対する表面上の理由となったインディアン達はいったいどうなったのだろうか？

彼らは、征服されたとみなされ、そして、1821 年にフロリダが合衆国に譲渡された後は、もはや彼らは通常の人質ではなかった。彼らは、村や穀物の焼却、そして、破廉恥な引ったくり、そして、Creeks 族がアラバマで受けた略式の死刑執行から免れた。不幸にも、彼らは、尚も、以前の居住者が、フランス人や英国人であったフロリダに住み、Seminoles 族のものはただ単なる借地人として見られていた。

こうした土地は、合意と買収、あるいは、そこが征服されたことによりアメリカの政府に獲得されたに違いなかった。この疑問が決断されたはずの時代まで、Jackson はホワイトハウスの中に居り、政府の方針となつて行つたことに何の疑いもない。また、誇り高き Seminoles 族が戦争をすることなしに、これを表明しなかったことにも何の疑いもない。

しかしながら、その戦争が始まる前に、出来事の様相は、全てに対し、これは、但し、ほんの僅かのインディアンの指導者達に過ぎないが、これを明らかにした、ミシシッピー川の東部に居るインディアン達は、可能だったら順応されたのかもしれない；もし、そうでなかったら、彼らは、彼らの先祖の故郷を離れ、平和に暮らす選択をせずに、大河の反対側に移住させられていたかも知れない。アメリカの東半分の戦争は、無くなろうとしていた。

二人のインディアンの指導者が、不可避なことに挑戦した。一人は、**Osceola** であり、彼の時代はまだであった。そして、もう一人は、**Black Hawk** だった。

BLACK HAWK の戦争

彼は、1767 年に、Sauks 族、よく、Sacs 族と呼ばれたが、その部族の大きな村、そこは、イリノイ州の Rock River の土手にあり、そこから 2 マイル程でミシシッピー川に辿りつくが、ここにはほとんど誰も住んでいなかった、そんな村で彼は生まれた。Rock Island の町は今でもそこにある。彼の母親は、この少年に Ma-ka-tai-me-she-kia-kiak、これは、Black Sparrow Hawk という意味であるが、この名前を付けた。アメリカ人には、Jackson 大統領から以後、彼は、Black Hawk として知られてきた。

彼が戦った戦争は、その名前により、榮譽を称えられているというわけではない。彼は有能な男で、Black Hawk は、Pontiac や Tecumseh が成功するには、もっとずっと都合の良い時代に失敗したところでうまくやろうと期待していたのではなかった。しかし、彼は、アメリカ政府に対し、Abraham Lincoln, Jefferson Davis, Zachary Taylor, Alexander Hamilton の息子たち、そして、Daniel Boone Albert Sidney Johnston, Winfield Scott と言った著名な人たちの名前がついていたが、そうした軍隊を平原に配備させた。こうした人たちの一人として、大平原で特に著名であったという訳ではない。

少年時代から、Black Hawk は、決して彼の名前から来ている訳ではなく、とにかく白人を恨んでいた。Rock River の、イリノイの北西部の森、ここで、Sauks 族は何世紀にも渡って狩りをし、漁をしてきたのだが、この森に見守られた自然豊かな大平原で育ち、彼は、スペイン人がミシシッピーの地域を 1769 年から 1804 年にかけてここを支配していたことを知っていた。Black Hawk は、彼らを不人情で勇敢な者達だと考えていた。彼は、St. Louis のスペインの役所に下って来た時に、Sauks 族, Foxs 族,そして、その他の部族との、毛皮の取引では、彼らの物惜しみをしないやり方に頼っていた。その小さな川沿いの町で、彼は最初にアメリカ人の事を聞き、いかに彼らがスペイン人を打倒したかを学び、そして、彼らに攻撃的な眼差しを向けるずっと以前に、彼らを憎しみ始めていた。

アメリカ人が 1804 年に St. Louis にある砦を奪取し、そこに、その年に、豪胆なインディアン闘士の、Tecumseh の野蛮な征服者である William Henty Harrison、彼は、その当時、政府の代理人のようなことをしていたが、その彼がやって来た。彼がそこで Sauk、ならびに、Fox の国の 3 人の酋長と合意した協定が、白人達に、こうした人達がミシシッピーから東の地域に持っていた全ての土地—そのほとんどは、北イリノイ、ここで、Sauks 族が少なくとも、700 エーカーを耕作していた土地をもっていたが、これを白人達に与えるものとした。その見返りに、インディアン達は、不適当な経済的な認識と、土地が、入植者たちに開放されるまで、彼らがイリノイで狩りを続け、そして、そこでトウモロコシを栽培できると記された約束を取り付けた。Harrison は、約束として決められたこと、それが



Black Hawk

永久に守られるとは、いささかも信じていなかった。

彼の生涯の遺物として、1804年の協定が **Black Hawk** に乗り移った。最初のところで、彼は、酋長達が **St. Louis** に合意のために全く行かなかったことを明らかにした。**Harrison** は、彼らを **Sauk** や **Fox** の国の代表として、認識しており、そして、彼らが斟酌するまでもてなしていた。それは、**Black Hawk** をとても立腹させるには、とても簡単にできる事とであったかもしれない重要な任務であったが、しかし、現代の古典に関する学識は、それを真実なことだと証明しがちであった。

しかし、彼もまた、その協定に反対する、もっとずっと基本的な理由を持っていた。彼が数年後に彼の自伝を書いた時に、彼は、彼以前の、全ての素晴らしいインディアンの指導者達が白人達に向かって言おうとしたことを文字であらわそうとした。“私なりの分別が私に、土地は売られたものではないと教えた。”と記述した。“偉大なる精霊が、それを彼の子供達にそこに住むように与えたのだ。彼らが、そこに住み、そして、耕作している限り彼らはその土地の権利を持っている。そうしたことが、消えてなくなる限り、何も売られてはいない筈だ。”

彼自身のところの人々が、彼に完全に同意したという訳ではなかった；ある者達は、彼は進歩的だと思っていた。彼らは既に白人達の生き方を真似しており、そして、協定が署名されたあとには、彼らは、彼らの女達・子供達と一緒に平和的にミシシッピー川を渡り、アイオアにまで行っていた。

Black Hawk は、彼らとともに行ったが、しかし、彼はそこに住みつこうとはしなかったのだろう。彼はそのころには、37歳くらいで、10年間の間、尊敬された戦争の酋長であった。彼は其のために彼の人世を費やした戦争の原因を知っていた。彼の父親のティピーの中の少年として、彼は **Pontiac** の伝説を何度も何度も聞いていた。彼は、まだ、たった15歳の時に、彼は敵を殺し、そして、頭皮をはがし、彼が儀式の時にまとう毛布に部族が認めた赤い血の手の標を描いた。彼はその時に、彼自身の中のと、白人達の入植者の押し寄せる波に抵抗するために彼らの周りの集まってきていた他の人達を助ける様な仕事をして、戦争の酋長となった。

1812年に西部の地での戦争に火がついた時、**Black Hawk** が **Techmseh** に加わらなければならなくなり、そして彼の最も信頼のおける仲間の一人になったのは必然的なことであった。彼は **Fort Meigs** や **Fort Stephenson** や、**Frenchtown** におり、そして、**Thames** の戦場に居たのかも知れない。

アメリカ人の勝利は、それまでもまして彼の憤りに火を注いだ。戦争が終結すると、彼は、1804年の協定を破棄するために彼を助けるよう、イギリスを説得するとともに実現しそうな仕事を達成しようと、しばらくの間カナダに滞在していた。そこで、上手くいかなくて、彼は、彼の前にも **Pontiac** や **Tecumseh** がしたように、同盟を作る事に望みを託しながら、北西の地域の部族の間を転々と旅し始めた。彼も、また、夢を抱いていた：

Red River から Mexico にかけて、白人達のさらなる進出に対して、敵対する障壁を作る、インディアン達の壮大な連立政権、というものであった。

当初、ほとんど同盟というものを造ることが出来なかった多くの部族は、平和を作ろうと気を配り、毛皮の取引で利益を上げていた。Sauks 族の殆どは Black Hawk のライバルであった Keokuk の指導の下で、ミシシッピー川を越えた反対側の新しい土地に住み、白人達の世界に融合しようとしていた。

Black Hawk だけが、彼が愛してやまない、そして、決してあきらめない、Rock River の峡谷の先祖代々の土地に残っていた。Sauks 族の何人かが、彼と一緒にそこに住み、多分、彼ら、Ontario の Fort Malden にあるイギリスの出先の機関、ここで、彼らはイギリス人と交易を行い、そして、彼らから贈り物を手にしていたが、ここにいく馴染の経路を頻繁に旅していたことから、そう呼ばれたのであろうが、イギリスの一団として知られるようになった。

1830 年の春、そのイギリスの一団と呼ばれていた者達が冬の狩りの旅から、Red River の畔、ここは、彼ら以前、彼らと彼らの仲間達が、何時もやって来て、誰でもが、そこを覚えている限りそこに小屋を建てていた場所であるが、ここに帰って来た時までは、このような感じで事が運んでいた。彼らは、未だに政府のどのような調査に対しても把握されてはいないような、そして、1804 年の協定にも明らかに違反している様な、白人達の無断居住者が土地を占拠している事に気付いた。こうした白人達は、インディアンのトウモロコシ畑を私物化したり、死んだ人達のお墓の中に、新しい土地を畑に耕したりしていた。

Black Hawk は、どうしてもできなくて怒っていたが、しかし、彼は、助言が必要と感じていた。彼は、急いで Fort Malden に行き、そこで、何をしたらよいのか、軍の代表者に訪ねた。彼は、白人達の家族が、彼の持っている小さな小屋を取り上げ、その一方で、彼らの仲間の妻たちや子供達が、何の囲いもない様な川の土手でうずくまっていなければならない、と言った。この事が全体的に正確な情景ではなかったかも知れないが、ある部分に於いては確かで、Black Hawk の憤慨のある部分は、代表者に通じたようだった。協定は、正真正銘、犯されていて、彼は、彼のインディアンの友達という事を確かだと思い、そして、もし、Black Hawk が、抵抗するなら、アメリカの政府は、彼は、公平に取り扱われていると確かに理解するだろう。それが、イギリスが何時も彼らのインディアンの友達に与えたアドバイスだった：行って、戦うんだ；我々はお前さんたちを励まそう。

インディアン達が戻り、不法占拠者達は、彼らが村を所有していることを示した。不穏な夏が過ぎ、両方の側を警戒態勢にする、もっと多くの防御とおなじように、沢山の喧嘩と小さな憤慨が Sauks 族の女達と子供達に降りかかった。そして、インディアン達は、彼らの冬の狩りに出かけて行った。

1831 年の春に戻ってきて、彼らは、もっと沢山の白人達が居る事に気づき、Black Hawk は、極わずかな忍耐の極地に達した。彼は、不法占拠者達に断固として立ち退くように命令し、そして、彼らにもし彼らがそれに従おうとしなければ殺されると思い知らせた。彼

がそう言っている証拠として、彼は、若い男達を峡谷のあちこちに送り込み、そこそこにある小屋を焼き払い、そして、居住者達を脅かした。

闘争と警告の中で、入植者達はイリノイ統治官である **John Reynolds**、彼は、西部地区の軍の指揮官である **Edmund P. Gaines** 将軍に、その出発にあたり 700 人の軍隊を派遣、そこに行くように命じたのであるが、その彼に嘆願した。**Gaines** は、1831 年の 6 月 20 日に彼の報告書を作成した：

“私は、その地域性、そして、できる限りインディアンの気質を確信することを意識して、**Rock River** の村を訪れた。彼らは、私が以前に持っていたなんであろうと、彼らの敵愾心の感覚なのかもしれない、彼らは、自分達を自己防衛のため以外に、戦闘用の斧や、火器を使う事を避けるように決められている、という考え方をますます強くさせている。しかしながら、闘士は殆ど見かけなかった；彼らの女や子供達、そして、老人たち達が不安そうにしており、そして、最初に、何かに困惑していて、それでも、誰一人、逃げ出そうとはしなかった。

事前に、彼らの酋長に、私が以前に指導したように、すぐさま動こうと言う彼らの意図を私に知らせたいとしない限り、彼らにそれ以上の事をいう事は無いと忠告し、彼らの多くは、50 ヤード以内であるが、私は彼らに話をしなかった。私は、沢山の大砲と二個大隊の歩兵をスチームボートの上に乗せて持っていた。彼らの村は、**Rock River** の直ぐのところにあり、だから、私、スチームボートから彼らの木の皮で作った小屋（これが彼らの持っている家の種類の全てであった）を、たかが数分のうちに、私の配下の今の軍隊を使って、多分、誰一人犠牲者を出さずに、破壊できる状況にあった。しかし、私は、何分かの流血もせずに、砲撃をすることを、あるいは、インディアンだけには、血を流させるような目的の手段を回避するように決められていた。既に、私は彼らの 1/3 近くを、ミシシッピー川を渡り彼ら自身の土地に、説得して行かせていた。しかしながら、残りの者達が、友好的な酋長たちが報告しているように、彼らは、決して動くつもりはないと言っており；そして、全く、非常識なことは、彼らの女たちが、敵愾心を抱く夫たちを、移住したり、彼らの故郷を諦めるなんてことをするより、むしろ、戦うべきだとけしかけていると言っている。”

一週間後に、**Black Hawk** と **Gaines** が、議会であったが、しかし、彼らは、おたがいに、それ以前に話していた事以上には、何も話をしなかった。両者ともに、頑固だった。**Gaines** は、単に、彼の軍隊が到着するのを待っているだけで、彼らが、6 月の 25 日に到着すると、インディアン達は、軍が、銃撃を加えることなしに、村を占拠するがままにさせて、川を渡って逃げていった。二日後に、**Black Hawk** が、白旗に見守られて現れ、そして、合意—それは、協定を持ち出そうとしたものではなく、がなされた。様々なことの中に、白人の入植者達は、**Sauks** 族に、トウモロコシの供給をするという事が約束されていたが、すぐに兵士達が姿をけし、彼らが縮小された形が小さいと分ると、**Black Hawk** が後に言うように、**Sauks** 族は、強硬に川を渡り、そして、“彼ら自身の畑から、トウモロコシを盗



Washington に行き、彼の家に戻る

みだした。”

それは、難しい冬の前兆であった。二年の間に、**Sauk** 自分達の畑で、トウモロコシを育てられなくなり、そして、彼らに供給されるものが厳しくなった。**Black Hawk** は、彼が夢に抱いていた連合国を作ろうと言う、この上ない試みをしながら、冬の終わりを過ごしていた。彼の主な支援者、彼は、そう考えていたが、彼は、**Winnebago** の予言者 **Waubeshik**、あるいは、**White Cloud** という者で、直ぐに彼を助けることに賛同していたのであった。彼は、また、**Winnebagoes** 族、**Potawatomies** 族、**Mascoutens** 族、**Foxes** 族、そして、**Kickapoos** 族からも、支援の約束を取っていた。

彼のビジョンが、願望を全うする点に基づいていることを信ずるよう元気づけられ、そして、彼が実際に信じていることが、偉大なる精霊の **Man-ee-do** からの直接の指示であるという事により鼓舞されて、彼は、1832 年の春に、500、ないし、600 名の戦士、彼らの殆どは、古い土地を取り戻し、そして、白人達をそこから追い出そうと言うつもり **Sauks** 族であったが、彼らとともに川を渡って戻ってきた。

どこの辺境地も恐怖の状態だった。数百名にも及ぶ逃亡者達がシカゴに逃げ、道徳的に不純な街という見捨てた話があった。彼らの激しい恐怖のなかに、入植者達は、**Black Hawk** が望んでいたものが真実であることを想像し、インディアン達の壮大な連合が辺境地の人達を心細くしていた。

再び、市民軍が招集され、**Washington** から **Henty Atkinson** 将軍の管轄下の正規兵一問もなく有名となる運命を意識で鼓舞された軍、が平和を取り戻すためやって来た。敵愾心を持った軍同士、増強するのを待って、待機している **Atkinson** と、彼の空想的に抱いている連合軍からの約束された援軍の、頼りにならない望みを抱いている **Black Hawk** が、互いに接近した。ただ、**Foxs** 族だけがやって来た。“私は、**Winnebagoes** 族や **Potawatomi** は、我々にたいし、どのような援助もしたくないのだ。” と、彼の失敗を書きながら、冷淡に観察していた。

インディアン達は、敵対行為を始めようとされてはいなかった。**Black Hawk** は、**Atkinson** に、彼のただ単なる意図は、トウモロコシを作る事であり、もし、白人たちが、戦いを望むのなら、彼は、彼を攻撃しなければならないということをはっきりさせるような伝言を何度も送った。それが、実際に起ったことだった。5 月の中ごろ、**Stillman** 少佐が、270 の男達の先頭に立って **Sauks** 族のキャンプに向かって進軍し、そして、彼が近づいてきた時に、**Black Hawk** は、休戦の旗を持った 3 人の闘士を送り出した。それに対する応答は残酷なものだった。**Stillman** は、三人の勇士を捕虜としてとらえ、そして、**Black Hawk** は、彼を探しに、さらに 5 人の者を送り出し、正規兵たちは、その彼らに攻撃をし、2 人を殺害した。もう、協定などなかった。戦争になったのだ。

Carl Sandburg が、これを詩人の見方から記述していた：“そして、いまや、波打つ大平原と、**Rock River** に沿った森林の地全体に、彼らの頭上に広がるどこまでも続く青い空のもと、赤人たちと白人達が、お互いに恐ろしい死を手掛けようと、睨み合っている。彼ら

が戦いに行き、小さいと分ると、それは、見つけるのも難しかったが、小競り合いをし、戦い、そして、二本足の動物の死に至るその瞬間まで、他方からは隠れようというそうした行為；ただ鋭い目だけが、その行動の断片を見る事ができ、そして、汗まみれになり、打ちのめされ、消えて行き、再び、やって来て、打ちのめられるという戦う集団となった人の動きとすることができ、これが、どこまでも広がる青い空のもと、緑が芽生え、雨がきれいに流しさり、木々が、どこまでも水々しく波打つ大平原と森林の大地のもと、深々と生い茂っているという結果だ。”

地 **Abraham Lincoln** は、戦闘的な者のひとり、あるいは、インディアンとの戦闘士となる様だった一人で、彼は、彼の役人としての仕事を失おうとしており、そして、戦争の記録が彼を間違いなく助けたらろう州議会に参画しようとしていた。しかしながら、“**Abraham Lincoln** 中尉の騎馬連隊の第一旅団の軍” は、最初は、乗る馬もない状態で、戦いには一度も出掛けなかった。その旅団は、**Zachary Taylor** 少佐の指揮権のもとの 1600 名からなる軍の一部で、これが行軍し、イリノイを渡って、戦場まで戦いに進軍したが、しかしながら、数日まえの小競り合いで殺された 5 人の者の埋葬をした以外は、何も行動しなかった。それは、終結されたことに何も疑いを持たず、十分にこのことを知るのに足りる事であった。それぞれの死体について、**Lincoln** は、“彼らの頭の頂点に、そこに赤人が彼らの頭皮を持って行ったように、1 ドルほどの大きさの輪をつくり”、その一方で、戦っている情景は、“赤い太陽は、この世の全てのものを照らしているようにみえた。”と、言っていた。

しかし、彼が、もし、決してインディアンを誰も殺さなかったら。**Lincoln** は、ひとりのインディアンを命を救った。それは、年老いた一人の男、彼は、ある日キャンプに迷いこんできた者で、害を与えず、兵士には何の意味もない軍の通行証を持っていた。彼はインディアンだったので、彼らは簡単に彼を殺す準備ができていた。“おい、これはしてはいかんぞ。”と、彼は言った。“彼は、撃たれてはならんし、また、我々に殺されてはならん。”

“おまえは、臆病者だ。”と、兵士の一人が決闘を挑んだ。

“もし、誰かが、私を臆病者だと思ふのなら、私を試すがよい。” **Lincoln** は、即座に答えた。

“あんたは、我々より、大男だし、体重が重い。”誰かが、答えて言った。

“あんたは、それに、対して、防御することが出来る—自分の武器を選択することが出来る。”と、**Lincoln** が言った。そこに、それ以上の議論は無かった。

森の別の場所で、**Jefferson Davis** 准将は、彼の指揮官、**Taylor** 大佐と一緒に行軍していた。直ぐに彼は、**Wisconsin** の **Fort Crawford** の大佐の心細い前哨基地、そこで、彼は **Taylor** の可愛らしい娘の **Sarah** と会い、そして、愛に落ちいり、そして、彼女の父親の承諾なしに、彼女と二年以上一緒に結婚していたのだが、そこに戻った。

一方、**Black Hawk** 戦争は、ますます、展開し、国の新聞に、読むのも恐ろしいようなこと、そこでは、**Sauk** 人の指導者が見るからに悪魔のように描かれていたが、などが乗せられていた。実際には、戦争は、その無益さと、有能な者達の喪失であり、その中での無駄

な努力であり、感傷的なものであった 6 月と 7 月の暑い太陽の照りつけるなか、ゆっくりと、**Black Hawk** は、イリノイ州から、ウィスコンシンの湿地帯、林の中、大草原、そして、川を渡って離れていく、基本的には退却を指導していた。政府は、根絶の戦争を意味する形にしようと、もっと沢山の連隊を投入してきた：**Winfield Scott** 将軍の指揮下にある 9 個の砲兵連隊；五大湖のほとりにある砦から、9 個大隊；**Baton Rouge** からはさらに 2 個大隊をといる具合であった。**Black Hawk** の唯一の同盟は、彼がそう願っていたと願う事ができる敵により殺されるよりもたくさんの人が死んだが、その夏のコレラの大流行に見舞われた。208 人の正規兵の一つの隊で、生き残ったのは、たったの 9 人しかいなかった。

最終的には、**Black Hawk** は現実を理解し、そして、彼は戻って、全面戦争をせざると得ないと考えたのであろう。彼は、7 月の 21 日に、**Wisconsin Heights** と呼ばれたところで、それを実行することを選択したが、しかし、それは、**Black Hawk** が、女や子供達を安全に **Wisconsin River** を渡らせる、非常に巧みな戦術を取ったけれども、両方の側にある程度の犠牲者を伴う、決定的ではない出来事だった。

しかしながら、終結の状況が目目の当たりとなり、それは、8 月 1 日、そして、2 日に、逃げていたインディアン達が **Bad Axe River** の河口にちかい、**Mississippi** 川に辿りついた時にやって来た。**Black Hawk** は、失望感を募らせ、自分の立場を顧みた。川辺には、彼の安全な場所に行く道以外は、武装した川の蒸気船、**Warrior** 号が立ちほだかっていた。彼の周りは、疲れきり、食糧に飢えた女、子供、そして、兵士達が耐え忍んでいた。これを見て、最初に彼は、彼の戦いには希望が持てないと理解した。彼は、150 人の勇士を休戦の旗を持たせて川辺に立たせた。続いて起こったことについて、ここに、政府の補給物資を運ぶ蒸気船の船長をしていた **Throckmorton** 大尉の報告書がある：

“私は、**Sacs** 族の接近していることを彼らに知らせるために、そして、**Prairie du Chien** に友好的なインディアン達全てに命令を下すために、**Prairie du Chien** の 120 マイル程上流にある **Wapashaw** の村に **Warrior** 号に乗り、一人で派遣された。我々はその行程の途中で **Sioux** 族の集団の一人、彼はわれわれにインディアン達(われわれの敵)が **Bad Axe River** に居て、その数が 400 人に及ぶと教えてくれたのだが、その男に会った。我々は、少しばかりの森林を切り開き、そこで、次の行動の準備をした。

“水曜日の午後(8 月の 1 日)の 4 時ごろ、我々は、彼が彼らを残してきたと言うところで、紳士達を見つけた。我々が彼等に近付くと、彼等は白旗を掲げ、そして、頻りに我々を誘っていた、がしかし、われわれは、彼等にとっては、ちょっとだけ歳を取りすぎており；というのは、上陸する代わりに、我々が彼等に、彼等はそれを拒絶したが、乗るためのボートを送るように命じた。15 分くらい後になってから、彼等の女や子供達の何人かを逃すための時間を与え、われわれは 6-ポンド砲を繰り出し、大砲の射撃をし、続けて、マスケット銃の激しい銃撃をした；そして、もし、あなたが、直立した毛布を見たのなら、彼等がそこに居ると考えただろう。私は停泊して、ほとんどの時間彼等と戦い、そして、我々は、彼等の目に全くさらされた。私が立っていた直ぐ近くに、銃弾が当たり、そして、

それは、大車輪の輪の部屋の隔壁を打ちぬけて行った。”

“われわれは、我々の木材が壊れるまで、そして、およそ一時間あまり、闘い、そして、日が暮れ、われわれはそこを離れ、**Prairie** に行った。この、小さな戦いで彼等は、23 名が亡くなり、勿論、負傷した者も非常に多かった。我々は、一人の死者も出さず、だが、ただ一人だけ一足を撃たれて、負傷した。次の日の朝、我々が帰りつくまえに、濃い霧だったために、**Atkinson** 将軍の軍隊の全軍がそこにいた。われわれは、そこで彼等を見つけ、そして、歩いて行き、彼らは我々に加わった。”

“**Warrior** 号からの最初の射撃は、3 度ほど行われた。私は、そのことについては、ほとんど何も語ることが出来ない。というのは、今、私は再び野戦に向かうところだが、その今は、あまりにも忙しいからだ。軍は、8 人か、あるいは、9 人が亡くなっており、そして、17 人か負傷し、その彼等を私は街に運んできた。昨晚、そのうちの一人がベッドの上で亡くなった。私は、36 人の捕虜を、そして、女、子供を携えてきた。”

“とりわけ、草木の芽生えるこの時期に、インディアンと戦うことは、何の愉快的なことでもない。”

起こったことは、大尉の手紙が、全てを説明していないように、**Black Hawk** が、彼自身、一方では **Warrior** 号を、そして、もう一方では、**Atkinson** 将軍の軍隊という、その間で毟にはめられたことに気付いたという事だった。**Atkinson** は、荷車を後に残して、軍隊の進軍をし、そして、彼の部下の 1600 名の者達を、8 月の 1 日にインディアン達から、僅か 10 マイルしか離れていない場所に立ち止まらせるようにしてきた。わずか、2・3 時間の休憩を取り、彼等は、次の日に攻撃を仕掛け、そして、3 時間程度の戦闘をし、これは、直ぐに大虐殺に変わった。数百名の、そこまで **Black Hawk** が巧みにつれてきた女・子供たちが、陸上での殺人達から逃れようと川に連れ込まれ、そして、まるで、スポーツして、楽しんでいるかのような **Atkinson** 軍の射撃手により狙い撃ちにされた。**Atkinson** の軍のものは 27 人が亡くなった；インディアンは、少なくとも 200 人、あるいは、かなり確実にもっと沢山の者が亡くなった。

Black Hawk 自身は、**White Cloud** が何人かの時代遅れの戦士を送り出し、そして、その数はあまりにも少なく、また、遅すぎたのだが、そんなことをしていた **Prairie la Cross** の **Winnebago** 族の部落に逃げ込んだ。そこで、彼と予言者は **Black Hawk** の、彼と一緒に闘ってきた二人の息子を伴って、彼ら自身が降伏する決断をした。

彼等は、8 月の 27 日に **Prairie du Chien** に行き、その時、**Black Hawk** は、**Winnebago** 人の妻が彼のために作った白い、鹿の皮のドレスを纏い、堂々とした男の身なりをしていた。彼と、彼と一緒にいった者達は、**Street** 将軍に降伏し、**Jefferson Davis** 准将が、彼を **Black Hawk** 自身の国の中心地であった **Rock Island** 島に建てられた **Fort Armstrong** の **Winfield Scott** 将軍のところに連れて行くために、停泊中の蒸気船の **Winnebago** 号に連れて行った。

彼が、壮大な川を暗い気持ちで下って行く時に、彼は自分がなぜそんなに長く白人達に



抵抗したのか、その理由を説明しようとした：“我々は、彼等[白人たち]に、自分達を放っておくように、そして、我々から離れているように話したが、でも、彼等はやって来て、そして、我々が往くところにつきまとい、まるでヘビのように我々の中でとぐろを巻いていたんだ。彼等に触ると、毒気が襲った・・・・われわれは、彼らのように、偽善者になり、嘘つきで、姦通者になり、そして、ごろつきになり、喋るだけで、少しも働かないものになってしまった。”

しかし、彼はもはや闘う事ができなかった。数か月 **Fort Armstrong** に監禁したあと、**Jefferson** 大統領は、彼と彼の集団に **Washington** に連行されるように命じた。**Sandburg** が、**White House** での彼等の面会について記述している：“彼等、白人の首長と赤人の首長が互いに向かい合った；ともに、人々を殺し、そして、恐ろしい怒り、とてもきつい悲しみ、極端な危険、そして、心の傷を知っていた；それぞれが、既に 70 歳に近かった；そして、**Black Hawk** が **Jefferson** に、‘I-am-a man-and you-are-another,’ と言った。”

Black Hawk は、彼が戦争の原因として認識していることを **Jackson** に話した。“われわれは、白人達を打破しようと思っただけではなかった。”と彼は話した。“彼等は、あまりにも沢山の家をもっていたし、また、人数も多かった。わたしは、私の仲間達がもはや我慢できない傷をいやすために、私の責任として、手斧を握んだ。彼らと戦わずにできるだろうか。私の仲間達が、‘**Black Hawk** は女だ；彼は、酋長として歳を取りすぎた；彼は **Sauks** 族なんかではない。’ こうした環境が、私に戦争の関の声を湧き上がらせたのだ。私は、もはやそのことはもうこれ以上言わない；あなたにはもう分ってもらえた。**Keokuk** がかつて一度ここに来たことがある；あなたは彼の手を握り、そして、彼が彼の故郷に帰ることを望んだ時に、あなたは、快くこれに応じた。**Black Hawk** は、**Keokuk** のように、我々も、同じように戻ることを許されると思っている。”と。

Black Hawk が、彼が実際、満足のいくような協定が、**Winnebagoes** 族、**Sauks**、そして、**Foxes** 族と結ばれるまで、そして、**Jackson** が彼をどのように扱うかを決めるまで、合衆国の人質であったという事を知っていたかもしれないし、あるいは、知っていなかったかもしれない。その協定が最初にやって来た。それにより、**Winnebagoes** 族は **Wisconsin** の南部地域と **Mississippi** の東部地域の肥沃な土地 4,600,000 エーカーを譲渡した。**Sauks** 族と **Foxes** 族は 6,000,000 エーカーを明け渡した。その代わりに合衆国政府は、部族にたいし、以後 30 年間、毎年 \$20,000 支払うことで合意した。彼ら自身の人のなかから、彼等にたいし、加治屋と、鉄砲職人を供給すること、その費用は、政府により賄われること；インディアンの借金を支払う事；そして、内容ははっきりしない準備品を彼等に供給することに賛同した。彼等の土地から平和裏に退いて行った **Keokuk** や友好的な **Sauks** 族の忠義に対する報償として **Iowa River** のほとりに、40 マイル四方の保護居留区を与えられることになっていた。それは、白人の交渉人たちが見ていたように、途轍もないは計らいだった。

Jackson は、なおまだ、**Black Hawk** と彼と一緒に来た者達をどのように扱うかを決めか

ねていたので、彼等が彼等の自由を失わない程度に親切に取り扱っていた **Monroe** 要塞に閉じ込めていた。しかし、6 月の 4 日に、彼等は解放され、蒸気船で **Baltimore** に向かって出発した。

Black Hawk の中に、壮大な公共の利益のあることに気付き、政府は、東部の主要な町の中を、捕獲した獲物のように、彼にパレードさせる決心をした。しかし、公衆は、今や、既に危険は過去のものとなり、彼を、勇敢で、浪漫的で、野性的な開拓者の象徴として彼を迎え入れ、そして、英雄のごとく扱っていた。**Black Hawk** は、そこで、直ぐに凱旋の前進となった旅を楽しんだばかりでなく、彼の白人の男に対する意見を変えた。**New York City** の **Broad Street** にある **Exchange Hotel** で彼に催された宴会で、彼は、基調演説の中で返答をした：“兄弟たちよ；私たちはあなたたちの話を好いている。私たちは友達になるだろう、私たちは白人がすきだ；彼等は私たちに非常に良くしてくれた。われわれは、そのことを忘れないだろう。あなた方の議会は素晴らしい。私たちにそれに加わることになろう。あなた方の価値ある贈り物は私のインディアンの妻のところに届くだろう[それは、金の施された一揃いのトパーズのイアリングだった。；それは、私を非常に喜ばせた。私たちは、これからいつでも友達になるだろう。”

どれだけ、合衆国の東部地域の天候が曇ったかは、**Black Hawk** と彼の随伴者達が **New York** 州の北部にある彼らの保護居留区の **Seneca Indians** 族を訪ねた時に評価されたはずだった。年取った **Seneca** 人の酋長、彼のアメリカ人としての名前、そして、肩書は、**Captain Pollard** であったが、その彼が、**Sauks** 族に対して平和的に故郷に戻り、土地を耕作し、白人に対し二度と戦いを挑まないように主張した。**Black Hawk** は、こう答えた：

“我々に話をした **Senecas** 族の年老いた兄弟が、良心的で賢明な男の言葉を話した。我々は、同じ肌の色をしているけれども、御互いに赤の他人で、そして、偉大なる精霊が我々全てを創造し、われわれにこの国をとも与えてくれた。兄弟たちよ、われわれは、白人達がどれほど偉大な人達であるかを理解した。彼等は、非常に裕福だし、また、とても強力なのだ。彼等と戦おうなんて言うのは、どれほど馬鹿げたことか。われわれはたくさんの知恵を携えて故郷に帰ろうではないか。私の場合、私は仲間たちに、おとなしく家にもどり、良心的な男達のように暮らそうと忠言しよう。あなた方が私たちにくれた忠言は、兄弟たちよ、それは、素晴らしい、そして、私はあなた方に、私たちは、未来に向かって真っすぐに歩んで行かなければならないし、我々が確保し、そして、土地を耕して行く事で、我々自身を満足させなければならないと言いたい。”

それから、大西洋岸から **Mississippi** まで彼の仲間たちの過去帳を公表していた、北西部地域の偉大なるインディアンの指導者の最期が、戦闘が長いこと猛威をふるっていた **Mohawk** の溪谷に知れ渡った；それは、イギリス人、フランス人、アメリカ人、そして、インディアン達が、恐ろしい程争っていたバッファローと土地に関しての争いであつたが；デトロイトに関しては、ここは、**Pontiac** の時代からまだほんの 2・3 世代しか経っておらず、また、手斧の時代から僅か 2・3 年しか経っていなかった、その時代であつた。彼

等はデトロイトで思い出した。白人達は、**Black Hawk** の肖像を身代わりに焼き、そして、彼に何の祝宴も持たなかった。しかしながら、なんの暴動も起こらなかった。

そして、最後に **Green Bay**、ここは、最近、**Sauks** 族の敵となった部族で、**Atkinson** を支援するために、最善を尽くしていた部族のであるが、その部族の国にまで広がった。そして、白人の連隊の派遣が **Black Hawk** の人達を、シカゴまで同伴し、そして、もう一度、**Fort Armstrong** に行く川を下って行き、彼等の保護をした。彼等が、彼の故郷の国の懐かしい土地を通った時には、**Black Hawk** は、それまでにない程陰鬱で、無口になってしまった。**White House** の記憶、彼に名声をあたえた白人の指導者達の記憶、**Seneca** の酋長の友好的な助言の記憶—このすべては、彼が彼の父親の故郷を通して旅をし、そして、征服者の家々から巻き上がっている煙を見た時に彼を完全に参らせた少しばかり苦い思い出の中に覆い隠された。

一つの最期の屈辱感があった。**Fort Armstrong** での議会で、政府の代表である **Garland** 将軍が **Black Hawk** の解放の条件、これは、**Jackson** 大統領の特別の計らいであるが、**Keokuk** が **Sauk** 族の国の指導的な酋長であるとみなされるべきであり、その榮譽を受ける資格のある部族の中のたった一人であるべきだったこと、のようだった。部族のなかに二つの流れがあったところに、こうしていまや一つのものとなった。

打ちのめされたが、なお、誇りを持って、**Black Hawk** は、彼の時代を生き抜くために **Iowa** の保護居留区に退却した。1837 年の 9 月に、彼は、**Sauks** 族、**Foxes** 族、**Sioux** 族、そして、**Iowa** 族の代表団の一団となって、白人達が 26,500,000 エーカーの土地を、エーカーあたり 3 セントで手にし、その見返りにさまざまな責務、そのうちの殆どはその後無視されてしまったが、政府との別はかなり満足する取扱いを決めたばかりの人達、全部で 35 人にもなったが、こうした人達とともに **Washington** にもう一つの旅をした。

それは、もう一度、公衆の前で、インディアン達を誇示するための素晴らしい、公になった相互の関係の認められたもので、**Black Hawk** は、再び、壮観な旅をし、今度は、彼の妻と息子も一緒であったが、1838 年であったが、**Washington** の誕生日に、**Wisconsin** の **Fort Madison** での宴会場で、それは絶頂に達した。**Black Hawk** は、次の 7 月 4 日に帰るよう招待されたが、そこは、宴会で彼の白人の招待者がこの乾杯の辞を対案した：“われわれの素晴らしい客人。戦争的な出来事から荒々しく騒々しかった彼の以前のように、彼のこれからの引退する年は、静かであるように。彼の白人達に対する現在の友好的態度は完全に彼を我々の側に席を取られている。”

Black Hawk のこれに対する返答には無限の哀れを誘うものがあつた：“今日、私が此処にいるのは、偉大なる精霊の喜びとするところだ。地球は我々の母であり、我々は、今、それを見渡すことを許されている。2・3 年まえ、私は白人の人達にたいして戦いを挑んで来た；私は間違っていた；どうか、そのことは忘れてほしい。私は、私の町を愛しているし、**Rock River** のとうもろこし畑を愛している；そこは、とても美しい街だ。わたしは、それを守るために闘ってきたが、そこは、今ではあなたたちのものになっている。どう

かそこを **Sauks** 族がしてきたように大事にしてほしい。わたしは、かつては戦闘士だったが、いまは、貧乏だ。**Keokuk** は、私がこうなるその根拠であった、がしかし、わたしは彼を咎めたりはしない。わたしは、**Mississippi** を見る事を愛している。子供のころから、それをずっと見てきた。私はその川を愛している。私のふるさとはその土手にある。私はあなたの友達のためになる様にあなたのことを考えている。それ以上いう事はない。”

三ヶ月経った、10月の3日に、彼は、**Keokuk** が彼の居場所として管理していた保護居留区のなかの **Des Moines** 川にある彼の小屋で亡くなった。彼の望みに従い、人々は、彼を古い **Sauk** 族の酋長のようなやり方で、彼を石板の屋根とレールで出来た木製の箱の中に、彼の膝の間にステッキを置き、それを彼が生きている間にしていたように掴ませ、白人達が彼に贈った全ての贈り物を彼の横にしまい、彼を大地に座らせるようにして埋葬した。

死んだあとでも、彼は、休息していなかった。次の年に、蛮行が彼の墓を暴き、彼の頭をひどく痛めつけ、そして、骨の別の部分を取り、それをテントの見世物で晒すようにこうしたぞっとするようなものを取ろうとした。もう一度回復し、それらは、**Burlington** にある、**Iowa Historical Society** に保管されるようになったが、そこで、それらは、その **Society** の建物が火事で焼失した時に、最終的に大地に戻って行った。

12

第二次セミノール戦争

Black Hawk の戦争の年の間、Mississippi 側の東側の地域での最後のインディアン戦争となり、そして、その状況下での白人に対する唯一の残り続けた抵抗が終わった出来事が、遠くフロリダで起こった。

その出来事は、Jackson 大統領の、殺されることのなかったインディアン達全てを取り除こうと言う、執念深い信念により思いつかれた、政府の協定の別の形であった。彼は Creek 人の国を追い散らし、そして、その生き残った人達の殆どを、いまの Oklahoma に移住させた。かれは、Seminoles 族に対しても、かれらが唯一、全体的な白人達の生き方の障害となっていたので、その彼等にも同じような運命を辿るようにすることを主張した。これにより、このことが起こったのだが、その道具となったものが、1832 年の 5 月 9 日に作られた、Payne's Landing の協定として知られるようになった。

そうした協定の殆どのものと同様、この一つは、政府の交渉役の Wiley Thompson 将軍の提案したものであるが、これが、全くの味気ない欺瞞であった。それは、Seminoles 族に対し、彼等のフロリダにある所有物を全て諦め、Creeks 族、彼等は、Seminoles 族が彼らから数年前に分れてきた敵であったが、その Creeks 族の Oklahoma の保護居留区に移り住むように提案してきた。その見返りに、ごく少ない調停、これは、3 年以内に完遂すると言うものであったが、政府は、彼等が新しい家に落ち着いたら、彼等に \$15,400 を与えることに合意するという寛大なものであり；さらに、おまけとして、全ての者、おんな、子供も含め、其れそれに、一枚の毛布と、一着の手袖の仕事着をあたえるという内容であった。

ここにトラブルの本髄があった：Creeks 族や Cherokees 族は、彼ら自身の奴隷、彼等は白人達から逃れるように逃げ出していたが、その奴隷をもっていて、その奴隷達が Florida の湿地帯に逃げ込んでいた。その逃げ込んできた奴隷達を Seminoles 族は彼等に安全ない場所を提供していたばかりでなく、効果的に、彼らと部族を超えた結婚をしたり、そして、簡単な同化をさせて、部族の中に取り入れてきた。逃亡者達が、原住民の間でうまれてきた部族の者としての社会的な立場はなかったが、しかし、その一方で、彼等の取り扱いは、Georgia 州や Alabama 州に居た時よりも計り知れない程、良いものだった。

白人、そして、赤人の所有者が、逃亡した者達を探すために、Florida に奴隷探索人を送ると、Seminoles 族は、おのずと彼等をよそものの侵略者とみなして、かれらを追い出していた。このことが、スペイン人は、彼らが Florida を合衆国に譲渡した時に、理解したように思われる事実である、最初の Seminole War の根深い、そして、奥底に潜む原因の一つとなっていた。協定のなかの条項は、新しい所有者はインディアンの権利を尊敬しなければならず、彼等を公正に取り扱わなければならないと明細に記していた。

Seminoles 族は、直ぐに、合衆国がこの約束を尊敬するつもりとどれだけかけ離れているかに気付いた。いまやアメリカの所有となった Florida で、奴隷狩りをする者は、合衆国の保護のもとに、Negroes 族ばかりでなく、Georgia, Alabama、そして、どこに限らず、奴隷市場で取引されるものとして、混血の、あるいは、純粋のインディアンを求めて歩き回っていた。それが、Seminoles 族を、湿地帯に隠れ、侵略者から自らを守る逃亡者にさせてしまった。

最後の頼りないものは、Negro の子孫は誰も、Oklahoma に行つてはならず、奴隷の身として売られるように残っていなければならないと明確にした Payne's Landing 協定の後付けの知恵として発布された、言葉の上だけの命令だった。この事は、二世代以上に渡り、部族を超え結婚がなされていたので、多くの Seminoles の家族にとっては崩壊することを意味するだけだった。

Payne's Landing に居たインディアンの名士の一人は、Osceola という名前の、毛むくじゃらで恰好の良い若いインディアンで、まだ、30 歳にもなっていないような若さだったが、でも彼は、酋長ではないが、家系か、あるいは、選ばれて、既に部族の中では指導者となっていた。彼は、また、白人達の間では Powell として知られており、彼は多分実際には、全くのインディアンではあつたけれども、スコットランド人の父、祖父、あるいは、義理の父を持っていたと言われていた。

彼は、最初の Seminole War では、Jackson に対抗して戦つたが、それから、Fort King、ここは、白人たちが、逃亡兵を追跡したり、あるいは、彼の部族の中の罪人を捕まえるために、彼を雇っていたところであるが、ここで比較的何もなく平和に暮らしていた。じわじわと、彼の強力な個性の美德により、彼は、決して、正式な酋長ではなかったが、Seminoles 族の知的な指導者として見られるようになっていった。

Payne's Landing 議会で、Osceola は、出席していたが、署名をした 7 人の酋長のなかにはいなかった。彼は、あからさまに、その記録を軽蔑し、そして、Fort Gibson、ここは、僅か 2・3 人の酋長が、部族の切迫した移住のはっきりした是認へと罾にかけられたところであるが、ここでのこの後の年での彼の立場を確言していた。Wiley Thompson's での促しをしている人の一人が、Charley Emathla で、彼は部族の主酋長であつたが、この男だった。

Thompson 将軍は、もう一度、1835 年の 4 月に、満場一致の賛同を得ようと試みた。以前の協定に署名することに反対をしていた酋長達が、静かに立ちあがり、そして、ペンを取ろうとしなかったが、Osceola は、怒りの軽蔑を爆発させて、彼の狩り用のナイフを引き出し、それを、不快なその書類に突き刺した。そして、彼は、Thompson と怒りの口論を始め、そのなかで、彼は、一般的となった不適切な強制、賄賂の授受、そして、欺瞞を非難し、そして、彼は、彼のいう事を聞く部下たちの誰に対しても、これに対抗するように呼び掛ける以外には、その協定に対して賛同しないと表明した。都合の良い沢山のことが彼には聞こえていた Thompson は、Osceola をその現場で逮捕し、囚われの身とした。



Osceola

この状況で、**Seminole** 人は、最も単純な戦略を採用した。彼は、かれの逮捕が彼の気持ちを変え、そして、協定に署名し、ほかの同意しない人を説得するためにできる事は何でもし、許されたところならどこにでも行くと同意した、そのようなそぶりをした。自由になると直ぐに、彼は、異論を唱える全ての人を集め、悩みの種の運動を組織するのに忙しかった。

Osceola は、**Creel War** や最初の **Seminole** の運動から教訓を学んでいた。かれは、武力で白人の軍に敵対しようとは考えていなかった。彼は、女や子供たちを湿地帯の奥深い安全な場所に移し、彼の戦闘士たちを、彼らができるところでは殺し、そして、優れた軍隊の証拠は微塵も残さず湿地帯の安全な場所に退却するという、まるで膨大な数の蜂のように、白人達の周りをぶんぶん飛び回るよう指導された小さな集団に組織化した。

この運動はうまくいったので、当然の反応が起こり、正規の連隊が戦場に送り込まれた。1835年のクリスマス・イブに **Dade** 少佐が 100 人の部下と 8 人の下士官をつれ、彼は **Osceola** を逮捕し、そして、戦争を終結させると確信して、**Fort King** を出発した。28 日の朝に、**Osceola** と部下の強力な一隊が、この軍隊に対し驚くべき程の速さで急攻撃をし、死にかけた、あるいは、**Fort King** に逃げ込んだ、酷く負傷した 3 人の男以外は彼らの全てを殺害した。

早朝の仕事が余りにも簡単に済んだので、**Osceola**、彼は囚われの身であったが、復習の個人的な行動をやり遂げる時間を持った。小さな集団とともに、彼は、**Fort King** から僅か 250 ヤードしか離れていない家、ここでは、**Willey Thompson** と 9 人の他のものが、そとの空気と太陽に向けて開いた状態で、食事をしていたが、ここにこっそりと忍び込んだ。こうした開放された口を通して、**Osceola** と彼の部隊は、**Thompson** を含め、5 人の男を殺すという殺人の一斉射撃を浴びせかけた。他の者達は砦に逃げ込んだ。**Osceola** の立場からすれば、こうしたことは、悪名高き **Payne's Landing Treaty** の扇動者を正当に殺したという事だった。この協定の首長である **Seminole** の署名者である、**Charley Emathla** は、既に **Thompson** の運命を黙認していたのだ。

28 日の虐殺と殺人に対する仕返しに、**Call** 将軍が **Osceola** を追って、700 名の隊員を従え、追撃し、**Ouithlacoochee River** を超えた浅瀬で彼と辛辣な衝突を繰り広げた。インディアン達は、重大な損害を被り、**Osceola** も傷を負い、退却したが、しかし、そこには、63 人ものアメリカ人が、殺され、そして、傷を負っていた。それは、**Osceola** が、そうした、露わな衝突で危険を冒した、唯一の時だった。

さらに多くの連隊が野戦に投入された。**Gaines** 将軍が 2 月の 9 日に、巨大な軍隊を伴い **Tampa** に到着し、そして、3 隻の蒸気船で **Alafia River** を遡って行き、最終的には、半島を横切り **Fort King** の基地まで行進した。彼も、また、**Osceola** との戦いを模索していたが、彼は、小さな小競り合いを幾つかしただけだった。戦いは、夏の間、物憂くつづいた。**Scott** 将軍が、**Gaines** 将軍の代わりに来たが、何も成果を上げることができず、秋になる前までに、アメリカ政府に、**Seminole** 族に対してなんの進展もなかったということは、明

らかだった。Scott の単純な成果としては Oklahoma に 400 名何某かの Seminole 族のもの、そのほとんどは女、子供で、彼等はすでに移住を決めている人達の、友好的な人達であり、この人達を船で連れていったことだけだった。

“戦争を捻じ曲げる” ために、次々に将軍が南にやって来て、そして、インディアンとの抵抗との衝突は、あたかも切迫しているかのように報道され、それが、Washington では、厄介な冗談となった。失敗をした全ての役人たちにとっては、彼等の軍における経歴に多大の汚点となり、職務に熱意を注ぐ将軍を見つけことが難しい事態にまで発展した。

この指揮権の危機的状況の中で、Jackson 大統領は、軍の強烈に有能な将軍の Thomas Sidney Jesup、彼は、かつて、Henry Clay が John Randolph の無血の決闘の際にセコンドとして、補助したことのある者だが、このものに Florida に行き、そして、軍の司令に従い、他の将軍たちがやり遂げる事の出来なかったことを何でもするように命じた。

1837 年に到着し、Jesup はしばらくの間、インディアンを追跡したり、彼等と小競り合いをするなどし、しかしながら、彼等とは決定的な戦いに持ち込むことはできない状態で、前任者たちと同じように無駄な動きをしていた。Washington からの縁起の悪いつづやきを耳にし、彼は、平和を築く者として自分の手腕をためそうと決断し、そして、5 月に彼は、会議のために、Lake Monroe にある Fort Mellon に 3000 人もの男、女、そして、子供達を集めることに成功した。Osceola、そして、沢山の Seminole の酋長達が参加し、そして、議論が始まった。

月の中ごろまで、Jesup は、彼の成功が確信できたので、彼は、24 隻の輸送船を Tampa の沖合に用意し、インディアン達に、彼らの西部への旅の一步を踏み出す準備をさせた。しかし、Osceola、提案された平和と言うものが、どのようなものにされるのかを見ており、彼は人々の周りを駆け回り、そして、野営地全体が、猛烈な伝染病が流行し、置き去りにされた、その空になった輸送船と軍隊だけという不運な Jesup を残して、一晩のうちに、苦境の泥沼に陥っていた。

Jesup、彼は戦争の長官であるが、その彼の指令から任務を解かれるように依頼する手紙を書いたが、しかし、彼の議会からもらった返事はことごとく侮辱ばかりで、400 人の Shawnees 族、200 人の Delawares 族、そして、100 人の Kikapoos 族が、Seminoles 族との戦いのためにさし向けられるはずだという長官からの約束に過ぎなかった。9 月になり、こうした西部ならびに南部から、Seminoles 族を制圧するのに、とりわけ不承不承支援するような、そうした 1000 人以上ものインディアンたちが到着した。

しかしながら、Jesup は、この時まで、気持ちの中には非常にいらいらするものを感じていた。彼は、彼のしくじりにより、いらだっており、そして、自尊心を傷つけられ、もし仮に、彼が自分の経歴の残りを Florida で過ごしていても、彼は決して Seminole 族を負かすことはできないとの確信をしていた。しかし、もしかれば Osceola を捉える事だけでもできたなら、Jesup は、戦いが彼の捕えどころのない敵の外のことになるだろうと確信していた。

将軍は、最も見え透いた策略で、この目的を続けようとしていた。1837年の10月21日に彼は、Osceolaと25人の彼の下で戦った白人達との会議をしている間に捕えられる様に注文をだした。Jesupは、その結果起こったことにより、完全にいらだってしまった。彼がOsceolaを捕まえる事に失敗してしまうそのまえに、かれは、そのことを公然と非難されてしまった。インディアン達のためにはどんなことでも気の進まない人達でさえ、Jesupが取った悪名高き裏切り行為については何も言わない、国の法律の無礼な侮辱により、ぞっとさせられる以外になかった。

にもかかわらず、Jesupは、Osceolaを捉え、そして、彼は彼を解放するように主張しなかった。彼は、Seminoles族の指導者を、まず、St. AugustineのFort Marionに、その後、近くのCharlestonのFort Moultrieに送った。Osceolaは、囚人の身として耐えられなかった。彼の不運に打ちひしがれ、白人達の裏切りで、苦い日々を過ごし、彼は急速に消耗し、彼が捕獲されてから、僅か3ヶ月後の1838年の一月に亡くなった。それは、Black Hawkが、Iowaの大平原で死の床に臥す、ほんの僅か、8ヶ月前の事であった。Osceolaは、勇敢であり、技能に長けており、そして、知的であったが、しかしながら、彼は、TecumsehやBlack Hawkの評価の者ではなかった。しかしながら、もし彼が生きていたなら、彼は、幸せな時代の、彼の仲間達の素晴らしい指導者であったかもしれない；かれは永遠の若者だったのだ。

Jesupの、Osceolaと、その他の酋長達を捕獲することが戦争を終結させるという、情け深い希望が理想的なものであることを証明した。闘争は、以前と同じように続き、そして、Jesupは、彼の任務から外された。Washingtonに戻り、彼は、冷淡な議会に面し、取り調べを受けたが、彼は、彼を元の仕事に戻すことに成功した、上院議員のThomas Hart Bentonにより、救われた。

彼の後継者は、インディアンの戦争の運命をたどった人達に親しい風采をしていた。Black Hawkを彼が破滅するまで追跡していた大佐のZachary Taylorは、いまや将軍となり、その彼にこれまで誰も達成する事の出来なかった任務が任された。1837年の12月9日に、彼は、600人の男達の先頭に立って、Seminoles族の主体となっている者達のいるLake Kissimmee、そこからは、僅か25マイルしか離れていない、Okeechobee Lakeの地に向かって行軍した。

Taylorはクリスマスの日の朝、敵愾心のあるキャンプに到達し、Seminoles族が深い丘にうまく身を隠して安全な場所におり、そこから志願兵たちに向かって破壊的な攻撃を仕掛けて来ていることに気付いた。彼等のねばりが報われ、そして、Seminoles族が退却するまで、4時間以上にわたり、白人達は何度も攻撃を仕掛けた。それはこれまでFloridaで繰り広げられた戦いでは、もっとも過酷なものだった。Taylorは、勝利を主張することはできたが、しかし、-28人が殺され、111人が負傷するという、その代償も大きかった。

にもかかわらず、彼は、彼の一時の有利さを追い求めるように準備されており、冬の遅くまでに、幾つかの他の小競り合いのあと、Jacksonの忍耐が、焦りがFloridaでの任務の

尚も別の攻撃を彼にさせた時、完全に途絶されたある種の手の込んだ計画を作り上げた。**Taylor** は召還され、**McComb** 将軍が彼の代わりとなった。

Taylor でさえも、であるが、彼の上官であったものは、**Seminoles** 族を制圧することは不可能であると決断した。かれが離任する以前に、**Jesup** は、**Cuba** から、数千ドルの費用をかけて、33 匹のブラックハウンド（優れた嗅覚の追跡犬）を輸入して復職し、それらでインディアン達を追い詰めていた。ふたたび、憤慨の叫び声が、彼の耳を煩わした。アメリカ人達は、ブラックハウンドが逃げ惑う奴隷達にした事の残忍な物語を聞いていた。それはインディアンに同情する人達により語られたものであり、彼等の土地から **Florida** の正当な所有者になることにしくじっている大統領には、好ましからざるもので、彼等をずたずたに引き裂き、撃退させてしまおうと決断されたものだった。

誰も心配する必要がなかった。ハウンドは **Negroes** 族の特有の匂いを追跡するように訓練されていた；インディアン達は、彼等とは違う臭いを持っており、**Seminoles** 族を追いかけられるように訓練することはできなかったのだ。事実、湿地帯に入って行った犬たちはインディアン達と仲良くなり、彼らは、それを、白人達を攻撃するように訓練していた。

McComb は、大きな軍隊や、あるいは、ブラッドハウンドを戦場に送り込もうという意図はなかった。彼の指導は、最も良い可能性のある平和を築くべきというものであり、彼は、**Seminoles** 族がありとあらゆる可能性のある点で彼を苦しめ続けている間、其のために一生懸命働いた。かつて、赤人の略奪の一団が、**St. Augustine** の近くに沿って足早に通り抜けていく、大胆な偽りの者達の幌馬車に遭遇した。彼等は、二台の車に向かった一斉射撃をし、4 人の男を殺害し、その間に、女達と希望を抱いた管理者は森の中に逃げ込んだ。インディアン達は、幌馬車の中をあさりまわり、その者達の衣装を見つけ、そして、それを着ようとし始めた。彼等は、ぴかぴか光る者、輝かしい着物などの言葉の裏にあるものにうっとりとし、奇妙奇天烈な恰好をして、着飾って、**Fort Searle** の近くを取り巻いて、あつけにとられた兵士達に向かって、こっちに来て戦えと喚いていた。兵士達は、その挑戦を受けるには、あまりには奇観なのにまごついてしまった。

1840 年の秋まで、**McComb** 将軍は **Seminoles** 族を平圧することもできなかったし、また、彼等と協定を結ぶのにも成功できず、**W. R. Armistead** 将軍が彼の後を引き継ぎ、なおより懐柔的な政策を追求する様な支持を受けて任務に就いた。

Armistead は、自分では、実にすばらしい計画だと考えていたことを案出した。彼は、**Mississippi** のかなたの新しい土地から 14 人の **Seminole** 人の酋長を呼んできて、反対する者達に送り込み、かれらに観念して西部に移住するよう説得にあたらせた。これらの酋長達のみなが、彼等が降参する前に移住させることに反対をし、そして、**Armistead** は、彼等の影響が強くなるだろうという結論に達した。帰還者達が、沼沢地での会合で彼等の仲間会った。白人達は、そこで何が話し合われたのかを確かめる手段がなく、しかし、いずれにしても **Seminoles** 族は、戦うために戻り、そして、14 人は故郷に戻ってしまった。

“このようにして、戦争を平穏な手段によって終結させようと言う、我々の全ての十分



に根拠のある希望が閉ざされてしまった。”と、Armistead は、戦争責任者に後悔の念を込めて返答した。“国の資源における確信、敵は、それを最後まで確保しようとしており、再びそれが戻ってくるようにはされはしないだろう。すぐにでも、インディアン達の撤退についての命令は、彼等の軍隊を行動に移される連隊の指揮官たちに移され、そして、其れがあなたのところに到着するまえに、ありとあらゆる方向で偵察されてしまうだろう。”

長官は、大統領もそうであったが、確信をしていなかった。彼等は、執拗に、Seminoles 族が制圧されなかった理由は、適当な男が Florida に送られていなかった、それだけが理由だと信じていた。1841 年の春に、彼等は彼を見出した；彼は、1838 年以来、ずっと Florida に住んでいて、Quaker 教徒の両親の間に生まれ、1812 年の戦争では、Morgan Lewis と Winfield Scott とともに献身し、そこで彼は、かれを 1812 年から 1828 年まで、West Point での将校見習いの者達の指揮官として働くのに十分な特質を身に付けたのだが、かれは、William J. Worth という New York、Hudson の男だった。

Worth は、ばかばかしいほど簡単な主人のおだてを信じていた。彼は、既に戦場で Seminoles 族を打ち破っていたのだが、そして、その勝利は彼を将軍にまで仕立て上げたのだけれども、彼は、他の者達と同じように、抵抗は決して終わらせることはできないと主張していた。

彼の考えを実行するために、彼は、1841 年の夏を、インディアン達の住んでいた島に向かって沼沢地を侵略して行く事で費やしており、そして、彼等は既に逃げうせていたが、彼の兵士たちは、彼等の住処と彼等が冬を見越して頼りにしていたトウモロコシを規則通りに焼き払った。その過程のなかで、彼は、何とか、指導者であった酋長と 5 人のその他、

抵抗の信念の堅い人物を捉え、その結果として、かれは、その敵愾心を持ったキャンプ地に対して、こうした全ての捕虜たちは、吊るし首に去れるだろうという伝言をおくり、そして、逮捕された他のものも、全て同じ様な運命を辿ると言った。

ともかくも、この言明が、敵愾心を持つ人達に恐怖の身震いを送った。捕虜たちは、Worth が言ったが、もし **Seminoles** 族が降参するなら、彼等の命だけは助かったのだ。そして、秋の初めになり、彼等は、沼沢地から出てきて、将軍のいるキャンプにやってきた。多分、彼らの食べる穀物がなくなり、彼等の村が焼かれたためと言うこと、そして、勇敢なる男として十分に闘ったということ以外には、その他の理由はたいしてなかった。

Seminoles 族が出てくると、なぜ正規軍のもっとも優れた能力を持っていた正規軍の者達が、このおんぼろの軍隊を、戦争を6年もかかって粉碎できなかったのか、理解することができなかった。かれらは、痩せ衰え、やつれ果て、素足で歩き、そして、ぼろきれに包まれていた。彼等の女、子供たちは、悲惨な状況にあり、飢えており、ほとんど裸同然だった。彼等の火打ち式銃は、痛ましい形をしており、そして、彼らの手にしているこれとは思われる武器は、ナイフと手斧だった。

これらが、アメリカ合衆国が、1500 人もの命と、\$20,000,000 もの費用をつぎ込んだインディアンたちの姿だった。

最終的な協定が、1842 年に署名され、**Seminoles** 族は、彼等の同胞たちが辿った西部への道を歩み始めた。しかし、それがすべてではなかった。その数は、決して悩ましいというほどのたくさんの者ではなかったが、まだ、諦めることを拒絶していた人が何人か居た。時代は彼等には構わず進み、そして、今日、誰もが、彼らのことを、**Everglades** で、絵に描いたような旅人達に、お土産を売っている、美しい原住民として知っており、そして、フラミンゴたちと一緒にあって、**Hialeah** の壮観の一部となっている。

第二次世界大戦では、彼らの殆どが、その徴兵に登録することを拒絶した。彼等は、説明しているように、合衆国の市民ではなかったのだ。かれらは、独立した国である、**Seminole** 国の市民なのであった。

そのことは、第二次の **Seminole** 戦争が、決して終結しないという風になって現れる。

13

泣いて辿った道

“最初は、この大地は、平らで、そして、非常にやわらかく、じめじめしていた。”と、この様に、Cherokee 族の神話は始まっている。“動物たちは、一生懸命、降りて往こうとし、(Galunlati 、大地のかなたにあるところ)、そして、ひょっとしてそこがまだ乾いているかどうかを知るために別の鳥を調べに行かせたが、しかし、彼等は、降りて往くところを見つけることが出来ず、また元の Galunlati に戻ってきた。そして、最期には、その時が来たかに見え、彼等は Buzzard を送り出し、彼に、行って、そして、彼等のために準備をするように話した。これが、Great Buzzard、我々が、今、目にしている全てのコンドルの父親なのだ。彼は、この大地の全てのところに飛んで行き、地面の近くまで下りて行ったが、そこは、まだ、やはり柔らかかった。かれが、Cherokee の国に辿りついた時、彼は非常に疲れていて、彼の翼はばたばたし始め、そして、地面を叩いてしまったが、彼が、大地を叩いたところには、溪谷が出来、そして、もう一度、持ち上げたところには、山ができた。動物たちがこれを見て、世界の全てが山なのではないのだろうかと心配をし、彼等は、彼を呼び戻したが、Cherokee の国は、今日の山に覆われたようなものの形で残っている。”

このように、Cherokees 族は、約 40,000 m² の Kanawha と Tennessee 川の源流の地から、南には、Appalachian の麓の地帯を、そして、西には Tennessee、ここは、その川が、北は Ohio 州から、南は Carolinas 州の東の山麓まで、縦に境界線を作っているように流れているが、ここまで広がる Tennessee の溪谷にある彼等の故郷の発祥について語っていた。

Cherokee 族は、彼等の山々を、川を愛し、そして、自分達自身のために、幸せで、豊かな国を作る事以上のものは何も望まない、知的で、見栄えの良い、生産的で、平和な人びとであった。彼等は、アメリカの中の全てのインディアン達のなかでも、イロクオイ族に次いで、おそらく、もっとも高度に文明開化されていたのではないかと思われ、多くの観点から、彼等は、自分達を白人の男達が入ってくることに對して、これに順応していく多大の努力をしていた。

しかも、最初から、彼等は、白人達により、残虐に犠牲にされており、巻き込まれていた抵抗をするために、しなくてはならないことについて、彼等の間で別々にされていた。最後に、彼等は、国としての形はすべからず破壊されてしまった。彼らの分解の方法と手段は、Mississippi の東に住んでいたインディアンの生涯という、最期の、そして、最も悲哀に満ちた章を書き残した。彼等が戦争によって分解されたのではなく；白人が、イギリス人が Acadians 達を移住させたように、その故郷から、かれらを単に移動させたのだ。彼等の悲劇的な事件を不滅化するエバンジェリンは無いのだった、がしかし、彼等の物語は、アメリカの歴史の中で最もよく知られた物語の一つとなっており、多分、それは、白人達

の支配権に対して、赤人の長い戦いの中で彼らに対して起こった全てのことを具現しているからであろう。

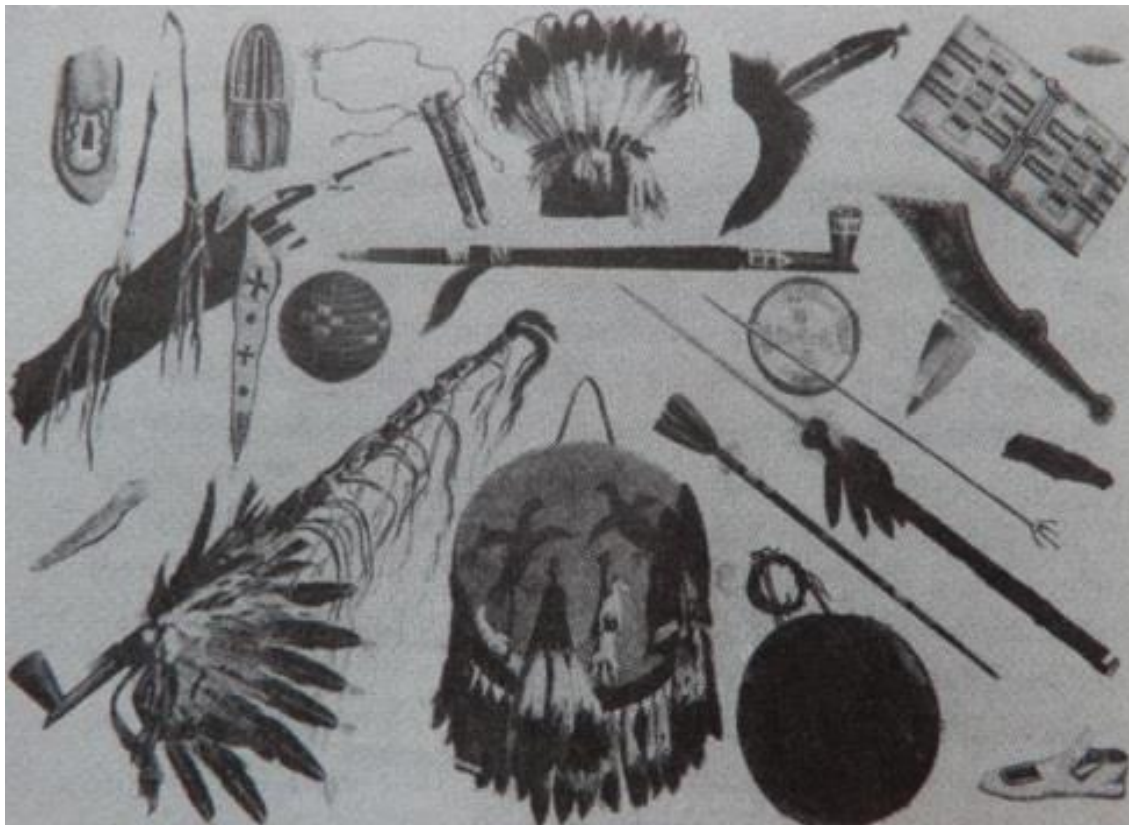
ここには、主張されるべき通常の正当化は何もない。**Cherokees** 族は、彼等の退去の時には、獐猛で、そして、戦闘的な、白人に対して野蛮な行動を何度も繰り返して、悩まして来たような人達ではなかった。彼等は彼等の領土に侵入してきた入植者達と平和的に暮らすことを望んでいないわけではなかったが、しかし、アメリカ政府が、どこまでも心配するような、ある悲しませる間違いを持っていた：彼等は、彼等の愛する国に住むことを望み、彼等が何時も所有していた大地で暮らすことを望んでいた。

勿論、**Cherokees** 族は、アメリカの国の当初は、慣習的に、住む場所を周回して去っていた。彼等は、このやり方を押し通し、これはフランス人も、また、英国の本国の者も、そして、イギリス人の入植者達もしていた。彼等は、彼等のもともとの住居地の広い領地を割譲し、そして、若い酋長が、協定で決められた境界には、何の気も使わない白人の入植者達の襲来に対して抗戦してきた。彼等の内の一人 **Dragging Canoe**、が、アメリカの独立戦争の間、そして、そのあとでもアメリカ人の側の悩みの種であった。かれは、**Alexander McGillivray** と一緒に、白人の侵略に対抗する総力を挙げての戦争のなかで、**Creeks** 族と **Cherokees** 族との統合を画策して、インディアンとの同盟の夢という随筆を書いてさえいた。

しかしながら、1792 年に **Dragging Canoe** に亡くなった時に、その生涯は、**Cherokee** の抵抗の終わりであり、1794 年の終わりまでに、將軍の平和は普及していった。1812 年の戦争の中で、国全体が、**Andrew Jackson** を支持して一つにまとまり、彼らの兵士達は、**Horseshoe Bend** で **Creeks** 族を打ち破った **Jackson** を助けた友好的なインディアン達に囲まれていた。

近年の歴史が指摘しているように **Cherokees** 族は、合衆国の中でも、ほとんどよその国のような存在だった；彼等の国は、東部の商業地帯と西部の消費地との間の障壁となっていた。代理人は **Cherokees** 族と妥協しなければならないし、彼等と良い関係を維持していなければならないということが、**Washington** では、容易に認識されていた。彼等は、インディアン達に農場での道具を与えたり、その他の農作業の出助けを上手にするなどしていたので、**Cherokees** 族は彼等の土地や財産を豊かなものに始めていた。1801 年の早い時期に、抜け目のない代理人であった **Benjamin Hawkins** 大佐は、彼は、**Creeks** 族と親しくしていたが、その彼が次のように言っている：“**Cherokee** の代理人には、車や機織り機、そして、鋤が、頻繁に利用されており、農園、手工業、そして、備蓄をすることなどが、男や女達の会話での話題を湧き起こしている”と観察していた。

1826 年までに、**Cherokee** 人の国は 22,000 頭もの牛、7,600 頭の馬、46,000 頭の豚、2,500 頭の羊、762 台もの機織り機、2,488 台の紡織機、172 台の幌馬車、2,942 本の鋤、10 の製材所、31 の製粉所、62 鍛冶屋、8 製綿機、18 の学校、18 隻のフェリー、そして、公共の道路などを自慢するほどの驚きの発展をしていた。白人達の文化の痕跡はどこにもあった。一方、年長者の者達は、まだやはり、インディアンのやり方や習慣に固執して

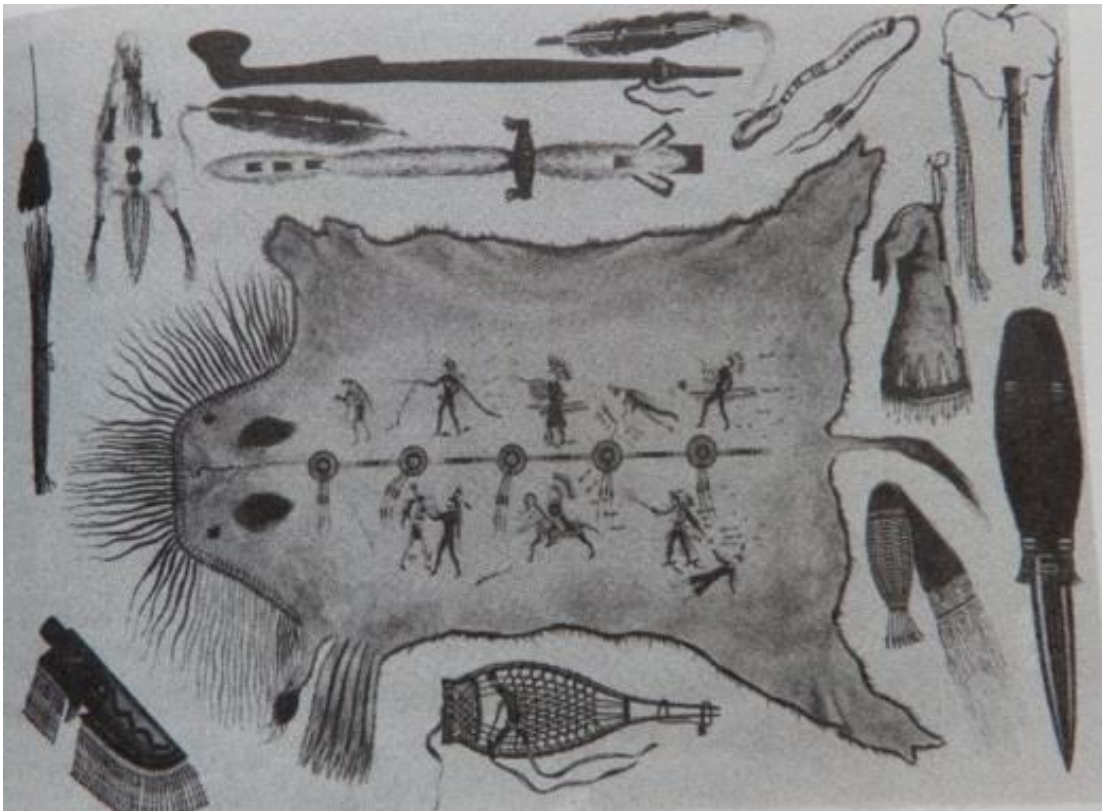


インディアンの生活用具と武器

いたのに対し、若い男達は、ほとんどいつも、白人達のような服を着ていた。かつてのウィグナムの様なものはどこかに行ってしまった。貧乏人は、丸太小屋に住むようになった；一般の人達は、Joseph Vann 酋長の家のように、George の Spring Place、ここは、Philadelphia の芸術家が設計したところで、800 エーカーもの耕作された農園の中心地でもあったが、ここに\$10,000 もする二階建ての煉瓦造りの、立派で素敵な家に住んでいた。Joseph のすこし貧乏な兄弟は、家の外を内もきれいに塗装された素晴らしい家を持っており、彼の妻はピアノを弾いて、客をもてなしていた。

それから、部族のなかには無教養の者はいなかった。彼等は本を読んでいたし、その本を家で持っており、アメリカやイギリスの新聞を丹念に読み通していた。彼等の娘たちは、板張りの学校には行かなかった。Sequoyah—George Gist、あるいは、Guess、白人達は彼をこう呼んでいたが、一という無学の部族のものが、部族の者達の間での教育改革という、素晴らしい功績である、Cherokee 語の子音表を考え出した。一年間で、Cherokee 族の数千人も大人のが、彼ら自身の言葉でものを書くことを学んだ。1828年に、国の別の指導者である、Elias Boudinot という者が、英語と彼ら自身の言語で書かれた *Cherokee Phoenix* という新聞を発行し始めた。

最初の Phoenix の新聞が、明らかにした：“我々は、いま、神が、彼の恵みを彼等に授け



インディアンの生活用具と武器

るよう祈っている、そして、全てのインディアンが、Phoenixのように、灰から目を覚ます時に、そして、‘インディアンの略奪’、‘戦争の関の声’、‘頭皮を取るナイフ’、そして、こうしたいろいろなもの、これらが使用されないようになり、永久に大地の深くに埋められるような時に、幸せの時がやってくると望んでいる”、大衆の良心と欲望の満足への極わずかの努力を約束するだろう。”

1826年に、Cherokees族は、他のインディアンの国がかってしなかったようなことをした。彼等は、会合を持ち、そして、合衆国がしていたようなものに非常によく似た、書かれた規約を創案した。それは、次の年に施行され、国は正直に信じているという国が、その存在を保証するだろうという但し書きが含まれていた。

この国の独立性と管轄権は、境界内[1819年の協定で規定されている]の国、全土にわたり及んでいて、そして、そののいたるところに、そして、これからも維持される、国として一般的に言われているところに及ぶ；しかしながら、進歩はこれからもなされ、かつ、その国の市民の財産において、それを築いた、あるいは、それらの所有にたいし正当性のある人、個々に、それは、排他的であり、市民から没収できないものである；もし、仮に、彼等が、彼等の個々の進歩に対する排他的な、そして、没収できない権利を持っている国の市民が、ここで述べられているように、何の権利も、そして、いかなる手段であっても

国に対して、独立した国に対して、どんなやり方であってもいかなる方法でも、彼らの進歩を規制する権利もなければ、その力も持たないだろう、そのような人は誰もいない；そして。そうした市民はいつでも、あるいは、市民は、この国の制限の外に彼等の努力を取り除き、そして、彼等は、どこか別の国の市民になるなら、こうした国の市民としての彼等の権利や特典は無くなってしまうだろう・・・。

同様に初期の誠実さで、その新しい構成の中で、最初に選ばれた主酋長の John Ross は、1828 年の 10 月に Council 将軍の前で彼の手を挙げ誓約した：“私は、Cherokee の国の主酋長の仕事を、誠心誠意をもって管理・運営し、そして、最善を尽くし、Cherokee の国の規約を保護し、守り、そして、維持していくことを、ここに厳粛に宣言する。”と。

Ross は、1/8 以上の Cherokee の血が流れている者ではなかったが、しかし、彼は、彼のスコットランド人の父親により、インディアンとして育てられ、そして、白人の血が、3/4 ほど混じった Cherokee 人の女性と結婚していた。会議には、完全にインディアンの血しか流れていない有能なものがいた一 Major Ridge、彼は、どのような観点からしても賢明な政治家であった指導者的な人格者であったが、彼のような者達；そして、尊敬に足る Pathkiller、彼に従う人達を彼等のもっと原始的な時代から新しい啓発の風潮に導いて行った人で有るが、そのような人達がいた。

彼等の、インディアンの国を白人の世界の中で、同化のモデルを作ろうという立派な努力のすべては、其れ自身の高潔さは維持していたが、やっぱりそれは無駄に終わった。Cherokees 族の運命は、Georgia との合意の中での連邦の政府が、インディアンを彼等の土地、そこは、Georgia が、できるだけ早期に平和的に成し遂げると主張していたところ有るが、そこから移動させると約束した、1802 年という昔に決められていた。政府は、1817 年に譲渡によりいくらかの土地を手にしたが、しかし、1822 年には、保護居留区の議会は、Georgia との合意は、実行されなかったと、そして、政治家たちは Cherokees 族の土地の名称を消滅させるために \$30,000 を特別に支払うと決議した。

Cherokee の議会は、政府とのこれ以上土地に関する協定はしないとの決議により、一時的な返答をし、そこで、Washington は、一組の委員会を送った。こうした使者たちは、成果もなしに甘言と脅しの両方をして、そして、John Ross と 2 人の他の相談役のものに、もし彼らが秘密の協定に署名したなら、それぞれに 2,000 ドルを提供するとして、彼等は、賄賂の授受を復活させた。

次の日に議会が面会した時に、Ross は、こう述べた：“私の性格にとっても、また、議会のそれにも同じように酷い侮辱が提案されたことをあなた方に告げる事が私の任務となる時がきた、”と言い、そして、彼は、事務員にそれを読むようにと、賄賂の内容が掛かれた手紙を渡した。怒りの混乱が湧きあがり、会議が物別れとなり、そのあと派遣された者達は、Washington に戻り、彼等の全体的なうまくいかなかったことを報告した。

しかし、Georgia は、インディアン達は、合衆国の土地を借りている只の借地人であると

いうことを通しており、その法律制定が冷淡にも、もし、Washington が **Cherokees** 族を取り扱わないのであれば、**Georgians** が、それを独自に行うと連邦政府に通告した。この厚かましさを極め付けが 1828 年の 1 月 26 日に、George の統治官である John Forsyth が **Cherokee** の憲法の写しを大統領の John Quincy Adams に、彼から“独立国としての権限の中での別箇の政府の選択”についての彼がなすべきことの提案したことを依頼し、これを送った時に起こった。Forsyth は、インディアンを“生意気な”と呼んだ。

Adams はおそらく、その差し迫った悲劇を避けるために、彼の政治的な手腕を発揮することが出来たのだろう。しかし、不運にも、John Ross と、Andrew Jackson は、ほとんど同じ時期に役所にやって来て、そして、インディアンの問題については、取るに足りない理解さえも、決してすることになかった大統領からの正当な取扱いの希望を微塵も持っていなかった。

1829 年に、かつて一度、退去をさせるための費用が議会に取り入れられ、そして、Georgia は、その鉱物資源の豊かなこと、そして、可能性のある実際の財産の価値が貪欲な商売人や政治家に無駄ではない、**Cherokee** の土地を掴みとるための圧力の猛烈な連続集中砲火を始めた。権利を主張された時代に流行したうた：

この国で私のほしいもの
それは、かわいいちっちゃな少女さ
と、それに、大きな農場さ
Cherokee の国の向こうにあるんさ。

土地を乗っ取るやり方は、Georgia の法律によって詳細に描写されているように、そのやり方は、古くからのものだった。1830 年に始まったものだったが、継続的な法律が、まず、公に、その領域に、Georgia の法律が正式に及ぶものとした。それから、**Cherokees** 族の財産が、いわゆる 160 エーカーごとの“土地区画”と、40 エーカーごとの“金の区画”に分割され、彼等の全てが、のちに、くじ引きにより、手に入れられた。インディアンに対する一片として、160 エーカーが、**Cherokee** の家族長に与えられるはずであったが、しかし、**Georgians** 達は、それと同時に、綿密に、何らこうした分配を実行しないように行政命令を下していた。

伝統的に自分達には、深く権利を授かっているような振りをしてきた **Georgians** たちは、だから、自由な政府に対してこうした基本的な考え方をするインディアン達を滅ぼすそうとやりだしていた **Cherokees** 族は、それ以来、白人達にたいして法廷で証言することが許されなかった；白人達との彼等の契約は、このように、目立った白人達の負債は取り消しにされ、不備なものと言明された；彼らは、どんな目的であろうが、何かの目的で公然と平和的に集合することが出来なかった；そして、彼らは金を採掘する権利をはく奪された。合衆国政府のこうした運用の中に見られた最終的な刺激として、Georgia 州は、**Cherokee** 人の領地の中に住んでいる全ての白人に対して、国に対して忠誠を誓うという事を要請し、そして、と同時に、彼は、それを処分すべきくじ引きからは阻まれているので、土地を所

有するという権利を、基本的に、否定されていた。それは、残酷な欺瞞である計画全体を公然と非難してきた伝道師や教師たちを取り上げるように提案された国がどのようなものか、という事であった。

こうした法律が有効に働くのを待とうとせず、Georgians の人達は、依然のインディアン達とおなじようなこと、小屋に火を付け、馬を盗み、そして、何の防御もない Cherokees 族にありとあらゆる残虐行為をはたらくような事をし始めた。

一方、退去させる議案が、議会になかに持ち上がり、そして、国全体の興味が突然 Cherokees 族の身の上に降りかかってきた。彼らは、ほんの僅かの明白な保護者を見つけた。Massachusetts の Edward Everett が、略奪し放題の Georgians たちを公然と非難して国会の中で立ち上がった：“彼らは、Cherokee の領海線をほんの超えればいいだけだ；彼らはほんの僅かの時間と彼らの上に立ち、休みのとれる、だれも白人の目の行き届かないほんの僅かの場所を選択すればよいのだ、そして、彼らは、住宅を焼き払い、農地を荒らしまわり、持ち物を略奪し、人に襲い掛かり、Georgia で問題になっている Cherokee の子供たちを殺しているようだ。そして、数百人も部族の人達が見ているのにもかかわらず、その略奪者たちに対する目撃に責任を持つことを許されているような者は誰一人いない。”

John Ross は、最高裁判所に、Georgia 州の法律に対抗する差し止め命令を求めて、彼の国の告訴を提出したが、しかし、John Marshall 主席判事と裁判所は、Cherokee の国は、その国はアメリカの国外の国で有するという理由で、合衆国の裁判所に、その行為を Cherokee の国は持ち込むことはできないという立場に立って、インディアンに対して、裁定した。しかしながら、一年が経ち、1832 年に、裁判所は、本質的に、宣誓を拒絶し、そして、牢獄に送られた二人の伝道師の裁判の中で、その裁定を覆した。その裁判権を拡大する中で合衆国の条例は、違憲であることを明らかにし、裁判所は裁定をくだした：“Cherokee の国は、その境界線が明確に示され、そこでは Georgia 州の法律は、何の効力も持つてはおらず、そして、Cherokees 族の、彼ら自身の承諾、あるいは、協約の承諾とか、議会での条項が無い限り、Georgia 州の市民はそこに立ち入る権利は持っていない、彼ら自身の領土を有している、明確な社会である。”と。

“John Marshall は、彼の決断をした、” 合衆国の大統領が言っていた、“いまや、彼に彼の言葉を施行させよう。” Georgia 州は Jackson の指針を取り上げ、そして、その非合法的な方法を継続した。

終わりを告げる時は刻々と近づいていた。John Ross の家は、あの裕福な Joseph Vann や Cherokee の指導者の所有しているさまざまな住居と同様、没収された。Ross 自身は、Tennessee の領域にある彼の Long Island “Home, Sweet Home”からはずっと離れていた、John Howard Payne をもてなしている最中に、1835 年に逮捕された。二人は直ぐに釈放されたが、しかし、Payne は、Georgia の市民軍が Cherokees 族に対してしていることを毒づくような説明を書き、そして、Tennessee は、逮捕は神聖な境界線の地帯の中で行われ



Mandan 酋長の小屋の内部

たとあきれかえっていた。すぐに **Cherokee Phoenix** が発行を停止させられ、インディアン達は、彼らの出来事についての情報源となるその中核を、もはや失ってしまった。

この状況で、政府が別の協定を作ろうと言う動きをすべきだったという事は必然的なことであって、これは、移転の協定の一つであるが、これが 1835 年の 12 月 29 日に、17,000 人の **Cherokees** 族のなかの 500 人程度のものとの間で署名された。政府は、それは、

“**Cherokee** という部族のインディアンの酋長、指導者的な者達、そして、人々”との協定であると、もっともらしく見せかけていたが、しかし、国の政府の唯一の役所ではないものがこの記録に署名したもので、これは、勿論、べつの形の欺瞞であった。ただ、**Ridge** 少佐、彼の息子の **John**、そして、**Elias Boudinot** がそれに賛成し、指導者達の間ではそれだけで、彼らは、役所を支えている者達ではなかった。

補完的な条項が、其れにより **Cherokees** 族が **Mississippi** の東部で所有している全てのものを \$5,000,000 で譲渡するという議事録を簡潔するものであったが、これが 1836 年の 3 月 1 日に協定に付け加わった。彼らは、7,000,000 エーカーの西部の土地と、べつの 8,000,000 エーカーの土地のための \$500,000 が与えられる筈であった。かれらは、この新しく住む場所に 2 年以内に移動しなければならなかった。

Cherokees 族は、その協定により、無残な形で分断された。**Ross** 酋長がそれを妥当でないと明らかにした。16,000 人の署名をもって嘆願書が **Washington** に送られ、その中で、

合衆国の交渉人は、国をペテンにかけたことを明らかにしたが、しかし、**Jackson** は、これには、何の反応も示さなかった。しかしながら、上院に、この協定を承認する時が来て、ある程度の政策的な資金を、彼らが、大統領による、多分、非公開の処置と認められるようなものから出すという、**Whigs** の決断による、上院議員たちの品位の良い感覚にあまり関係のない様な、耳障りな論争が巻き起こってきた。どんな場合にしろ、抵抗は何の足しにもならなかった。**Jackson** は、承認を後押しするために彼の強力な上院の機能を組織化したが、しかし、その協定に関しては、たった一度の評決で最終的に批准された。

それ自身の裏切りを承認して、政府は、たちまち、**Cherokees** 族が、言葉で表しているよりももっと別の形で抵抗するかもしれないと言う恐怖に陥れこまれ、そして、インディアン達を武装解除しようとその領域に軍隊を送った。**R. G. Dunlap** 将軍、彼は指揮官の一人で有るが、その彼が、彼の任務を実行し始めた、その直後に、インディアン達は、保護を必要としている人達であるということを見てとった。時を経ず、その地域のいたるところで、インディアン達を助けるというかなりの騒動があったが、しかし、これらの殆どは、政策的に扇動されたものであった。

Cherokees 族は彼らの移動を始めた。彼らの内の 2000 名のものが、1836 年から 1838 年にかけて西に向かって行った。その他の 15,000 人の者達は、明らかに、**Ross** の協定を破棄するという戦いが必ずうまくいくと、希望し、そして、其れを信じて移住をしなかった。しかし、何の変化も起こらず、そして、その時が始まった；2 年間という猶予の時が終わりに近くなった。政府にとって、**Cherokees** 族が強制的に移住させられるべきだという時が明白になってきて、1838 年の 5 月に **Winfield Scott** 将軍が 7000 名の兵士を伴い、この仕事を遂行するために送られた。

その時の説明が、移住するために一同に集めようという声明が公布された、穏やかな春の **Cherokee** の国の状況を明らかにしていた：“3 月の最初から、寒い天候ではなくなった。農作業は、寒さで閉ざされていることから解放された。芽が、葉や花にほころび出始めていた；木々には緑があふれ、うきうきしており、さえずる鳥たちで華やかだ。インディアン達は、かつてない程朝早くから畑で働き始めた……。垣根の角や、低木の列は綺麗に整備された。大地は耕され、トウモロコシは、かつてない程上手に植えられた……。それらは、直ぐにひざの高さまで上手く育っていった。彼らは、肥沃なところだけを耕した。インディアンは、決して貧相なやせた土地では、仕事をしない。”

こうした平和的な情景の中、**Scott** 将軍の兵士達が、インディアン達が退去させられるまで、収容しておく砦棚(サッパ)に連れていくための幌馬車を運んでやって来た。ゆったりとして動く雄牛を棒でつついている、幌馬車の御者の一人は、**William Cotter** という一人の少年であったが、かれは、のちに、その時代の悲惨な光景を書き残していた。

“全ての注意事項があった後、彼らの中にいる兵士達とともに、指定された、まさにその日に、彼らの家のまわりや、畑で働いているインディアン達が見受けられた。二人、あるいは、三人が、畑にやってくる兵士を見ると、直ぐに鋤を投げ出し、そして、できるだ

け早く逃げ出して行く情景が、まるで昨日のことの様に思い出された。その後は、彼らはそうする以外に方法が無かった。男たちは、かれらを紳士的に扱ったが、しかし、彼らを道路でも、あるいは、畑でも、どこであろうと彼らを見つけた所で、時には、家族の居るところで捕まえて、そして、彼等を指定された場所に連れて行った。彼らの家の中のあらゆるものが、1日とか、2日そのまま取り残され、そして、指定されたところに持っていかれた。百とか、あるいは、それ以上の家族が集められると、彼らは、**Ross Landing** への行進をさせられた。それは、それを目撃した人達には、まさしく悲しみを誘う光景だった――白髪の混じった年寄りや女達が、嘆きの集団となって歩いている。歩くことが出来なくなった者達のために乗る者が準備されていた……。”

“小屋からものを取りだすときには、6人とか、それ以上の男達が私と一緒に守衛として出かけた。彼らは、無理矢理にドアを開け、そして、幌馬車の中に、貧相な極わずかの役に立つ家庭用品を積み込み、時には、2ないし3家族の家庭用品が一つの道で持ち込まれた。私につづいて、1マイルとか2マイルを守衛たちは、私を誰よりも危険な状態にしたまま、あちこち走り回っていた：だから、もし、インディアンでも隠れていたとすれば、私は、犠牲者の一人となっていただろう。”

“でも、インディアンは殆ど家に戻らなかった。我々は牛や子牛を、一日か二日は離れて居られるように、後に残して行き、猫や犬たちは、彼らが我々を見たときには、どこかへか逃げ去って行っていた。人目につかない木の下のポニーは、彼らの鈴の音を立てて、ハエを追いか、牛や子牛は、お互いにモー、モーと泣いていた；哀れな犬たちは、彼らの飼い主を求めて吠えており、彼らを残して来た時には、一彼らが、全てのものは、堅い石を柔らかく溶けるようになっているということが分るように、家のドアを開け広げてきた。そして、これとは対照的に、トウモロコシや大豆が見事に育っている光景があった。”

Cotter が話している人のように、全ての **Scott** の兵士達が人道的だったという訳ではない。ある者達は野蛮であり、そして、不人情であった。彼らの後に、辺境地開拓者の暴徒たちがやって来て、彼らはできることは何であろうと略奪し、そして、破壊すると決心していた。こうした過程のなかで、**Cherokees** 族からの抵抗は殆どなかった；彼らは、既にあまりにも教化されていたのだった。

収容所の中では、**Cherokees** 族のものは、何時も一緒にさせられており、赤痢、熱などに苦しめられ、質のわるい酒のために準備して所持していたほとんどないようなお金をせしめようという白人の悪党どもが捕まっていた。6月の初めに、みすばらしいインディアン達は、平船に詰め込まれ、彼らの神話では、死の干からびた風が吹いてくる、恐ろしい西部に向かって、**Tennessee River** を下って行った。彼らは、旅そのものよりももっとそのずっと先にある薄暗い土地のことに怯えていた。

しかも、それは。現実の恐怖であることを証明するような旅であった。最初に出発した者達のほとんどが、夏の猛暑と、それによる発熱に屈服し、**Scott** 将軍は、9月の1日まで、強制退去を、人道的に延期し、**Jackson** や新しく旅を指揮するものたちが、これに反対した

けれども、彼の約束に固執した。日照り続きがあり、さらに、最期の退去を遅らせたが、13,000 人以上の **Cherokees** 族の者が、べつべつの 13 台の幌馬車にのり、10 月 1 日と 11 月 4 日の間に移動させられた。病気が、格安物扱いで、打ちひしがれ、おびえていたこの不幸な人達をさらに苦しめていた。4,000 人以上もの人が旅の途中で死に、決して、新しい土地まで行く着くことが出来なかった。**Ross** の妻も、そのうちの一人だった；打ちひしがれた指導者は、**Little Rock** に彼女を埋葬した。西部に向かう旅の道へのかすかな驚異が、いつしか、**Cherokee** の人達のつぶやきのなかに **Nuna-da-ut-sun'y**、“嘆きの街道”と聞かれるようになった。私たちが今日 **The Trail of Tear** として知っているものである。

そうしたものは、明白な運命の威厳ある成り行きであった。合衆国政府が言っていた、彼らの新しい故郷で、**Cherokees** 族は、“緑の草が生え、そして、川が流れている間”は、生き延びることができた。それは、他のこととおなじように、何の価値もない将来の見込みだった。

14

西部での、南北戦争

“我々は、情け容赦のない Apache により、どこにも行けないように閉じ込められている、” 1861 年の 8 月に、その領域から、*Arizonian* が報告していた。“Overland Mail の撤回と駐屯部隊の撤収以来、生き残りへの挑戦が、最も厳しい頂点に達していた。6 ヶ月もしないうちに、全体の男たちの内の 9/10 の者が殺害され、そして、個々の領地のどこの牧場、農園、そして、鉱山に行っても、もはや、継続することはできない、諦めの状態となってしまった……。”

それが、Mississippi から西の殆どどここの場所でも、北軍、南軍のどちらの軍隊でも、彼らのもっともすばらしい兵士達の砦を撤収したときに、彼等と呼ばせけるような時の状態だった。いくつかの出張所は完全に閉鎖された；他のところは、年寄りの、弱々しい、あるいは、正規兵の中では、闘うには、あまりにも未熟な兵士達によって守られていた。大平原のインディアン達は、**Rebel prisoners**、彼らは、“メッキされたヤンキー”と、さげすまされて知られていたものとして知られているが、その者達が、危険となった領域を守備するために奉仕をするためにおくり込まれたのだが、そんな新しい状況での、限りなく広い場所での有効な優位性を取っていた。

こうした混乱を伴いながら、大陸の西半分での闘争が始まり、最初は、南北戦争そのものの壮大で、悲劇的な光景の余興の様なものが始まった。東部のアメリカの長い戦いのようではなく、西武での白人と赤人との間の諍いは、歴史の筋道が一つの取り決めとか、宣伝の成り行きにより、すべからく変わっていなかったにしても、それが脇にそらされていたような、陰に潜んだ決定的衝突を何も自慢できるものではなかった。抗争が、偉大なる国、古くも、そして、新しくもある、その国と力の意図しないような均衡にあるインディアンとの間のものであった、もっと以前の時代に持っていた背景の威厳を持っているというものでもなかった。アメリカの東部では、白人達は、インディアンを完全に征服するのに、300 年の年月を要した。合衆国政府は、西部の部族の抵抗を、彼らを膨大な数で殺害し、いつものような詐欺的な協約で彼らの土地を奪いとり、ずっと以前から、彼らの取り扱いがむき出しの恥辱と不祥事であったような保護居留区に閉じこめると言ったことで、破壊してしまうのに、僅か、30 年しかかからなかった。その物足りない 30 年に、指導者達、白人と、そして、赤人の両方のものが、彼ら自身の中にある種の国家的な文献を作り、映画やテレビの中で描かれている、そして、アメリカ人や、その他、誠にたくさんの世界中の人々が、古い西部のことを知っている根拠となったただ単なるイメージを作り出した、戦争を戦ったのだ。それは、よく知られた英雄の武勇伝である。現実には英雄的なものでもなかった。

Cherokees 族の悲しい経過と、南北戦争の結末との間、西部における新しい時代は、1849

年のゴールドラッシュに続いて起こった、殺到した移住により告知された。幌馬車の行列が西部の大平原を横切って彼らの冒険的な道をのたくっていた時には、彼らは、かつて、**Opechancanough** や **Philip** 王の時代から、どの部族もしていたような侵略にたいして抵抗してきた敵愾心を抱く部族によって取り囲まれていた。しかしながら、この時代までには、インディアン達に、どのようにすれば彼らに街道の道を、自由に動ける領域を、さらには、一般的に、誰にたいしても、土地、あるいは、お金を所有している人と直接やり取りするのに、不利とならずにそれらのものを手に入れることが出来るようにようとする、そんな風に解放させるか、彼らを取り扱う手立ての経験を十二分に持ったアメリカ政府があった。

1851 年に、政府は **Cherokees** 族, **Arapahos** 族, **Crows** 族, **Assiniboins** 族, **Hidatsas** 族, **Mandans** 族,そして、**Arikaras** 族の者達が参加した **Fort Laramie** での会議に交渉人を送った。これらの部族は、政府によって分割されることに賛同し、それぞれが、表面上だけで彼ら自身の領土となっているものに署名させられた。**Cheyennes** と **Arapahos** が、一つの例として引用するために、ところが、これが後でトラブルとなったのだが、彼らは、現在の **Colorado** と **Kansas** の西部の殆どを与えられた。

こうしたインディアン達の古い時代の土地に道路と軍の支所を建設するという特権、これは、どんな場合にでも適用するというのを抜け目なく意味していたのだが、この特権のために、政府はこの先 50 年間の間、毎年\$50,000 の支払いに賛成した。この協約が上院に行くと、“50 年”の代わりに、“10 年”という句が置き換えられた；勿論、インディアン達には、決して話されなかった。

どれほど、他の観点に立つとこの協約の意味するところが沢山の意味を持っているかが、直ぐに明らかになった。1859 年に新しいゴールドラッシュが **Colorado** に大群となった入植者達を連れ込むようになると、彼らは、単純に **Cheyennes** 族や **Arapahoes** 族を追い出した。その協定は、白人達が、こうした土地を横切るというだけの権利を保証していたのだが、しかし、彼らが街をつくり、そして、農場を耕作する代わりに、彼らの望むものはなんでも所有できることをも保証していた。

7 年の後、この不法な強奪のあとにおこったインディアン達の戦争を検証する政府の委員会が、赤人たちの苦境を総括し、都合の良い特権に含まれている道徳的な問題を提起する深く感動する論評を作った。

“1861 年以前、**Cheyennes** 族と **Arapahos** 族は、高山地帯から、**Arkansas** の水辺に下って来させられ、そして、彼等の権利のこの違法行為のために、陰鬱になり、不機嫌になっていた…… もし、白人達の土地が取られれば、文明社会はその侵入者に対する抵抗を正当化するだろう。文明社会はこれ以上のことをするだろう：もし、彼が悪事にそまるようなら、社会は、彼に対して卑怯者、そして、奴隷としての刻印を押すだろう。こうして、文明社会は、立場の弱い人達の権利を確立し、そして、其れを保証するようになった。それは、保障によって成り立っているのではなかった。協定は破られたが、しかし、未開人によってではなかった。もし、未開人が抵抗するなら、文明社会は、片手にモーゼの十戒



進展の精霊

をもち、そして、もう一方の片手に剣を持ち、彼の即座の根絶・・・を要求した。こうしたインディアン達は、彼らの以前の故郷が、そして、彼がしていた狩猟の大地が、金に目のくらんだ、欲深な連中により踏みにじられていることを知った。彼らは、彼らの獲物が大平原の東に移動させられたことを知り、直ぐに、自分達自身がねたみの対象になっており、憎まれていることが分った。彼らは、行かなければならなかったのだ。”

一方、隣接した **Arizona** とか、**New Mexico** では、もっとずっと気性の激しい人達の **Apaches** 族が、二人の酋長、**Cochise** と **Manga Colorado** に先導されて不可避の前進に抵抗していた。そこでは、牛やインディアンがアメリカ人の妾となったメキシコ人の女達から子供達を盗んだとして罪を帰せられた、1861 年に戦争が起こった。**Cochise** と 5 人のほかの酋長達が、**Fort Buchanan** に駐屯していた第 7 騎兵隊から派遣されてきた人達とこのことについて話し合いをするためにやって来た。彼らは、指揮官のテントで面会したが、

そこには、兵士達が告白を得られない時には無視されることを象徴する、休戦の白旗がなびいていた。彼らは、酋長達を捉えようとしたが、Cochise はナイフで外にでる自分の道を切り開いた。他の酋長が彼に見習ってやろうとしたが、彼は殴られ、銃剣で撃たれた。他の酋長達は縄で縛り上げられた。

Cochise は、敵愾心のあるものとして何人かの入植者達を捉えており、捕虜たちの交換がよくよく議論された。それが実際に実行されるまえに、酋長の若い男達が捕虜たちを殺し、そして、僅か 2・3 時間ののちに、Apache の捕虜たちが兵士達により、吊るし首にされた。

戦争が、特有の狂暴性を持って、領地に荒れ狂った。Apaches 族は、伝統的に、“野性味あふれるインディアン”として、知られていたが、そして、Cochise は、彼らの中でも、ぬきん出て野性的な人物の一人だった。彼が彼の白人の捕虜たちを罰するときの闘っているような拷問の物語が、今日では、Arizona では、それを記念しているけれども、彼の名前に南西部の残虐という異名を与えた。Mangas Colorado が、軍が行って捕虜となり、“逃走をしようとした” 1863 年に殺されたが、その時に、Cochise は、主酋長となった。Mangas Colorado が見張りの真っ赤に焼かれた銃剣で刺され、そして、彼が拷問から逃れようとしたときに殺されたという物語は、彼の後に続く者の気質を何も改善しなかった。

1862 年の 9 月に、Carleton 将軍が Rio Grand の入植地に到着し、同じ指示をもたせて、3 つの派遣隊を野戦に送り込んだ。“男達は、いつでも、どこでも彼らを見つけた時には、殺されなければならない。女や子供達は捕虜として捕まえ、勿論、彼らを殺してはならない。”それが、根絶の戦争の、勿論、あるべきものだ。勿論、そうした戦争がうまくいくはずがない。Apaches 族は、ただ単に山奥に逃げ、そして、白人達が再び、交渉を再開するまでの数年の間、そこからゲリラ戦法を取って来た。

南北戦争の西部地域に対する影響が 1864 年に絶頂に達し、と同時に、其れ自身が戦争の絶頂という形となった。その時まで、抑制されていないインディアンの抵抗の三年間の間に、東部の戦闘の最前線から、より多くの、そして、よく訓練された連隊が召喚され、軍の遠征隊が、あらゆる方向に実施された。Colorado Territory では、Arapahos 族が、彼らを飢餓の極限にまで至らしめた、彼らの消失した狩猟地の取り返しの動きがますます激しくなっていた。

それは、奇妙な状況だった。インディアンは、心底、戦争を望んでいたのではなかった、というより、彼らの苦境が、彼らに、白人の軍隊によるこの上ないような無慈悲なやり方に対する返答でもあった、略奪して回ったり、強奪をするようにさせていたのだ。James D. Horan が、*The Great American West* で、私たちに語っている: 1864 年までに、South Platte に沿って、全てと言っていいほどの農場主たちが焼け出されて、そして、殺された。干し草の一つの谷は完全に焼き尽くされた。荷役労務者達は、危険極まりない旅を拒絶し、Denver は食料の供給を絶たれてしまった。1863 年には、小麦粉がほとんど手に入らなくなり、一包みが \$45 で売られた。状況は通信が途絶えるほど悪くなった。”

両方の側が、不平を言っていたが、ある者が恐怖を抱き、1864 年の春にインディアンに

対して行った極めて過酷な遠征の命令の中での、Downing 少佐の報告を呼んでいる：“我々は、その日の大体 11 時頃に出発し、昼も夜も旅をつづけた；夜明け近くに、私は、South Platte River の約 60 マイル程度北にある小さな峡谷である Cedar Bluffs のなかの Cheyenne の村でビックリするような体験をした。我々は、襲撃を開始した。わたしは、部下たちに彼らを殺すように命じた。彼らは、私が聞いたところでは、26 人ほど殺されてしまい、そして、6 人が負傷した。私自身の損失は、一人が殺され、一人が負傷した。わたしは、彼らの部落を焼き払い、そして、手にできる者は全て持ち帰った。捕虜は一人もいなかった。我々は弾薬が尽き果て、かれらを追い詰める事ができなかった。”

残虐行為の応酬が、白人と赤人との長期にわたる戦争の中で最も議論の余地のある出来事の一つとなる筈のもの、この物語は、歴史の中で Sand Creek の大虐殺として知られているものであるが、これを引き起こす原因となった。それは、Denver の東、30 マイルに住んでいた Hungate の家族の殺人という、インディアンの行為から始まった。Hungate 自身は、彼の体には 80 発の弾を射抜かれていたが、切断されて見つかった。彼の妻と子供たちは、拷問にかけられ、そして、殺された；彼らの体は、井戸の中に、一緒に縛られて見つかった。

それは、他の似た様ないくつかの事件からすれば、ちょっとだけ度が過ぎて悪かった程度であったが、Hungate の運命により、その領域全体に衝撃がはしり、そして、強い怒りが沸き起こった。しかし、統治官の Evans は、直ぐに、まず Washington に、遅ればせながら、100 日間の奉仕の大隊を投入させるという戦闘局からの許可の返事を受け、Arapahos 族や、Cheyennes 族に対する助けを要求するという行動をとった。この命令が出て、1864 年の夏に Fort Weld に届き、そして、悲劇を生んだ二人の主要な役者が、舞台にのし上がって来た。

平和の不当な評価を受けている悪人が、John Milton Chivington 少佐であった。彼は、強いて彼の任務を断念された、このすばらしい役人に対する公正という意味において、彼は、極めて偉大な彼の国にたいしての奉獻を実施したと言われるべきであった。Chivington は、誇りを持ち、そして、不撓不屈の男であったのかも知れない、がしかし、彼はまた、有利な取引でも、軍事的な非凡さと恐怖を知らない男だった。それが、1862 年の 3 月 27 日に、Santa Fe の戦い、これは、“The Gettysburg of the Southwest” と呼ばれた、その戦いで勝利をわが物にした Chivington であった。その供給基地であった Confederate(同盟国) を破り、Chivington は、Colorado, Arizona, California、そして、Nevada と言った金の産出地を南軍が手に入れることを防ぎ、そして、大きな意味で、上手いこと決定的となった勝利が、南北戦争の結末となった。彼の Santa Fe での偉業のあと、Chivington の部隊は、騎兵隊に変換され、かれは、Cheyennes 族, Arapahos 族, そして、Sioux 族を追い詰めるための時間を費やすこととなった。

Sand Creek での出来事の英雄は、一立場を変えて、インディアンの側では、一 Cheyennes 族の酋長だった Black Kettle だった。彼は Cochise のような、仇討に熱中した血に飢えた



幌馬車隊への襲撃

指導者ではなかった、がしかし、彼と、仲間の戦士達は、後に彼のキャンプで見つかったのだが、長い髪をした女達のものも含め、沢山の素晴らしい頭皮を集めていた。彼もまた、非道の責を持つ者であったが、この出来事の中での彼の偉大な功績は彼が平和を望んでいたことである。Cheyennes 族は、Dowing 少佐のような無慈悲な攻撃的な遠征隊に困惑し、弱っていた；彼らは、抵抗していたけれども、彼らはそれがどんなに無駄なことかを知っていたに違いなく、そして、1864 年の夏に、彼らは、平和を求めた。それゆえに、Black Kettle は、Fort Lyon で指揮をとっている Wyncoop 少佐に、彼が、交渉の会議を持つことを望んでいるということを知らせ、そして、捕虜たちの交換を提案した。

その後で何が起こったのかは、いまなお、これに継続した研究が、それを明らかにするというようなことにあまり熱心でなかったという大変な議論の余地を残す主題である。いまだに確かな事実は、論争の原因を蘇らせているように思われる。かれは、いかなる交渉の権利をも持っていないと知っていた Wyncoop 少佐は、出てきて、そして、Cheyennes や Arapaho の指導者たちを、統治官の Evans と話をするために、彼と一緒に Denver に行くように説得した。代表団には、Black Kettle、彼の兄弟の White Antelope、そして、Bull Bear、彼らはいずれも Cheyennes 族の者達；そして、主酋長である Left Hand を代表とする何人かの Arapahos 族の者達を含んでいた。

会話の記録を見てみると、それは全く役に立たない会合だった。政府側のその会議の主張は、“Running Creek で Hungate の家族を殺したのはだれか？” “Cherry Creek の奥で男

と少年を殺したのは誰か?”、そして、“Charley Autobee の馬を盗んだものは誰だ?” とこのような疑問に明け暮れているばかりだった。こうしたことへの返事は、いつも、“北の Arapaho さ”; “Kiowas 族と Comanches 族さ”; あるいは、“Raven 渡りガラスの息子さ” — どんな時も、そんな者は居ない、あるいは、彼らの部族の者ではないと言うものだった。

Evans は、彼は、何ら権威を持っていないので彼らと平和を築くことはできないと酋長達に指摘するばかりだった。平和は軍、この場合には、この領域の指揮官で有る Chivington 大佐と合意しなければならないと彼は言った。まさしく、その日に、彼は、彼の上司であり、Department of Kansas の司令官である S. R. Curtis 将軍から、電報を受け取った。そして、その電報には、“私は、内務省の代表が、あまりにも直ぐ贈り物をするのではないかと心配している。沢山の事の話をするためにちょっとばかりの煙草などどんな贈り物をする前に懲らしめた方がよい。” それは、正式な政府の意見であり、一平和のまえに懲罰、というものであった。インディアン達は、まず最初に、懲らしめられねばならなかった。

Black Kettle の最後の言葉はいかにも平和的だった。“我々は、Wyncoop 少佐と一緒に Fort Lyon に戻ろう、” と、彼は言った。“それから、我々は村に帰り、そして、私のところの若い者たちに言われた言葉を送り届けよう、あなたの言ったことを全てだ。私は、それらの事の全てに返事をする事が出来ないが、兵士達を手助けすることに賛同させることに何の困難もないと考えている一つまり、これは、彼は、彼のところの勇士たちが、平和を維持しようとしている軍部のものと協調するものと思っている、ということを意味していた。そのように、Black Kettle の言葉のたしかな白人達の見方であったものだが、通訳されたものを読んでいた。

Wyncoop は、Denver での会議のあと、直ぐに彼の命令にほっとした。Chivington の敵が、後に、それは、少佐が余りにもインディアンの肩を持っているからだと主張していた。どんなことがあったにしろ、彼は、11 月の 2 日に Fort Lyon からの命令を受けた、良心的な司令官である Scott Anthony 少佐に置き換えられた。

こうして、猫とネズミ、もっと的確には、司令官とインディアンとの、追いかっこが始まった。彼の到着で、Anthony は、652 人の南部 Arapahos 族のものが、敵愾心に燃えていると知られている Little Raven という酋長に率いられて、砦から 2 マイル程離れた所で、見せかけだけは、平和的に見えるようにキャンプをしていることに気付いた。かれらは、毎日、食糧を求めてやって来た ; Wyncoop は、あきらかに、彼らに食料を与えていた。Anthony は、彼らには、決して彼らの武器を手渡さないと告げ、そして、其れが自分たちの持っている全てだと言いながら、兵器の貧弱な集まったものに話を転じた。Anthony は、彼の権威を超えていくことに心配しながら、武装解除について二番目の考えを持っており、10 日後に、彼は、Cheyennes 族に加わることを選択した、友好的な酋長である Left Hand のもとで、彼らの 8 つの小屋をのぞいて、どこかに行くように指導して、武器を彼らに返した。

11 月の 6 日に、Black Kettle の Cheyennes 族が、多分平和にしようという事で、砦に向

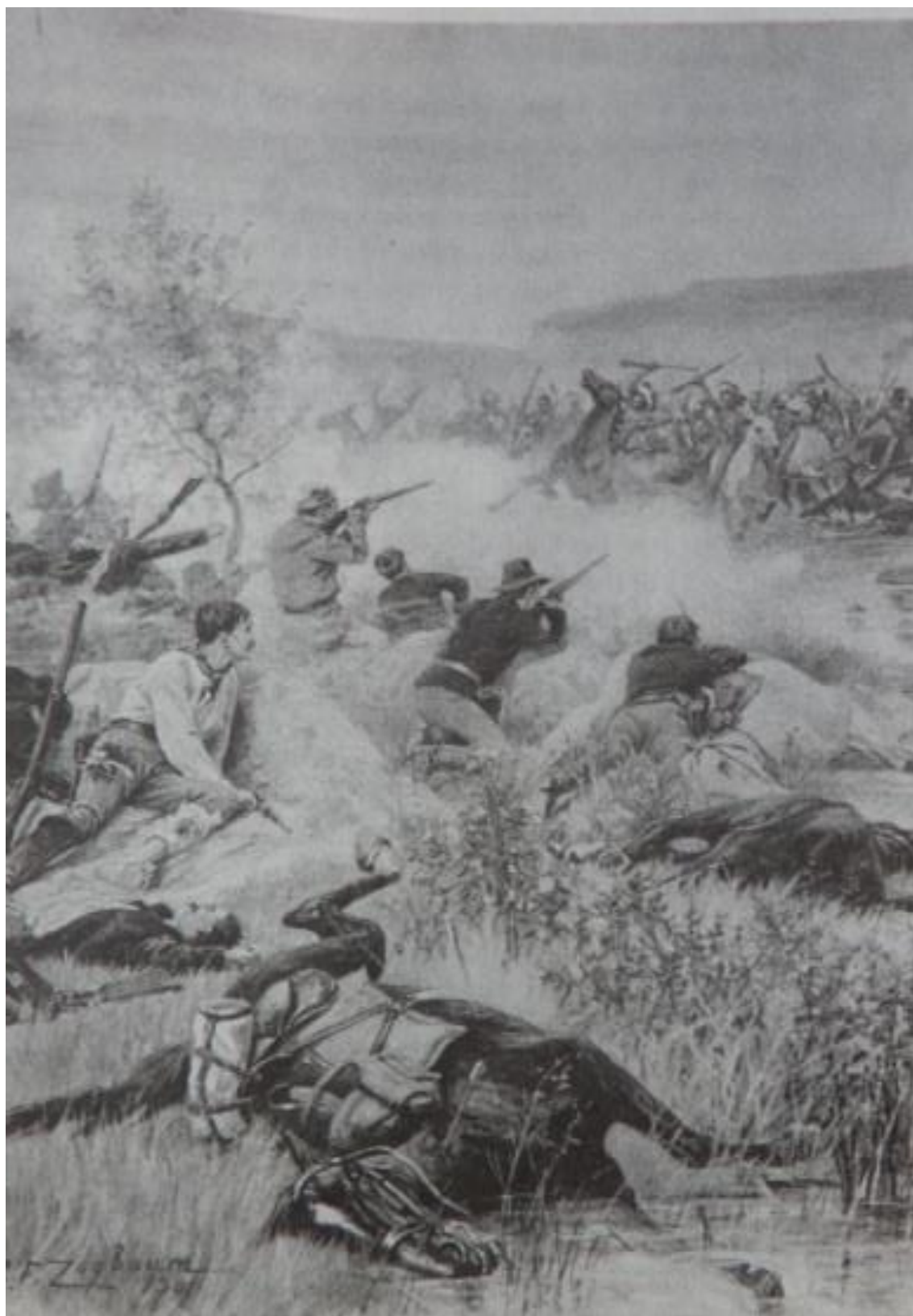
かって移動を始めた。Anthony 少佐が、その日に本部に向かって報告した：“素晴らしい Cheyenne Indians が、今日、私に会いたいと申し出てきた。かれらは、部族のうちの 600 人が、この支所に向かって、今、ここから北へ 35 マイルのところまで来ており、さらに 2,000 名ものが 75 マイルのところ、個々に来られるような天気がよくなるのを待ちながら待機している。私は、たとえ捕虜としてでも、彼らがここにくるのを許しはしないだろう。というのは、もし、そうしたら、私は、彼らに食料を支給しなければなくなるだろうからだ。しかしながら、私は彼らの武器、これらは全て盗まれた類のものだが、これと、略奪の張本人たちをさし出すように求めよう。彼らは、この提案を飲まないだろう、そして、彼らは Smoky Hill に戻ろうとするのではないかというのが、私の見解だ。彼らは、自分達は平和を望んでいる振りをしており、私は、彼らの中の小さな集団が無防備な列車、あるいは、開拓農民の入植者達を見つけることが出来るところ以外で、冬の間は戦う事ができないので、今はそうするだろうと思っている。私は、今は私の提案する様に取り扱われるように全ての略奪の張本人達が捕まるまで、彼らと平和を作る政策を取るべきだとは思っていない。”

ちょっとばかりの和平交渉のあと、35 マイル程の北のところに居た Black Kettle の仲間の 600 人の Cheyennes 族の者達がやって来たが、Anthony は、彼らが砦のなかに入ってくること、もしくは、近くの空き地でキャンプをすることを認めなかった。彼は、彼らに、40 マイル離れた Sand Creek に行き、そこでキャンプをすればよいと話した。そして、Anthony は、もし、彼が彼らを取り扱う何某かの権利を与えられたのなら、それを彼らに知らせる、と付け加えた

Cheyennes 族はこの応対に喜んだわけではないが、彼らは Sand Creek でキャンプを張り、そこで、待った。彼らの雰囲気は、まったくもって友好的なものではなかった。かれらは、“もし、こんな事は無いけれども——、赤い目をした酋長が戦おうと言うのなら、我々は彼が望むものはなんでも彼に与えるだろう、” 彼らに悲嘆にくれさせる眼差しを送っていた卑劣な Anthony を意味しているのを明らかにした、侮辱的なメッセージを砦に送った。Black Kettle は、全く安全であると感じていた。Fort Lyon には、駐屯兵、彼らは彼を攻撃するには弱すぎたのだが、彼らの他には、そのあたりには兵士は誰もいなかった。

彼が知らなかったのは、Chivington、彼は Denver に戻っていたが、その彼が全体的な状況から、警戒をするようになっていた事だった。ここに、40 マイルも離れていないところに大きな Cheyennes 族のいる、そして、それほど遠くない所には、2,000 人ものほかの者がいる、Fort Lyon があった。Little Raven の Arapahos 族がいるかもしれないということを知っている者は誰もいなかった。大佐は、早急な行動が必要だと感じ、Curtis 将軍から受け取った別の電報、それは、“どこでも、Cheyennes 族、そして、Arapahos 族を追撃し、酷い目にあわせろ；境界線など気にするな。私の承諾なしに、何も贈り物をする必要もないし、何の平和の必要もない。” というもので、これによりさらに衝動が増長された。

それが、Chivington の必要としていた権威の全てであった。11 月の終わりに、彼は、



インディアンとの戦い

Anthony 少佐と、彼の First Colorado Cavalry (第一コロラド騎兵隊) を、曲射砲二台とともに、参加させるために Fort Lyon に立ち寄り、小さな軍隊を引き連れて、Bijou Basin を出発し行軍した。11 月 28 日の夜に、彼らは、騎兵隊と砲兵隊を含め、約 750 名のいる Fort Lyon の麓の大草原を横切って東に向かって行軍していた。彼らは、最初は 2 ないし 3 フィートの深さの雪の中を 5 日間ほど予定通り進んでいたが、その時には足元はよかった。夜は寒かったので、老年の Jim Beckwith、彼は、彼らの罷仕掛けの案内役であったが、その彼がこわばってしまい、進む道がわからなくなってしまった。という訳で、彼らは、混血のインディアンに頼らざるを得なくなった。この代理のガイドと 2 人の下士官がほかの者達の大体半マイルほど先に進んだ。

夜明けと日の昇る間の薄明かりの中で、彼らは、Sand Creek のインディアン達のキャンプをしているところに到達した。そこには、120 の Cheyenne の、そして、8 つの Arapaho の小屋が、広大な砂のなかを緩やかに走っている狭い小川のそばに作られていた。1100 匹の子馬がキャンプから両方に 1 マイルほど広がって群れを成しており、Chivington が戦士達から群を切り離すために派遣隊を送ったのは、これらに対してだった。

ほんの僅かのインディアンがキャンプの中で起きていたが、朝の仕度をしているインディアンの妻たちは、白人の男の乗った馬が足早に行く音を聞き、バッファローの群が近づいてきていると報告に走った。彼女の呼びかけに答えて飛びだしてきた極わずかの勇者たちが、今度は、バッファローは大きな体をした連隊であることを見て、そして、彼らの馬を Chivington がどうしようとして居るかを理解した。彼らは、それを邪魔しようと競争して走り、そして、こうした二つの集団の間に火の手が上がった。

何が引き続いて起きたのかについてのいかなる合意も一切なかった。インディアンのキャンプにいた混血の取引商の George Bent が、こんな説明を我々に残した：“私が酋長の小屋の方を眺めた時、私は、Black Kettle が、そのキャンプは友好的だと、連隊に合図をしているように、長いキャンプに柱に大きなアメリカの旗をかざしていたのを見た。戦闘士たちの部分は子馬の群の方に向かって走って行き、ほかの者達は、恐れをなしてキャンプのまわりを走っていた。ひっきりなしに Black Kettle は、何も恐れることないと叫び続けていた；そのキャンプは守られていて、何の危険もないと。それから、突然、連隊が、男たち、女、そして、子供達の集団に向かって射撃を始め、一斉にみんなか散り散りに、逃げ回った・・・・・・兵士達は、懸命になって〔防護のためにインディアンの部隊により掘られた壕のなかの人々に、一斉射撃を浴びせ、そして、我々は鉄砲と弓矢で出来る限りの応戦をした、がしかし、我々の持っている武器はほんの僅かしかなかった。彼らが逃げ込み、そして、傷ついたもの、女達、そして、痛めつけられていない子供達まで殺しながら、抵抗を止めたここはと思うような堀の中のたくさんの人を殺したあと、一度か二度以外は、連隊は突撃してこなかった。此处での戦いは、最期に司令官の下士官が部下たちに引き揚げを命ずるまで続けられた・・・・・・彼らが戻ったあと、兵士たちは小川の底に横たわっている死体から頭皮を剥いでいた。

“攻撃の始まる時に、**Black Kettle** は、彼の妻と **White Antelope** とともに、**Black Kettle** 家の前に、自分達の居場所をつくり、他のものたちがキャンプを立ち去るまでそこに残っていた。最後に、**Black Kettle** は、もはや、そこにはいる意味はないと分り、**White Antelope** に彼の後について来るように叫びながら、走りだした；しかしながら、**White Antelope** は、それを拒み、彼の死の歌を歌いながら、武器を携えて、死ぬ覚悟をしてそこに立っていた：そこにはもはや生きているものは何もなかった。彼が兵士により射殺されるまで、大地と山々以外には。”

これが目撃した者の説明だ。**Sand Creek** の大虐殺として知られるようになったものの議会での査察で、その他の目撃者達の全体的な大勢は、**George Bent** の話のいろいろなかたちでの変形物でびっしりと印刷された 700 ページを埋めていた。例えば、ある者は、**Black Kettle** は、旗の礼儀を無視していると分りながらも、白旗の上に、アメリカの旗のつけ、両方をもって走っていた、と言い、ほかの者達は、いかなる旗も何一つ持っていなかったと断言していた。再び、もし、**Black Kettle** が、キャンプは防御されていると仲間たちに話したのなら、彼が誰かによりその種のどんなものでも約束されたという物を彼が保持していた事を示す証拠は何もない。

しかしながら、極わずかのぞつとさせるような詳細が、この査察で出てきた。それは、二人のインディアンの女と五人のこども以外、誰も捕虜として捕まえられなかったこと、そして、可能であったにしても、男、女、そして、子供であろうが、誰一人として逃げだすことを認められなかったということが、一般的に認識統一された。一人の目撃者が、兵士が彼を射撃し、しくじり、そこで、別の兵士が、“わたしにちょっとやらせろ、一俺なら彼を撃てる。”と叫びながら、彼の乗った馬からとびかかった、彼の逃げ回っている両親の後をついてゆこうとしている 3 歳の裸の子供の事を話した。彼もまたしくじったが、3 番目の兵士は、馬からおり、獲物を袋に入れた。

インディアンが、小さな軍隊で完全に退去しなかったのは、これはほんの小手調べで、正午ごろに曲射砲が運ばれてきて、そして、村全体を壊滅させるような戦いとなって行く結果をもたらした十把一からげの破壊が始まった。

犠牲者の数については、広範に渡るさまざまな数がある。**Chivington** 大佐の最初の報告は、600 人のインディアンが殺されたというものだった；**Wyncoop** 少佐は、彼もまたこれに参画したものであるが、彼は、僅か 70 人のインディアンだったと見計らった。インディアン達は、60 人が戦士達で、これを含め 140 人だと渋々認めた。後の考察で、実際数は、多分、300 人のインディアンが亡くなり、その半分は戦士達で、残りの半分は、おんな、子供であり、一方、兵士たちは 7 人が亡くなり、47 人が負傷し、そのうちの 7 人がのちに亡くなったという事を明らかにした。

一度、インディアンに対する白人たちの取り扱いにより、その地域が混乱させられた。**Curtis** 将軍の命令は、十分に明白ではあったけれども、軍は **Chivington** を狼たちの間に投入し、彼を試しにつかった；彼は、一年後に任務を辞退した。その地域での端から端まで

の叱責と軽蔑があった。

彼に罪があったのだろうか？ 歴史家を悩ませる沢山の質問があったように、そのこたえは、yes でもあり、no でもある。Chivington の Sand Creek への行軍が、指揮官の命令を実行するものであったという事は、疑いのないところだし、Fort Lyon に対するあり得る危険性によって、軍の見識からすれば、さらに正当化されるものであった。しかし、命令が実行されたそのやり方は人道的な立場から厳しく正当化されなければならない；例え、“追跡し、撃退しろ”という正式な命令であったとしても、女や子供達を無慈悲に殺害うるということを容認できるものではない。しかも、Chivington の兵士達の行動のなかには、Colorado におけるインディアン達の数知れない暴挙、とりわけ女達に対するものへの根深い復讐の念があった。

このような観点から、大平原のインディアン達野の捕虜の女達の取り扱いは、明らかに Mississippi の東側に居る人達とは違っていた。東部の地域では、女達は、ほとんど決して性的ないたづらをされることは無かった。襲撃してきた集団によっても、あるいは、捕虜としてでもだ；西部では、彼らは、共通の意味合いを持ったものとして扱われ、時には、ひとりの仲間から別の仲間のものになることもあった。こうしたインディアン達は女の捕虜を彼らが男達に対してやる拷問をすることに躊躇するようなことは無かった。こうしたことをするようなことは、東部では考えられなかったが、しかし、彼らは、常識的ではなかった。Sand Creek で、Chivington の部下たちは、多分、殺された友達や仲間達とおなじように、強姦された妻や娘たちのことを考えていた。そのうえ、彼らは、インディアンの女達が彼らに向かって射撃をしている時には、彼女たちを狙撃するに何の良心の呵責を感じなかったのだろう。

しかし、もし、Sand Creek におけるインディアンの取り扱いについて、大衆の疑問があるとしても、Minnesota、ここでは、1862 年に始まった、Sand Creek の僅か 3 ヶ月前で有るが、南北戦争その時からインディアンの最後の敗北まで、一時的に敵の注意を牽制した Sioux 族の反乱があったところであるが、ここでの白人とインディアンとの戦争の原因については、ほとんど異論はない。

Minnesota でのインディアンの白人の最も悪辣な虐殺に端を発する争いは、一 300 人以上もの入植者達が一週間のうちに殺されたという、かつて経験もしたことのないものだった。国の歴史の中での他のどんな時でも、そのことは、論議を起こしただろうけれども、西部での恐怖についての後の報告は、Bull Run の Second Battle からの、Kentucky での Braggs の侵略、そして、Antietam、ここでは、死傷者が 23,000 人にも及んだが、こうしたところからのニュースと肩を並べなければならなかった。しかしながら、Minnesota の人々にとっては、大虐殺と、それに続いて起こった戦争は、悪夢そのものだった。

この反乱を引き起こしたのは、Medewkanton Sioux の Kajoja 部族の第 5 酋長で、この名前のついた、Little Crow であった。彼自身の言葉では、Chetan-wakan-mani、“歩行をするようになった pigeon-hawk(コチョウゲンボウ)” であった。Little Crow は、いか

がわしい優秀性を持った目鼻立ちのはっきりした未開人で、酒の愛好家であり、目立った本能で苦しんでおり、やり方が威張っていた。1820 年生まれで、彼の村は、最終的には、**Pig's Eye** の開拓の町となったところで、ここには、今では **St. Paul** が建っている。**Little Crow** は、悪徳な執事の緊急の要請で、その村を去らなければならなかった。彼は、一つのところでは二人の妻と結婚し、そして、彼女たちを残し、その次には、それぞれが姉妹であるが、今度は 4 人を受け入れるなど、二つの部族を彷徨っていた。

若々しい **Little Crow** は、“極わずかの良い感覚しか持っておらず、”彼の父親が、かつて、一言言ったが、しかし、かれの繰り返した結婚のあと、彼が **Kapojá** 部族の頭として、歳寄りの酋長から後を継いだときには、彼の父親に悪かったことを証明する準備ができていたようだった。“私は、ただの勇敢なだけの男だったが、それで、今は酋長になった。”と、かれは、過去のしくじりを思い出した時に、述べていた。彼は、お酒と自分の悪い道德観に立ち向い、そして、若者達に、儉約することと、きつい仕事をするように奮い立たせた。

アメリカ人達は、彼については何ら落ち度を見出すことができなかった。彼は、彼らが、その目的のためにシルクハットをかぶって **Washington** を訪問したりする、承認された彼らの協定を手に入れるのを手助けしたりして、**Sioux** 族の酋長達の中でも最も友好的な者のように振る舞った。事実、彼は、一時はインディアン達の中より、白人達の中での評判のほうが良かった。彼の支配の元にいた部族の者達は、彼の農場、彼の新しい幌馬車、そして、彼の白人達のような家などを見て、彼の事を、敵に身を売り、そして、彼らを見捨てたと思っていた。

これは、伝統を守ろうと言う人達と白人達と赤人の男達が身近に一緒に住むときには、いつでも起こる様なことだと順応して行った一部の人達との間での、ある種の内面的な闘争であった。**Little Crow** のうさん臭く思うのは、そうした基本的な疑問の上に、**Sioux** 族を分けてしまった言い争いの一部だけだった。狩りをする人達は、農民たちと鋭く対立していた。

1862 年の 7 月に、両方のものたちが、白人達に対する共通の不満で合同した。以前の協定では、彼等に、現金と支給品で、年金を保証していたが、しかし、小麦粉、ラード、そして、砂糖は支給されるのを待って倉庫にあったけれども、これらが 7 月に未払いになった。**Yellow Medicine** での命令で、**Galbraith** 少佐は、飢えたインディアン達に対して、支給品と一緒に払われるべきお金が、まだ、届いておらず、分配を始めることが出来る様なそれなりの権威をともに、それを受け取るまでは、何であつても、支給できるものは何もないと言う以外に、何の理由も説明することが出来なかった。インディアンたちは、白人は、彼らの南北戦争に気を取られて居て、支払う金は何もないのではないかと疑念を抱いていた。

この一時的な不満に加えられたのが、10 年間に渡って骨髓に徹していた通常の問題であった：取引業者の騙し；ときにしばしば結託までしていた、取引業者や代理人のペテン〜彼等を守ることは出来なかった酋長の無能力；そして、日に日に明らかになって行った、

彼の署名した協定の、一般的にもとらえどころのない性格、などであった。

何人かの若い勇猛な者達は、**Red Middle Voice** という名の扇動者のもとで、普段は狩猟とか戦闘の時にだけ、選出されるよう内部的な組織であるが、兵士達の小屋と呼ばれる組織を結成した。この時には、若い男達は、彼等の酋長がしくじったと思ったような場では彼等が代わってその仕事をするつもりでいた；しかし、彼等が、**Fort Ridgely** で、**John Marsh** 大尉に会いに行った時は、彼等の気持ちはまだ平和的であった。彼等は、貿易商達が、お金がやって来た時に彼等の主張を聞いてくれるよう砦の兵士達が助けに来てくれるのかどうか、知りたかった。“私の少年たちは兵士だ；彼等は、取引商達のための意見聞きの人ではない、”と **Marsh** は彼等を元気づけた。

取引商達がこの会合の事を耳にし、彼等は直ぐに、そして、不運な行動を取った。彼等は、インディアン達に対して、年金が支払われ、そして、彼等の主張が聞き入れられるまで、売掛けしない事を決めた。直ぐに彼等のお店で掲示が出された：“インディアンには売掛けしない。” 仲買人が、もしお金が直ぐに来ないのであれば、そして、インディアンが売掛けできないのであれば、彼等は、飢えてしまうとかれを防御した。多分、**Marie Antoinette** のことをそれまで聞いていなかったのだろう、取引商の一人が、答えた：“他人はともかく私の意見としては、もし、彼等が飢えているなら、彼等に草を食べさそう。” というものであった。

彼の言葉は、**Sioux** 族をからかう叫びとなった。“草を食べさせておけ” は、虐待の 10 年間の憎悪と疑惑の全てのもとを厳しい焦点の中に運び入れた。こうしたことを議論するために、8 月の 17 日の日曜日の午後兵士達の小屋に集まった。彼等は、その日の朝、4 人の **Red Middle Voice** のところの若い勇士が、**Meeker County** で 5 人の入植者達を殺害したことを知らなかった。恐怖の統治が始まった。

日曜日の朝の夜明けは、**Opechancanough** が **Jamestown** の入植者達により彼を悩ませていた悪事をただそうと出発した、1622 年の 3 月のそれ以来、数千の別の早朝の忙しさのようではなかった。**Sioux** 族の妻たちは、**Little Turtle** の男達がその日の血のにじむ仕事のために身支度をしている一方で、丁度、**Virginia** のインディアンの妻たちと勇士たちが 2 世紀も前にしていたこととおなじように、朝ご飯の仕度で、薄明かりのなか忙しそうにしていた。

Minnesota の **Redwood** で、**Jamestown** のように、白人達も朝早くから起きていた；そして、**Myrick** 兄弟の店で、働いていた **Jim Lynd** は、多分、彼のインディアンの妻、彼女は彼の二人の混血の娘の母だが、その彼女が作った朝食を、彼が、6 時に店に降りて行き、そして、**Little Crow** の部下の勇士の一人の **Plenty of Hail** に、彼の店のドアに向かう前の通路に立った時に射殺された、その前に食べた。歴史の無情な流れ、誰も止める事の出来ない果てしなく続く、その流れが、両方の側に尚も罪のない人を犠牲にしていた。

Redwood の **Lower Agency**、ここは、保護居留区の中にある二つのインディアンの村の一つであるが、ここにある、家とお店が最初に攻撃された。**March** 大尉と彼の部下たち、

彼等は、Fort Ridgely から救助のために急いでいたのであるが、そのかれらが、Redwood Ferry で待ち伏せされ、そして、その半分以上が犠牲となった。その後、インディアン達が、入植者達の小屋になだれ込んで行った。血塗られた一日が終わる前に、400 人以上の市民が殺された。襲撃者達は、Upper Agency、ここは Yellow Medicine にあるが、ここを真夜中までに襲い、そして、そこのお店を略奪し出した。

水曜日は混乱の日だった。何某かの救助隊、彼等は Glencoe から Fort Ridgely までに至るまでの連隊からの派遣隊であったが、これが到達し、そして、もっと多勢のものが Fort Snelling、ここは Ridgely から 165 マイルも乗って来た者で、その者がもたらしたニュースであるが、そこから派遣されてくるに違いないというものであった。どこでも、入植者達は恐怖からのがれようとしており、彼等の 4000 名もの人が道路に溢れ、そして、大平原を横切っていった。Snelling で、Henry Hastings Sibley 将軍は暴動を抑えるように指示されていた。

次の日に、Little Turtle は Fort Ridgely を奥深くまで行く様な襲撃を先導したが、しかし、彼は反発にあい、包囲されてしまった。その一方で、Lake Shetek の不運な入植者達は、それ以後、ぞっとするような気持ちの “Slaughter Slough” という名前で知られる狭い場所に包囲され、大虐殺をうけた。あきらかに、Sibley 将軍は彼のために彼の仕事を切り抜いていた。

金曜日までに、300 人の避難民が Ridgely の安全地帯に何とか到着した。Little Turtle は、その日に砦を大体的に攻撃する企てにでたが、しかし、再び、彼は、反撃にあった。砦の空気の何かが、目撃者の、B. H. Randall 大佐、彼はトラブルの始まったその前の日曜日に、どれだけ、“避難者が来る日も来る日も得ず街道を埋め尽くしているか、多くの者が傷つき、そして、悲嘆に暮れて；多くのものは、食糧も飲み水さえもない様な状態だった。”と後で話していたのだが、その彼の言葉から思い描かれていたに違いない。

“夕暮れになると、守衛が、斧、ショベル、棍棒、あるいは、武器として使えるものなら何でも持って、あらゆるドアのところに立っていた。女達は、一晩中、番兵に与えられるように用意されたちよっとして数の鉄砲のために男達により作られた散弾銃のための弾をつくるのに働いて居た。

“20 年ものの古い型の Dragoon 式カービン銃が、雑誌のなかに見つけられ、15 年間 Second Infantry（第二歩兵部隊）で軍曹をしていた Patrick Hefron により、使えるように整備されていた。女達は、鉄棒を切り、弾にして、これらのために詰め込み用の銃弾を作っていた。その夜 Jones は、砦がなお、ここにあるという知らせをするために、ロケット弾を打ち上げた；それらは、18 マイル離れた New Ulm でみられた。

“火事の心配が非常に大きかった。全てが非常に乾燥していたからだ。水の入ったバケツが、簡易小屋の屋根に直ぐに持って行けるように四つの水桶の一つとして置かれた。次の日の朝には雨が降った。

“金曜日の正午近く、3 つの方角から攻撃が仕掛けられた。南の方の Jones の居場所

を守っていた、司令官の部屋の部屋が開けられるまで、彼は、その部屋を通過して、水の入った入れ物を送り出すことにより、火事を抑えることが出来た。**Little Crow** の攻撃と指令は、直接聞かれていたが、しかし、ぶどう弾と散弾銃により失敗に終わってしまった。

一方、**Sibley** は、反乱を鎮めるにはまことに不十分で不適當な軍で出発したと改めて確信したので、何も知らされずであった **New Ulm** からの救援に怒りの要請をうけた **St. Peter** はどまで遠くにやって来ていた。次の日に **New Ulm** は、朝から晩まで繰り返し攻撃を受けていた；そして、インディアン達は繰り返し、追い払われたけれども、街の 1/3 が破壊された。次の日、月曜日に、**Sibley** は、**Fort Snelling** から召喚していた連隊と補給物資を待ちながら、**St. Peter** に当惑して座っている間に、そこは、避難されてしまわなければならなかった。彼等はすぐに到着し、そして、三日後に **Sibley** は、1500 名の部隊を引き連れて、**Fort Ridgely** に戻った。

彼は傷つき、そして、傷病で溢れた包囲された前哨基地だとわかり、彼が到着した次の日の火曜日に、これは 9 月 2 日であったが、彼は、無理矢理に、砦から 20 台の幌馬車と 135 名の男達、これは、若い下士官の **Marsh** 大尉に指揮されたもので、埋葬するための部隊であったが、彼等を送り出さなければならなかった。**Birch Coulee** としてしられた場所、ここは、砦から 13 マイル離れた所であるが、ここで、先導者が **Little Crow** の軍隊を見つけ、**Marsh** は、馬とラバを真ん中に置くという、昔からのやり方で、幌馬車で円陣つくるように指示し、来るべき襲撃に備えた。

その時が来るまで、そんなに長い時間ではなかった。間もなく勇者たちが、1000 以上の西部劇により不朽の手段となったやり方で、円陣となった幌馬車の周りを回り始めた。彼らの攻撃は、いつものように夕暮れに始まった。夜中までに、**Marsh** の 96 頭の馬のうち、ただ一頭だけが生き残り、そして、兵士たちは、馬の死体のバリケードの中で馬車の車輪に対してその支えとなっている死体を燃やしていた。その馬の前の僅か 2・3 フィートのところで、助けを求めて捕まえた生き残った動物に乗ろうとしたある一人の志願兵が倒れたが、それは、まさに文字通りの蜂の巣状態で撃ち殺されていた。

何が起こったのかを創造するに、**Sibley** は、その攻撃から 31 時間の後であるが、水曜日に **Birch Coulee** に到着した、救助部隊を送り出した。救援は、横たわった者や致命的な傷を負った **Marsh** の部下たち 23 名にとっては遅すぎたが、**Little Crow** の戦士達と激しい小競り合いで、彼等を追い払い、ほかの者達を救った。

9 月 18 日まで、**Sibley** の管轄部隊は、1600 名ほどの数になっていたが、彼は、弾薬と支給物資でさらに増強されていた。このように装備されて、彼は、**Yellow Medicine** に向かって出発した。四日ほどで 36 マイル行進し、彼は、彼の目的地から僅か 4 マイルしか離れていない、**Wool Lake** の近くでその日のキャンプを張った。太陽が昇るまえに、彼は、自分達が、**Minnesota** の部族から固められたに違いない、最強の軍隊である 700 名の **Sioux** 族の戦闘士たちに見張られている事に気づいた。インディアン達は、彼等の戦略を非常によく考えて作っていたが、しかし、戦闘は早すぎて誘発され、それは、全ての **Sioux** 族が

行動に移せる時間より前に起きた。白人達が、いつもやるように、しでかすどんなやり方よりもすごいやり方で、曲撃砲が火を噴き、インディアン達をビックリ仰天させた。この場合は、彼等は乱れ、そして、逃げ回り、彼等の死者は、Sibley の兵士達とくらべ、2 対 1 以上の割合だった。

Wood Lake の戦いの直接の結果は、それがすぐに知られるようになると、Sibley が、彼の准将としての権限を持つということになり、そして、Sioux 族の酋長は、彼等は、戦闘に敗れたという事だけでなく、戦争にも敗れたという、野戦での感覚を残すこととなった。次の日の朝、Little Crow とそのほかの指導者達は Minnesota を去り、Devil's Lake、あるいは、Western の大平原のカナダに向けて退却していった。彼等は、彼等とともに捕虜を連れて行った。Little Crow は、彼の名声、彼の土地、そして、捕虜を拷問したり、殺害するなどを提唱した“素晴らしい男”として築きあげた全てのものを失う事で、酷く激怒させられておったが、対抗者でもあり、より高貴な酋長の Red Iron が、会議に出てきて、そして、彼は、女や子供に手出しをするようなどんな兵士も殺しただろうと明らかにした。Red Iron は、Little Crow が、しなかったこと—Sibley と平和にしなければならないだろう、このことはしないだろうと予知していた。

Little Turtle は、しかしながら、最期の言葉を持っていた。幌馬車が彼の愛した土地を諦めるために詰め込まれている時に、かれは彼の周りの戦士達を集め、そして、彼等に話した：“私は、自分のことを Dakota と呼ぶのが恥ずかしい。我々の、最も素晴らしい 700 名の戦士たちは、昨日、白人達により折檻された。いまや、われわれは、皆で逃げ出し、そして、バッファローやオオカミのように大平原を彷徨っている方がいい。確かなことは、白人達は我々より優れた、幌馬車に積んだ大砲や、性能の良い銃をもっており、しかもずっとたくさん持っている。しかし、彼等を折檻すべきではないと言う理由は、我々が勇敢な Dakotas 族であり、白人は臆病な女のようなものだから、それは何もない。私は、不面目な敗北を説明することが出来ない。それは、我々の中にいる裏切り者の仕事であるに違いない。”

二つのインディアンのキャンプが、Sibley 大佐が彼の軍隊ともにやってきて、そして、彼等の釈放が実行されるまで、捕虜たちを守るために残された。彼等が大佐の異常なほどのゆっくりとし前進、それは、彼の異常なまでの注意深さからであったが、それを待っている間、若い勇者が、女の捕虜たちを森の中に付けて行き、そして、強姦して、彼等自身、楽しんでいた。時に、10 人とか 12 人の強盗団を作ったりしていた。16 歳の少女が 20 人以上の Sioux 族の者に強姦された。

Sibley は、9 月の 26 日に、捕虜たちのところに到着し、そして、そこを Camp Release と名付けた。彼は、会議に集まったインディアン達に、私は罪を懲らしめるつもりだ、がしかし、勿論、全てのここにいるインディアンの指導者は、彼等は、大佐が探し求めている人達ではないと、雄弁に言い訳をした、と話した。然しながら、夕方までに、捕虜たちは解放され、そして、目撃者が報告した：“半分、飢餓の状態で、ほとんど裸のような女と子

供達の顔に書かれた悲哀は、最も厳しい思いに溶けて行ったのだろう。”

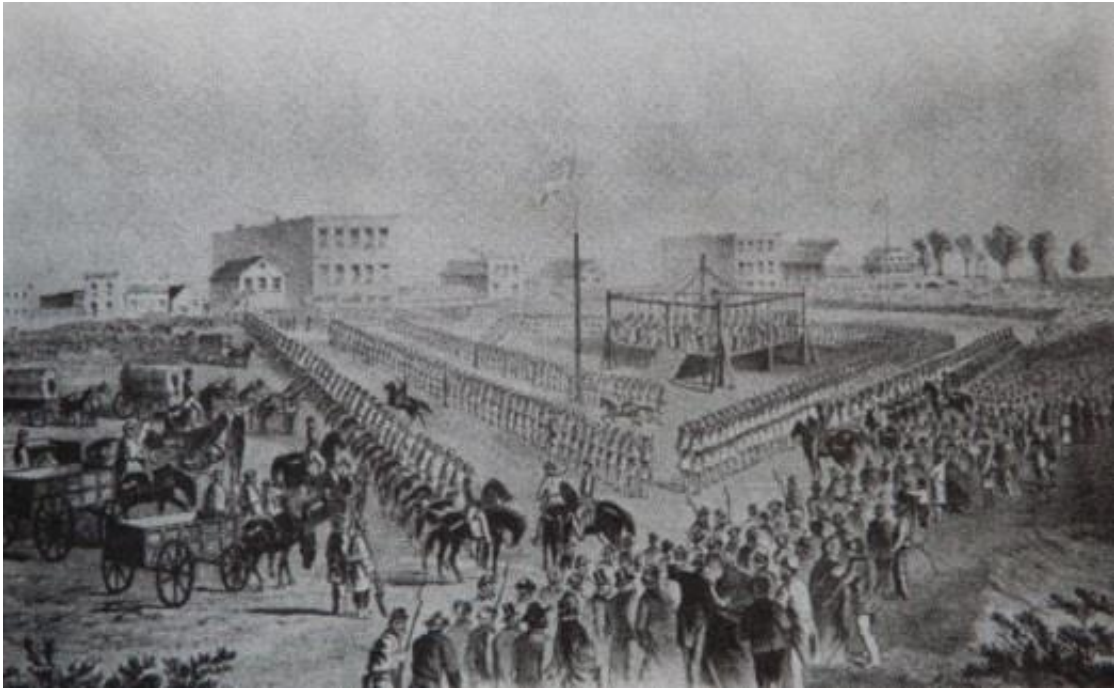
Sibley 大佐と彼の軍隊は、下士官たちが、懲罰の対象とするものを必死に探している間、一か月の間、Camp Release に留まっていた。しかし。罪人たちは、Little Crow の忠告を聞き、散り散りなっている。彼が探し求めていた酋長を見つけることが不可能となり、Sibley は、そこにいる全てのインディアン達を捕まえるように指示し、そして、3 週間のうちに次のように明らかにした：“私は、いま、だいたい 400 人位のインディアンの男達を牢獄に入れており、60 人から 70 人程度、ここ、そして、Yellow Medicine で、監視下に置いている。” 彼は、それから、自分で考案したランプコートを纏い、法令を施行し始めた。一日に 40 人位のものが裁かれた。11 月 5 日までに、吊るし首の判決を言い渡されたのは 306 人を下らなかった。

Sibley は、有罪と判決を宣告された者達の名前を Abraham Lincoln に発信し、吊るし首の刑を実行する許可を待っていた。Lincoln は、これに 11 月に返事をした：“あなたに判決を宣告されたインディアンの名前を知らせる旨の連絡をいただいた。どうぞ、沢山の、そして、完璧な有罪の記録をできるだけ早く前に進めてください；もし、その記録がもっと重い罪や犯罪人たちの影響力を、詳しく説明するものでなかったのなら、こう言った点に十分注意をした声明を出すようにし、私に提出してください。手紙で送るようにしてください。” 最後の文章は、400 ドル以上もの金額に相当する、306 人もの名前を送った電報に関してのものだった。

彼は、その記録を見るや否や、Lincoln は、それらが詳細で、完璧である以外のものであることを知っており、そして、あまり罪のないところから本当の罪を探り出す不可能な業務を管理する二人の人間を与えた。一方、306 人の者も含めインディアンの捕虜たちは、Fort Snelling の高い壁の内側で冬を越すように集団にさせられていた。有罪の判決を言い渡された者達は直ぐに Mankato River にある隔離された収容所に移動させられた。その途中で彼等は、野次馬の女達が街の通りに並び、小石を投げたり、捕虜たちにやけどをさせる様な熱湯を浴びせかけたり、そして、干草用のフォーク、はさみ、鋏、ナイフ、そして、煉瓦などで傷を負わそうとしている New Ulm の町を通らなければならなかった。15 人のなす術を持たない捕虜たちが傷ついた。それが、子供達がインディアンの妻や子供達から痛めつけられた Snelling への道の繰り返しであった。

Lincoln は、一人の観察者が書いていたように、“決して一人ではないが、インディアンの友達からの、あるいは、死の罰則に対して反対をする人達から、そして、戦争の捕虜としての有罪を重要視する人達からの同情の訴えで、精一杯だった。” しかし、開拓地の人びとがどれほど感じているかについては疑う余地が無かった；彼等は、直ぐに刑の執行を望んでいたし、非常識ではなかった。

12 月になり、Lincoln は、誰が死刑に値するかを明らかにする手紙を Sibley の統治官に送った。そのリストには、39 名の名前が載っており、仕事はその名前に適合する人物を見つけ出すことだった。それは、決して簡単なことではなかった。というのは、捕虜たち



の中には、同じ名前のものが沢山いて、そのうえ、執行の命令が **Lincoln** の使節より彼等に与えられた番号により、死刑を宣告された男達を指名しており、そして、誰もどの番号がどの捕虜を指しているのかということ特定することができなかった。このようにして、ある一人の白人の女の捕虜が抗議したように、“**Chaskadon** という名のインディアンは、これは大統領が吊るし首にするように命令した者だが、この者は、妊娠している婦人を殺し、彼女の子供を切り刻んだが、彼等は **Chaska**、彼は、**Mr. Gleason** が殺された時にそこに居たと言う、ただそれだけで有罪にされたのだが、そのかれを吊るし首にした。” 事実は、**Chaska** は、この夫人を守ったのだった。似た様な事件があったが、しかし、リストのうちの 39 名は、疑いもなく極悪なものだった。一方、戦争を始めた多くの者たち、そして、最も酷い攻撃をするために侵略していた者達は、犯罪の宣告を受けていなかった。彼等は、ずっと以前に逃げていて、決して降参して来なかった。

インディアン達は、クリスマスのあとの日に吊るし首にあった。彼等は、38 人で、一人は、権威ある者達は賛同しなかったが、執行を延期された。彼等は、彼等の顔にキャラコの覆いを被せることに抵抗したが、しかし、彼等は群れにされて、にも拘わらず、大きな絞首刑の台に乗せられ、彼等の首をくくりつける輪になったロープをつけられた。**Dakota** 族のものをふさぎ込む死の悲しみに動揺し、そして、脚を鳴らす、“**Hi-yi-yi,hi-yi-yi**” という叫びが、一本調子の旋律で流れ、彼等の死を待っていた。極わずかもものが絶叫を上げた。他の者達は、周りに動き、そして、隣の人の手を握っていた；あるものは、彼等の名前を呼んでいた。

死んだように鳴り響く太鼓を叩く音が執行の瞬間の時を告げたとき、William J. Duley が、手にナイフを持って、前に進み、引き続き 38 人の足場をとり外すように、ロープを切った。Duley の子供の 2 人が殺され、そして、虐殺で頭皮をはがされた。彼のナイフは、鋭く研がれ、そして、良く切れ、踏み台が落ち、そして、其れを見ていた兵士や入植者達の気分の悪くなった唇から、低い、唸りの叫びが湧き上がった。冷たい 12 月の空気の中でグロテスクにぶら下がった体を蹴ったり、ばたばたさせることが、Sioux 族の反逆の終わりを告げ、そして、直ぐに白人と赤人との間の長かった戦争を永延に終結するようになる信仰と血の流れるような出来事を暗く予兆した。

Minnesota 戦争が歴史をなるまえに加えられなければならない数少ない脚注があった。その夜のうちに、処刑された男たちは、彼等の遺体を研究室で使う目的で、彼等の集団墓地から、取り去って行った。西部のずっと遠くに逃げていた Little Turtle が、彼の息子と一緒に 1864 年の 7 月に戻ってきて、彼が Hutchinson の近くの農場のあたりをうろついている時、ある日の晩に殺された。Sibley は、Sioux 族の生き残りのものを Badlands 一銃撃で清められた地獄、彼はこのように呼んでいた一に追い込み、そして、1864 年野 8 月に、そこで、彼はインディアンが 500 人以上もの勇者たちと酋長を犠牲とした一日がかりの最後の抵抗を粉砕した。

この突然の大参事の生き残りの者達は、西へ、西へと引き下がって行ったが、しかし、いわんや、残った大陸というもではなかった。彼等は、Sand Creek で生き残った Cheyennes 族と会い、そして、彼等と共通の運命を辿り、そして、その出会いで、状況は、完全な敗北の夜のまえのたそがれとなる最後の戦いへと向かって行った。

15

直ぐ以前の反抗

Minnesota 戦争のその後の一年は平和であった。皮肉な言い逃れで、合衆国の騎兵隊がしくじったこの休息の時を勝ち得たのは、同盟であった。Sand Creek や New Ulm が北の地域を破壊し続けている間、南の地域は辺境の開拓地に平和をもたらしたものと思われる偉大な会合に、西部地域の部族をともに動いて行った。Jefferson Davis がこの劇的な意思表示により得ようとしたものは全く明確ではないが、それは、非常に楽天的なものであったとしたら、堂々としたものだった。

同盟政府により選択された平和の使者は Tuk-a-Ba-Tche-Miko という名の Creeks 族の勇士で、彼等は、その議会への招集勧告をもたらしながら、馬と徒歩で南西地域を踏破する長い巡礼の旅をした者だった。彼は、Osages 族, Pawnees 族, Iowas 族, Kickapoos 族,そして、Potawatomies 族,Wichitas 族,Kiows 族,Comanches 族, Apaches 族, Southern Cheyenne 族、そして、Arapahoe 族, Navajos 族, Meschlero Apaches 族, Northern Chenenees 族, Unkpapas 族, Teton and Yankton Sioux 族 に話しかけた。こうした部族の間を、いかにたくさんの部族を彼が説得し、その数がどれだけになっているかを知らせるために会議の後には、標のきざみ目のついた杖の束を送り返しながら、来る週も、来る週も、広大な領域を歩き回りに続けた。

その Creek 人は、1865 年の 5 月 1 日に、Washita River での最終的な会合が開かれた時、そこには、少なくとも 20,000 人は下らないインディアンが住んでおり、多分、そこに集まった人達は、それまで Mississippi の西の地域で開かれたものとしては、最も大勢の人達となったものと思われるが、その会議では、他に類の無い説得力のある情報の伝達者であったに違いない。その同盟の役所は、今の Apponattox(Virginia 州中部の町; 1865 年にここで南軍の Lee 将軍が北軍の Grand 将軍に降伏して南北戦争が終わった。)については知っていなかった。良い信条を持って、彼等は会議に代表として来ていた部族から—そして、その Creek 人の伝達者が訪問した人たちの殆どを含むところからの派遣団の者達から—白人達の報復を引き起こし、そして、戦争に導いてしまうような襲撃を止めるという合意を確立した。インディアン達は、と同時に責任を持って平和を維持することに同意し、その約束は、僅かの間であるが、一時、南西部全体の大きな尺度となった。

しかしながら、もっと北の地域では、状況はずっと不安定であった。戦争により中断していたアメリカ人の西部への進出の弛むこと無き熱が再開され、彼等は、彼等の進む道を阻んだこうした古いアメリカ人達との間の諍い状態に身を置くようになった。移住の潮流が四つの主要な経路に沿って、大陸の西部を横切って流れていった：南の地域では、Santa Fe Trail ; Denver には、Kansas Trail ; Nebraska と Salt Lake City、さらにはここを通り Oregon や California には Oregon Trail ;そして、Wyoming を抜け Montana へは、Bozeman

Trail があった。

Mississippi への西部への進出が暫時であったのに対し、南北戦争後のそうした動きは、正しく押し寄せる波のごとくであった。四つの街道に沿ったさらにその西の地域への突進に直面し、大平原の荒々しいインディアン達は、生き残るための戦いの準備をしていた。極わずかの指導者達が、彼等の土地を守ろうということの無益なことに気づいていたが、彼等の希望が残っている限り、もっともできる事は、熱狂的に闘う事を決心する事であった。

彼等に対抗するものは、主として、自分達自身を市民生活に再適合させることのできなかった、あるいは、不適合者や策士以外の何物でもなかった人たちからなる、北軍や南軍の流れを汲む、戦争後の荒々しい軍隊だった。James D. Horan、彼の *The Great American West* は、彼等を最も生き生きとした姿で描いており、Foreign Legion (外人部隊)、と呼び、そして、実際、彼らはアイルランド人であり、ドイツ人、フランス人、イタリア人、その他、半ダース以上ものなまかじりの他国籍の者達だった。黒人たちもいた、強盗化した第10騎兵隊、そして、“Carpenter’s Brunettes(黒めの大工たち)”として知られた抜け目のない営繕部隊の将官たちの歩兵連隊であった。白人たちの軍隊の中には、インディアン達でさえいた—Pawnees 族, Crows 族, Shoshones 族の者達で、彼等は、Sioux 族を憎んでいた者達で、斥候しての行動をしていた。

階層や登録が間違っていたかも知れないにも拘わらず、一少なくとも彼等は勇気とか、専門的な知識は全くなかった—彼等の指揮官たちは、第一の序列であった。Grant 将軍は、もちろん、軍隊の最上級の位置にいた。彼の部下の総責任者は William Tecumseh Sherman で、Phil Sheridan が西部地域部門を指揮していた。野戦での指揮官の名簿は、名誉ある役割であるように読み取れる：Alfred H. Terry, George Armstrong Custer, George Crook, John Gibbon, Nelson A. Miles, と言った面々であった。

こうした指揮官がインディアンと戦った戦争は、東部を征服したようなものではなかった。それまでのような戦いは殆どなく、むしろ、もっと小競り合いのような、そして、搜索的な性格のもので、簡単な合戦の類のものであった。彼らは、取分け大平原のインディアン達の野蛮性に対して戦わされたもので、これに加えて、部族の者達には、容赦のない大量殺人にあい、そして、先祖代々の狩猟の地を奪われて、破れかぶれになった獰猛さが加わっていた。どちらに側にも情け容赦などなかった。残虐行為を恥じるようなことは微塵もなかった。1866年から1875年の間の最初の強力な宣伝の段階で、200以上の戦い、これらは主としてSioux族との間のものであるが、そして、第二段階は、1882年から1887にかけての、Apaches族に的の絞られた闘争だった。

長い戦争の歴史の中での最後のこの章は1866年にFort Laramieで開催された別の平和の会議から始まっていた。合衆国の交渉人が、いまや、Sioux族と北部Cheyennes族に対し、白人の移住者達に、インディアン達にほんの一年ほど前に譲渡した土地を通る権利を与えること、そして、Bozeman Trainを保護するために準備された三つの砦の建設を強化



Red Cloud と American Horse

する様に求めたので、インディアン達の連邦の購入した戦闘停止は殆ど終結した。

Sherman 将軍自身、インディアン達を歓迎するために、Fort Laramie の大きなテントに集結された白人の派遣部隊を指揮していた。こうした人達と対面した厳格な風情をした赤人の交渉人は、Oglalas 族の酋長であり、そして、Sioux 族の賢明なる指導者の、かつ又、Cheyenne の敵対者でもあった Red Cloud だった。

Red Cloud は、わずか 44 歳で、男たちの野性的な指揮官だった。白人の同時代の人は、彼を“荒々しい男らしさを持った素晴らしい輩”とか、“トラのように活動力に溢れた者”と言っていた。もし Bozeman Trail にそって砦が建設されたのなら、そして、その街道がさらに西に目指していく主要な幹線道路になったなら、何が彼の部族の者達に、そして、彼等の土地にもたらすのか、彼には、それを十分正確に見通すことのできるような鋭い先見の明を与えられていたので、威厳を持ち、そして、紳士的な作法と話法を携えて、彼は Laramie の会合にやってきた。かつ又、Red Cloud には神秘的な何かがあった；彼は、彼に何をすべきか話した偉大なる精霊と直接通じていると主張していた。

使節団と酋長達が、春の遅くになって会合を始めるに従い、インディアン達には、白人達が、その会合の結果がどうであれ、彼等の砦とその街道を建設しようと主張していることが分ってきた。交渉人が話したときでさえ、Henry B. Carrington 大佐は、Fort Kearney から 2000 人の男達とともにやって来て、そして、6 月には、Powder River 地域を軍隊が既に支配していることを示すために、そのうちの 700 人を、まさに、インディアン達の鼻の先の元となる Laramie に送り込んできた。

この時に、Red Cloud は、Carrington を公然と非難し、そして、怒りに燃えて、白人達は、力で土地を掴もうとしており、事実、それを行動に移していると咎めた。彼は大手を振って会議を抜け出し、これに Man Afraid of His Horse や彼に賛成をする指導者達が彼に続いた。Spotted Tail, Standing Elk,そして、Swift Bear, Brulé Sioux 族の全ての首長たちは、そこに残り、そして、協定に署名する決心をしたが、しかし、その二週間後に彼等は、彼等の若い者達の殆どは、逃走してしまったと白人の指揮官たちに、無理矢理に報告させられた。彼等は、砦のずっと離れた所で一か八かやってみようとするどんな集団も、“覚悟をし、そして、彼らの性格に気を付ける”方がいいと簡潔な警告を付け加えた。

こうして、2 年間の実質的な包囲攻撃が始まり、その間、Red Cloud と彼の仲間の勇士たちは、ひっきりなしに、Carrington の連隊と、Bozeman Trail を通過するどんな集団に対しても、へとへとに疲れさせる攻撃をし続けた。そこには、John Phillips, 彼は市民の斥候であるが、その彼が嵐のような猛吹雪のなか、敵対するインディアンの領域を 236 マイルも Fort Laramie から Fort C. F. Smith の Carrington のところまで救援物資を運んだというような、偉大なる勇気と愛情の出来事もあった。また、1867 年の 8 月には、Res Cloud が、Fort Kearney の襲撃で、彼の最も信頼する 3000 人の戦士達を指導していた時に、出くわした、主要な遭遇もあった。英雄的な James W. Powell 大尉、彼は、Chickamauga でとても良い仕事をした人で有るが、その彼が、32 人の哀れな極わずかの駐屯部隊を、非常

にうまく指揮していたので、彼らは、Red Cloud の戦士たちによる 3 度の攻撃を払いのけ、そして、彼の戦士達 1137 人—これは、ほとんど信じられない程の手柄で有るが、これを殺していた。

しかしながら、それは、George Alexander 少佐の “Sandy” Forsyth と 28 人の男のもう一つの目を見張る様な防御、これは、同じ年に、彼らが、Colorado の東部にある Beecher’s Island で、強大な Sioux 族に対して、非常に上手に抵抗した時のもので、これとよく整合性が取れていた。最初の攻撃で、3 発の銃撃にあい、Forsyth は、かれ自身のうっ血から、落ち着いて指揮を執った。それから、彼の傷がゆっくりと壊疽して腐りはじめると、彼は 5 日以上の上の攻撃の恐ろしい日々とともに弱まっていく彼の軍を維持しながら、その間、彼の飢餓となった男達は、助けが来るまで、彼らの死んだ馬の肉をけずってこれを食べていた。救援部隊は、Louis H. Carpenter 大佐、彼は、彼の友人の Forsyth が、ライフルが彼の膝を打ち抜き、Oliver Twist の複写を読んでいた—彼は、休暇をとることを拒絶していたと勇敢な将軍が後で告白していたが、それは、気品のある姿をしており、それを見たのであるが、その大佐により指揮されていた。彼は、その怪我から回復するのに 2 年間を要した。

こうした、そして、その他の英雄的な行動にも拘わらず、Red Cloud は、ついには、全くの断固とした解決策により打ち勝った。政府は、1867 年の遅く、彼と打ち合わせをし始めたが、しかし、話し合いは分裂し、1868 年の夏に再開され、そして、11 月の 6 日には最終的にはうまい結論に達した—これは、完全に Red Cloud には勝利の形となり、彼のためになるものだった。Bozeman Trail は閉鎖され ; Fort Kearney と C. F. Smith は放棄する様に指示された。

政府は インディアン政策に重要な変化を取り始めていた。インディアンとの戦争を終結する方法は、それは、以前に決断されていた者だが、インディアンがその地域を自由に往来することを防ぐことで会った—簡潔に言えば、かれを保護居留区に閉じ込める事であった。こうした孤立集団を作り出すための彼らに対して投げ出されるべき鼻薬は、彼らに、保護居留区という形となった土地を、ほとんどの場合、それは、彼らが既に所有していたものを与えるというものであったが、そうした贈り物をするのであった。その保護居留区と言う考え方は何も新しいものではなく—既に数世代まえからあった以前の協定がインディアンの署名者達の独占的な使用のためにとって置かれたものであった。しかしながら、アメリカの政府は、こうした協定を乱用することから何も学んでいなかった。新しい政策は、そうした保護居留区に対する白人たちの侵入することを防ぐ手立てを何もしなかったばかりでなく、それを公布した協定とは程遠く、土地の贈与の永久性を保証するものではなかった。

保護居留区の政策が、全ての部族を閉じ込めるのには、二世代をも要することになるのだが、これが 1868 年に完全に執行され始めた。一年後の 1869 年に、Sheridan が Grant 大統領に、別の致命的な政策を取るように説得した。インディアン達がそれ以来アメリカ合衆国の民として認識されるべきであるから、政府は、部族と、あるいは、彼らの国とこ

れ以上の何の協定も結ぶべきではないと宣言した。こうして、数世代に渡る諍いの基本的なもととなる要因の一つが取り除かれたが、しかし、と同時に、政府は、それ以前に取る様なことのなかった責任を負うようになった。不幸にも、インディアンにとっては、彼らの保護者の仮定された良心以外に、民としての彼らを守るものは何もなかった。これが彼らにとってどれだけの意味を持っていたのか、歴史は悲しい判断だけであった。

こうした平和的な政策が公布されていた時でさえ、根絶運動が進んでいた。Sand Creekの大惨事から生き残った Black Kettle は、ワシントンからの交渉人たちが、Comanches 族, Kiowas 族, Arapahos 族, そして、Cheyennes 族と、Medicine Creek Lodge で、新しい協定を結んだ、1867 年まであちこちを起こっていた取りとめもなく起こっていた襲撃の出来事以来、時を過ごしていた。Black Kettle は、他の部族の代表達がしたように、この会議の成り行きに満足している様に見えた。彼らには、気分を良くするような贈り物が配られ、そして、Santana（ときには、Satanta）、あるいは、White Bear、彼は Kiowa 族の副酋長であったが、彼は、昨日まで敵同士で戦っていたアメリカ軍の制服を一贈り物としてもらい、これを誇らしげに着たりしていた。

しかし、部族の若い者達は、その協定、あるいは、贈り物を決して友好的なものとは考えていなかった。彼らの本質的に戦闘的気質は、四年近く続いた休みなき戦いにより燃え上がっており、そして、彼らは、そう簡単に降参するような雰囲気ではなかった。こうした、扇動家たちは、以前と同じように、頭皮をはがしたり、焼き払うなどできる事はなんでもするというようなことをしていた；年寄りの酋長達はもはや、彼らの勢いを止める様な力を持っていなかった。そこで、Sheridan 将軍は、よくやる方法で強力に平和を推し進める決心をし、そして、1868 年の遅く、Cheyennes 族と、そのほか、いかなる部族であっても依然として敵愾心を持っている部族に対して焦土作戦を開始した。

彼が野戦の指揮官として選んだのは、年老いた彼のお気に入りの男、George Armstrong Custer で、彼は、衝動的で、何事も徹底的にやる、南北戦争の“Boy General”と言われた男で、その後、いろいろな事件で、彼の残虐性や不法な指揮で有罪になった裁判沙汰のあと、軍から一年間の待機命令を受けていた者だった。Sheridan は、彼を西部の Kansas の Fort Hays にうまく連れてきて、そして、第 7 騎兵隊の指揮官にした。

彼の生涯のなかで、彼がそうであったように歴史家の記述のなかにも異論があり、インディアン達に対する Sheridan の戦争の中での Custer の役割は、意見の分かれるところであり、その中には、記述のうえでの偉大な取扱いがある。彼がしたことの詳細は、それをした彼の持っている理由以上にずっと明白である。

11 月の 23 日に、Sheridan の命令により、彼が、彼の部下たちとともに Washita River、ここは Black Kettle が、その冬の間、彼の仲間達の 75 の小屋に囲まれて、故郷を遠く離れた、何人かの Kiowas 族, Arapahos 族,そして、極わずかの Apaches 族の者達と一緒に、平和に暮らしていたところであるが、ここに向けて攻撃して行つた。Custer は、静かにこのキャンプをしているところに近付き、そして、27 日の朝、夜明けに、彼の連隊は、声を

揃えて、“Garry Owen”の歌を歌いながら、殺りくと破壊を繰り返して、その村に突入して行った。

俺たちは、役人たちを楽しくやっつけよう

俺たちは、市長や警察を走らせよう

俺たちは、誰もあえて困らせようとしないうつらだ、

かれが、自分の肌の色を知っていればだ！

Custer は Sheridan の命令に従ったが、しかし、彼を弁明する者たちは、それは少なくともないが、彼らは Washita で、大虐殺以外の何が起こったのか、何も述べる事は出来ない。もし、何かが起こったとしても、それは、Sand Creek よりももっと悪かった。そして、この時に、Black Kettle は生き延びることが出来なかった。彼は、数えきれないほどの戦士達、女、そして、子供達とともに死んでしまった。奇跡的にか、最初の襲撃の騒ぎで逃げ出した、仲間のうちのかかなりの者が生きながらえた。Santana、そして、Black Kettle の補佐の酋長であった Little Rock、に指導され、一端逃げた勇者たちは、戻ってきて、そして、彼らがどんな復讐ができるのかを強引にしようとした。彼らは、見えなくなっていた Major Elliott と、そして、戦争のあと、無くなった 15 人前後の男達に対する責任をとった。

歴史家の中の Custer の友達は、Elliott、そして、彼の部下たちを探そうとしないことに、彼に対して何の恥もかかそうとはせず、そして、これが、多分、かれが、もはやあえて待とうとはしなかったことなのだろう。彼らは、また、その格好の良い指揮官が彼の寝床に可愛いインディアンの人妻を連れ込み、そして、彼女に子供を産ませたとは、誰も信じようとしなかった。後になって、彼女がこのことは事実であると、口汚く罵っていたにも拘わらずである。

しかし、一再び、命令に従ったのであるが、一彼が部下たちに対して、全てのティピーを焼き払い、そして、後に残された、銃や、ピストル、そして、弓矢など、何であろうとも押収したものに加えて、1000 枚ものバッファローの毛皮、700 ポンドの煙草を、インディアン達が冬を越すために準備していたその他のいろいろなものと一緒に破壊するよう命じたことに、何の疑いもない。インディアン達以上に、彼らの側にも被害者が出た。攻撃をされるまえに、あわてて逃げようと、騎兵の Custer は、捕獲したインディアンのポニー—そのうちの 875 頭—を殺すように命じた。

Sheridan の仕上げの施策は、時々あまり大げさでなく、議論の有る様なものではない形で続けられていたが、ただ、二つだけ大平原のインディアン達の抵抗のなかには、大きな谷間があった。一つは、Powder River の近くの Big Horn の谷にキャンプを張っていた Sioux 族の連合体の形で残っていたものである。そして、もう一つは、彼ら自信がチリカツアの Apache と呼んでいた“集団の人達”であった。こうした人たちは、南西部の伝説的な悪漢どもで、獰猛で、頑強であり、そして、白人達に対する狂信的な嫌悪感により元気づけられていた人たちであった。彼らは、南北戦争の間は、恐怖の Arizona 領域と言われる土地を所有していた“情け容赦のない Apache”であった。彼らの顔立ちは、太った姿をし

た **Sioux** 族と違い、体を乗り出した、時には、見栄えのするもので、彼らの勇気は、彼らを憎んでいた白人達でさえ、これをほめていた。

1871 年まで、**Apaches** 族に対する政策は、単に根絶をするというものの一つにすぎなかった。**California** 部局の指令で、**Ord** 将軍は 1869 年に報告していた：“私は部隊にあらゆる手段で **Apache** を捕まえ、根絶するように士気を奮い立たせてきた。そして、かれらをあたかも動物であるかのように狩猟をさせてきた……。”

この政策は、**Arizona**、ここでは、住民たちは、**Apache** にたいして、特別の憎悪をもっているところであるが、ここで最も活発に実施された。1871 年に、市民兵のアメリカ人、メキシコ人、そして、**Papago** インディアンの大部隊が **Tucson** から、近くにある敵の村を追い払うために出発した。**Fort Lowell** にある軍の駐屯地が仲裁しようとしたが、遅すぎた。駐屯地の軍医がそこに到着し、彼は、単に、恐怖を報告する事だけだった：“……私は、幌馬車、あるいは、医療品が何の役にも立たないことが分った；仕事は、全ての事がなされた後だった キャンプは焼打ちにあい、そして、21 人もの女と子供の死体があちこちに無造作に横たわっていた；最初の段階で、傷ついた人たちは、石で頭を殴られていた。二人の美人のインディアンの人妻がそうした状況にあり、そして、性器が見え、そして、傷ついているところからして、彼女たちは、最初に強姦され、そして、射殺されたに違いない。死んでいる人たちは殆ど、手足を切断されていた。10 ヶ月そこそこの一人の赤子は、二度も撃たれており、そして、片方の脚は、叩き斬られていた。あちこち歩いている間に、我々は、傷ついていないインディアンの人妻のところに来たが、しかし、彼女は何もしゃべる事ができなかった。彼女は、我々の優しい思いやりを確かなものと感ずることが出来なかったのだ。”

次の日の朝、**Whitman** 准将が死体を葬るために駐屯地からやってくると、彼が、ある話を付け加えた：“……彼らのキャンプは包囲されており、日が明けると攻撃された。それは、あまりにも突然であり、かつ又、予測もできなかったので、だれも仲間達に警告する事にも気づかされず、そして、私は、その日の朝にもって行くために集められた枯草の束の横で眠ったまま銃撃された実にたくさんの女達の数を見た。逃げる事も出来なくなった傷を負った者達は、彼らの頭を棍棒とか、石で殴られ、また、ある者達は銃撃で致命的に傷つけられているのに、弓矢をたつぷりと射られていた。体には、ほとんど纏っているものが無かった。もちろん、全ての者が埋葬され、ある者は老人で有り、ある者は、かなり育った少年で、残りは、女達や子供達だった。殺された者、そして、不明になったものの全体の数は一大体、120 名くらいで、－8 名だけが成人の男だった……”

そうしたものが、90 年前にもなっていない、**Arizona** における白人の文明開化の状態だった。

政府が、法律を復興させ、整備するために、そして、それと同時に **Apache** を抑制するために送り出した者が、**George Crook** 将軍で、彼は、1871 年の 6 月 4 日に **Arizona** 部局の指揮権を持った。**Crook** は、根絶を信じていなかった。彼は、入植者達を喜ばすことの

ないようなあけすけな声明を宣言した。“私は、Apache は、彼が、受けるに足る以上にもっと暗い色に塗り手繰られており、そして、かれの悪行は、彼がその他のインディアン達よりももっと邪悪であるというよりも事実の間違った認識からのもののほうに起因していると考えている。自然の産物、其れだけでは彼らを支える事の出来ないところで生きて行きながら、彼は、大地を耕すか、あるいは、盗賊をするかをしてきて、我々が彼のことを恐れて、かれの気持ちをぐらつかせるような政策を取った時に、彼は、後者を選び、そして、その方が、より労力は少なく済むし、その方が、彼のもって生まれた本性によくあっていたからだ。私は、彼に対する明確で、積極的な宣伝活動が彼をこの国で最も素晴らしいインディアンにすることだけでなく、それが、大蔵省に数百万ドルの節約をもたらしそして、沢山の汚れない白人達とインディアン達の生活をもたらしてくれるものと思っている。”と。

しかし、大統領自身の代表者 Vincent Colyer、彼は同時にその地にやって来たのであるが、彼は、Crook の“明確、かつ、積極的な宣伝活動”に賛同しなかった。かれは、その代わりに、強制力を取ろうとし、Apache は、彼に対して 1881 年の 9 月から、1882 年の 9 月まで、Arizona で断続的な 54 回の襲撃を繰り返して対抗し、そのあと、Crook は、“手におえそうもないような敵対者”を処罰する彼の意図を宣言した。それをするのに彼は、6 ヶ月そこそこの歳月を費やした。1873 年の 4 月 27 日に最後の反抗が包囲され、そして、一時的に Arizona に平和がもたらされた。政府は、Crook の手柄を多いに評価し、かれは、准将になり、これは、当時としては異例の抜擢であった。

Crook は、屁理屈だった。インディアンに対する効果的な戦いを行う者で、彼は、また、彼らの友達でもあった。戦場での勇気を持った行いが、赤人たちを平和的に取り扱う中でその勇気によりうまく調整されるべきであると信じていた。と同時に、彼は、彼の当時としてはかなり進んだ提案をし、彼は、軍隊の中でも“インディアンを愛する人”としても認められており、政府からも、役人としてあまりにも先見の明がありすぎると思われていた。彼は、懲罰をすると言う軍の政策に対抗すると言う立場、その代わりに許容するというものであるが、そうした立場を取るだけでなく、彼は、保護居留区を細分化し、そうすれば、それぞれのインディアンは自分自身の農場を持つことが出来るし、自立するに違いないと提案した。彼は、また、インディアンは、国家の基本法の保護を受けるに値する市民であり、また、他の全ての市民たちの権利を持つべきであるし、当時、多くの国の立法府で奉じられていない全体的な合理的信条を与えられるべきであると、あえてこれを信じてようとしていた。

誰一人として、彼の要望に多くの注意を払おうとはしなかった；戦場での彼の能力が余りにも有用だった。Arizona での大成功のあと、彼は、the Department of the Platte の指揮官とされたが、ここでは、Sioux 族と Cheyenne 族が、根絶の後に予定されていた、大規模な抵抗の出来事を計画していた。

しかしながら、Crook が Apache を追跡している間、北部の California でのちょっとした

た出来事が大衆の興味を引き、あまり世に知られていない部族の Modocs 族をインディアン戦争の記録で有名な部族に仕立て上げてきた。

Keith A. Murray、彼は、Modoc の出来事の、つい最近の、そして、もっともすばらしい歴史家であるが、その彼がこう述べている：“Modoc Indian 戦争は、古来のインディアンに対する自然に発生した生活・思考の様式のなかで、白人の男たちの文化の衝撃に対して、最終的にやけになった抵抗である。それは、活気に溢れたおだやかな拒絶の最終的な結末の状態と獐猛な人達の数を表すもので、19 世紀の非常に初期の段階に始まり、そして、打ちのめされ、そして、活気を失った人々が Central Pacific Railroad に乗せられ、Oklahoma のちゃちな保護居留区に国外追放される形で運ばれていった時に終わったものである。”

Modoc 戦争は、また、多彩な個性の衝突でもあったし、それは、多分、他の西部のインディアン戦争よりももっと激しかったのだろう。例えば、そこでは、20 世紀の組織犯罪の世界に名をつられた者達、Captain Jack , Curley Headed Doctor, Bogus Charley, Shacknasty Jim, Scarfaced Charley, Steamboat Frank, Boston Carley, Ellen's Man George, One Eyed Watchman, Hooker Jim, Old Tail, William (The Wild Gal's Man), Old Chuckle Head and One Eyed Mose と言った者達とおなじような響きを持つ名の指導者達がいた部族であつたに違いない。

Modoc の反乱の原因は複雑であつたが、基本的にはそれらは、入植師者達とインディアンたちとの間の、古くからのトラブルと小競り合いから成り立っていたもので、比較的新しいものの一つは、保護居留区内での労働に伴う不満であつた。物語の中には、その他の要素もあつた。その一つは、Modoc の酋長の Schonchin,あるいは、Sconchin、彼は保護居留区の構築をする協定に署名したものであるが、かれと、彼の若い宿敵である Captain Jack、彼は、それを弾劾し、そして、異論を唱える彼の仲間達を指定された土地から引き離していた者であるが、その二人の間の対抗意識であつた。別の要因としては、Klamath 部族、この部族は、彼らの権利と土地の複雑化した保護居留区に絡んで含まれていた部族で、政府の管理の技量に欠けるところによりこうしたことの殆どがもたらされたのであり、その部族は Modocs 族の古い敵であつたが、この部族との接近であつた。二つの部族の間の内部争い的な戦闘は、これはどうしても避けられないものであつた。

最終的に、他の部族の中でもそうであつたように、そこには神秘主義的な要素があつた。それは、Curley Headed Doctor の存在で、彼は、Modoc 戦争の精神的な指導者であり、そして、それを彼の呪術がしくじり、そして、部族の者達が彼に対する彼らの信頼を失った時まで、半端者達に対して、それを維持し続けてきたのである。多くの者達が、Jack の議論により、あるいは、古いやり方によって進められた Curley Headed Doctor の熱心な説教のどちらかに寄り、正直に説得させられていた。その他の者達は、保護居留区の中で問題ばかり起こしていたような殺人鬼や盗賊であつた。しかしながら、ある一つの事柄で、彼らは多かれ少なかれ一つにまとまっていた。彼らは、政府の代理人により、管理されようとはいささかも思っていなかった。1872 年の 11 月 29 日に、38 人の兵士達からなる軍が、

彼らを逮捕し、そして、保護居留区にもどそうとやって来た時、彼らは、彼らの内の 8 人を殺害するか、負傷させ、この **Lost River** の戦場で、戦争は、続行していた。

Captain Jack の性格については、なお、多分に異論をはさむものがある。それは、彼の名前、これは、白人達が、彼が彼らの役人たちの一人のような服を着ていた彼の感情により彼に与えていたものだが、その名前にちなんで、彼の周りには、何かとけばけばしさがあつた。こちんまりとした、丸顔で、誤魔化し上手なずんぐりした背の低い男で、彼は、多分、インディアンの国に対しては何の飾る所も持ち合わせていなかった；彼は、多分、インディアン売春のようないかがわしい商売に身を置いていたのかも知れない。しかしながら、彼は、**Battle of Lost River** から、軍隊には“**the Stronghold**”として知られている、ここは、事実 **Oregon** 州との州境にある **Tule Lake** の南に広がる熔岩の地形であるが、この昔からある洞穴や割れ目の隠れ家に、かれに異論を唱える者を追いこんでいたこともあり、これにより、彼の軍事に対する能力については、何の疑いもなかったに違いない。6 ヶ月に渡る向こう見ずの行動のために、彼は、1000 人以上の兵と入植者達からなる軍を山の懷に集結させた。

彼は、5 の主要な戦いと、そして、幾つかの彼の追求者たちとのあいだでの小競り合いを戦い、かれ自身の不十分な軍にはほんの僅かの損失を講じただけで、そして、彼の部下の戦士たちの全数よりももっと沢山の人的損害を与えていた。1874 年の 1 月 17 日での最初の戦いの一つでは、彼の部下たちは、一日中繰り返された彼の本拠地に対する攻撃を仕掛けてきた 400 人の部隊を近づけさせず、誰一人の（そのように報告されているが、）の人的損害も出さずに 9 人の敵を殺害し、そのほか 30 人ものものを負傷させていた。

Captain Jack の戦場での敵は、**Crook** 将軍のように、インディアン達の真の友人たちだった。**E. R. S. Canby** 将軍、彼は、**the Department of the Columbia** を指揮していたのだが、その彼は、再び **Crook** のように、インディアン達に対して軍事的な継続と、インディアン達を取り扱う上での公明盛大と正直と言う両方の繰り返しをしてきた、南北戦争の退役軍人であった。彼は、**Seminole** 戦争では **Jackson** と一緒であつたし、**Cherokees** 族の掃討では、反抗的な役割を演じていた。その後、彼は、**Mexican War** で、奉獻した後、1858 年の無血の“**Mormon War**”に没頭し、**New Mexico** 州で働き、南北戦争の西部地域での戦場で戦い、1865 年に、**Mobile** を攻め落とし、南部地域での仕事に専念し、そして、南部の 4 つの州の軍事的な統括官として働いていた。彼は、**Virginia** から、**Washington Territory** に直接やって来たのだ。

Canby は、インディアンが溶岩台地の難攻不落の安全な場所に身を隠している事がはつきりしてきた後、**Modocs** 族に対して、さらなる敵愾心を持たないように望んでいた。彼は、いかなる場合でも合意することを良しとしていた；彼は、ある部族が彼のことを呼んでいたように“インディアン達の友人”と言う呼び名をまさしく得ていた。**Modocs** 族は合意により失うものは何もなかった。彼らは、駆け引き上手であつたし、また、**Canby** のような男と全体的に満足するような条項を作り出すことをとてもうまくやることが出来た。しか

し、それは、今では説明のできる理由により、彼らは、ただ一つの、間違いじみた、精神的に責任を負う事ができない行動により、彼らの好機と戦争を失ってしまった。

4月の11日に、Canbyの使いの者が、Modocの指導者とともに、非常に高い崖の麓で平和裏にテントが維持されるようにするために議会に向かい出発した。将軍は、彼とともに、Eleazer Thomas 師；A. B. Meacham；Klamath 保護居留区からの代理人である L. S. Dyer；そして、伝達使の通訳として、Frank Riddle と彼の Modoc 族の妻の Toby を連れて来た。彼らは、彼らを迎えて待っていた 8 人の Modocs 族のいることに気付いた：Bogus Charley, Boston Charley, Captain Jack, Schonchin John（彼は周長の息子であった）、Ellen's Man, Black Jim, Hooker Jim, そして、Shacknasty Jim であった。彼らは、すべからく武装していた。

非常に和やかな話し合いのあと、そのほとんどは伝達使の仕事について懐柔的なものであったが、土地のどの部分が Modocs 族に対して、保護居留区として与えられるのかということで行きづまりに到達してしまった。もちろんこのことは、何時でも問題となる最も重要な項目であったのだが。インディアン達が思い切ったことをしたことの一つが起き、4つのインディアンの部族が、銃を携えてある近くに岩の影から現れてきて、混乱の瞬間となったのだ。

“これは、何の真似だ、Captain Jack？”、とある一人の白人が叫んだ。“Atwe”と、Jack が応えたが、これは、彼が、彼の回転銃で合図をすれば、いつでも、わずか 3 フィートも離れていない Canby に向けて銃を放つ“準備ができて居る”ということだった。銃は打ちそこなったが、しかし、Jack は、銃を再び構え、そして、もう一度、射撃をした。Canby は、目の下を撃たれて、倒れた。それから、明らかに準備されていた様に、インディアンたちは、彼らの定められた敵の上に降りかかった。Thomas は、撃たれ、そして、殺された。Meacham は、彼の馬に跨ろうとして、銃の打ち合いをしたが、しかし、彼もまた殺された。Canby、彼は傷を負っただけだったが、起き上がり、そして、ライフルの射撃で彼を撃とうしていた Ellen's Man の前をちょっとだけ走ったが、Captain Jack が首のところに槍で突いて彼のとどめをさした。Dyer, Riddle、そして、Toby だけが逃げた。

インディアンのどんな戦争のなかにも、こうした殺人のような熱い怒りをあらわに示すものは殆ど無い。それは、そのものがそうであったように、それ自身が残虐性であり、恥ずべきものであったという、単純なものではなく、Canby や Thomas のような男達、彼らは Modocs 族を大いに助け、そして、明らかに、心から興味を持っていたのであるが、彼らのように、そうした非常に高く尊ばれていたという事が示された事実だったのだ。合意が断念され、そして、根絶というものが、再び、政策となった。

Jefferson C. Davis 大佐は、1000人以上の兵士、志願兵の市民軍、そして、スカウトとして働いた Modocs 族の者達とともに戦場に繰り出した。制圧が直ぐに壮大なものとなり、そして、Modocs 族はゆっくりと丘の方に退却をした。しかしながら、もし、彼らの中で意見の相違が起きていなかったのなら、そして、仮に彼らが Curley Headed Doctor の威光に

おける信頼を失っていなかったのなら、彼らは、それから上手に抵抗を続けたのかも知れない。5月の22日に65人が投降した。Jackは二人の他の戦士と彼らの妻、そして、子供たちとともに、6月の1日まで抵抗した。希望を失い、そして、向こう見ずになって、彼は、彼のところに会いにやってきた斥候に向かって睨み返し、そして、ただ単に、彼の両手をひろげ、“私の両足はくたびれてしまった”とだけ、言った。

Captain Jackを含め、6人のModocs族のものが監督官を殺害しようと試みた。この計画は、実際に、戦争の掟を破ったことに対する裁定を下す軍事行動であった。すべての者が有罪とされ、吊るし首が宣告されたが、Grant大統領は、二人の男を助命するように宣告を取り換えた。1873年の10月3日に、他の4人の者はFort Klamathの簡素な長い絞首刑台で吊るされた。強情なCaptain Jackは、ただ、吊るし首になる前に、“私は、偉大な父のもとに行くつもりだ。”とだけ、一言述べた。

こうして、政府がインディアンとのこれまでの戦いに関連して最も大きな金銭的な犠牲を強いられたModoc Warが幕を閉じた。そのかかった費用は、0.5百万ドル以上であった。白人達は、8人の高級事務官、39名の正式な登録者、16人の市民軍、そして、2人の斥候、そのうえ、18人の入植者が殺され、そして、同じくらいの負傷者が出ていたが、これに加えて67人のものが負傷していた。Modocs族の方は、数名の女、子供達に加え、わずか5名の者が失われただけだった。

もし、政府がModocs族に、彼らの望んでいたものを与えていたのなら、それは、2000エーカーの土地、多分それは、\$10,000の価値にもならないものであり、そして、代理人、これは、\$20,000以上にもなったかもしれないが、彼をおくだけですんだのだ。

Modocs族を鎮圧したあと、大草原での最終的な偉大な戦いにまで発展した、Dakotas族のBlack Hillsでの出来事が起こった。Black Hillsは、そこが彼らの聖地の領域であるとみなしていたSioux族には、既に、非常に大事なところであった。1873年と1874年、白人たちがそこで金を発見し、瞬く間に、そこがとても重要な場所となった。両方のCusterがその場に出くわした。George Custerは、1873年に、Black Hillsを探検する最初の調査隊とともに行動を起こしており、彼の弟のTom大尉は、次の年にこれを実行した。Tomは、Sioux族の酋長、Rain-in-the-Face、彼は一時的に逃げて、そして、いつかは、Tomの肝を食ってやると誓いを立てていたが、その彼を拿捕したことで、知られていた。

Custer兄弟は、Black Hillsで金を発見し、そして、軍の機智に富んだものが、Sioux族との間で、しかるべき協定ができるまで、不可避となったラッシュをとどめ置くように試みたけれども、金を求める者達を制約することはなかった。一年のうちに、Deadwoodは、他の町がぱっと燃え広がり、そして、インディアン達は、どこに行っても彼らの神聖なる土地が汚されていると理解した。Sioux族やCheyenne族にとって、それは、耐える事の出来る限界すれすれのものであった。そして、今や、Cook将軍がしなければならない仕事が生まれたのだろう。

今度は、彼は、彼のCrazy Horseと、Sitting Bullという、手におえそうもない好敵手

と対面することになった。Crazy Horse は、Sioux 族連合の軍事的な天性を持った男であり、Sitting Bull は、策略と組織を作ることの秀でた能力を有する祈祷師であった。

Crazy Horse は、25 歳にも満たない若い男であった。Oglala 部族の Sioux 人で、彼の名前（かれ自身の発音では、Tashunca-uitco という）は、多分、彼の生まれの時の出来事にちなんだもので、その時に野性の子馬が、村中をかけまわったと言われている、このことから来ていたのだろう。ただ、これについては何も確かなもとは分っていないが、彼は、Wyoming の宣伝運動の中の Red Clouds と共に戦ったのはもっともらしい。Crazy Horse は、保護居留区の中に閉じ込められようとは思ってもいない、勇敢で、独立心のある男であった。最初から彼は、白人達の政府や、そして、全てのその仕事に対して非常に厳しい態度を取っていた。彼は、Sioux 族の間では強力な指導者であったが、そして、Cheyenne 族の女と結婚した時には、彼らの間でも、非常に重要な立場の人間にもなった。

Sitting Bull は、違った経歴の持ち主だった。Crazy Horse より歳をとっており―彼は戦争の当時 40 歳超えていた―また、より賢明であった。事実、彼はまさに政治家として良き見本だった。彼が若かった時、戦闘の指導者として、自分自身の立場を確立してあと、彼は、より高尚で、より安全で、そして、より軍事目標として価値のある領域へのお告げの様なものを聞き、かれ自身を祈祷師、ならびに、年輩の政治家としてその身を置いた。幸運にも、彼は、両方の目的にかなう才能をもっていた。たちまち、彼は、インディアン達のために、幸運を証明するような実績を上げ、そして、彼が、強力で、影響力を持つ男のように、Sioux 族、Cheyenne 族、そして、Arapaho 族の指導者達、彼らは、彼がしてきたのと同様にたくさん、白人達を憎んでいたのだが、その彼らの興味を引きながら、彼の小屋で主宰し始めた。彼の憎悪は、彼の生涯のいかなる特別な出来事によっても、湧き上がって来たものではなかった；それは、単純な伝統的なものだった。彼の立場を確固たるものにするために、彼は、それが最も有効に働くようなところで、贈答品を分配するために彼の富を利用した。

このようにして、太った、背の低い、重量のある、丁度、インディアンの組合長か、あるいは、養老院の親方のような男は、1875 年までに、かれ自身が、戦争の首長ではなかったにも拘わらず、戦争の会議をするその主催者でいることに気付いた。1876 年の春、この時は、戦争は差し迫っているかのようなになった時だが、この時に彼は、Little Big Horn の谷を流れる Rosebud River での彼のキャンプに、2500 から 4000 名の良く武装訓練された男達と少年たちを集めていた。1875 年のゴールドラッシュが、Sitting Bull が、かれと Crazy Horse の双方が求めていた戦争を始めることを実行するために必要としていた促進剤であると証明したので、毎日もっと沢山の人がやってくる。Red Cloud に耳を傾け、そして、彼に従って、白人達との平和を模索していた Sioux 族の者達は、神聖なる Black Hills への侵略により、その幻想からの夢を覚まされていた。

Washington のインディアンの監督官が、Sioux 族の、自由に物事を叫ぶことのできる様な行動力について聞いた者により警告をうけたが、その彼が 1876 年の 1 月 31 日までに

彼らの保護居留区に、全てのあちこち動いている部族の者は戻らなければならないと宣告した、1885年の12月に、戦争という結果をもたらした、ばかげた行動が起きた。それは、無分別であるのと同様、現実的ではなかった。その一つには、インディアンの代理人が伝達事項を伝えるために送り込んだ伝達人は、その道すがら、大平原の厳しい冬の気候を乗り越えなければならなかった；それには、大の大人が一か月もかかった。冬はあまりにも厳しかったので、多くの部族は、獲物をもとめ家から遠く離れており、そして、彼らにとっては戻ってくることが不可能だったのだろう。

期限の時が過ぎ去り、ほとんどは無視されていたのだが、監督官は the War Department に対する彼の命令の実行を覆し、そして、Crook 将軍に命令を実行し、Sioux 族の冬の部落を攻撃させた。彼の部隊が、騎兵隊二個連隊と、二個の歩兵中隊、その一つは、軍が西部のインディアン達に対して送り込んだもっとも強力な部隊の一つであったので、こうしたことから、彼は、間違いなく、成功すると確信していた。二人のインディアンの狩人が現れ、この手におえそうもない探検隊を見て、そして、急いで逃げた時、Crook は、彼らの後に、450 人の兵とともに、J. J. Reynolds 大尉を送った。

夜が明け、Reynolds' の斥候が大きなインディアン達のキャンプをしている場所にやってきた。彼らは、それを知らなかったが、彼は、Sioux 族の戦争の指導者である、Crazy Horse 自身の本拠地を発見した。Reynolds は、村を驚かせたが、しかし、戦士たちの殆どは、急いでそこを去るように十分警告されていて、近くの木々が沢山ある森に隠れる場所を見つけた。Reynolds は、直ちにキャンプに火を付け、それを眺めていたインディアン達は、自分達が住んでいた家が、そして、彼らの持っていた毛布、食糧が炎の中で燃え尽きるのを確認した。Reynolds は、彼らの馬を捕獲さえした。

どんな他の酋長も降参したか、あるいは、彼の戦士達を彼らの生活の恐怖の中で逃げ延びさせたが、しかし、Crazy Horse は、彼がなぜ Sioux 族の酋長たち、そして、戦闘の指揮官としてもっとも誉れが高いのかを実施に証明した。彼は勇士たちを呼び戻し、彼自身の実例で彼を奮い立たせ、反撃の態勢を整え、そして、Reynolds の部下たちを、早急に退却するということに追い込むような脱落者がでて、機敏な大佐が手痛い損出をもって軍を引かざるを得ないという、そんな恐ろしさを感じるような状況に追い込んだ。Crazy Horse は、彼の戦士たちの馬を取り戻すために、白人達の戦列の乱れを上手に利用した。

Reynolds は Crook の主力部隊のところまでたどり着く事ができたが、しかし、Sioux 族の大胆な指導者は、かれの競争相手と手が切れなかった。

再び馬に跨り、Crazy Horse の部下は、軍隊の中を走り回り、そして、Crook が彼の損失を確認する前で、牛を逃がすように、その手綱の殆どを切ってしまった。かれの食料用の肉が無くなり、荒涼たる大平原の基地からずっと離れ、将軍は陰気な敗北の内に、Fort Fetterman に退却の行軍以外に選択肢が無かった。Crazy Horse は、彼の村を失ったが、しかし、彼は、白人達を打ち負かし、それと同時に、彼の蓄えの倉庫をまた元通りにした。

Crook について言えば、彼は、Sioux 族をすぐ後に追いつかせることは、the War

Department が考えているよりもずっと大変な仕事であると分っていた。新しい戦略が春になると同時に企まれ、6 月までに彼はもう一度出発する用意をした。計画は、Crook にとっては、Rosebud の溪谷に入り、北に進んで行進するというもので、一方では、John Gibbon 大佐は、Montana 山脈から東方に移動し、Alfred H. Terry 将軍、彼は、Dakota の Fort Abraham Lincoln から Missouri River まで進んでいく予定であったが、その将軍のところまで、たどり着くことであった。こうした進軍の目的は、Sioux 族をあらゆる方角から孤立させ、彼らをバラバラに分散させた状態においやり、でも、恒久的には、かれらをお互いに助け合う事ができないようにさせる事だった。

5 月になり、さまざまな探索隊が移動を始めた。Crook は、今度は、騎兵隊 15 連隊と歩兵部隊の 5 中隊とともに Bozeman Trail を行進し、苦い思い出の廃墟と化した Fort Kearney を通って行き、そして、彼が Crazy Horse から、彼にそこを超えるなど忠告する伝言を得た Tongue River までやって来た。この時は、Crook のような退役した軍人に対して送られた伝言の種類ではなかった。彼が赤人に対してそうであったように思いやりをもって、彼は、この国の全てのインディアン達は、かれはそれから直ぐに実行したのだが、彼がその川を超えることをさせないなどできないと、辛辣な返事をした。

6 月の 17 日の朝、8 時に、1300 名の彼の軍隊が、Crazy Horse の率いる 1200 名の Oglala's 族、そして、Cheyenne's 族に向かって突入した。それは、長い、熱い一日となった、勝ったり負けたりの一進一退があり、そして、夜が明けると、手痛い損失があり、Sioux 族の手の中にあった Rosebud の土手を去って、引き上げたのは Crook であった。Crook は、インディアンの指導者の手段にあい、彼の二度目の敗北で、深く悔しがっていたが、しかし、彼は、Crazy Horse が特別高尚な策略家であると認めないわけにはいかなかった。

Crook が本拠地でもう一度攻撃するためにもっと沢山の兵士と補給物資を待っている間、Gibbons の軍隊で補強された Terry 将軍が、6 月の 22 日に到着していたのだが、Rosebud の河口の近くに居た。彼は、それを知らなかったが、しかし、Crazy Horse は、Crook を打破したあと直ぐに、北に進軍し、彼の Sioux 族、そして、Cheyennes 族の主力部隊とともに、Little Big Horn の谷で、Sitting Bull に加わった。Crook はそこにキャンプのあることは知っていたが、しかし、彼は、彼の敵の強さを誤った見積もりをするという基本的な戦略のしくじりを犯し、さらに、馬に乗っていない白人の下士官があまりにも沢山おり、そして、インディアン達の闘う技量を誤解するという、さらなる誤りを犯した。彼がただ心配していたのは、Sitting Bull の軍隊が、彼がその彼らを陥れるまえに逃走してしまうのではないかという事だった。

Sitting Bull、一方、彼は、彼の小屋にのこり、そして、彼がしていることの意味合いをよく知っていた。彼は、まず最初に、キャンプに腰を落ちつかせ、そして、彼の勇士たちが Crazy Horse と、Gall という名の別の酋長の指揮下で戦いをしている間に、非常に強力な祈祷をしていた。さらに、彼の斥候達は、白人達の行進を身近で監視しており、そして、6 月の 12 日に彼に、Terry が、Custer の指揮下、有名な第 7 騎兵隊を、明らかにインディ

アン達のキャンプしているところを探し出そうと言う意図で、Rosebud まで、送り込んできたと報告した。

事実、その計画は、Custer にとっては、Little Big Horn の本拠地と同様に遠くまで進軍すると言うものであり、Terry が、なんとしてでも捕まえようと、別の経路から近付いていたのだが、その間に掃討しようとするものであった。このプランで、どちらが、尚も激しい怒りを唱えているかというアメリカの歴史で最も異論のある物語の一つが始まった。Custer は、命令に従わなかった生意気な馬鹿者であったのか、それとも、彼は、予定通りすることにしくじった、素晴らしい策略家の巧妙な手段を試そうとしたのか？ 生徒、あるいは、無関心な読者は、彼の権威を選択するだろうが、しかし、確かな事実、明白に残っている。我々は、Custer が実際にしたことを知っているのだ。

彼が、川の源流に近付いた時、彼は、インディアンのキャンプをしている方に向きを変え、彼を否定なしに Terry がそこに辿りつく前に敵と接触するような形にさせる経路を取った。この行動のためにとった彼の移動は、そして、彼が接近するときに適当な事前の注意を払うことに失敗したかどうか、は疑問が残る。しかし、6月の25日の運命の朝に彼が、分水嶺の、Little Big Horn の谷の一方の側、反対側は、Rosebud の方であったが、こちらに立ち、事実、その指揮官は、どこに敵が待ち伏せしているのか、そして、その数がどの程度であるのかを、知らなかった。

彼は、朝の間に谷の中に進軍して行き、そして、彼の部下を三つの戦闘隊に分割した。彼は、Frederick Benteen 大尉に一個大隊を付けて、南に向かわせ、インディアンの部落を探索するようにさせた。一方、彼の大隊と、Marcus A. Reno 少佐により指令をうけた一人とともに、彼は谷の中に進軍して行き、そして、昼過ぎに、彼の目的とする場所に着いた。彼は、Reno に、支援隊として彼の大隊を保持しておきながら、直ぐに攻撃をするように命じたが、主力の者達は既に過ぎ去った後で、彼は、明らかに、気持ちを変え、彼の軍隊をキャンプの後方を攻撃するような形に彼の軍隊を巧妙な手段を取ろうとした。

Custer の取った動き、あるいは戦略がどんなものであったにしろ、結果は、悲惨なものであった。Reno の大隊は、村に近付いた時に、Gall の指揮下にある強力なインディアンの軍隊により攻撃を受け、一方、Crazy Horse は、予め Cheyennes 族の軍隊に指示をして置き、Custer を動揺させ、そして、かれを包囲した。Gall は素早く、Reno に重大な被害を与え、川を横切り、高い崖を反対側まで這い上がらせ、ここは、生き残りの者達が、濠をめぐらし、そして、反撃したところだが、ここまで、退却をさせた。彼の部下たちの一部を拿捕するために残して、Gall は、既に貧相になった Custer を取り囲んでいた Crazy Horse を援軍するために北に向かって進んだ。そして、有名な最後の瞬間がやって来た。それは、長くは続かなかった。夜のとぼりが落ちる前に、Custer と彼の完全に指揮下にいた 212 人の男達は、全滅させられた。

一方、インディアンを全く見つけられなく、Benteen は、北方に戻り、絶滅から Reno を救うために時間通りに到達した。一緒になった彼らの軍隊は、次の日の朝、包囲してい



Custer の最後の戦い

る者達が突然包囲を解き、西方に向かって行ってしまった、その時まで、インディアン達を寄せ付けなかった。彼らの斥候達は、Terry 将軍の接近を突き止めていた。

インディアン達は、勝利を勝ち取ったが、しかし、再度、彼らは戦争そのものを失った。勿論、彼らは、どんな場合でもそれをうしなっていた。Custer の惨事の情報が Washington に火をつけ、もっと多くの連隊が数日のうちに西部に投入され始めた。しかし、この歴史の中で度々めぐり合うのだが、Crazy Horse や彼の祈祷が 6 月の 25 日のその日の午後に強力な力を発揮したに違いない Sitting Bull が、なぜ、彼らの決定的な勝利の有利さの機を生かさず、ことごとく彼らの軍隊をまとめて、攻撃しなかったかという事について、インディアンの気質のこうした、説明のつかない不可思議な神秘の一つが残っている。その代りに、彼らは、幾つかの部族に分れて、あたかも彼らは、まるで負けたかのように、そして、敵が一斉に追跡してくるのではないかと予測していたかのように、散り散りになって去って行ってしまった。

1877 年の 10 月 25 日の Sheridan 将軍の報告が、何が起こったかを物語っている：“……12 月と 1 月の間に、敵のインディアン達は、絶えず Nelson A. Miles 大佐の指揮下の連隊に悩まされ続け、首脳部たちが Tongue River の河口に居た第五歩兵部隊は、そして、彼らが二つのことに注視をしていたのだが、その一つは、Red River の事であり、そして、もう一つは、多大な人的、そして、補給物資と、動物の損失を出していた困惑している Hanging Woman's Fort の事であった。……真冬の間の、われわれ（とりわけ、Miles 大佐）の連

隊に対するこの継続的で止むことなき、活動は、物語りはじめ、そして、1877年の2月の初めには、インディアンが一般的に戦争をしようとしており、そして、今までは戦場での大きな部隊が戦闘を開始したという事を私に信じ込ませる様な情報が伝わって来た。

“その月の25日に、Minneconjoux、並びに、San Da Arcsにある229の小屋が、DakotaのIndian Agencyの連隊に投降した。彼らは、完全に武装解除され、彼らからは馬が取り上げられ、そして、全員が守衛の監視下に置かれた。このシステムは、後になってDakotaとPlatteの部局に投降してきた全ての者に対して実行された。3月の1日から同じ月の21日までの間に、30から900の分かれた状態で、2200人ものインディアンがやって来て、Platteの部局の、Camps SheridanとRobinsonに投降し、そして、4月の22日には、303名のCheyenne族が、Dakotaの部局下にあるTongue Riverの宿営地のMiles大佐に投降し、そして、もっと沢山の者達が、諦めるその道筋に乗っていると報告された。最終的には、5月の6日に、Crazy Horse、彼は、889人の彼に従う者達、そして、2000匹の子馬とともに、Camp Robinsonにやって来て、本人がCrook将軍に降伏した・・・”

草原の戦いの言葉は、Crazy Horseの物悲しい陥落を伝えることにしくじった。Little Big Hornの戦いの、そう長くない後、彼と800人の彼に従う戦士達は、代理人にいる西部の方に戻ってきて、それは、あきらかに弾薬と補給物資を手に入れるのを望んでいたが、しかし、Crook将軍、彼は彼を追い回していたのであるが、その彼がCrazy Horseと彼の戦士達を、彼らが、Crookがちょうど打破したばかりの酋長のAmerican Horseを助けようと来た時に、これを追い払った。Crazy Horseは、Rosebudからそう離れていないWolf Mountainsで、その冬を越すつもりでいたが、しかし、Milesはそこまで彼を追いかけに行き、そして、1月の8日に、酋長と彼の部下たちは既に逃げていたが、二門の曲射砲の助けをかりて、彼の冬の小屋を破壊した。

しかし、彼は、もうそれ以上することが出来ないを知っていた。代理人に攻撃するという彼の計画していたものの裏をかき、彼は、どこにも弾薬と補給物資を求めて行かなかった。彼のCheyenne族の者達、そして、かれ自身の部族の者たちでさえ、さまざまな理由で彼のもとを去っていき始めた。彼の友人たちは、彼に投降するように頼み、そして、そう決心するのにさらに4ヶ月が掛かったが、彼はそのようにした。

彼が、白人達がかれを捕捉しようとしていることを認識した時に、破れかぶれの一時的な興奮状態がCrazy Horseを捕えた。彼のナイフを取り出し、彼は、自由になる彼の道を切ろうとした。Little Big Man、彼は彼と行動を共にしていた友人であるが、その彼が、彼の腕を見つけ、そして、彼をさらなる問題となることから救い、そして、それに続いて起こった混乱した困難の中で、彼は、肉体的な胃の具合が悪くなるという症状に追い込まれた。

ある者が、近くにいた兵士が彼を銃剣で押し出したと言った。Little Big Man、多分、彼は、身をもってかれを救おうとしたのだろう、その彼が、Crazy Horseは、たまたま事故で自分を刺したのだと言った。どんな出来事があったにしろ、彼は夜中に亡くなり、そし

て、彼の父と母は、彼を秘密裏にその丘に埋葬した。この様にして、彼は、彼自身、白人達がかれを扱う計画をしていた運命から自分自身を救った：彼は、Dry Tortugas に逃亡したのだ。

Camp Robinson に居た大尉、彼は、Crazy Horse を彼が亡くなった日に見た者だが、その彼は、“まさに若く、30 歳以上には見えず、……5 フィートの背丈で、顔には傷のある、しなやかで、筋骨たくましかった。彼が他の者に与える顔つきの印象は、全くある種の威厳があり、だが、気難しく、機敏で、頑固で、物悲しい……全てのインディアンが、彼に対し、彼の勇気と寛大さに高い尊敬を表しており、……。彼こそ、まさに彼の時代の、そして、彼の世代の偉大なる兵士の一人であった。”

Sitting Bull について言えば、彼の祈祷師としての評判は、それは、その偉大なる勝利の時代におけるものと比べると、必ずしも高くはなかったが、それに続いた厳しい冬に、彼に対して信用をし続けていた人たちが彼の友だちの投降を、そして、Crook の部下たちの嫌がらせの下で、ますます進行する彼ら自身の悪くなっていく沢山の事に会うに従い、薄れて行った。彼らは、部族の指導者達が駆け始めた Canada との国境をこえて、貧苦が麻増すに従って、次々に退却して行った。彼らには何の選択肢もなかった。それは、Sitting Bull が、1881 年の 7 月に Fort Buford で投降するために連れてきた 187 名の者からなる男たち、女達、そして、子供達の惨めな集団であった。

Crazy Horse は、確かに非凡な才能を持った Sioux 族の者だったが、しかし、幾分、大衆の気持ちの中で特大のつり合いのとれた見方でインディアンの英雄は、政治家であり、そして、まやかしの霊媒師であった Sitting Bull であった。皮肉な、そして、不名誉な死を待ちうけている、1881 年の後の 10 年間の間 Standing Rock の保護居留区での彼の小屋の中で座っていた、激しい敵意を示し、そして、妥協をしない老人は、過度に興奮した東部の白人達により想像された印象からは、とおく離れた風評であった。彼は、あたかも現実には白人であるかのように様々な形で述べられた；West Point を含み、いろいろな機関の卒業生であり、；学者であり、言語学者であり；自由市民であり；そして、カソリック教徒と言った具合であった。彼は、フランス語やラテン語を書く詩人たちを信じていた。しかしながら、真実という点において、彼は、かれ自身の名前すら正確に書くことのできないような、特別に深刻な、ならず者以外の何者でもなかった。

軍が Sitting Bull と Crazy Horse のあとに掃討している間、インディアン達の軍事的な能力が、その中で実際に失われた原因で崩壊していった、もう一つの別の戦略的な“最終的状況”が起こった。Joseph 酋長と Nez Perés 族の物語は、Custer のものと同じ様に、しばしば話されはしたが、しかし、これは、インディアンの戦争の歴史のなかでは、いかなるもののなかでも厳しく無視されていたに違いない。

Nez Perés 族は、1863 年に Oregon 州の東部にある Wallowa Valley の彼らの伝統的な故郷から Idaho の保護居留区に強制的に移住をさせられた。彼らは、白人達とは何の仲たがいもしなかった；彼らは一人たりとも殺人をしなかったと自慢していた。政府でさえも、

彼らは移住させられなければならないと宣言し、そして、1877 年まで、仲たがい物憂く続き、その一方で、無慈悲な入植者達はその谷に溢れ、そして、避ける事の出来ない諍いに発展して行った。

Nez Perés 族の何人かは、協定に署名し、Idaho に移住して行った。反抗をした人々の指導者は若い Joseph で、彼は、協定が署名された時には 23 歳にもなっていなかった。Joseph、もしくは、Hinmaton-Yalaktit、これは、“大地を覆い尽くす水から出てくる雷”と言う意味だが、その彼は、谷を愛し、そして、1873 年に彼の父親がそこに埋葬されると、彼は、酋長となり、決して協定には従わないと決心をした。

O. O. Howard 将軍、彼は、その地方の統治官であったが、かれは合意をしようと努めたかったという以上のものがあり、戦争することを望んではいなかった Joseph もまたそうであった。しかしながら、白人の不法占拠者達は少なくとも 1877 年、この時には、酋長は、400 人足らずの勇士たちとともに、より優れた戦力をもつ白人部隊を撃退したのだが、この 6 月に敵対心を露わにした。この時と、これに続くさらにあと二つの勝利にも拘わらず、Joseph は、彼はアメリカ軍を打ち破ることの希望は持てないと理解し、Canada への退きの道を決心した—これが国の軍事的な歴史の中では最も特別なものの一つとして施行されて行くことになる協定だった。

200 人の戦士達とともに、そして、3 倍にもなる数の女達と子供達により、思うように進まない状態で、彼は行き先を東部の方に変えたが、そこには、Howard 将軍の追手が近くに迫っていた。Joseph は、Idaho の西部にある厳しい山脈の地形を超えていく歴史的な Lo-lo の峠に行く事にしたが、この時には、彼は、白人の電報が、Fort Shaw の John Gibbon の指揮下にある第 7 歩兵部隊を彼の進む道の前に、そして、その他の場所にも、彼の行く先が妨げられるように送り込むという、緊急の伝言をもたらしているということを知る由もなかった。

Bitter Root Valley に入ってくると、Joseph は、アメリカ軍の連隊の不十分な駐屯部隊を無視して、そこを横切るように進軍し、そして、10 日後、8 月の始めであるが、Idaho 山脈の山稜からそう遠くない Big Hole で、彼の疲労困憊の人びとを休ませるために休息した。それには、Gibbon が 8 月 9 日に完全に彼に驚いたが、しかし、Joseph と彼のふたりの戦闘の指導者 Looking Glass と White Bird の 2 人であるが、彼らは、彼らの村から引率し、ずっとあとについて来た戦士達を集め、そして、反撃する計画をたて、一方、女達と子供達は先に送るというようにした。Gibbon は、かれ自身深刻な傷を負っていたが、ちょっとばかり退却し、そして、辛抱していた。Joseph は、大草原の草に火を付け、そして、もし、気まぐれな風が彼らを助けるような事が無ければ、白人達の軍隊を焼き払おうとした。こうして、この煙の幕に隠れ、インディアン達は逃げ延びた。

一方、Howard 将軍、逃げていくインディアン達から 2 日か、3 日くらいの遅れでいたのだが、彼は、かれ自身の指揮権下に生き残りのものを受け入れて、Gibson の救済にやってきて、そして、もう一度、出発した。8 月の 20 日の晩、追跡するものと追われる者達が

Wyoming の境界辺りに近付くと、Joseph 酋長は、大胆な後方を守ると言う策略を実施し、そして、眠って居る兵士達が取り返せせるまえに Howard の馬たちを捕まえた。一時的に動けなくなって、地団駄踏んだ将軍は新しく馬に乗るためにしばらく待たなければならなかったが、一方、Joseph と彼の仲間達は、Wyoming の一画を通り過ぎ、Canada にいくために北への向きを変える Montana に入ってしまった。

経路は、Yellowstone Park を抜け、Clark's 支流に沿って Yellowstone River に繋がっていた。この川の北側には、S. D. Sturgis 将軍が待ち受けていた。Joseph は、輝かしい変わり身を行い、将軍には、何の得るものを残さなかった。それまで来たことのないような北の方まで進み、9 月の末には、ついに、北の Montana にある Bear Paw Mountains にやって来た。そこは、安全地帯から僅か、30 マイルしか離れていなかった。そこで、彼は、彼らの追手の裏をかいたと同じようにうまく彼らを引き離したと考え、彼は休息を取った。

しかし、Miles 将軍、彼は、Fort Keogh から強行軍で行軍をし、追いかけてきたのだが、その彼が突然、9 月 30 日に彼と出会った。

Joseph 酋長には、当時、三つの選択肢があった。もし、かれが負傷した者、女達、そして、子供達を見捨てたのなら、彼と彼の戦士たちは Canada に逃げ込むことが出来た。彼は、彼の長い退却を失敗だったと、そして、勝利が見えている間に降伏することが出来たと叫ぶことができた。さもないければ、彼は闘う事ができた。性格的には、Joseph は戦闘を選択し、専門的な技術者の技量でかれ自身を安全な場所に身を置くことができた。

Miles は、たった一つの決定的な優位性をもっていた：彼は、曲射砲と Gatling Guns を一緒に持って来ていた。にもかかわらず、Joseph は、白人の連隊に大損害を与えるというよく考えられた戦いの中で、将軍を撃退した。インディアン達は、皆が同じような狙撃の名手の気持ちで戦い抜き、一つの連隊などは、全体の 35%を失った。

しかしながら、それは、望みのない戦いであって、Joseph は、そのことを知っていた。三日目になるが、10 月の 3 日に、彼は投降することに賛成し、そして、哀れな、そして、しばしば引き合いに出されるメッセージを送った：“Howard 将軍に、私はあなたの気持ちを知っていると一言いなさい。彼が以前に私に言ったことを私は肝に銘じている。私は、闘う事に疲れた。我々の酋長は殺された。Looking Gas は亡くなったのだ。Too-hul-sulsuit も亡くなった。年寄りたちはみんな死んでしまった。若い者たちが、‘yes’ か ‘no’を言う時は今だ。若い者達を引っ張っている彼 [Joseph の兄弟である、Ollicut] は、亡くなった。周りはとても寒くなったが、我々には毛布すらない。幼い子供達は凍えて死んでいく。我々の仲間は一彼らの内の何人かはその丘からどこかに行ってしまったが、彼らは毛布も無ければ、食糧もっていないのだ。私は、私の子供達を探し、そして、私が彼らのうちのどれだけのものを見つけ出せるのかを知る時間がほしい：多分、死んでしまった彼らを見つけることになるだろう。私のいう事を聞いてくれ、私の酋長達よ、私の心は、病んでおり、そして、悲しい。太陽の昇るところから、私は、もはや永久にもうこれ以上闘う積りはない。”



Joseph の投降

10月の5日に、Joseph 酋長と5人の戦士が Miles の野営地にやって来た。Haron が、インディアンの指導者達が現れたことについて記述している：“彼の頭皮の房は、カワウソの毛皮で結ばれていた。彼の髪の毛の残りは、彼の頭の両側で熱く編まれて垂れ下がっていた。彼は、鹿皮のレギングと、そして、その前の戦いで受けた、4つ、あるいは、5つの弾丸の穴の跡が分る、灰色の綿のショールを身に付けていた。彼の頭、そして、腕にも弾丸により掻き毟られて傷痕があった。彼は、自分のライフルを Miles に出し、そして、Howard と握手するときには微笑んでいた。”

Joseph は、彼がしたことがどんな衝撃であったのかということを理解する事ができた。Miles の部下の20%が亡くなった；Nez Perés では、17人が、戦闘で亡くなっただけだった。しかも、将軍は助ける事ができなかったが、しかし彼の敵をほめたたえた。“Joseph 酋長は、”と、彼は、“かつてこれまでに知ったインディアン達の中では、最も高貴な人だ。彼は、非常に紳士的で、思いやりがあり、そして、勇敢な男だった。”と明言した。

軍人として、Miles と Howard は、Joseph の顕著な功績を認めないわけにはいかなかった。彼は、2000マイル以上もの道則を乗り越えてやって来た。しかも、そこは、合衆国の西部にある、幾つかの最も険しいという山並みを超えて来たのだ。彼の軍隊は、あちこちで加わるものがあったとは言え、決して300人を超えていたわけでもなく、しかも、彼は、176人もの死者と、140名の負傷者という打撃を与え、2000名以上の白人の兵士達と衝突

しながら、絶えず彼らに抵抗してきたのだ。彼らの受けた被害は、151 名が殺され、そして、負傷したのは、89 人だった。彼は、自分が戦った 5 つの戦闘のなかで、3 度の勝利を収めており、そして、一つは手詰まりを解決し、そして、最期の一つだけを上手くやることが出来なかった。

Joseph 酋長に従った者の多くは、彼らが、インディアンの居留地とすることになっていた保護居留区で病気になり、亡くなっていた。Joseph は、生きている限り、彼らのためにできる事をしてきた。彼は、Roosevelt 大統領と会う、計り知れないほどの特権を与えられたが、しかし、彼の全ての素晴らしい仕事について、彼は、彼が愛した故国の谷に戻ることもとずっと素晴らしい特権を手中にすることはできなかった。

この小さな侮辱は政府の野蛮的な保護居留区の政策のたった一つの兆しに過ぎなかった。実際の政策のなかで存在していた人道主義というものは、東部の人道主義者達、彼らは、“より良いことをする”と言う現実的な人の罰当たりの言葉で表現された人達で、彼らの圧力により導かれていた。西部にある態度は、ほとんどの場所で非常識であったのと同様、恥知らずな残虐な、そして、執念深いものであった。平均的なアメリカの市民に関しては、現在と同じように、彼は、現実に関心していることに関しては何の関心もないし、また、心配りもしていなかった。いつも変わらず、保護居留区は、病気の蔓延する何の望みもないユダヤ人町の場所であったし、しばしば、無関心であり、そして、腐敗した代理人により仕切られていた。

誰でもという訳ではないが、しかしながら、人々は畏にはまった未開人の状況に無関心であった。1881 年に、“ある北部アメリカの種族についての合衆国政府の取り扱いに関するあらまし”と言う副題のついた、Helen Hunt Jackson の、*A Century of Dishonour*、という本が出版された。正直な憤慨で書かれたもので、そして、良心の均衡に欠けていることに疑いもなく、それは、白人達のインディアンを征服した恥のいっぱい詰まった歴史を説明しており、次のよう結論している；

“欺き、強奪、そして、約束を破ること—この三つの事こそ、止めなければならない明白なものである。それに、もう一つは、インディアン達の財産の権利、‘生活の、自由、そして、幸せを求める’ことの法的な保護の拒絶である。こうした、四つの事が止められた時には、時間、政治的手腕、博愛主義、そして、キリスト教徒であることが、ゆっくりと、そして、確かに休息をすることができる。こうした四つの事がなされるのが止むまで、政治的手腕、博愛主義のようなものは全く無駄になるに違いないし、そして、キリスト教徒であることさえも、ちょっとした収穫以外に刈り取りをすることが出来る。”

その最後の言葉は、その後の 80 年の間にインディアンの出来事の中で起こるべきものであったものの憂鬱にさせるお告げであった。

その本の発行は、1882 年に現実の結果、Indian Rights Association の設立、ここは、啓発的な組織的な活動を、白人が彼の国外逃亡するのを助けるために、折よく指導する機関であるが、こうした組織を生んだ。しかしながら、一方で、最期の抵抗を撃ち砕くビジネ

スが続けられた。

大平原の部族は、支配下にあり、そして、南西部にだけ残っていた。Texas の Panhandle 地域に、1874 年に実を結ぶことのなかった革命が鎮圧された。

Quanah Parker、彼は、Kwahadi Comanches 族の酋長で、その彼が、700 名の Comanches 族、Kiowas 族、そして、Cheyennes 族を指導して、Adobe Walls の取引所の内側にバリケードを造っていた 30 名のバッファロー狩りをしている者達に対抗し、そして、3 日間の戦闘のあと、この要塞を乗っ取ることに失敗した。白人達は、インディアン達がそれまで耳にしたこともない様な、強力な新しい、長身のライフル銃を持っていたのだ。

Parker、彼は Comanche と Cynthia Ann Parker という名の白人の少女との間に生まれた混血の息子であるが、その彼は、ばかげたことに、白人の侵略者たちを撃退するための Plans Indians という大同盟をつくる夢を抱いていた。そして、彼は、自分が誤っていることに気づいた。“わたしは、白人のやり方を学ぶことが出来る。” かれは、Battle of Adobe Walls のあと気づき、そして、彼はそれを実行した。彼は、市民権をもつ住民となり、ビジネスを始め、そして、良心的なアメリカ人は誰でもがするように、大成功をした。

もっとずっと罪深かったのは Geronimo、かれは、南西部のテロリストで、彼の部族、Chiricahua Apaches 族の酋長ではなかったが、しかし、にもかかわらず、彼が終らせた Crook の考えに続いて、Apache にテロを再び行わせ、そして、インディアンの最後の抵抗者となった。Geromino のインディアンの名前は、“口を広く開ける人” という意味の Goyathlay であった；メキシコ人は、彼ら自身の言葉で、彼を Geronimo、あるいは、英語読みの Jerome と呼んでいた。Geronimo は、若者として、Cochise、そして、Mangas Colorado とともに戦い、そして、かつての強力な男達が亡くなると、必要性に応じて、その部族の指導者になった。

Geronimo は、その時代、あるときにはうまくいったり、またあるときはまずかったり、の反逆者だった。彼は、1876 年に Chiricahuas 族が新しい保護居留区に移住するときに極わずかの襲撃的な探索を実行したが、それから、彼は、ふたたび、新しい土地に落ち着いたようにみえた。彼は、1880 年に、また、戦闘の道に戻り、捕獲されて、戻ってきたが、しかし、1882 年には、彼は、もう一度、破れかぶれになり、陰気になった異議を唱える一団を指揮する用意があると宣言した。問題が起こることをおそれ、西部は、以前、Apache 狩りで成功を納めた Crook 将軍を、大平原の戦争から呼び戻し、彼に、もう一度、Arizona Territory の統治を任せた。

Crook は、公正な取扱いと言う彼の通常のやり方に従い、インディアン達は公正な不満を抱いており、会合を持つこと、そこでは、彼は古い疑問：“なぜ、白人達は彼らの約束を破るのか？”を聞くのをたじろがざるを得なかったが、そのような会議を求めていると確信した。彼は、心の曲がった Tucson の契約者達が、インディアンの代理人と手を組んで、問題を起こしていると分り、そして、出来事を正しくするようにし始めた。がしかし、時は既に遅すぎた。Apache は、戦闘への道に乗りだしていた。



Jeronimo

Crook と Geronimo の間での、潜伏と探索という死の隠れん坊のような戦いが始まった。Apache は、強大な強さと活力を持って、力強く仕上げられた者達で、彼らは獐猛であり、そして、巧みであった。Crook は、説得力があり、そして、根気強くもあった。彼は、1883 年に Geronimo を捕まえたが、しかし、二年後に、巧みに逃げたインディアンは、もう一度、もとの反抗の道に戻り、最期となったこの時には、壮大な宣伝活動したが、この間に入植者達の間にテロ、そして、死を拡大していたが、Crook は、何時も一歩か二歩離れていた。将軍は、捕まえにくい彼の敵をメキシコに追い込み、そこで、Geronimo は 1886 年の 5 月に投降した。二晩ののちに彼は、何人かの仲間とともに、ここから逃亡したが、この時には、追跡は、政府のインディアン政策に嫌気がさし、辞職していた Crook に代わるためにきていた Miles 将軍により続けられた。

Geronimo は、8 月には、メキシコの Bavispe River で窮地に追い詰められており、かれをよく知っている准将が逃亡者に宣言する様に追い込み、彼は、9 月 4 日にそうした。

Geronimo は、Pansacola の Fort Pickens に戦争の囚人として 2 年間服役したが、後に彼は、Oklahoma の Fort Sill に移された。今度は、彼は、上出来な農民となり、牧畜業者となった。

Parker と Geronimo は新しい秩序の先駆者であった。彼らは、白人達と戦い、そして、その戦いに敗れたが、しかし、彼らは、Sitting Bull が Stranding Rock の保護居留区で、その当時したような事で、彼らの過去にしがみついて彼らの時代を過ごすようなことをしなかった。かれの名前が、激しい怒りと同義語であったような Geronimo は、1903 年には、Dutch Reformed Church に加わり、St. Louis World's Fair に行き、そして、1905 年の Roosevelt 大統領の就任の行進にも参加している。彼は、そのなかにほとんど信実はないが、自伝を書きさえもしており、そして、白人達の病気でもある肺炎により、最期を遂げている。

Geronimo は、壮大なる戦闘の酋長の最後の人であった。Geronimo のように死ななかった人達は、白人達のやり方に自分自身を適応させていた。あらゆる現実的な目的のためのインディアンと彼らの征服者達との間の壮大な戦争は終わりを遂げ、その墓誌碑文は、Crazy Horse の素晴らしい軍隊の生き残りの者達とともに 1877 年に投降した、歳老いた Sioux 族の酋長の宣言の中に書かれていた。

“我々は、あなた方や、あなた方の軍隊と比べれば貧弱だ。我々は、ライフルをつくることができなければ、弾薬もナイフも作る事ができない。事実、我々は、我々の土地の所有権を取っているあなた方の慈悲にすがっている。あなた方のやることは、粗雑で残虐であるが、しかし、我々は、それを受け入れ続けていると、それをあなた方の慈悲としている。”

そうした、慈悲の本質は直ぐに誇示され、それは、Geronimo を征服した後、僅か 4 年しか経っていなかった。

16

最後の反乱

“太陽が死んだとき、私は、天国に行き、そして、神とずっと昔に死んだみんなと会った。神は私に、戻って来て、そして、彼らに良心の持ち主をなければならない、そして、お互いにいつくしみ、闘ったり、あるいは、人の物を盗んだり、嘘をついてはいけなく、仲間に話すように言った。そして、仲間たちに教えるように私にこの踊りをくれた。”

こうした言葉とともに、名前が **Wovoka** という若い **Piute** が、**Nevada** で、1888 年のいつごろか、新しい宗教を始め、この有りそうもない始まりから、アメリカでの最後のインディアン反乱が発展していった。

Jack Wilson というクリスチャンネームでも知られる **Wovoka** は、彼が布教の中で聞き、僅か、その半分しか理解できなかったが、その神教により影響を受けた。彼が説教した教義は、白人たちの宗教をインディアン達のために希望の伝言に変える、感動させる様な試みだった—それはそうした破れかぶれで培われたものであったので、全てがずんと身に伝えた。

教条だけについて言えば、それは平和の哲学であった。**Wovoka** が、偉大なる精霊が彼にたいて、彼は、つまり、**Wovoka** は、最初の救世主が白人達により張り付けにされたので、インディアンとして、この地球に戻って来た救世主であるという事を啓示したのだという、インディアンの論理的な見解を仲間達に話した。彼、救世主は、この地球に膨大な変化をもたらすだろうと **Wovoka** は言った。インディアン達の間の死は、再び蘇り、彼らの大地に戻るのだ。殺されたバッファローもまた、同じように蘇り、そして、大草原に、また、前のように溢れ、群れを成すのだ。燃え上がる火山の一つが、白人達を掃き清めるように、そして、信じようとならない者達もいるが、それ以外の人達には、彼らに代わりインディアンに置き換える、熔岩の流れをもたらすようになるのだ。

しかしながら、インディアンの誰もが、**Wavoka** 彼らに見せた、神聖なる **Ghost Dance** により救われた違いなかった。ダンスそのものは簡単なものだった；踊り手たちは手を組んで輪になり、そして、左のほうにゆっくり動いていくのだった。彼らは、**Wavoka** が白人たちの銃弾を止めると言い張った特別の服を纏っていた。

救世主は、信仰者に対して特別な教えを説いた。“他の者を傷つけてはいけなく。何時も正しくなくてはならない。うそをついてはいけなく。戦ってはならない。友達が亡くなっても、決して涙を流してはならない。”

宗教的な復興はずっと東部のインディアン達の間にも、1800 年の **Kentucky** や **Tennessee** の辺境地開拓者たちの心を掴んだそんなものと非常によく似た形で、広がって行った。これは、正真正銘の集団ヒステリーであって、いまもなお、生き残っている古い伝統を大事にしているキャンプの集会でも見る事ができる。インディアンの妻たちと戦士達は、彼ら



Oglala Sioux 族の Ghost Dance

自身が恍惚状態になり、夢うつつとなり、そして、取り乱して **Ghost Dance** を踊る者達の揺れ動く姿の虜となる、そんな姿が見られた。

Ghost Dance の儀式は、確かに、何の傷跡も残さなかったかもしれないし、確かにそれは、一時のものとして直ぐに消えてしまったのだろうが、しかし、不幸にも、それは、山並みを超えて、何事も悲惨な状態にあった、大平原のインディアン達の間広がって行った。此処には、最期に激しい戦争の辛い状況の生き残りの者たちが住んでいて、ほとんど飢餓状態にあり、代理人たちにより虐待をうけ、白人達の約束により滅滅を感じさせられ、打ち破られ、そして、狭い保護居留区に押しこめられていた。彼らの生活には、何の望みもなく、そして、彼らは、**Ghost Dance** の儀式をみるまで、どの道を辿って行けばよいのか見当がつかなかった。そして、彼らが、新しい教えがどのようなものであるかを、探るために持ち込んだのであるが、その錯覚的な約束が使節により彼らのもとの持ち込まれた。

しかしながら、その持ち込まれる途中で、それは、新しい意味合いを請け負うようになった。宗教の平和的な意味合いが失われたのだ。大平原のインディアン達が、**Ghost Dance** を踊るときには、白人たちに対する戦争が彼らの心の内に、そして、其れを詳細に説明する祈祷師のように、その教条の中にあった。もっと悪かったのは、儀式の祈祷が彼らに対して、弾丸、そして、死というもののそのものに対する耐性があるとさせたのだ。この考え方が、**Sioux 族**、**Arapahos 族**、**Cheyennes 族**、そして、**Kiowas 族**、彼らは、合衆国政府の基本的な犠牲者であるが、彼らにより感傷的な願望とともに、全面的に受け入れられた。

こうしたインディアン達は、たちまちのうちに、彼らがよみがえったバッファローを見たり、そして、今や、生き返って来た、ずっと以前に亡くなって親戚のものに対して話したりすることを主張しながら、興奮状態に陥っていた。かれらは心底、1000 年は手の内にあると信じていた。

また、Ghost Dancers の中には、新しい信仰を取り入れる事が、実際にその中で、昔の闘争を読み替えさせる意味を実際にみたというような事を告白するものも居た。彼らのうちの一人が、神聖なる呪術を実際に執り行っていた Sitting Bull であった。彼は、自ずと Ghost Dancing の中に、彼が決して成し遂げられないだろうという希望をほとんど諦めた終結を意味するものと理解していた。

1890 年の秋の終わりに Pine Ridge と Rosebud の Sioux 族の保護居留区で湧き始め、そして、12 月までに。危険な電氣的火花が散る様な空気となった。インディアン達は Ghost Dance の儀式を密かに実行するために保護居留区から姿を消し、そして、Sitting Bull と彼の崇拜者たちが彼らに続くつもりでいるという噂が流れた。

なおも、もし、Benjamin Harrison が、1888 年に選出されなかったのなら、そして、次の年に役所、ここは、Grover Cleveland の Democratic の役人たちの残りと一緒にインディアンをの代理人を一掃したのであるが、この役所を仮定すれば、重大な局面は、過ぎたのかもしれない。

新しい Pine Ridge の代理人、彼は、Royer という名の未熟な手腕のもので、その彼は、Ghost Dancers 達の背反と Sitting Bull についての噂により注意されて育ち、保護居留区に居るインディアン達の殆ど大部分のものたちは、明らかに平穏であるという事にもかかわらず、彼は、防護のために軍隊を要請した。これに応答した將軍の John R. Brooke は、Royer よりももっとインディアンに対して親しみをもっていなかった。彼は、1890 年の 11 月 19 日に、Pine Ridge に到着したが、折しもこの日は、Ghost Dancers の大集団が、後に残した自分達の家を焼き払って Badlands に逃げ込んだ日でもあった。

あきらかに Brooke と他の軍の事務官たちは、もし Sitting Bull が Dancers 達に加わったのなら、彼らは、直ぐに戦争を始めるかもしれないと恐れ、直ちに、歳老いた酋長を逮捕する様に Standing Rock Agency に命令が送られた。Bullhead というインディアンの准将が、12 月の 15 日の朝に原住民の警察隊を Sitting Bull のいる丸太小屋に行かせ、彼をベッドから引きずり下ろした。

彼らが彼を引き連れていくまえに、怒った仲間達が酋長の周りに集まり、そして、Catch-the-Bear、彼は Sitting Bull に傾倒した、Bullhead の古い敵であったが、その彼がインディアンの准将を狙撃する機会を得た。彼が打たれると Bullhead は何とか彼のピストルを握り、そして、酋長の体に銃弾を放ったが、一方、その時に別の警官、Red Tomahawk が、Sitting Bull の頭めがけて弾丸を放ち、これで彼は即死した。

村全体が大騒ぎとなった。ほんの 2・3 分の内に、一ダースもの男達が亡くなり、ほかに 3 名の者が負傷した。白人の軍隊が到着して、やっと仲間内の大虐殺が治まった。



Wounded Knee Creek での大虐殺

風のごとくの速い勢いで大草原に広がって **Sitting Bull** の死のニュースが伝わり、大混乱が **Sioux** 族を巻き込んで行った。それが何を意味しているのかは、誰も知らなかった。それは、救世主が予言した戦争の合図だったのだろうか？ それとも、白人達が、戦争が始まる前に **Sioux** 族を絶滅させると決断したことを意味していたのだろうか？ 家族は、彼の親戚のところに逃げた；他の者達は、防護を求めて代理人のところにやってきた。

秩序を戻すために、軍隊は全てのインディアン達を保護居留区に戻すために派遣隊を送った。其れについては何も語られていないが、敵として残った人たちには、何の慈悲も与えられないだろうとの意味が込められていた。それは後に否定されたが、しかし、**Custer** の記憶がこうした兵士達、その中には、彼と共に任務に就いていた者もいたが、その彼らの心に火を付けたということは、全く疑う余地のないところである。

連隊の探し求めたさすらいの酋長の一人が、**Big Foot**、彼は逮捕状が出ていたのであるが、その彼であった。彼がそれを聞いた時、**Big Foot** は、356 人の男達、女達、それに、子供も達とともに **Pine Ridge Agency** に向かって旅を始めていた。**Sitting Bull** の殺人があつてから、13 日が経っていたが、彼は、第 7 騎兵隊の 8 連隊と、全部で 470 人ほどの斥候の集

団を率いる S. M. Whitside 将軍に出遭った。Whitside は Big Foot の無条件降伏を要望した。酋長はこれに応じ、そして、インディアン達は、代理人のところから 20 マイル離れた、Wounded Knee Creek に誘導された。12 月の 28 日の夕べに、彼らはそこでキャンプを張り、その一方で、じっとして居られない Whitside は補強の軍、これは、直ぐに、数多くの Sioux の宣伝活動の頑健な退役軍人である Forsyth 大佐の指揮下となったが、この軍を送り込んだ。

両方の陣営とも、お互いに、深く相手を信用していなかった。白人達は彼らの馬を殺害し、そして、彼らを鎖でつなぎ、船に乗せて部族の全体を Florida に連れて行こうとしているという暗い噂が Sioux 族の者達の間でつぶやかれた。Forsyth は、彼の方では、裏切りの Sioux 族、彼は全てのインディアンに対してそうであったが、彼らを疑っていた。

次の日の朝、29 日であるが、Forsyth は、彼の部下をキャンプの周りに行かせて、ティピーの上の Hotchkiss 銃の発射の整備をし、インディアン達の武装解除の準備をした。これに伴って起こった様々な諍いが報告されている。ある権威ある者は、Big Foot の部下の戦士達は、事実、裏切りの一撃を企み、Yellow Bird という名の呪術者が合図として一握みの埃を放り投げたときに、銃撃をするという事で、毛布の下に銃を隠し持っていた。

この説明を疑う良い訳がある。Big Foot は、彼の部下を指揮して保護居留区に向かいつつあった；もし彼が、戦争を企てていたのなら、彼は、ほとんどそんなやり方でそれをやり始めなかっただろう。しかしながら、彼の村は完全に、致命的な兵器、曲射砲を備えた強烈な軍隊によって完全に包囲されており、かつ、Big Foot からのインディアン達は、彼らにおこることに徹頭徹尾恐れていたという事に何の疑いもなかったに違いない。引き続いて起きた大参事の引き金になったもののもっともらしい説明は、Forsyth の部下たちが、いつも大草原のインディアンの誇りを持ち、危険な行為となる隠し持った兵器を、手荒に探り始めたことである。鉄砲は発砲され、そして、2・3 分もしないうちに、インディアン戦争の歴史全体の中でも最悪の大虐殺の一つと言われることをしでかした。

政府の調査官、かれは、確かにインディアンの一味として非難されることはなかったが、彼らは後に報告した：“ある一人の女性の生き残りの者、Blue Whirlwinds 彼女と著作者は談話を交わしていたが、その彼女は 14 もの傷を負い、その一方彼女の 2 人の幼い少年は、どちらもまた、彼女のそばで負傷していた。2・3 分のうちに 200 名のインディアンの男、女、そして、子供達が 60 名の兵士たちにより、殺され、そして、傷つけられて大地でうごめいており、ティピーは弾丸により引き裂かれ、それらの多くが、誰も助けてくれない負傷者達の上で焼かれ、そして、生き残った一握りのインディアン達は、気の狂ったような数百名の兵士達により追われ、そして、峡谷を掃射するように、その場所に移動されていた Hotchkiss 銃から繰り出される掃射の銃弾を浴びながら、峡谷の中にある隠れ家に大混乱の中で逃げ込んで行った。追跡が単なる大虐殺であり、そこでは、逃げ惑う女達が、腕に幼児を抱えて、抵抗が終わり、そして、ほとんどすべての戦士が、死体を晒されているか、あるいは、大地で死んでいくかの時に、銃で撃たれて倒れていった。”



1891.1.18 South Dakota の Pine Ridge の近くの、合衆国で一番大きな the Largest Hostile Indian Camp を視察中の Miles 将軍と Buffalo Bill Cody

第7騎兵隊は、ついに Custer の復讐をした。しかし、それは白人の典型的なもので、Oliver La Farge が指摘したように、Little Big Horn での出来事は、Forsyth の男達による恥さらしの殺人が正式に Battle of Wounded Knee として名づけられているのに対し、Custer の大虐殺として知られるようになった。

古い時代には、そうした残虐行為がインディアンの荒れ狂った仕返しを誘発したのだろう、そして、Forsyth 大佐は直ぐに、古い時代は全く死んではいないと学んだ。ほとんど、憤怒の逆上で、Brulé Sioux 族が Two Strike の下で、代理人を襲撃したが、その一方で別の一団が、30 日に Wounded Knee のキャンプを激怒して攻撃した。Forsyth は、軍の補強、それは彼が全滅する寸前に来たが、助けを求めなければならなかった。

突然の戦闘が、最初は、一か所で起こったが、その後は、他の場所でも、32 日間のものが起き上がり、その後、突然止んでしまった。それはちょうど荒涼たる冬の夜にうちあげられた独立記念日の彷徨えるロケットのごとく、燃え尽き、絶えてしまった。

Nevada に戻ると、陰気な出来事の連鎖を始めていた預言者が仰天し、そして、Ghost Dance の信仰の結末に、全くうろたえてしまっていた。丸い顔をした救世主は、昔からのやり方で、彼が白人達の着る洋服の上に習慣的にいつも纏い、そして、毛布で彼の頭を覆っていた、大きなつばのある黒い帽子を脱ぎ捨てた。Sioux 族は、“事を捻じ曲げた。”と彼は悲しんだ；それは、“全体のビジネスを落とした。”と言う方がよい。

侘しく、そして、腰の曲がった Wovoka が、彼の仲間の中を歩き、そして、かれらに叫んだ：“Hoo-oo! 私の子供達よ、子供達よ。たくさんの時代のあと、数日して、私は、狩り

に出かけるようにお前さんたちを呼び、さもないと、戦争に駆り出した。いまやこうした道は、砂に渦れている；それらが草を覆い、若者達をそれがどこにあるのかを見つける事ができない。私の子供達よ、今日、私は、お前さんたちが新しい道を進むように願う。その道がただ一つ開けられているのだーそれは、白人の男の道だ……。”

結び

彼らは、白人の男たちの道を歩んだ。Wounded Knee のあと、2・3 の地方の小さな抵抗があった。最後のものは 1911 年で、それは良く見なれた形のものだった。Nevada の Humboldt で、Shoshone Mike という名の男が数人の牧畜業の者を殺した小さな一団を引きいていた。シェリフの一団が彼らを追い詰め、インディアン達の弾丸が尽きるまで戦い、そして、その後、Shoshones 族として彼らの大幅な削減をし、弓矢だけをもたせ、全くの自暴自棄の状態にさせた。彼らは全て殺された。僅かに生き残った部族のものは一人の女と 2 人の子供だけだった。

白人の男たちの道とはずっと先に進んでいて、インディアン達はもっと上品な絶滅の道に遭遇した。南西部の部族のある者達はほとんど飢餓の状態で死んでいった。他の者達は保護居留区の言語道断な環境により見舞われた病気で、人口が削減された。多くのものは彼らの市民権を組織的に否定され、そして、それは当時、多くの州で見られたことだった。彼らの殆どが、それを見、そして、今なおそれを見ており、協定の無視が、そして、土地の略奪が続いており、それらは合法的なやり方と、そして、裁判での疑わしい恩恵と思っている人々の両方で行われている。

1960 年に、法廷が発電所のプロジェクトの利得のために Iroquois 族の土地の多くの部分を獲得するという、土地の不法入手の止むことの無き継続の中で、別の形のものを裁可した。しばらくの間、新聞には、その判定を保護する、編集者への手紙の記事が溢れていた。誰もが、1960 年 3 月 14 日の New York Herald Tribune に掲載された American Army での個人的に一等兵の若いインディアンにより書かれたもの以上に、鋭い指摘、そして、寄り身に応える様なものはない。Mitchell L. Bush, Jr. 一等兵が書いたのは：

“それはどこで終わるのだろうか? Iroquois 連合の Seneca や Tuscarora の者達の土地の喪失を見てみると、我々は、もう一度よくわかった。白人達がこの大陸、そこは、母なる大地を保有することを無理やりに分割されて来たインディアンの土地なのだが、そこに白人達が来て以来、あまりにも多くのものを見てきた。しかしながら、今日では、状況は全く変わっている。インディアンは、今は文明開化された American なのだ；したがって、かつてあった様な血を流すような戦いは無くなっている。そのかわり、インディアンは、裁判所に通ずる白人達の男たちの道を辿ってきたが、しかし、それは何のために、だ。弁護士を雇い、そして、最高裁判所での悲嘆にくれた採決のために使われるお金（部族の改善のために使われる筈のお金）の損失のためだけだ。”

“二心の有るに違いない合衆国が私の肝をつぶしている一わしたちは、私たちの役人を、世界に向けて、好意のある旅に送り出し、そして、経済的に不運な目にあっている国々を助けているが、しかし、我々は、この大陸の土着の人達（我々、アメリカ先住民たち）が、我々が選択できる方法で生きる事を許そうというつもりはない。合衆国政府は、人民の、

人民による、人民のためのものであり、それだから、我々は、大半は我々に対抗していると判断しなければならない—なぜだ？

“われわれ、アメリカ先住民、は本質的にインディアンであり、そして、我々ができる最善のものとして平均的なアメリカ人のように生きている間、昔からの生活のやり方を守り通す。なぜ、あなた方、人々は、我々の土地を奪い、そして、アメリカという解けた容器の中に我々を押し込もうとして、これを終結させるようにと決断させられなければならないのか？ Iroquois の連合国の Onondaga Indian として、私は、経験から離している。われわれ自身の保護居留区を空からご覧ください、そして、我々が何を見ているのか、ご覧下さい—迷路と化した電力線、塩の経路、ガスのライン、そして、水の供給路、2〜3 百エーカーにも広がるダム、北東部分を二等分している四車線ものある高速道路、そして、何のためなのかその理由がわからずに無くなったおおきな土地を！

“Iroquois 族は初期のアメリカのために多大な貢献をして来た。それは我々のためにではないし、合衆国は民主主義でもなかったようだ。民主主義は、あなた方がやって来たヨーロッパでは、知られていなかったからだが、しかし、民主主義は、この大陸この地で満開に花開いた。Iroquois 族は、あらゆる戦争と争いを通して、400 年近くの間生き残り続けてきた。なぜ、我々が住んでいる土地に 4 方向の風を送り込んでまき散らし、その集結を呼ばなければならないのだ？”

最初の白人達が上陸してから、我々はどんなに遠くにやってきたのだろうか？ 実際、それは、どこで終わりを告げるのだろうか？

図書目録

この本の内容は 200 冊以上の本、パンフレット、そして、原本の資料から引用されたものだった。内容は、こうした資料に詳しい特別な読者のためにと意図されたものではなかった。次の様な目録が、インディアンの戦争について特別な領域を探ろうという人々のために用意されている。アメリカインディアンの歴史には、もっと反対するようなものが存在しているというような領域は殆ど無いという事に注意を払わなければならない。多くの実例の中には、もっとも著名な権威を持った人たちの間でさえ、賛同されないものがある。これらの目録は、著者たちが最も信頼できるものとして認めたこれらの出所に対して調査をする人たちに向けられている。

白人と赤人との、諍いの始まりとして、Francis Parkman の *France and England in North America* は卓越したものを持っている。最初の 13 冊の本を一つにまとめたものとして幾つか知られているものがある。New England War の標準的な現代の説明書は、Charles H. Lincoln により編集された、*Narratives of the Indian Wars, 1675-1699* で、最近では、Barnes & Noble により、魅力的な再販本が出版されている。とても素晴らしい研究は、Vanderbilt University (Macmillan) の歴史学の助教授の Douglas Edward Leach による *Flintlock and Tomahawk* である。

George Washington のインディアンの取り扱いは、Douglas Southall Freeman の *George Washington* (Scribner) の第 6 巻に詳しく述べられている。改革におけるインディアンの戦争の簡潔で正確な説明が、Christopher Ward による *The War of the Revolution* (1 vols., Macmillan) ならびに Henry Steele Counmager と Richard B. Morris (2 vols., Bobbs-Merrill) により編集された *The Spirit of 'Seventy-Six* の中に見出されるだろう。

1812 年の戦争と Andrew Jackson のインディアンについてのキャンペーンについては、著者 Arthur M. Schlesinger, Jr (Little, Brown) による、*The Age of Jackson*, Marquis James (Bobbs-Merrill) による *The Life of Andrew Jackson*, ならびに、Francis F. Beirne (Dutton) による *The War of 1812* を見られたい。

Pontiac の戦争の物語は、Howard H. Peckham による *Pontiac and the Indian Uprising* に最もよく書かれている。

Mississippi の西の地域におけるインディアンの戦争に関する文献には膨大な、かつ、高尚な議論のまとなるものがある。その領域の古典は、J. P. Denn, Jr., による *Massacres of the Mountains* であるが、これは、最近、Archer House, Inc. により再出版されている。写真と文章を用いた図表の表示は、James D. Horan (Crown) の *The Great American West* を是非見て頂きたい。Custer と Sioux との戦争に関する信実を語る公平な説明はないが、しかし、多分、最近の者で最も良いものは Jay Monaghan による Custer 将軍の詳細な伝記である。Modoc 戦争に関する断然群を抜いた記述は Keith A. Murray (Oklahoma) による *The Modocs and Their War* である。C. M. Oehler (Oxford) の *The Great Sioux Uprising*

は、その出来事を最もよく書かれている、一番最近の説明である。Will Henry が、Joseph 酋長の物語を *From Where the Sun Now Stands* (Random House) のなかで、生々しく書いている。

北アメリカのインディアン、一般的、かつ、非常に広範な範囲を認められている説明は、John Collier (Norton) の *The Indians of the Americas*、Ruth M. Underhill (Chicago) の *Red Man's America*、George E. Hyde (Oklahoma) の *Indians of the High Plains*、そして、Olive Lafarge による *Pictorial History of the American Indian* に見る事ができる。

Dictionary of American Biography は、この巻に出てくる沢山の指導者達、白人そして赤人のたくさんの人の、素晴らしい標準的な伝記を描いている。そして、*The Pageant of America* (Yale) の第 2 巻は、伝記の描写と沢山の出来事の簡潔、かつ、一般的に言って正確な記述がされており、また、壮大な写真を載せている。

訳者あとがき、

2019年9月1日から、原本を読み始め、その英訳してきました。アメリカの歴史については、独立戦争の後の事しか知りませんでしたが、Lewis & Clarkの探索の冒険、アメリカ原住民に関する話に興味を持ち、そして、この度、アメリカの発展の歴史をインディアンの側から、知る機会に恵まれました。そして、そこにはこれまでとは全く違った歴史のあることを知らされました。そうした事実を知ることにより、現在のアメリカ人の考え方の裏にあるもの、そして、彼らの考え方の価値観を覗き見る事ができました。

自然とともに生き、そして、戦闘に勝っても敵を殺さないという、彼らの生き方に強い感銘を受けました。また、それが彼らの弱点であったことも確かのようにですが、人間として、どのように生きていくかの知恵がそこに潜んでいるのではないかと思うのですが、いかななものでしょうか？

2020.5.15